THE CENTRAL REVIEW

中央公論

6-1921

六月號

6　36

第三十六年　第六號　第三百九十六號



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

佐藤綠葉氏作

長篇小說 黎明

新刊

四六版假裝
紙數三百八十頁
定價壹圓六拾錢
郵送料拾錢

著者久しく隱忍して現はれず、今や多年の蘊蓄を傾けて、雄腕を此の一大力作に示さる。我が文壇に曾て現れざりし一篇の時代小說として敢へて是れを世に薦む

「黎明」は人生の夜明けに當つて、その新たなる旅程に上らんとする青年男女の交涉を描いたものである。主人公は天才的の若い美術家と、生長、躍動、柔軟、直覺等、若き生命その物を代表するところの一人の少女である。青年美術家は、大膽で、少しく粗野で、突進的で、一種の時代の子を代表してゐる。それに對して相手の少女は、善良で、素直で、幾分反省的で、若い女性其ものを代表する。春になつて古い葉が落ちると、其下に新らしい芽が出來てゐるやうに、彼等は古い人の凋落と、社會の變轉とに頓着なく、生長し、戀愛し、結合する。「黎明」には又別人物として、思索と、抑制とに、靜かな意思生活を創造せんとする青年哲學者と、若い海軍士官と、女優を熱望して、若い日の夢を空中に描かんとする虛榮の女とがある。さうしてそれ等の人々が、世界戰爭によつて捲き起された社會生活の動搖と、一般的思想生活の混亂の中に浮きつ沈みつしてゐる。獨逸表現主義の先驅者カンヂンスキーは、其著「精神調和の藝術」に於て、「總ての藝術上の製作は時代の子である。そして多くの場合に於て、それは吾々の情緒の母である。」と言つてゐるが、それは又著者が此作をする場合に於ける用意の一つであつた。要するに「黎明」の經（たて）は强い青年の戀愛で、其緯（よこ）は動搖してゐる時代相だ。そして此の作はまた著者にとつても、其の思想生活の緒を開いた大切な夜明けの鐘の音ともいふべきものである。

東京牛込矢來三番地
振替東京一七四二番
新潮社
電話番町 八〇九番 八九九番 九三六番

肉筆東海道五十三次
漫画絵巻頒布会

肉筆 **東海道五十三次漫畫繪卷頒布會**

本會は東京漫畫會の諸大家が實際に踏破せし、東海道五十三次を肉筆の合作繪卷となして御頒けする催しであります。其の趣意は、漫畫の藝術的眞價の宣傳と、我國にて最も由緒あり亦いろ〳〵の點に秀絶せる東海道五十三次を現代の内外に紹介し且遠く後世に記錄せんとするのであります。

廣重の東海道五十三次は木版畫でありますが、今回の東海道五十三次漫畫繪卷は總て肉筆でありますから其の數に限りが御座います。猶ほ筆者諸先生は御禮の多少を問はず、東海道の紹介及び漫畫の藝術的眞價宣傳の爲めに御執筆下さるものでありますから、出來得るだけ會費を低廉に致しました。若し之を個人でお作りにならうとしたら恐らく一萬圓を投じても出來かねると思ひます。御望みの方は是非左の規定を御覧の上至急申込下さいまし。

規定

一、本會の筆者並に受持宿場左の通り。（但し病氣等止を得ざる事情生じる場合は地の筆者代つて揮毫することとあるべし）

長原止水氏（装題）

岡本一平氏（日本橋）
在田稠氏（品川）
下川凹天氏（川崎）
岡本一平氏（神奈川）
代田收一氏（程ヶ谷）
清水對岳坊氏（戸塚）
在田稠氏（藤澤）
中西立頃氏（平塚）
池田永治氏（大磯）
在田稠氏（小田原）
近藤浩一路氏（箱根）
岡本一平氏（三島）
清水對岳坊氏（沼津）
服部亮英氏（原）
近藤浩一路氏（吉原）
池部鈞氏（蒲原）
近藤浩一路氏（由比）
幸内純一氏（興津）
清水對岳坊氏（江尻）
岡本一平氏（府中）
清水對岳坊氏（丸子）
森島直造氏（岡部）
小川治平氏（藤枝）
池部鈞氏（島田）
小川治平氏（金谷）
細木原青起氏（日坂）
細木原青起氏（掛川）
水島爾保布氏（袋井）
森島直造氏（見付）
宍戸左行氏（濱松）
服部亮英氏（舞坂）
前川千帆氏（新居）
細木原青起氏（白須賀）
池部鈞氏（二川）
幸内純一氏（豊橋）
水島爾保布氏（御油）
山田實氏（赤坂）
水島爾保布氏（藤川）
細木原青起氏（岡崎）
幸内純一氏（知立）
水島爾保布氏（鳴海）
前川千帆氏（名古屋）
山田實氏（桑名）
森島直造氏（四日市）
小川治平氏（石藥師）
服部亮英氏（庄野）
山田實氏（龜山）
前川千帆氏（關）
池部鈞氏（坂の下）
前川千帆氏（土山）
宍戸左行氏（水口）
服部亮英氏（石部）
池田永治氏（草津）
山田實氏（大津）
近藤浩一路氏（京都）

二、**會費金六拾五圓也**（外に送費内地九十五錢殖民地一圓二十錢を要す）

三、申込金等一切不要、會費は揮毫及び表装出來の節、居宅代金引換小包郵便にて現品と引換の事、但し東京市内は郵便に依らず使を以て現品お届け致し其節會費を頂戴す。

四、繪卷は竪八寸二分、横一尺一寸二分の書簽紙に揮毫せし肉筆五十五枚を上下二卷に表装し一卷の長さ約三丈二尺（二卷合せて約六丈四尺）の大卷にて、牙軸、表紙緞珍、桐箱入のものなり。畫は總て餘り濃厚ならざる彩色をほどこし、構圖は風景にて其の宿場の情趣を現はし之に人物又は他の動物を配合せしものもあれば、又人物或は動物にて其宿場を象徴し之に自然の山川、草木を背景とせしものなどいろ〳〵にて頗る雅致に富むものなり、表題は帝展の審査員長原止水先生の肉筆なり。順序は日本橋、品川川崎と宿場順にして表装す。

五、申込期限六月三十日限り。但し期限内と雖も豫定數に滿ちたる場合は謝絶することとあるべし。

六、揮毫並に表装出來期限は、申込を受けてより二十日乃至八十日間とし配布は申込順による。但し申込み一時に多數なる時は配布多少遲延することとあるべし。發送若しくは御届けする際は一日前に書面を以て御案内す。

七、申込は普通郵便端書に（貴協會開催の東海道五十三次漫畫繪卷頒布會に入會致し候間、揮毫表装出來の節は居宅代金引換小包郵便にて送附相成度此段申込み候也）と記し、住所姓名を明細に記入して成べく姓名の下に認印を捺し（東京市麹町區元園町中央美術協會）宛御投函のこと。

趣意及び規定を明細に印刷せしものあり御希望の方はハガキにて申込めば送呈す

東京市麹町區元園町一ノ一九
中央美術協會
電話九段八四一番
振替東京二九七番

大好評第四版發賣

月見草

相本まさを女史新著

津田敏子女史裝幀
島成園女史挿繪

玄文社發行

全國各書店販賣定價貳圓五拾錢

大阪時事新報懸賞小說第一等に選ばれた傑作幽かに揺めく月見草のやうな女性や、執拗な男や、情熱に燃ゆる青年や、或は小さな野心を持つ婦人や、更にまた可憐な性格を持ちながら色々の事情に制せられて、ずるずると妾といふ暗い生活に這入つて行く女主人公が、歡樂と、苦惱と、悔恨と、自責の悲しい運命の淵から遁れようとする。細微な心理と環境が、赤裸々に描かれて、而もその愼ましい筆致は、最も藝術的な苦心の溶んだ、近來の力作である。

新刊長篇小說

戀草

田山花袋新著

三五版五百十頁
定價貳圓拾錢

戀草は著者の近作中最も力を注いだ力作である。最も深く人生に觸れた、最も男女の問題に密接な關係を持つた傑作である。從つて著者が最も得意とする作であることは言を待たない。殊に女性の細かい心理を深い洞察と同情とを以て描寫した點に於ては、數多い著者の作中にも他に多く類を見ることが出來ないであらう。戀の中に人生を見、人生の中に戀を見、更に歡樂の遁くべからず、罪の遁くべからざるを其背景となしてゐる。此作の世を動かし、讀者を熱狂さすもの、全く我々の日常の心持ちを遺憾なく描いたからである。

蛙 戲曲小說詩集 森林太郎譯 五版貳圓五拾錢

初戀 川路柳虹著 四版壹圓貳拾錢

几帳のかげ 伊藤蝶子著 十三版貳圓五拾錢

花道 上司小劍著 四版貳圓五拾錢

くれなゐ 田山花袋著 五版貳圓參拾錢

▼說苑



PORTRAIT OF A LADY. MLLE. OLGA DE BOZNANSKA.

藥學士 大倉忠太郎氏創製

回春
長壽

國勢の素（こくせいのもと）

説明書進呈

萬物の靈長たる私共人類の肉體も化學的に分折しまするど、蛋白質、脂肪質、炭水化物、鹽類、水などから成立つて居りまして之れ等が肉、骨、血液などの各機關に變形して人間を形ち作つて居るのであります、隨て之等の要素は生命を維持する爲に常に消費せられつゝあるのであります、ですから私共は常に外界から食物を吸收して消費せられました要素を補給するのであります日常食物として私共がとります食物料は幾分たりとも前述の蛋白質、脂肪質、炭水化物を含有して居らぬ物はありませんが間々疾病其他の故障により身體の衰弱を來したる場合には完全なる吸收作用即新陳代謝の働きを旺盛にするには是非共吸收され易き營養料を必要と致します。此原理よりして新進の藥學士大倉忠太郎氏が研鑽の結果國勢上よりしても國民の强健を主とせざる可からずと考へられ此處に國勢の素を發表して皆様に是非御試用を御進め致す次第であります此國勢の素は蛋白質、脂肪質、炭水化物、カルチユム、乳酸等人體の主成分を含有して居りますから人體の成分たる蛋白質の分解消耗を補給し有害菌を殺す白血球を増し血液を清良にし人體の組織を改造しますれば病弱の恢復、體力の増進、精力の旺盛を來し不老長壽肉體美を發揮し人生の目的を愉快に達する事が出來ます。

瘦せた人、肥えた人、機官に故障ある方、神經衰弱の方、ヒステリー、貧血、肺結核、胃腸病の方、心臟病の方、不眠症等の方など用ひなほ病症の回復は勿論の事精神の爽快、血行の良好、元氣の充溢、動作の活潑、病苦の除去、體力精力の回復增進補給

定價 ◎五十瓦金壹圓七拾錢 ◎半ポンド七圓 ◎壹ポンド金拾參圓

發賣元 東京牛込神樂坂上 振替東京一五〇〇番 中西莊吉藥房



新運動の惱み

「現狀」はすべての新しい運動の敵である。新しい運動は、先づ其の手始めに此の勁敵を破らなければならない。斯くして新運動勃興の當初に於ては、其有らゆる新運動は、事實上にも惰性的にも手硬い「現狀」と鬪ふ爲めに、堅い結束を作る。

新運動は新精神の醱酵から生れる。新しい精神は理想に燃へる。從つて其の新運動の建設せんとする目的は必しも同一ではない。玆に於て現狀打破の第一戰に於て堅い結束をしても、新理想の實現といふ積極的の建設事業になると、一致の行動が出來なくなる。而して彼等が其理想に忠實であればある程、妥協の容さるゝ餘地に乏しい。一面から云へば、新しい運動が現狀打破の消極的方面の幾分目鼻がついた後までも仍は堅い結束を續けて行くことあらば、それは恐らく不健全なる分子を含むと疑つても可いと思ふ。

新しい運動は、だから、一度は仲間割れの悲しい運命に逢着するを免れない。「現狀」と「古習」とは得たり賢しと此處に乘ずべき隙を見出す。之を避けやうと焦せり過ぎると、元の仲間を壓倒する爲に腕力に恃むを辭せさらんとする。レーニンは之が爲めに何れ丈け世界の惡評を被つたか分らない。斯の非難を免れ而かも反動的勢力の乘ずる所たらざらんとせば、吾人は常に戒心して自家領域内の敵と戰はなければならない。恐るべきは常に獅子身中の虫である。

然れども新しい運動を一つの客觀的事象と觀るとき、其の仲間割れをして居る時は即ち既に發達の第二段に進んだ時であると謂はなければならない。之を漫然として或は混亂と觀又或は逆轉と觀るのは、甚だ淺薄な考方である。

普通選擧の要求は去年までは勞働運動の一大標目であつた。然るに今年に至つては一部の勞働者は直接行動論を執つて普通選擧の主張を弊履の如く捨てゝ顧みぬ。或る政治家之を解して曰く、普通選擧の要求は未だ民衆の眞摯なる要求でないと。國際聯盟は參戰以前から亞米利加に於ける識者の要求であつた。出來上つた聯盟は眞の聯盟の精神にそぐはぬものとして今や非難反抗の聲頗る高い。或る政治家之を解して曰く、米國の民衆は未だ國家主義執着の夢より覺めないと。十里の途に停つて居ないと云ふ點が同じだからとて、二十里先きへ往つたものと五里の昔に歸つたものとを混同しては可けない。

心ある者は活眼を開いて民衆の要求の趨る所の如何を見よ。世界の大勢の進む所の孰れに在るかを見よ。但し斯く進んだ事の果して慶ぶべきか呪ふべきかは直に斷定は出來ない。進歩の途上には常に障礙と陷穽とがある。之を巧に乘り越へるか又は蹉跌するかは、一に繫りて吾人の道義的努力によるのである。

中央公論



第卅六年第六號
六月號
第三百九拾六號

所謂世界的秘密結社の正體

法學博士 吉野作造

(一) 序言

今年春東宮殿下御外遊の御内議が發表された際、一部眞面目な人々の間に、之をお留め申さうと云ふ運動が可なり猛烈に行はれた事は、今尚我々の記憶に鮮かである。中にも浪人會の如きは其中堅となつて堂々と活動して居つた。國民の大多數が急に御外遊と御決定遊ばされた理由の如何に拘らず、等しく之れを誠に喜ばしい事と考へて居つたのに、何故に此等の人々のみが斯くまで反對の見解を固執せられたのであらうか。それには天皇陛下の御不例と云ふ事や、不逞

鮮人の跳梁と云ふやうな事も數へられて居つたが、之と相並んで矢張り重大な原因の一つとして猶太人の陰謀と云ふ事の擧げられて居つた事は、特に我々の注目を惹いたのであつた。現に東宮殿下御出發後に於いて、浪人會が發表した疏明書の中には、「世界に瀰蔓せる猶太人の陰謀が根柢深く且つ辛辣を極め居り」云々の文字がある。そこで問題となるのは、猶太人と云ふものは、一般に今日右のやうな怖るべき陰謀を本當に企てゝ居るのであらうかと云ふ事である。

其後注意して新聞雜誌の報道や論說を見て居ると、猶太人の怖るべき秘密の陰謀と云ふ事がちよい〳〵見える。猶太人と云ふものはおしなべて陰險なものであるとか、社會に迷惑をかけて喜ぶものであるとか、社會、秩序を破壞し、就中君主國を撲滅することを主義とするものであるとか、此目的を達するが爲めには全然手段を擇ばないとか云ふのである。併し常識から考へても、猶太人が一人殘らず斯う云ふ陰謀に關係あるとか、又斯う云ふ陰謀の遂行の目的で、すべての猶太人が固く結束して居ると云ふやうな事は有り得べきことゝは思はれない。斯種の陰謀を企んで居るものがあると云ふ丈けなら、それは只猶太人に限つたことではない。それにも拘らず猶太人については一種妙な考の我國の一部に行はれて居ることは爭はれない。然らば特に我々日本人が猶太人について委しく研究して居るのかと云へばさうでもない。猶太人について多く知る所なく、而かも猶太人には警戒せよ〳〵と云ふのだから可笑しい。之には何か由つて來る所がなければならない。而して私の觀る所によれば之が原をなすものは、恐らく彼のマツソン秘密結社の流說ではあるまいかと思ふ。

マツソン秘密結社の事については一昨年の暮頃一度本欄に於いて、一應其荒唐無稽なる旨を述べた事がある。然るに其後此流說は消滅しないのみか、益々蔓延するの傾がある。其云ふ所の大要を聽くに、猶太人は古來頗る堅い結束をな

し、秘密の間に怖るべき陰謀を廻らして世界全體を顚覆し、自己の掌裡に完全な支配權を握らんとして居る。之をマツソン秘密結社と云ふのであるが、非常に巧妙に秘密な運動を續けて居つた所から、久しく世間に知られてなかつた。之が昨今我々に知らるゝやうになつたのであるが、露西亞の過激派の運動は卽ち其露骨なあらはれの一つで、之を手初めに漸次世界を征服せんとして居る。實に戰慄に値する怖るべき陰謀であると。大本敎などは之を其儘取つて彼の豫言せる日本の事變は卽ちマツソンの襲撃に因るのだと誠しやかに説いて居るさうだ。獨り大本敎ばかりではない。其外いろ〳〵な方面に所謂マツソンなるものについての流説が持ち廻られて居るが、要するに之が本となつて猶太人に關する途方もない誤解が形造られて行くものと見える。

然らばマツソン秘密結社なるものゝ流説は何處から來たか。一つの淵源は西洋に在る。もと〳〵斯う云ふ流説の起りは西洋にあるので、恰度巴里講和會議のあつた頃、之に關する或本が西洋でも問題になつて居つたとて、之を持ち歸つた人が可なりある。其本の一つは「シオン長老の議錄」(Protocols of the learned Elders of Zion)であるが、之に基いて一篇の猶太人論を書いたものに「時事新報」の下田君がある(四月中旬頃所載)。三月十五日發行の「外交時報」に出た今井帝大助敎授の長篇は主として之と「猶太牧師の猶太民族に與へたる訓令」との紹介である。之等の材料を氏は歐羅巴に留學中露西亞に於て手に入れられたものだと云ふ事である。何にしても斯う云ふ方面の紹介は極く最近事で、日本の一部の人の間に深く此流説の根を植ゑ附けたものは恐らく西伯利方面から來た材料であらう。予の聽く所によれば其頃西伯利出征軍の最高幹部に居つた某將軍が、矢張り前記の書物を手に入れ、之を盲信せられたものと見えて態々翻譯して印刷に附し、多くの人に之を頒つて此怖るべき運動に對する警戒と覺醒とを促したとの事である。西伯利存住の將校官吏の間には可なり廣く行き撒いたものと見えて、予の知れる靑年中西伯利に居る親や兄から大事な、又は

有益な書類として送つて來たと云つて之を見せて呉れたものが少からずある。而して之を原として日本内地の或筋で作つた出版物で「過激思想の由來」と題するものがあるが、之がまた一部有力なる人々の間に、可なり弘く布り撒かれたので、そこで彼の所謂危險なる猶太人の陰謀と云ふ誤解が強く廣く信ぜらるゝやうになつたのである。

思ひ出せば一昨年の春頃の事であつた。西伯利に居る一友人から書面を貰つた。目下當地方で猶太人及マツソン結社なるものについて斯々の說が行はれて居るが、之に對する御意見は如何、當地に流布さるゝ印刷物を送るからよく見た上で意見を聽きたいと云ふのであつた。右の印刷物は内地の或る官憲の手を通じて屆けらるゝ筈と申して來たのであつたが、遂に今日に至るまで僕の手許には屆かない。同年夏の終り頃になつて西伯利から歸つて來たと云ふモ一人の友達が西伯利に於ける印刷物に基い 内地で作つた或筋の出版物なるもの一冊を持つて來て予の批評を求められた。之が予のマツソン結社に關する邦文の書き物を手にした初まりである。五六頁繰り返して見ると、其荒唐無稽なる事が直ぐに眼に着いた。そして少しでも斯くの如きものを信ずる人の愚かさと、又斯う云ふものを利用して新思想壓迫の用に供しようと云ふ人々の淺果敢さとを嘆ぜずには居れなかつた。段々讀んで行くと、之が西洋に其頃行はれて居つた或種の運動を無反省に飜譯したものなることが分つた。斯う云ふものを持て囃すことの寧ろ大きな恥辱であることを話し合つて別れたのであつた。

併し斯んな見え透いた方法、新思想の壓迫を遣らうとする淺果敢な態度は、我國の頑迷者流の間には珍らしい事ではないから、其後夫れとなく此問題に關して注意を怠らなかつた。すると之についていろ／＼の事を耳にした。マツソン結社の事は此春以來隨分隱密の間に内地の各方面で宣傳されて居ると云ふ事を聽いた。軍部に關する或有力なる雜誌に

は春頃數回に亙つて連載されたとか、中國邊の或新聞には同地某師團長の談として二三回に亙る記事があつたとか、又或方面の或筋では、急に猶太人の身分調べをやつたとか、新たに來朝する猶太人には此彼の區別なく尾行を附けたとか云ふ風說もあつた。當局までが、此流說を信じてすべての猶太人を猜疑の眼を以て視ると云ふ說は恐らく誤りであらう。けれども猶太人と云へば只何となく世人が不安を感ずると云ふ風はちよい／＼と見えた。噓から出た眞も、斯うまで發展しては猶太人こそいゝ面の皮だと心窃かに氣の毒にも思つたのであつた。

同じく一昨年の十月末頃であつたと記憶する。「東京朝日新聞」に東北の某縣で、過激派の陰謀と題する出版物を廣く縣下の役場、學校、圖書館其他民間の有志に配り、其中にあらゆる新しい運動を罵り呪ふ文句が澤山あると云ふ記事が載つて居つた。段々研究して見ると、縣廳の肝煎りの下に出來て居る民力涵養委員なるものが、中央の或筋からの配布を受けた此の出版物を以て、極めて時勢に適切な有益なるものとなし、公費を以て多くの部數を複製し、態々推奬の書面を添へて之を配つたと云ふ事が分つた。之も後で聽いた話であるが、流石東北の僻陬でもかゝる荒唐無稽の說を流布するに公費を濫費するの失當を鳴らすものがあり、爲めに之が表沙汰となつて、民力涵養委員の代表者が出版法違反に問はれ、罰金刑に處せられたとやら、何れにしても斯くして此流說は可なり廣く傳はつたものと見える。よく讀んだ人は無論其荒唐無稽なるに氣付く筈だけれども、世間には讀まずに只大きい聲で叫びてる方に馳せ集るものが多いものだから、案外にまた猶太人に對する誤解が解けずして傳はつて行くかも知れない。而して之が單に猶太人の迷惑丈けで濟むならまだいゝが、我々は斯くの如き笑ふべき手段によつて、新思想對抗運動を講ぜんとするものが、今尙有力なる人々の間にあるのを觀て、之によつて假令一時でも文化の開發が如何に妨げらるゝかを思ひ、遂に默視するを得ずと云ふ考を起したのである。

之より予は現に我國に流布さるゝ流説の内容如何を明かにし、之と一時西洋に行はれた其種本とを比較し、更にかゝる流説の西洋に特に行はれた所以と、又日本の頑迷者流が之を悪用して、爲めにする所あらんとした魂膽を明かにし、更に之が爲めに不當の寃罪を被つたフリー・メーソンリーについて一言辨明する所あらんとする。

(一) マッソン秘密結社

前掲出版物は「過激思想の由來」と題して居る。タイプライターで刷つた百四十頁斗りのものである。之によつてマッソン秘密結社の何であるか、及び之によつて猶太人が何を計畫して居るかの大要を有りの儘に紹介しやう。マッソンとは云ふ迄もなく秘密結社の名稱とせられて居る。之を中心として猶太人の企てゝ居る陰謀は、「全世界を征服し猶太血統の王を立て世界に猶太人の主權を確立しやう」と云ふ事である。(一〇五頁) 此事の外國に知られたのは比較的最近の事で(此事後に詳説する)あるが、「陰謀其物は遠く猶太國滅亡の時に始まり、以て今日に至つて居るのである。其間苟くも猶太人が國家組織の中に深く喰ひ込んだ國は、何れも崩壞して居るのを見る」(一〇六頁)。何故に彼等は斯くの如き陰謀を企つるに至つたかと云へば 二千年以來基督教國民に散々に苦しめられたからである。卽ち陰謀の動機は基督教並びに基督教國民に對する猶太民族の復讐と云ふにあるが、今日では單にそればかりではない。總ての國家に挑戰することになつた。「若し今日まで基督教との應戰に全力を傾倒したとすれば、之は基督教が各國に於て民衆の獸性を抑壓し、國家組織安康の基礎を形成して居ることを知つて居るからである。マッソンの究極の目的とする所は、基督教の撲滅ではない。更に進んで現世界に於て猶太血統の王の下にマッソンの主權を確立しやうとするのにあ

る」(一一三頁)。

斯くの如く猶太人は、すべての國家を滅ぼして猶太人專制の下に世界を征服統一せんとして居るものと見られて居るが、斯くの如き觀察の眞面目に受取らるべきものかどうかは姑く之を措く。予輩の特に玆に注意せんとするは、西洋に於ける流說は、此秘密結社の挑戰せんとする對手を只基督教國とのみ云つて、すべての國家と云はないと云ふ點である。マッソン結社なるものを日本にとつても怖るべきものだと說く爲めには、此邊に手加減をする必要を見たのであらう。

マッソン秘密結社とは實はフリー・メーソンリーを指して居ることとは、マッソン結社を註釋して「フリー・メーソンなり」と書いてあることによつて分る(一〇六頁)。處が西洋に於てフリー・メーソンリーの事は可なり廣く知られて居るが、其會員は實は猶太人に限つて居るのではない。殆んど世界の人が洽ねく網羅されて居る。而して後にも說くが如く、之には三十有餘の階級があつて、上の階級の事は下の階級のものに秘密にされて居ると云ふ仕組になつて居る。そこで我が流說は「入社するのは猶太人のみには限らぬ。三十二の階級があつて……………下級の雜輩は、大工左官等と稱する階級に屬し、段々昇進して秘密を明かさるゝのであるが、最後の秘密は最上級の社員たる猶太人の外誰も窺ふ事が出來ない」(八頁)と云つて居る。そこで第二級以下の社員はすべて最後の秘密を知らず、何の爲めかを明かにせずして最上級のものに頤使せらるゝのであるから、隨分澤山の基督教徒なども社員にはなつて居るが、結局猶太人の爲めの運動に外ならない事になる。

然らば所謂最後の秘密とは如何なるものか。それは即ち前記の「シオン長老決議錄」に盡されて居ると云ふ。之れ丈けを聽いても段々荒唐無稽の作り話しらしい臭ひがして來るが、更に此決議錄が如何にして今日我々に知らるるに至つ

たかの說明を聞くと、紛ふ方なき妄說であることが明白になる。彼等は云ふ、猶太人は實にこんな怖ろしい陰謀を企てゝ居る。又云ふ、彼等の運動の巧妙なる、此運動は二千年來殆んど外界に知られなかつたと。又云ふ、今や此陰謀の暴露に逢つて我々は其陰險殘虐なるに戰慄を禁じ得ないと。そこで問題になるのは、二千年も隱し了ふせた陰謀が、どうして昨今急に知られたか、と云ふ事である。彼等の云ふ所によると、米國にある全結社の首領が同社總會の席上で述べた報告書の中に、秘密の條項を揭げてあるが「此報告をした首領が自分の妻を捨て他の女と關係したので、其妻君が該報告の原稿を盜んで佛蘭西に逃げて行つて、當時佛蘭西に住んで居た露西亞の大地主なる某富豪に之を賣つた。これは多分一八八〇年乃至一八八五年の事であらうと思ふ。賣却後二年を經て、此女は佛蘭西で毒殺せられて了つたが其下手人は遂に不明に終つた」(一一四頁)と云ふのである。其後右の原稿は或る裁判官に遺贈せられ、一八九五年露譯の上出版せられたが、秘密の手が忽ち之を買ひ占めて燒棄し、一般讀者の手に入らなかつた。次いで一九〇五年に第二版、一九一一年に第三版が出たが、其都度初版同樣の運命に逢つたと云つて居る(三四頁)。重大事件の秘密を握つて居るものが、他の女と關係した爲めに妻君の嫉妬に逢ひ其處から秘密が洩れたと云ふやうな事は、此種の作り話によく出る手である。生中こんな來歷譚を書いて居る爲めに、此流說は益々其眞實性を失つて行く。

斯くしてマツソン結社の本當の中堅は、猶太人だとなつて居る。猶太人以外の社員も澤山ある。が其等は本當の目的を知らずして盲動して居るものに過ぎない。一番奧にあつて操つて居るのは猶太人だから、此結社は即ち猶太人の秘密結社と云つていゝ。マツソン結社は即ち「猶太人を結束せる團體である」(五頁)。而して「彼等は一定の領土を有せず、一地に固着せず、世界の隅々到る所に散在して居るから、仕事が爲し易い。彼等は世界に散在して居るが、結束鐵

の如くで、互に氣脈を通じて世界革命の計畫の實行に努めて居る」と云つて居る。之によつて見ると、世界中の猶太人が悉く一つになつて、同一の目的を意識して熱心に活動して居るやうに見えるが、之なども事實を飛び離れた飛んでもない獨斷である。

斯う云ふ怖ろしい陰謀のあると云ふ丈けで、可なり世界の人が脅かされる譯であるが、更に進んで該書は此結社と露國革命との關係を說き、ボルシエヴヰズムの運動が即ち此陰謀の最も雄辯なるあらはれだと云ふて居る。此書の標題が「過激思想の由來」としてあるのを觀ても、其趣意は明かであらう。

彼等は云ふ。露國革命の先鋒たるリボフ公やミリユーコフは猶太の目的を意識せざる第二級以下のマツソンである。彼等は民意に副ふ政府を作らうとして君主政治を覆した。豈に圖らんや、之れ猶太人の操る所なることを。やがてケーレンスキーが出て來た。「兵卒は將校に敬禮するを要せず」との命令に次いで「兵卒は將校を監視すべし」との命令を發して軍隊の破壞を企てたのは彼であつて、而して之はマツソンがなさしめた仕事に外ならない。併し彼はマツソンの旨を徹底的に奉ずる事を躊躇したが故にやがて排斥され、レーニン、トロツキーの徒が之に代つて出て來た。此兩人によつてボルシエヴイズムは初めて徹底された(一四—一七頁)。「以上革命の經路を一覽した丈けでもマツソンの分子が加はるに從つて破壞の程度が濃厚になつた事が窺はれるではないか」(一七頁)と。「彼等は先づ軍隊に入り込み、非戰論を鼓吹し軍隊の解散を主張した。彼等は實に露國に於ける革命の煽動者である。彼等は今日尙依然として印刷物や流說によつて盛んに下層民を煽動して居る。——要するに露國革命は猶太人の陰謀の實現である。」(一八—一九頁)斯くして過激派は即ち猶太人の怖るべき世界顚覆の陰謀の有力なる發現であるから、我々は飽くまで之が撲滅を期せなければならない。過

激派の侵略は如何なる形に於て來るものでも、我國にとつて最も怖るべきものである。之れ容易に西伯利撤兵を斷行し得べからざる所以で、又嚴しく過激派かぶれの思想の横行を抑壓せざるべからざる所以であると云ふのである。

（三）世界征服の方法

然らば猶太人がマシソン秘密結社を通じて世界を征服する方法は如何。彼等の云ふ所によると、第一には、自由平等博愛の思想を鼓吹することによつて、民心の社會的紐綱を紊亂することである。第二に猶太人の有する厖大なる金力によつて世界の人の物質生活を極度に苦めることである。第三には更に種々の手段を講じて人心頽廢の勢を助長することである。第四には此種の運動の遂行に最も邪魔になる君主制を何よりも先に打破することである。第五に斯くして尚世界征服の功を完うし得ざる時は、遂に最後の大々的革命手段に出づると云ふのである。此等の點が「決議錄」と猶太民族に與へたる訓令とに詳しく說かれてあるが、更に之を簡短に要約したものが前掲出版物の一箇所に出て居る。

フリー・メーソンリーが自由平等並びに四海同胞の人道主義の基礎の上に立つて個人的道德修養を專らとする團體であり、又一つには人種宗教等の差による各種族の抗爭を排し、純乎たる四海同胞の大義の上に完全なる人類和親を主張するものであることは公知の事實である。而して之が危險なる世界顛覆の陰謀の巢窟だと云ふのだから我々には不思議である。何故斯くの如き團體が世界顛覆の陰謀を企てゝ居るのだと云へるか、と云へば、彼等は云ふ、自由、平等、平和の思想によつて民心を荼毒弛頽し、主權と國家とを崩壞せしめ、暴民の擡頭を促し、酒を以て之を猶太人の支配下に置かんとすると。自由平等と云ふと一寸見ると人道的だと云つて人は喜ぶ。「而して其後ろの陰謀を知らぬから、自分は

人道の爲めに盡して居ると思ふて居るが、何ぞ知らん其陰には破壞、革命、暴動、延いては國家の滅亡と云ふ恐ろしいものが瞰らんで居るのである」（八頁）。彼等は自由平等の主張によつて先づ君主獨裁制を破り、盲目な群集の手に政權を移す。立憲君主制になつたと云ふ事が夫れ自身已に主權を弱めることになる。何故なれば、之は「主權者が政治の一部を臣民に與ふることになる。即ち主權を弱めたものである」（十頁）から。更に進んで彼等は立憲政體を共和政體に導き更に無政府狀態に引張つて行く。此處に至つて、天下は全く猶太人のものになる。「各國が無政府狀態とまで行かなくとも、民主政體まで崩れた時は、彼等の目的が達せられたのである」（十頁）。斯くして彼等は今日自由とか平等とか、四海同胞とか眞面目になつて唱へて居るものは、皆人道の爲め、世界平和の進歩の爲めに盡して居る積りであらうが、其努力の爲めに何物があらはれ來るかと云へば、猶太人の陰謀の遂行に便利な狀態に外ならない。かゝる狀態を來さんが爲めに初めから惡意を以て自由平等を唱へて居るものも少くないが、善意を以て之を唱ふるものと雖も、畢竟マツソンの傀儡に過ぎぬから、我々はウツカリ此等に雷同してはならないと云ふのである。

自由平等の思想を鼓吹する事が、政治方面から人心の頽廢を誘致するばかりでなく、又宗教の方面からも混亂を導かうといふのである。「基督教會は吾人の最も恐るべき敵の一つであるからして、吾人は此勢力を失墜させる爲め不斷の努力をしなければならぬ。即ち之が爲め基督教を信ずる智識階級の間に極力自由思想（懷疑思想）を注入し、宗派教派の分裂を來たさしめ、其間の爭鬪を激烈ならしめるやうに力めなければならぬ」（93頁）と。前記「猶太牧師の訓令」中に述べて居る。

斯くして人心を頹廢し、國家的精神を打破する事が隱れたる最後の目的であるから、此爲めには自由思想の鼓吹の外、どんな手段でも取る。戰後頻りに「國際」と云ふ文字を使ふが、之も其淵源は此處に在る。「彼等は盛んに國際といふ言葉

を振廻して居る。曰く國際聯盟、曰く國際警察、曰く何々など、孰れも國際といふ形容詞付きで、要するに國家といふ境界を取除いて世界の人心を統一し、金力に依つて猶太の主權を全世界に樹立しようといふのである」(一一頁)。又曰ふ、「彼のウィルソンが主張して居る國際聯盟や國際警察なんどいふ事は、猶太人の政策をそつくり其儘提議したものと云つてよい」(一二頁)と。

要するに「自由・平等・同仁なる語は盲從的な吾人の諜者によつて世界の隅々まで喧傳せられ、幾千萬の民衆は吾人の陣營に投じ、此旗幟を擔ぎ廻つて居る。然るに實際をいふと、此標語は到る處平和安寧一致を破壞し、國家の基礎を顚覆し、非猶太人の幸福を侵蝕する獅子身中の蟲であつて、從つて吾黨の幸福を大いに增進し、事は諸君の直ちに首肯せらるゝ所であらう」(十一—12頁)。と「決議錄」第一に述べて居る。荒唐無稽の作り話であるといふ面目は、此處に於いて遺憾なく發揮されて居る。

猶太人がどれ程恐ろしい陰謀を企てゝ居るとしても、彼等は差當り領土を有つて居ない。又兵隊も有つて居ない。然らば吾々から見て少しも恐るべき理由は無いではないか。と云ふに、否、さうではない、彼等は實に何よりも恐るべき金力を擁して居る、金力の巧妙なる利用によつて武器以上の效果を收める事を知つて居ると云ふのである。猶太人は今日まで金の力で基督教國民を虐めたといふ事は、殆ど歐羅巴人の迷信と云つてもいゝ位だから、猶太人は其有する金力の方面から恐ろしいものと說くのは、少くとも彼等の間には十分の效き目があるのである。其處で「決議錄」の第二十二には、猶太人をして斯ういふ事を云はしめて居る。曰く「吾人の掌中には現代の一大威力なる金力がある。吾人は如何なる巨額の金であつても、之を二日間に取出す事が出來るのである」(86—87頁)。彼等は如何に金力を利用して其目

的を達せんとするのであるか。自由思想の皷吹によつて小作人を地主に背かしめ、勞働者を資本家に反かしめ、遂に勞働者をして工場を奪はしめ、小作人をして土地を奪はしめる。併し乍ら「農民の地主から奪つた土地は、地主が經營したやうに開拓發展せしむる事が出來るであらうか。勞働者が工場主の樣に企業を經營し得るであらうか。今の彼等の教育程度を以つてしては到底出來ようがない。どのつまりは土地なり工場なりの經營、尠くとも其利益は、秘かに手を擴げて待つて居る猶太人の手に落つるのである」(一三一一四頁)。斯くして先づ各國に於ける産業の根本要素を猶太人の手に收めると云ふのである。

次ぎに彼等は各國政府の財政の鍵を握らうとする。今や歐米諸國の大都市に於ける經濟界の中堅は、殆ど例外なく猶太人である。而かも各國の政府は軍備の競爭の爲めに財政上大いに苦んで居る。其處で武裝的平和の下に各國を滅亡の淵に進ましめる爲に、「吾人に殘されて居る問題は、各國の國債の成立を容易にし、斯くして世界財政の支配者となる事である。さうすれば遂には各國の鐵道を奪ひ、森林を奪ひ、大工場を奪ひ、同時に他の不動産の形に於いて關稅並に國稅を手にする事を得るに到るであらう」(98頁)。

それでもまだ完全に各國各民族を從へる事は出來ない。其處で「尚ほ擾亂を續け、平和を與へずに國民を苦しめる。即ち生活難で苦しめるのである。彼等(猶太人)の手で金融界を左右する事が出來る以上、極めて容易に生活難を惹起する事が出來ると彼等は信じて居る」(一一一頁)。即ち廣大なる金力を以つて生活必需品の買占めによつて一般人民を苦しめるのである。「生活難の爲め一般人民は奴隷制度の下にかけるより以上の苦を嘗めて居る。既に國によつては擾亂が起つたのもある。やがて到る處に蔓延するのであらう」(六五頁)。依て「苦しめ抜いた揚句に、彼等の所謂一片のパンを人民に與へて其主權に歸服させるのである。……非猶太人を奴隷のやうに勞働さして其命を絞り上げ、そして時々パンを

與へつゝ人心を緩和し、世界を支配しようと云ふのである」（一一二頁）。言葉を換へて云へば「各國民の經濟を破壊し、自己の掌中に富を收め、各國民間の和平を害ひ、民衆を饑餓と失望との極度まで到らしめ、困憊疲弊の極遂に世界の經濟的優越權を掌握せる猶太王に頼り、隨喜の涙を流すに到らん時機を待つ」（一一四頁）と云ふのである。隨分人を食つた話である。

右のやうな方法で、武力に依らずして世界を征服しようといふのであるから、非猶太人に對しては自由平等の思想を鼓吹すると同時に、淫靡・贅澤・虚僞凡ゆる惡德の注入を怠らず、殊に游蕩文學の鼓吹によつて少しでも多く人心の頽廢を謀らんとする。「決議錄」の第十四に、「所謂一等國といふ國々に、吾人は愚鹿な淫靡な質に唾棄すべき文學を作り上げた。吾人が政權獲得の後、暫時は之を奬勵する」（66頁）と云つて居る。又曰ふ、「マッソンが文學美術の方面から、俗壞亂を企てゝ居る事は、マッソン自身之を自白して居る。……現に一時猶太人が根據を据ゑた佛國に於ける文學の如きは其適例である。モウパッサンやゾラの作、其他有象無象の小説、一つとして然らざるはなしだ。……然るに日本の文士は社會を荼毒すべく猶太人が故意に流し込んだ排泄物が入つて居るのを知らずに、西洋文學をそつくり其儘日本に紹介するから堪らない。……近來頻々起る裸體畫問題なども亦然りである」（二六―二七頁）と。

さうすると昨今世界に淫靡の風の流れて居るのは、猶太人の爲す所である事になる。さうすると木乃伊取りが木伊乃になるといふ諺の通り、猶太人自身も亦一緒に頽廢する事がないか。此點について本書の作者は「彼等自身は如何に己を持し、又如何に彼等の主權を擁護しつゝあるか」の點につき大いに學ぶべき點があるとて、次のやうな事を云つて居る。「彼等は非猶太人に對して自由・平等を鼓吹し、代議制を慫慂し、民權伸張を勸告して居るが、彼等自身は「カガル」

（秘密結社長）に對しては絶對の服從を爲して居る。一例を擧ぐれば、彼等は自ら餓えても「カガル」に納付を怠らない。又非猶太人民に對しては階級の軋轢を助長して居るが、自らは階級別を遵守して居る。又、非猶太人に向つては贅澤を鼓吹するに反し、自身は如何に富んで居つても極めて質素で虚榮に走らぬ。夫婦の關係の如きも、非猶太人に鼓吹するのと反對で、頗る嚴格である。彼等は人前に於ては一見淫靡の如く見ゆるが、實際は必ずしも然らずである。そして彼等の結束と相助の觀念とは鐵の如くであつて、非猶太人をば欺きもし、苦しめもするが、猶太人が猶太人を欺き又は見殺しにする事は稀である。又子弟は最も嚴重な監督と制裁との下に教育し、所謂猶太魂の涵養に努めて居る。それであるから殆んど二千年間流浪の生活を送り乍ら、彼等の民族性は今も昔も變らないのである」（二九―三〇頁）と。醉拂ひの道樂親爺が自分の小供にだけ品行方正ならん事を求むると同じ樣に、他人を散々墮落せしめて自身だけ一人嚴格な生活を送らうといふのは、無論初めから出來ない相談ではあるまいか。若し夫れ「貴族富豪の家庭に入込んで居る男女の家庭教師、僕婢、番頭、執事及び非猶太人の歡樂場に出入せる猶太の女性、就中此最後のものは……非猶太人の淫樂贅澤を故意に幇助して居るものであつて」（七四頁）、之れ取りも直さず殉教の精神に富む吾黨の諜者であると云ふに至つては、呆れて物が云へない。猶太人で妾を持つものがあるか、其女は非猶太人に限るとか、又露西亞では婦人共有法律を作つて居る所もあるが、此法律の適用を受くるものは事實上純露國婦人に限られ、猶太婦人に及んで居ない、之れ皆非猶太人を墮落せしむる爲めの魂膽に出づると云ふに至つては、人を馬鹿にするも程があると云ひたくなる。

以上のやうな方法で、猶太人は結局世界を征服せんとして居るのであるが、それがすら〳〵と目的が達せられるかと云へば、其處に一の大いなる障碍がある。「猶太人の世界掌握の陰謀の邪魔は、君主を戴いた國家である。何となれば聰

明なる君主は彼等の跋扈や主義の實行を許さないからである」(九頁)。「決議錄」中にもマキアヴェリ流の獨裁君主制を謳歌し(39頁)、又「政治問題等は社會の指導者が知つてさへ居ればよいのであつて、社會一般民衆が容喙すべきものではない」(52頁)などゝ云つて居る。其處で世界の表面から君主國を絶滅するといふのが彼等の最大の急務になる。「××××××××、×××××××××××××××」(××)。××××××××××××××××××××××××××××××。

君主制を打破するには君主と民衆とを離反せしめなければならぬ。之が爲に自由平等を說くのだ。而して君主に反いた多數の民衆は常に之を友として置く必要がある。それが爲には「凡ての社會問題殊に勞働者の運命を改善しようとするやうな問題に對しては熱心な味分であるかの如く假面を冠る事」(103頁)が必要である。斯くして時に最近勞働問題などを擔ぎ廻るものは皆マッソンの手先きであるといふやうな意味を仄めかして居る。何れにしても、柔順にして且つ無智なる民衆の大部分は吾人の味方になつて居るから大丈夫である」(101頁)勝利は疑ないと云つて居る。けれども萬一計劃の破れる事あらんか、其際は「吾人は如何なる勇敢な人間でも、之を聞けば直ちに縮み上つてしまふやうな準備をなしつゝある。準備とは何ぞ。地下道の開鑿之である。吾人の計劃の一般に感付かれる頃迄には、各國の首都に於いて地下道の完成を見るであらう。さうなれば一朝事ある時は、吾人は國家の重要機關を爆破する事が出來る」(68—69頁)と云つて居る。

以上述べたやうな方策を更に數箇條に要約して、次の如き行動計劃なるものを掲げて居る(一二一頁—一二八頁及一一三—一一四)。(一)、自由平等の思想の鼓吹に依り、個人的權利の擴張の名義の下に漸を以て主權を薄弱にし、愛國心を弱め

就中君主國の破壞を圖る事。(二)、貧富の懸隔を大ならしめ、階級鬪爭を助長し、下層民の手を借りて貴族富豪の撲滅を圖る事。(三)、非猶太人の間に淫靡放縱の風を助長し、人間の劣情を發達せしめ、殊に人倫上最も大切なる貞操の如きは迷信として嘲笑するの風を流行し、殊に青年の氣風を薄弱ならしむる事。(四)、猶太教以外の總ゆる宗教の撲滅を圖る事、殊に基督教撲滅の爲めには最も愼重なる方法を講ずる事、之れが爲めには表面から露骨に攻擊する事を避け、基督教の假面を被つて基督教の根柢を覆す手段を執る事。(近頃基督教が社會主義や危險思想の根源となつて居るのは、實はマツソンが基督教を利用して居るのだと云つて居る)。(五)、以上の計畫の實行のために新聞雜誌の言論機關を盛に利用する事。(世界の新聞の八割は猶太人の手に歸して居るとか、所謂世界の大勢などゝ云ふものは之等の新聞が國家思想を破壞するがために製造するものだなどゝ云つて居る)。(六)、斯くして非猶太人の民心の頽廢を極度に進めた後、徐ろに其尨大なる金力を利用して實に世界の征服の地步を占むる事。

(四) マツソン結社の組織

マツソン結社は全猶太人の固い團結で、彼等は全世界に散在して居るが、其結束鐵の如く、互に氣脈を通じて熱心に計畫の實行に努めて居る。如何にして氣脈を通じて居るかと云ふに、七十七の支部を全世界に設け、北米合衆國內カロライナ州のチャールストンに設けられてある本部に於て之れを總括して居ると云ふ。支部は亞細亞方面にもあるが日本にも四箇所あると云ふて居る(六頁)。

マツソン結社は前に述べた如く表面は正義人道の旗幟を揭げて居る所から、其本當の魂膽を知らない者は、世界の平和の爲めだ、正義人道の爲めだと考へて入會して居る者が多い。斯くして其「組織は一寸見當が付かぬ程複雜である。

即ち社會階級の總てを包括したもので、宗教、政治、經濟、總ゆる方面に亘つて居り、學者、政治家、論客、藝術家、俳優、番門、給仕等に至るまで總ての階級を網羅して居る。而して入社する者は猶太人とは限らない。三十二の階級があつて、社員は其一階級に屬する。下級の雜輩は、大工、左官等と稱する階級に屬し、段々昇進して秘密を明かさるゝのであるが、最後の秘密は最上級の社員たる猶太人以外誰れも覗ふ事が出來ない」(八頁)。之れは即ちフリー・メーソンリーを眼中に置いたものである事が明白であるが、而もフリー・メーソンリーの事を知らずして恁んな事を云つて居る所に無邪氣な滑稽が表はれて居る。

そこで彼等の云ふ所に依るとマッソン結社の社員は三十二の階級に分れて居るが、之れを大別して二つの階級に分ける事が出來る、即ち一つはマッソンの惡辣陰險の眞の目的を意識して居る最上級の者で、他の一つは只正義人道の看板に眼が眩み、其蔭に潛む陰謀を知らずして善意を以て世界破壞の運動の手先きとなつて居る者即ち之れである。決議錄の第九に曰く「目下世界各國に於ては、我黨の作つた種々の意見を鵜呑みにした連中が吾人の爲めに大ひの勞を取つて居る。曰く君主制復興家、曰く專制政治家、曰く社會主義者、曰く共産主義者云々」(五頁)斯くして此種の正直なる愚民を使つてマッソンの最高幹部は着々として世界顚覆の陰謀の遂行に努めて居るのである。

併し乍らマッソン結社は、如何にして本來馬鹿正直なる青年輩を自々の陰謀に羅致する事を得るか。非猶太人の征服の爲めに其非猶太人の子弟を使ふと云ふのだから餘程巧みな手段を執らないと底が割れる恐れがある。之れに就いては次ぎのやうな事を云つて居る、「一例を擧ぐれば最高秘密結社が基督教の權威を失墜せしめやうとする時は、基督教的教育又は訓練を施して幾多の人民を率き着ける。…………表面では基督教的道德の涵養を以て其社の根本目的と揚言し乍

ら、實際に於ては基督教の根本義を迷信なりとして排斥し、次いで基督教道德の破壊に手を伸すのである」(106—107頁)。又云ふ、最高秘密結社が世道人心を衰廢せしめんとする時は、適當な人士を選んで青年會を設けしめ、青年の氣質に投合するやうな說を餌として徐々に目的を達せんとする。譬へば子たる者は父母の要求が正當なる時に於いてのみ服從すべき者であるなどゝ說いて、子女をして父母を批評するの位置に立たしめながら、父母に背くの習慣を助長し、遂には親權の破壊を來さしめんとする。其他の政治的、文化的事業に至つても一として然らざるものはない。「彼等が國民の政治思想涵養の目的を以て社を興す事があらば、そは如何なる愚者にも主權の活動に對し絕えず批評を加へる特權を與へて、主權の權威を墜し、國家組織の解體に導かうとする陰謀から之れを爲すに外ならぬ」(107—108頁)と云つて暗に社會黨や勞働黨若くは急進黨を呪ふて居る。

斯う云ふ目的を達する爲めに特にマツソン社の骨を折る所は、飽く迄天下の耳目を欺くために世界各國に亘つて增設さるべきマツソン社には現在及び未來の大家を網羅すると云ふ事である。フリー・メーソンリーには、後にも述ぶる如く今日の政界で云ふならロイド・ジョージとか、ウィルソンとか云ふ第一流の人物が皆這入つて居る。夫れ丈けで見ても此結社が猶太人の世界顚覆の陰謀の手先きなどになる筈はない。況んや知らずして之れを助長して居ると云ふが如きおや。けれども何處までもフリー・メーソンリーを猶太人の陰謀たるマツソン結社に結び着けやうとするには、ロイド・ジョージも、ウイルソンも皆マツソンの徒と云はなければならない。斯くして彼等は云ふ、出來る丈け世間の耳目を瞞着する爲めに我々は一流の大家を網羅するのだと。斯うなると馬鹿も休み休み云へと云ひたくなる。

(五)「シオン決議錄」の內容

二千年來猶太人の抱いて居つた陰謀、而して久しく秘密の中に隱れて居つたのが前に述べたやうな不圖した事から最近やつと世界に暴露された陰謀計畫の內容は、所謂「シオン長老決議錄」に列擧されて居る。前に述べた事と重複するが其大要を次ぎに示さう。決議錄は全部で二十四の項目がある。けれども之れを系統的に分けると三大綱目になると思はれる。

第一に掲げて居る事はマキアヴェリー流の獨裁君主制の謳歌である。政治と道德とは全く沒交涉のもので、德義を基礎とする爲政家は政治家でないとか、苟くも政治家たらんとせば僞善を旨として奸策を弄さなければならぬ、公明と正直とは政治家にあつては寧ろ罪惡であるとか、吾人が今日止むを得ず行ひつゝある所の罪惡は後日善となるの日があらう、吾人の計畫は、是非善惡の點よりも寧ろ必要、不必要、利害得失の觀點より判斷されなければならぬとか云つて、「政治の本領は幼少より專制政治の訓練を受けた者に限りて之れを發揮する事が出來る。獨裁君主のみが諸計畫を概括し、國家機關の間に之れを案排し、秩序を立てゝ之れを處理して行く事が出來るのである」(三六頁)。之れはマッソンの政治理想が如何に現代歐米の自由主義と相容れないものであるかを明かに示すものである。

第二の項目には斯くの如き猶太人の獨裁的主權を確立する前提にして、先づ如何にして世界の擾亂を來すべきかの方法を論じて居る。猶太人には武力がない。從つて世界征服の事業を全うするためには、いろ〳〵特種の方法を講ずるの必要があるのである。之れに就いて彼等の最も得意氣に主張して居る所は世界各國到る所に數百萬の諜者を配置し(四三頁)金力を以て言論機關を左右するのみならず、更に行政官を左右し、(四三頁)各國の國家機關の運轉を彼等の手に收め(五〇頁)

次いで又大統領の地位を自分の思ふがまゝに左右する（60—62頁）。斯く國家の政治機關を掌中に收むる方策を講ずるの他の一方に於いて、又盛んに民心を混迷させる方法を怠らない。彼等は刊行物の力を借りて科學に對する盲從を絶えず鼓吹し、ダルウイニズムやマルキシズムやニイチエズム等の成功に依つて思想界を混亂したのは我々の力であると云つて居る（43—44頁）。表面飽く迄も勞働階級を助けるやうな顏をして資本主義攻擊の經濟學說を流布したのも我々だと云つて居る（54頁）。

自由の看板の下に政黨を作らしめ、政權爭奪の爲めに爭はしめたのも我々だ。生活難の爲めに彼等を苦しめたのも我々だ。「斯かる狀態の處へ持つて行つて、我黨の士は人道とか四海同胞とかを標榜して、社會主義や無政府主義や、共產主義を我々が援助を與へて居る勞働者に勸說するのであるから」、彼等は期せずして我々を救濟者と仰ぐ。斯くして我々は民衆を唆かし「其手を借りて吾人の前途を妨げる者を撲滅すべきである」（45—46頁）。斯う云ふと詰り貧乏人が金持に反抗するのは自ら手を下さずして貴族富豪を撲滅せんとする猶太人の陰謀に基くと云ふ事になるが、併し金持の大部分は猶太人であるのを何う說明するか。そこで彼等は云ふ。「併し乍ら彼等は吾人猶太人の富豪には手を觸れないだらう。何となれば吾人には彼等の攻擊の時までに事情が分つて居るから、豫め適當の豫防手段は講ずる事が出來るからである」（46頁）と。

此方法を以て進むに當り、「現今吾人を倒す事の出來る勢力は國際間には何もない。何となれば一の勢力が吾人を攻擊すると他の勢力が吾人を防護するからである」（47頁）。

要之猶太人は斯う云ふ惡辣な方法で世界を苦しめる。昨今世界を騷がして居る所謂危險思想や乃至共產運動は皆猶太人に淵源する事だと云ふ意味がよく表はされて居る。

終りに第三の項目には、猶太人が愈々其目的を逹して世界を掌握した時には、何う云ふ風に之れを治めるかと云ふ事が述べられて居る。

「吾人の天下となつたならば……法律に依り世間に對して絕對的服從を要求する」(12頁)。之れまで大いに擾亂されて愛國心も、宗教心も滅却して居るのだから、恁う云ふ社會を治めるには壓制の外にないと。「吾人は社會の一切の勢力を掌握するため極度の中央集權を取り」彼等を治むる法律は極度の壓制的なものでなければならぬと云つて居る(20頁)。

さうして置いて段々人民に服從の德を敎へて行く。

此目的を逹する爲めには「主要官衙から一切の自由主義者を驅逐し、之れに代ふるに吾人が行政敎育を施した者を以て」しなければならない。「我黨の裁判官は詐らない慈悲寬恕は正義の法則に違反する者なる事を知らねばならない」(21頁)。辯護士の制度は「無責任な放縱な人間を養成するものである。辯護士は……只管被告のみを辯護する習慣を持つて居る。……此故に吾人は此職業を極限する必要がある」。(21頁)更に吾人は大いに言論の取締りを嚴重にする必要を認める。免狀を持たずし、出版業者、印刷業者たる事が出來ない。總ての刊行物に保證金を徵し、一頁毎に課稅し且つ二十頁以上のものには倍額の稅を課する。雜誌の如きは大半之れを國有にしなければならぬ(21―22頁)。斯くして嚴重に取締つた上猶く諜者や密告者を放つて秘密の探偵をするから、殆んど不穩の陰謀の企てられやうがない。それでも若し警戒を嚴にする必要な出來事が起つた場合には、紛擾診斷なるものをやる(23頁)。それは雄辯家に賴んで不穩の演說をさせる。若し之れに共鳴する者多かつた時には、直ちに警察の力を以て之れが一掃を圖るのである。

次に宗敎に就いては猶太敎以外の他の一切の宗敎を破壞するとか、其ための過渡的の現象としては無神論者などを跋

屈させるとか（63頁）、教育に就いては「綜合大學を吾人の方針通りに教育して無害のものにする必要がある。此目的を達する爲めには、總長や教授に詳細な秘密教程を授け、少しでも之れに違反したら處罰する事とする」（73頁）。今までは非猶太人の國家組織を覆すために故意に政治法律の課目を授けて來たが、我々の時代になれば之れ等は悉く省いて了ふ事にする。本當に吾黨の機密に參與して居る少數者丈けに之れを授ければ好い。一般の人には寧ろ爲政者の善い事計りを敎へる事にする（73―74頁）。

財政並びに公債政策に就いても詳細に述べてあるが管々しいから今は省く。要するに猶太人の天下になれば、如何に現代の世界が苦しまねばならぬかを特に歐米の下層階級の神經を惱ましむるやうに説明してある。

以上を以つて「決議錄」の內容を大體述べ終つた事にする。もつと詳しい紹介は、三月十五日發行の「外交時報」紙上に載せた今井文學士の論文に詳しいから、就いて參照せられん事を希望する。唯此處に一言附け加へて置きたい事は此「決議錄」を振廻すものが、此猶太人の陰謀の計劃が其通り今日の世界的擾亂に現れて居る、豫言の斯くまで的中して居る所から觀ても、現代の世界的擾亂は取りも直さず猶太人の爲す所に相違ないといふ風に觀て居る事である。我々から觀れば、猶太人の希望するやうな狀態は一つも現はれて居ない。現に現はれて居る事は、猶太人の豫言を俟たなくとも豫想され得べき事柄である。之を豫言の的中などと云ふのが分らない。且つ又豫言の的中だとしても、今日の世界的擾亂を見て遽かに之を猶太人の計劃に歸して、彼等を陷れんが爲めに本書を拵へたものでないかといふ疑もある。其爲にや「決議錄」の發行者は之は最近に作つたものではない、一九〇五年に出版されたもので、現に大英博物館には一九〇六年八月十日の日附けで十七門三千九百二十六號として一本が保存されてあると態々斷つてある。恁んな事を辯じ立てゝ

居る丈け此本の下らないものであるといふ眞相が益々明白になるやうな氣がする。

(六) マッソンの餘毒

我が「過激思想の由來」は更にマッソン結社の秘密陰謀が古來幾度も世界の擾亂を企てたといふ事實を立證せんとして居る。其の滑稽な立證方法の一つ二つを御目に掛けよう。

第一に來るのが佛蘭西革命である。佛蘭西革命は正にマッソンの起したものだと斷言して居る（一一五頁）。それからナポレオンとマッソンの關係の說明が面白い。ナポレオンは佛蘭西の帝位に即くまではマッソンの徒で、又其支持を受けて居たが、皇帝となつてからは啻に其勸告に從はざりしのみならず、國內に在る猶太人を公然敵視したので、遂にマッソンは種々の劃策を廻らしてナポレオンを仆した。即ち一方に於いてマッソンの徒が多數を占めて居る當時の英、露、墺諸國の政治家を動かして歐洲聯盟を造り、他方に於てはナポレオン腹心中のマッソンを唆かして陰に陽にナポレオンの虛榮的野心を煽り、遂に滅亡的の事業を決行せしめたと云つて居る（一一九頁）。

次ぎに露國を倒したのも亦マッソンだと云つて居る。露國にマッソンの入つたのは餘程以前の事で、アレキサンドル一世時代には既に廷臣の多くが之に加はり、皇帝自身又其眞目的を知らずして之に歸依し、爲めに其勢力は益々張つて來た。然るに一八九五年最高幹部の總會は、露國の勢力を弱むる爲めに全力を注ぐ事を決議したが、當時の露西亞は實に此陰謀の爲めに絕好の機會であつた。何故ならば政權は剛毅果斷なアレキサンドルから優柔不斷のニコライ二世に移つたのみならず、帝は即位の當初より露國マッソンの首魁たるウヰツテの藥籠中のものであつたからである。日露戰爭を

起したのは露國の敗亡を希望するウキッテ一味のマッソンがやつたのである。此戰爭に露西亞が敗けたので、マッソンの領袖は一時私かに喜んだが、其後露國の國力恢復が案外速かなるを見て、之れではならぬと直ぐに又革命運動を起したが、內、國民多數のまだマッソンに感染れて居ないのと、外、獨逸皇帝の來援あつて、運動は忽ち鎭定せられた。けれども彼等は之に屈せず、言論機關を利用して盛んに破壞思想を注入した。露國に代議制を設けしめたのが卽ち此運動の一大成功であると云つて居る(一一八—一二〇頁)。

今次の世界大戰とマッソンとの關係については次のやうな事を云つて居る。「マッソン秘密結社は歐洲大戰の準備に着手した。此決議は一八九八年になされて居る」(一二〇頁)。之が爲めには、獨逸をして世界政策を取らしめ、之と英吉利とを離間せしむるに努めた。而して最初の計劃では巴爾幹問題で世界戰爭を勃發せしめようといふ豫定であつたが、一九〇六年に至つて多少計劃を變更し、三國同盟にはトルコ、ブルガリア等を加盟せしめ、又露佛同盟には英吉利、日本を加へ、此二大同盟を爭はしめて歐亞の大國を疲弊せしめ、やがて之等の國內に革命を起さしめようと云ふのであつた。而して米國は既に著るしくマッソン化して居るから、將來歐亞を併せてマッソンの世界的主權を樹立する時に策源地とする必要もあるから、二大同盟の何れにも加はらしめなかつた。此目的の爲めにマッソンは露西亞に入つては英露同盟の必要を說き、佛蘭西に入つては英佛同盟の必要を論じ、獨逸に入つては英佛露對戰準備の急務なる事を力說した。是等の國がうまく／＼と此議論に乘つたのは、彼等の爲めに考へて見れば誠に危險な事であつた。併しマッソンは果して此計劃通りに行くか何うかを多少掛念して居つたが、愈々大戰が勃發すると豫期以上の成功で、有繋強大を謳はれた露國も、見る影も無く崩壞したので、マッソンは大いに狂喜した。所が之が爲めに獨逸の勢が馬鹿に強くなり、自國の君主

制を益々鞏固にするので、之れではマッソンの計劃の進行に邪魔になるといふ所から、更に改めて獨逸壓迫の新方針を執る事になつた。之が爲めにマッソンは先づ以つて米國を利用した。從來首鼠兩端を持し、多少獨逸に同情を有するかに見えて居た米國が、忽ち豹變して獨逸の敵となつたのは之が爲めであると云つて居る(一二〇―一二三頁)。

次ぎに巴里の平和會議においても亦マッソンが大いに活躍したと云ふて居る。彼等は國際聯盟や民族自決主義などは共にマッソンが之を説かしめたものだと云つて居るが、國際聯盟の方は此「美名の下に各國家の經濟的政治的境界を取除き、各國の戰後の疲弊に乘じ全力を以つて世界の覇權を握り、其盟主にならう」(一二二頁)と云ふのであり、民族自決の方は「列强の多くは植民地又は多數の民族から成立つて居るから、各民族が獨立を宣言主張する事になると、列强が自然に崩壞しないまでも紛擾が絶えない事になる」。(一二二頁)畢竟米國以外の列强を弱める手段であると云つて居る。

彼等は又云ふ。「若し歐洲大戰前に日露獨の如き純粹な君主國がなかつたならば、マッソンは其豫ねてより準備して居つた社會革命運動を一二ケ月以内に勃發せしめ、無政府狀態を現出せしめて、遂に彼等の陰謀の目的とする所を達する事が出來たであらう」(一一七頁)。故にマッソンの何よりも撲滅せんとする所は君主國である。そこで「露獨の君主制を倒した今日、マッソンの徒は全力を擧げて××××××を企てゝ居る」(一二三頁)。一九〇六年以來多數のマッソン結社が日本に設立せられたが、昨今普通選擧運動や勞働運動や、其他日本固有の傳統に知られてなかつたいろ〳〵の新運動の起つて居るのは皆其蔭にマッソンの魔の手が潜んで居るのだと云ふやうな事が仄かされて居る。××××××××××××××××××××××××××××××××××××× ×××××××××××××××××××××××××××××××××(一二三頁)と云つて、盛んに米國の對日脅威を説いて居る。斯くして該書の結論に曰ふ

「××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××××××、×××××××××
××××××××××××××××××」（一二五頁）と。

（七）前記出版物の正體

以上述ぶる所によつて當該出版物の荒唐無稽を極めて居る事が、最早や極めて明白であらう。若し之が民間射利の徒の手によつて作られたものであつたなら、殆ど識者の顧る所とならずして終つたらうが、或る方面の有力なる筋より非常な大發見でもしたかの如く勿體をつけて頒布されたので、意外にもそれからそれへと傳唱され、遂に動かす可からざる一世界的事實として受取らるゝに至つたのは、不思議と云ふよりも寧ろ滑稽の沙汰である。而して斯くの如き事になつたのは、畢竟人々が單純な傳聞によつて輕卒に信ずるといふ所から來るので、若し其半分でも又は三分の一でも精讀したなら、恐らくは直ちに其途方も無い出鱈目である事が感知せられたであらう。予の前段に紹介した所はそれ丈けでも其荒唐無稽なる事を證明するに十分であると信ずる。

更に當該出版物が如何なる據り所があつて出來たか、又之を作る時の考は何ういふものであつたか等を考察して、該出版物の正體を解剖して見ると、其出鱈目なものである事は益々明白になる。予輩の知る所に據れば、作者も云つて居る通り、之れには西洋の種本(たねほん)がある。而して其種本はフリー・メーソンリーと猶太人とに對する西洋人傳來の反感を利用して、ボルセヸズムに對する不信を唆らんが爲めに作つた、所謂爲めにする所ある贋本(いかさま)に外ならない。然るに我國の譯者は恐らくフリー・メーソンリーの事も又アンチ・セミチズムの事も餘り能く御存知なく、從つて種本の眞意を諒解せず、漫然之を卒讀して、自分達の頑迷な思想の宣傳に利用しようとしたものだと考へる。次に簡單に此等の點を説明

しようと思ふ。

マツソン結社とは即ちフリー・メーソンリーの事だといふ事は讀んでも分るが、又明白に斷つて居る所もある。而して譯者はフリー・メーソンリーについて殆ど何等知る所なかつたと見えて、到る所に其無智を發露して居る。例へば、「久しき以前より世界を擾亂し、遂には世界を支配しようとする組織立つた秘密の結社がある。其名稱は時代によつて名稱を異つて居るが」目下はマツソン結社と云つて居る（五頁）とあるが、併しフリー・メーソンリは時代によつて名稱を異にした事はない。一體マツソン結社といふ名から可笑しい。フリー・メーソンリーは時としてマソニツクといふ形容詞で呼ばるゝ事はある。現に「決議錄」の中には、ジユーウイツシ・マソニツク・コンスピラシイ（猶太人のマソニツク陰謀）などと罵倒して居るが、併し何うもぢつて讀んでもマツソンといふ發音は出て來ないのである。甚だしきは英國では此結社をフリー・メーソンの名稱で呼ぶが、獨逸、佛蘭西方面ではマツソン結社と云ふなどと出鱈目を云つて居るものもある。獨逸ではフライ・マウラライ、佛蘭西ではフラン・マソンヌリーで、マツソンとは何うしても讀めないのである。

又該書は此團體の總本山を「全世界最高パトリアーク社」（他の一本に、社の代りに座の字を用ひたものがあつた）と書いてあるが（八頁）パトリアークを社だの座だのと譯した丈けでも甚だしき無學を發露して居るではないか。序でに譯者のもつとひどい無學の一例を示して置かう。該書の十八頁に斯う云ふ註釋がある。「目下吾人はボルセヴキを稱してタヴーリシチと云ふて居るが、之は猶太人たる煽動者が群衆なり軍隊なりに向つて演説する時に此言葉を用ゆるのである。タヴーリシチとは朋友、同黨の義で、諸君の代りである、猶太神話の中にある標語である」（一八頁—一九頁）。と。タヴーリシチが猶太神話と關係があると云ふ事は、露西亞語學者に聞いても明かでないが、唯此言葉は純粹の露西亞

語で同輩の義であり、昔から社會主義者の好んで使つた言葉である事は何人も知つて居る。社會主義者が普通日常の會話に用ゆる君、僕といふ言葉の起源が、封建時代の主從の階級的臭味を帶べるを不快とし、全然同列の人格だと云ふ意味を表はす爲めに、殊更に同輩と云ふ言葉を用ひて居る事は、今に初まつた事ではない。英人がお互にカムラードと呼び合ひ、獨逸人がコレーグ、佛蘭西人がコンフレールと呼ぶと同じゝ、露西亞人は多年タヷーリシチと呼び合つて來た。聞く所によれば日本の社會主義者の間にも、お互に呼び合ふ時にはカムラードと云ふ言葉を使ふさうだ。之れ丈けの事を知つて居れば、西伯利に於ける露西亞人がタヷーリシチと云ふ新しい呼び方をするからとて、少しも怪しむべき理由は無かつたのである。之を猶太神話に出づるものなどと云ふのに、隨分人を馬鹿にした牽强附會ではなからうか。

當該出版物が「過激思想の由來」と題するも、全體四部よりなつて居る事は前にも述べた。此第一の「世界革命の陰謀」はあと三篇の飜譯に與つた日本人たる「某憂國の士」の起稿に懸ると斷つてあるが、予の觀る所では最後の「マツソンの陰謀」も亦日本人の作ではないかと疑はるゝ。第二「シオン長老決議錄」と第三「猶太牧師の猶太民に與へたる訓令」の二つは、共に明かに飜譯である。前者は僕の手許にもある。そこで第二第三の兩篇は、餘り正確ではないが西洋の種本の飜譯であり、第一第四の兩篇は之を飜譯せる某日本人の註解と見て可い。而して少しく精密に研究して見ると、其註釋がまた全然原書の眞意を取違へて居るから面白い。最初僕が此本を讀んだ時、日本人の起稿と斷つてある第一篇の趣意と、第二第三兩篇の趣意とまるで違つて居るのに驚いた。やがて第四篇を見ると、之が又全然第一篇と同趣意で出來て居るから、之は飜譯とは云ふものゝ、恐らく日本製の僞物であらうと考へたのである。何れにしても本書は過激思想の由來を說いて猶太人の陰謀の恐るべきを警告せんとしたものであらうが、西洋の種本の作者の着眼點と、日本で

之を利用せんとするものの着眼點とまるで違ふ。そこで予は故らに第二と第三とよりの引用は洋字、第一と第四とよりの引用は日本字で頁數を示して置いたから、讀者に於いて少しく此點を注意して讀まれたなら、直ちに矛盾のある所が明白になるであらう、

先づ日本の譯者は何の目的に之を利用せんとしたかと云へば、極端に頑迷な保守思想の擁護に作る事は疑を容れない。尤も表面は露西亞の過激思想と云ふものは斯ういふ恐ろしいものである、之が日本に入つては大變だから何うしても喰ひ止めねばならぬと云ふて、或は西伯利駐兵の口實にしたり、又支那に於ける新運動排斥の論據としたりする點はある。之にも可也重大な誤解はあると思ふが、それでも單に猶太人の陰謀といふ恐るべきものが我々を脅かして居るといふ事實丈けを紹介するのなら可い。作者は此處に止まらず、更に勞働運動を初め其他凡ゆる社會的の運動より、普通選擧運動、否、立憲政治其物までを罵倒し、更に國際聯盟や平和運動の如きまでをも呪ひ、自由、進歩、平和等の目的を有する凡ゆる運動を皆マツソンの爲す所だと云つて排斥して居る。即ち日本に於ける是等の文化的新運動の凡てをマツソンの汚名と共に排斥せんとするのが其根本目的であるやうだ。驚くべき頑迷な反動思想で一貫して居る事は、前段の紹介によつても分るだらう。此點が又實に此書が其傾向の頑迷者流に喜ばれ、秘密の間に大いに廣く持囃された所以である。東北の或縣では縣廳の役人の肝煎りで民力涵養委員なるものが數百部を複製し、時勢に適切な極めて有益な讀物として、各郡市町村公衙、學校、圖書館、青年團、婦人會より誰れ彼れの有志にまで配つて、一時大いに物議を醸した事は前にも述べた。さう露骨に反動思想を宣傳して居る丈け、また少しく心あるものが見れば荒唐無稽を極めて居る事が直ぐ分る。唯露西亞の過激派が引合ひに出て居る丈け、而して過激派に對する疑惑不信の念は今日一般識者の間にも相當に強い丈け、鳥渡之に迷はされる事はある。

併し西洋の種本も亦同じやうな目的で書かれたものかと云ふに、さうではない。西洋の原書は猶太人の決議とか猶太牧師の訓令とかいふ謂はゞ猶太人自身の書いたものといふ形で書かれてあるから、一見すると日本の譯者と同じやうに、極端な反動思想の宣傳のやうに見ゆるけれども、實は之は非猶太人が書いたもので、猶太人がこんな不都合な事を考へて居るから、我々は自由と進歩と平和と人道との爲めに之に警戒し、又之と戰はなければならないといふ趣意を述べたものである。即ち此本の原作者の結局に於いて擁護せんとするものは、日本の譯者の極力排斥せんとするものと同一なのである。日本の譯者は自由と平和とを咀ひ、更に進んで此種の思想並に運動の策源地として基督教會及び青年會を罵倒して居るが、原作者は猶太人の陰謀の恐るべきを說き、基督の光りと教會のそれとのみが能く此魔手の跋扈を抑へる事が出來ると說いて居る。(「シオン長老決議錄」英文原書九五頁)。西洋の作者は猶太人は斯ういふ不都合な事を考へて居るから、眞の自由の爲めに起てと云ひ、日本の譯者は自由進歩などといふ奴等は皆マッソンの手だから之を排斥せよと云ふ。單純な利用の方法としては烏渡巧妙のやうであるが、能く讀んで見ると、まるで眞意を取違へて居るから可笑しい。

「能く游ぐものは水に溺る」の譬で、能く利用したがるものは兎角飛んでもない誤りをする。日本の頑迷者流は日進月歩の自由平和の大潮流に、なか／＼正面から抵抗する事が出來ない所から、兎角裏面から凡ゆる手段を弄して其陰險なる目的を達せんとする。西洋の本などで烏渡都合の好ささうなものがあると直ぐ之を利用したがる。昔山縣公が内務大臣であつた時、露西亞のポビエドノスチエッフの本を飜譯して物議を釀した事があつた。併し之は正面から立憲政治を呪ひ、民主主義を罵倒したものであつた。今度又同じ目的の爲めに「シオン長老決議錄」を利用したのであるが、焉んぞ知らん、之は立憲政治や民主主義や並に其根柢となる思想の擁護の爲めに書いた本である。唯書き方が猶太人が盛

んに之を罵倒するといふ形を取つた所から西洋人なら直ぐに之に唆かされて猶太人に對する反感を催す丈けであるのに是等の點に諒解のない日本人は、淺墓にも直ちに之を取つてボビエドノスチエッフの本と同じやうに利用し得ると考へたのであらう。

右の如く日本の方では飛んでもない讀み損ひをして居るから益々荒唐無稽のものになつて了つたが、併しさうでなかつたにしろ西洋の原書其物が既に途方も無い出鱈目である。そこで問題は何故又何の目的のためにこんな出鱈目が西洋で白々しくも說かれて居るかと云ふ點に集る。之れには又其由つて來たる理由があるのである。

第一に何の爲めに此本が作られたか。と云ふに之は歐米の民衆をボルセヰズムから引き離さんが爲めのものである。之は予輩一人の考ではなくして西洋の批評家も既に之を喝破して居る。ボルセヰズムが獨り露西亞の天下を風靡して居るのみならず、歐洲一般の下層階級に傳播して、政府當局者は勿論一般ブールジョア階級を非常に苦しめて居る。尤もブールジョアジーの立場が正しいのか、或は之に對抗する過激派感染れの民衆の立場が正しいのか、之は一つの大いなる問題であつて、又人によつて各々其觀る所を異にするであらう。之れについての議論は問題外だから特に之を避くるが、唯疑のない點は、各國の政治家、資本家、其他中産以上の階級が過激派感染れの流行を非常に苦として居る事である。而して如何にかして之を撲滅せん事に心を碎いてゐる事も公知の事實だ。彼等は各自國の民衆の過激化を防がんが爲めにいろ〳〵の手段を講じたのみならず、何よりも先づ其源を一掃するのが先決問題だと云ふので、露西亞本國に於いて反過激派勢力の勃興を助けた事も既に人の知る所である。けれども此目的は容易に達せられない。レーニン政府は露西亞の民衆の間になか〳〵堅い根柢を有つて居る。のみならず、自分達の國に於いてもプロレタリアート階級は動も

すればレーニンに加担して、自國の政府の反過激派援助の行動を妨害せんとする。之には政府も資本家も手古摺つた。又現に手古摺つて居る。何とかして一般の民心をレーニン一派に背かしめんと苦心するけれども効果が揚らない。そこで最後の窮策として所謂マッソン結社の說を作り出したのである。何となれば歐洲の人民の大半はフリー・メーソンリーと猶太人とに對して歷史的に特別な反感を有し、此の二者の爲す所だと誣ゆれば、譯も無く民衆の反感を唆るに都合が好いと考へられるからである。斯くして吾々は遂にフリー・メーソンリーと猶太人とについて少しく考へて見る必要がある。

フリー・メーソンリーの事は今詳しく之を說明して居る遑が無い。何れ他日を期して之を紹介して見たい。唯簡單に北輪廓丈けを述ぶるなら、之は名稱の示す通り建築石工の組合から發達したものである。起源については色々說があるが、廣く歐羅巴に擴がつたのは、中世石造建築が伊太利方面から北歐に廣がつた頃にある。此石工が同時にある精神主義を傳へたので、今日では純然たる道德的修養團體となつて了つた。唯昔石工組合から發達した所から、今でも石工に絡んだいろ／＼の傳說を有つて居る。彼等の集合所をロッヂ（小屋）と云ふのも此處から出て居る（但羅典諸國ではオリエントと云ふ）。三十二の階級に分れて居る事は前にも述べたが、更に之を大別すると親方、中間、徒弟の三級に分れること、當時のギルドと同一である。而して各階級に於いて守るべき又養ふべき道德が夫々嚴定され、それが又皆石工の道具に絡んだ名稱を有つて居る。物指しの道德だの、水盛りの道德だのといふ種類である。物指しはものを測る標準だから即ち正義を表はすとか、水盛りは公平を表はすと云ふやうな意味に解せられて居る。而して上の階級の事は全然下の階級には秘密になつて居る。總じて此組合は非常に秘密を重んじ組合其物が所謂秘密結社となつて居る所から、いろ／＼の誤解を招いた事は今に初まつた事ではない。今日はいろ／＼其内部の事も世間に分つて居るが、併し大體に於

いて今たほ秘密結社として發達して居る事は云ふまでも無い。

此團體の標榜する精神主義は何かと云ふに、四海同胞と云ふ事である。佛蘭西革命の標語たる自由、平等、四海同胞は實は此團體の旗幟に外ならない。之れ佛蘭西革命は彼等の陰謀に出づと昔から信ぜられた事のある所以である。更に角四海同胞と云ふ點が彼等の最も重んずる所だから、昔から歐羅巴に絶えなかつた人種宗教の爭などに對しては、極めて激しい反感を有つて居る。人類は凡て唯一人の神の子だ。いろ〳〵の教は明暗の差こそあれ等しく皆神の光りを反映するものである。神は即ち宇宙の大建築師で、吾々は其一材料に過ぎない。石塊は其儘では立派な建築材料とならないやうに、吾々も亦神の建築せんとする精神的宇宙の一分子たる使命を果すには、錐や鑿でいろ〳〵削りこなされなければならない。荒削りの儘では駄目だ。即ち道徳的修養を必要とする。而し吾々個人個人を神の目的に應ふ立派な建築材料たらしめんが爲に、いろ〳〵の宗教が生れたのだ。故に宗教も人種もいろ〳〵あるが、歸する所は唯一つの神だ。然らば吾々は唯一つの神によつて繋つて居る兄弟ではないか。末節に拘泥して爭ふのは以ての外の僻が事であると云ふのである。さういふ立場であるから、一方には人種、宗教の爭を緩和すると共に、更に進んでいろ〳〵の平和的國際運動の原動力ともなつて居る。其極、時として國境を無視し、反國家的なコスモポリタニズムに墮する事はある。けれども今日殆ど凡ての國際的運動は悉く此フリー・メーソンリーに關係ありと云つても敢て誣言ではあるまい。加之、有名な世界の宗教家政治家學者文人にして此團體に入つて居るものが又非常に多い。當代の偉人としてはウイルソン、ロイド・ヂョーヂ、ブリアン等を數へられ得べく、少し古い所では英吉利のエドワード七世陛下、露西亞のトルストイ、亞米利加のマツキンレー皆フリー・メーソンである。更に遡つてはカント、ゲーテ、フランクリン、ワシントン其他數へ擧げればいろいろの方面に際限はない。フレデリツク大王を始め獨逸の皇室にも、之に歸依する者頗る多くある、(最近では前カイゼル、

ウイルヘルム二世を除いては殆ど皆フリー・メーソンであつた)。して見るとフリー・メーソンリーは危險どころか非常に結構な、此上も無い立派な團體と云はなければならない。僕自身にした所が縁故が無いから入らないものの、出來るなら是非之に入りたいと考へて居る位だ。西洋滯在中適當な機會があつて之に加入した日本人は、私の知人の中にも多少はある。知名の人としては嘗て外務大臣であつた故林董伯は熱心な團員の一人であると聞いて居る。兎に角フリー・メーソンリーは危險な團體でも何でもない。寧ろ其一員たる事を誇つて然るべきものと云つていゝ。

然らば之れ程結構なものが何故歐米の一部の人の間に非常に嫌はれて居るかと云ふに、之れには歴史がある。中世以來天主教會が之を蛇蝎の如く嫌つた爲である。それが今日にも殘つて居る。何故に天主教が蛇蝎の如く之を嫌つたかと云へば、フリー・メーソンのやうな主張が通れば天主教會の根柢が動搖するからである。同じ耶蘇教でも天主教會はプロテスタントのやうに個人銘々の信仰を大事だと云はない。信者として最も尊重すべき德は聽從である。蓋し全智全能の神は、自分の名代として此世の中に基督を生れしめ、基督は自分の精神的後繼者として羅馬法王を立てたから、羅馬法王が法王といふ位に於いて發言する時は、即ち神其物の發言であるから、彼は間違つた事をしようたつて間違ひやうがないものである。而して法王の旨は大僧正之を奉じ、大僧正を通して更に幾多の階段を通して教會の教師が之を教へるのだから、各信徒は即ち其教を金科玉條として守ればいゝ。なまなか自己の判斷を加へるのは、人間の智慧を以つて神の智惠に對抗するものである。之即ち聽從を以て信徒最高の德となす所以である。天主教會は即ち斯くの如き形式的論理によつて神の意思の本當に表はれて居る所だから、人間の魂を預り得る眞の教會は此外には無い。天主教會は即ち唯一の教會であると云ふ。プロテスタントは無論の事、其他の教會は眞に人間を救ひ得るものでないから、之は言葉の正しき意味に於いて教會と云ふ事は出來ない。さういふ所から天主教會以外の教會を彼等は教會(英語の所謂チャーチ)と

は云はずして殿堂（テンプル）と云ふ。だから天主教國なる佛蘭西では、英語のチャーチに當るイグリーズといふ字は初めから天主教會丈けを意味するものと定まつて居る。之を英語のチャーチや獨逸語のキルへと全然同一と見てはいけない。英語のチャーチや獨逸語のキルへを佛蘭西語に譯す時は、其天主教會を意味するかプロテスタントを意味するかによつて、或はイグリーズと譯し、又或はテムペルの字を當て嵌めなければならない。斯く天主教會では自分の教會丈けが唯一の正しい教會であると云ふ事を非常に強く主張して居る。吾々の想像にも及ばない程力瘤を入れて居る。成程、プロテスタント教會でも矢張り人間の魂を預り得る教會だと考ふるやうになつては、天主教會は立ち行くまい。自分の教會が立ち行かないとなると、利己的主張だと氣付かずして遂に其反對の意見に極度の反感を抱くやうになるものだ。日本の官僚軍閥が眞に國家の爲めになるか否かを考ふるに遑あらずして、吾々を危険思想家扱ひするのと同一の心理狀態である。文明の今日フリー・メーソンリーを極端に憎むといふやうな事は有りさうもないやうに考へられるけれども、然し熟く考へて見れば、同じ様なことは日本にも存するのだから、其實毫も怪しむべきではない。

斯くして天主教會では非常にフリー・メーソンリーを憎んで居る。中世ジエスイットの盛んな時、宗教裁判の制度を利用して嚴刑を以つて迫害した事もある。之れがフリー・メーソンの秘密結社として發達し來れる原因である。石工の技術を盜まれまいといふ所から秘密結社として發達したといふ說もあるが、主としては天主教會の迫害の爲めだ。斯う云ふ歷史があり、且又現に教會の當局者が非常な憎惡の念を向けて居る所から、今日でもフリー・メーソン自身が戰々兢々として教會の耳目を脫がれんとするの風がある。若し夫れ一般教民に至つては、平素フリー・メーソンの頗る憎むべきを教はつて居るから、フリー・メーソンが吾々の村に入つて來たと云ふやうな話でも聞くと、如何にも極惡非道の人間が吾々を脅かして居る位に考へて心配する。而してフリー・メーソンを嫌惡するのは主として天主教會だけれども、

之れに次いで希臘教會や露西亞のやうな舊式の新教徒の間にも多い。要するに餘程開けた人間でないとフリー・メーソンの事は分つて居ない。大體としては厭なものと云ふ風に考へて居る。日本で云へば不敬漢に對するやうな、又は年を老つたものが社會主義者に對して抱くやうな考を有つて居る。であるから歐羅巴で人を陷れる場合に、彼はフリー・メーソンだと云ふのが頗る有效に利くのである。

フリー・メーソンと猶太人とは直接の關係は無い。猶太人も澤山入つて居るには居る。が、併し國によつては基督教徒でなければ入れない決めて居る所すらある。故に此兩者をゴツチヤにするのは大變に間違であるが、之をやつたのは畢竟フリー・メーソンリーに對する反感のみでは足りない。併せて猶太人に對する基督教徒一般の反感をも利用せんとしたのである。そこで吾々は次にまた猶太人に對する反感即ちアンチ・セミチズムの事について少しく考へて見る必要がある。

アンチ・セミチズムの事も詳しく云へば際限も無い。之も歐羅巴の社會狀態の內面的構成には非常に深い關係があるから、何れ他日の機會に於いて述べる時があらう。兎に角歐洲人は一般に猶太人に對して迷信的に反感を有する事、有田ドラツクが尾崎島田兩氏や僕等を嫌ふの比ではない。主としては彼等の祖先が基督を十字架に掛けたといふ考から來る。其他猶太人が常に基督教の敵として發達して來たと迷信し、其金錢慾の強くて又慘忍非道の事などを數へ立てゝ、小說や戲曲や其他の物語を通して人々の頭に非常に深く植えつけた。「ヴエニスの商人」を讀んで見ても、歐羅巴人が猶太人を何う見て居るかが分る。であるから最近まで猶太人をば法律上又は少くとも社會上普通の市民と同等に取扱は

れないやうになつて居た。例へば猶太人は辯護士にはするが裁判官にはしないとか、兵隊にはするが將校にはしないとかいふ類である。比較的猶太人の寛大に取扱はるる英吉利に於いてすら、十九世紀の初めまでは、猶太人に對して種々の拘束があつた。最近まで最も烈しく迫害されたのは露西亞に於いてである。居住移轉の自由が大いに拘束されて居るのみならず、時々大擧虐殺の厄に逢ふた事もある。それほど嫌惡されて居るのであるから、人を陷れるに、彼はジューらしいと云ふ事程有效に利くものはない。從て又左したる事でない出來事でも、それは猶太人がやつたのだと云ふと、格別民衆の反感を昂奮せしめる事も出來る。殊に天主教、希臘教等の盛んな所に於いて然うである。

そこで露西亞の過激派を徹頭徹尾猶太人の仕事といふ事に附會したのであらう。且つ之に加ふるにフリー・メーソンリーに對する反感を以てすれば所謂鬼に金棒だ。大いに民衆の血を沸かし、以つてレーニン一派を精神的に孤立させる事が出來ると考へたのであらう。であるからマッソン結社の最高の階級は猶太人だと云ふ出鱈目を述べ(此事の事實に反するは英國に於けるフリー・メーソンリーの總大將が、其即位までエドワード七世陛下である、陛下の即位以來はコンノート殿下であるといふ公知の事實に見ても分る)。而して偶々猶太人でないものがあると、無理に之を猶太人だと附會する。ケーレンスキーについては、「彼は姓名こそ露人であれ、出生は猶太人である事が今になつて明白になつた。彼の父は學校教師であつた。此教師は先妻を失ひ、後妻に猶太の女を迎へた。其間に出來た子がケーレンスキーである。一説には彼は後妻の連れ子で、元の父も猶太人であつたといふ。兎に角彼が猶太血統を繼いで居るは事實である」(一五―一六頁)と云ひ、又過激派頭目中唯一の非猶太人と知られて居るレーニンについては、本當のレーニンは二年前獨逸に客死した。「現在のレーニンは此死んだレーニンの旅行券――露西亞の戸籍制度は我國のと聊か趣を異にし、各人皆我國の旅行券のやうな體裁の戸籍券を有つて居る。之れが重要の戸籍證明書である――を盜んで、露人に化けて居るフオ

キルパウム(一説によればニコライ・イリツチ・ウリアノフと云ふ)といふ猶太人である」(一七頁)と云つて居る。隨分白々しい牽強附會と云はなければならない。

一體冷靜に考へると、如何に歐羅巴人でも、凡ての猶太人が皆鐵の如く堅く結束して恐ろしい陰謀を企らむと聞かされて直に、之を本當と信ずる筈は無い。何千萬といふ人間が悉く同一の目的に結束するといふ事は不可能の話だ。支那人や朝鮮人から觀れば、日本人は一人殘らず侵略的軍國主義に凝り固つて居るやうに見えるさうだが、併し內部に入つて觀れば、老人をして思想の混亂や國家の危機を叫ばしめる程ばら〳〵になつて居るではないか。政治的に統一されて居ない猶太人は尙更らの事であらう。尤も猶太人は隨分歐羅巴で迫害されて居る丈け極端にひねくれたものはなか〳〵多い。權力を以つてする迫害がある丈け極端な無政府主義などを唱へるやうなものも多く猶太人の中から出る。西洋で能く自由思想家同盟といふ會合に出席して見た事があつたが、看板は名ばかりで實は猶太人の旋毛曲りが中堅になつて基督教徒たる友達を誘つて教會を缺席させたり、其他普通人の厭やがる事をさせやうといふ團體であつた。餘り官憲が社會主義者を矢釜しく取締ると、穩健な日本人でも法廷で肌を脫ぐと云つたやうな態度に出づるものも出る。而して斯う云つたものが澤山になると、もと〳〵虐めたのが惡るいと云ふ方は忘れて、人の厭やがる事をやる奴が憎いといふ感情が先に立つ。斯う云ふ所から昨今猶太人が又格別嫌はれて居る。

併し猶太人だからとて皆々斯ういふものばかりではない。オルソドツクスの方は今日尙ほ嚴格に昔ながらの態度を改めないし、其改良派に屬するものは、其生活の樣式を出來る丈け基督教的に改め、之に屬する知識階級の中にはフリー・メーソンリーなどに關係して居るものも少くない。此等の者の間には固より全部結束して不逞の陰謀を企てるなどと云ふ事は考へられない。要するに猶太人が凡て固い約束をして居ると云ふのは、凡ての日本人が固く結束して世界の併呑

を企てゝ居ると云ふと同じく、愚民はいざ知らず、識者は固より文字通りに之を受取らない。唯猶太人の間に起つて居るシオニズムの運動は、各國に於いて政治的陰謀の嫌疑を受けて居る所から、ひよつとすると輕卒なる人には猶太人の陰謀と聞いて、若しやと疑はぬ事がないとも限らない。だから猶太人の陰謀と云ふ流説は、昨今のやうな時代に於いて猶太人を陷れるには最も都合の好い話なのである。從つて又或るものに對する反感を起さしめる爲めに、之を猶太人と引つつけるのは最も好都合なのである。

斯く考へて見ると、西洋に於いて如何にかしてボルセヸズムに對する一般民衆の憎惡反感を醸成する爲め、最後の窮策としてフリー・メーソンリーとアンチ・セミチズムとを利用した魂膽は略ぼ推察し得られる。作者と雖も其餘りに馬鹿馬鹿しい事は知つて居るに相違ない。が、斯うでもしなければレーニン一派を精神的に孤立せしめる事が出來ない。背に腹は代へられないので、馬鹿馬鹿しいとは知りつゝ斯う云ふ流説を流布したものだらう。從つて作者の目指す所はフリー・メーソンと猶太人とに對して最も強き反感を有する天主教徒である事は、出版物の隨所に之を推知する事が出來る。現に「決議錄」の最後には、此風潮に對抗して惡魔の陰謀を看破るものは天主教會の外にはない、此惡風潮と戰ふ爲めには第八回のエキユメーニカル、カウンシルを開くの必要ありと云ふやうな事を云つて居る。此カウシセルは專ら天主教會の會議である事は云ふまでもない。

天主教徒を特に眼中に置いたと云ふ事は、最近英佛諸國が頻りに羅馬法王廳に秋波を送つて居るといふ事實と對照すると面白い。英國と法王廳との間に密接な交渉のある事は、新聞の電報にも明かである。ルーベーの伊太利訪問以來國交斷絕の姿となつて居つたのを、昨今もと通り公使を授受しようといふ話合が、佛國政府と法王廳との間にある事も

屢々電報せられた。それかあらぬか日本までが法王廳に人をやつたりして居る。兎に角歐洲に於ける民心の左傾に對する有力なる防波堤として、法王廳の勢力を利用せんとして居る事實は極めて明白である。併し斯くして結局其目的を達し得るか何うか、又此目的を逹するが爲めに斯う云ふ反動思想に賴る事が得策であるが何うかは問題である。所謂苦しい時の神賴みで、政治家や資本家の天主教會の勢力に結ばんとして居る形勢は之を看過する譯には行かない。

併し乍ら斯う云ふ魂膽は、前にも述べたやうな特別の事情があるので、歐羅巴人になら幾分か效く。又歐羅巴の民衆を瞞着する目的を以つて斯かる魂膽に出たものである事にも諒解は出來る。けれども歐羅巴とはまるで事情を異にする日本に之を利用しようと云ふのは、恰かも肺病病みに能く效いたからとて、其の同じ藥を胃病患者に與ふるやうなもので、何等の效目のあるべき道理は無い。故に此流說を日本で振り廻す段になると、其運命は唯一笑に附せらるるのみであらう。有繫の西洋に於いてすら、今や此魂膽は正體を見露はされて三文の値打ちも無いものになつた。それを日本に利用しようと云ふのだから、其愚定に嗤ふべきであるが、偶々之を本當でもあらうかと若干氣にするものがあるから呆れる。一昨年の三月、朝鮮の萬歲運動の時、民族自決主義を提唱したウイルソンが、飛行機に乘つて朝鮮救濟の爲めに來ると盲信した或る田舍の朝鮮人が、暗夜目標が無くては着陸するに困るだらうとて小山の上に焚火して待つて居つたと云ふ話がある。吾々は其無智を嗤ふたのであるが、然し生眞面目にマツソン結社の流說を信ずるものは、之れ以上の無智を告白するものと云はねばならない。

航空局の設置を提唱す

――空軍を統一せざれば我が國防危し――

日本航空通信社長　渡部一英

一

昨年末頃、陸海軍間に航空協定委員會なるもの組織せられ、既に數回の會合を爲したるが如し。而もその内容は絶體秘密に附せられ居るを以て吾人は該委員會が果して如何なる事項を協定せむとするやを知る能はずと雖も、其の委員は單に陸海軍の將校より成り、又其の名稱の陸海軍航空協定なる文字より察するときは其協定せんとする範圍は略ゝ想像するに難からざる也。即ち航空軍の統一に非らずして陸海兩軍に於ける航空施設に關し相互の便益を圖らむとするに在りて、吾人の希望する所の空軍の編成並に一般航空政策の統一を期する爲めの規定と見る可らざるは疑ふの餘地なきに似たり。

凡そ國家の防禦の爲に陸軍海軍の兵備を常置する所以のものは、陸軍は陸地の防衞に任じ、海軍は之れに接する海面の防護並に海上交通の維持に委する爲なりとす。航空機の未だ攻防の兵器たらざりし前時代に在りては單に陸海兩軍の充實を以て一國の防禦は安全なりと謂はれたるも、既に航空機は怖るべき兵器として確認せらるゝに至りたる今日に於ては陸と云はず海と言はず、其上空より大なる脅威を與へらるゝを以て陸軍海軍の整備のみにて滿足するを許さず、更に空中に對して第三軍即空軍を創設するの必要なる事識者の言を俟たずして知るべきなり。

二

今や國際聯盟の成立を告げ、國家間の葛藤は國際裁判に依りて解決せらるべく、從つて戰爭の必要無きに至りたるが如く思惟せらるゝも、各列强國は依然として軍備縮小の意無く寧ろ財政の許す限り是れを擴張せんとする傾向あり、殊に航空兵力に對しては何れも爭ふて其の大を競ひつゝ他日の戰鬪準備に汲々

たる現狀を觀れば、所謂永久的世界の平和は主義として尊重せらるゝに止まり、實際は歴史の示すが如く戰爭の絶無を期し難きを語るものと考へざる可らず。果して然りとせば、軍國主義ならざる國家と雖も其國土及其國民の防衞の爲めには常に周到なる用意有るを要す。而して其の用意たるや一局部一部面に止まらず、何れの方面に對しても些の缺陷有るを許さゞるなり。然るに若し誤りて國防の一部に缺陷有らんか、直ちに敵の乘ずる所となり他の百般の準備如何に行屆きあるも遂に其の用を爲さずして悲慘なる敗北を招ぐの原因茲に生ずるに至らむ。

抑も從來の戰爭は接壤國間に在りては先づ陸軍の衝突より始まり、多くは之れに依つて勝敗を決し、島國に於ては海戰を先きにし其れより陸戰に及ぶを例とせり。然れども今日に至りては空中威力の現用に依り是の戰法を更新せられ、接壤國たると島國たるとを問はず戰鬪は先づ空中戰より開始せられ、一方が制空權を獲得したる後ちに於て初めて陸軍乃至海軍の活動に移る時代とはなれるなり。否或は空中の戰鬪のみに依りて戰爭の目的を達せらるゝ場合多きを想像するに難からざるべし。何となれば空中戰は陸戰海戰の孰れに比するも味方の人命を損傷する程度常に極めて尠少にして而も敵に損害を與ふるの效果非常に大なる事多きを以てなり。

三

假りに戰時に於て我國が敵に制空權を奪はれ、敵の航空機が頻々として我領土内に襲來して爆彈及燒夷彈を投下さるゝ場合に想倒せんか、殆んど木造家屋より成る大小の市街、村落又は工場の如きは忽ちにして灰に歸すべく、國内の主なる交通線は直ちに遮斷せられ行政機關も統帥機關も其能力を十分に發揮すると能はざるの慘狀を呈すべきや必せり。此時に方りて陸上の數百萬の軍隊も海上の數十萬噸の軍艦も其力を著しく減殺され、遂に敵軍に降伏せざるを得ざるに至るべきなり、而して我國に於ける航空政策の現情を觀るに何れの方面より考ふるも不徹底且つ不完全ならざるは無く、凡そ文明國中に我國の如き斯業の不振極まる國有るを聞かず、近來に至りては比較的軍備に無頓着なりと言はれたる支那にすら及ばざる所ありと評せらるゝ程なりと云ふ。若し夫英國の如く佛國の如く米國の如く將又伊國の如く、航空勢力の大を誇らむとするの時機が何れの時に我國に將來すべきかの間に對しては轉た其豫言に惱まざるを得ざるなり。吾人は思ふて此處に至れば慄然として我國防の不備を嘆ぜざる能はざるのみならず我、陸海軍の當局者並に一般國民が航空政策に對して極めて冷淡なる所以を知るに苦しむ者なり。

四

我國の執る可き航空政策の最善なる方法は速に航空省を新設して空軍の編制を行ひ、空軍に所屬する諸兵の教育は勿論陸海軍に所屬すべき航空兵の特別教育をも司る外、航空に關する器材の製造修理購買補給及檢査を爲し、大試驗所大研究所を創設し其所管に任じ、民間に於ける航空事業の指導奬勵保護及監督より航空の取締に至る迄悉く管掌事項とし、尙斯界に關する一切の事項の調査研究並に立案等を行はしむに在り。是實に時勢の要求なりとす。若し此方法を直に實施せされば我國に於ける航空學術及其工業能力の幼稚なる現狀より推するに、何れの日に到るも航空機の獨立は期し難かるべく、又航空勢力の充實を計るに由なからむ。斯ては一朝有事の際に何を以てか國家の防護に任ずべき。如何に優勢なる陸軍及海軍を有すと雖も、獨立せる完全なる空軍を常備せざるに於ては片輪の軍備と謂つべく、國民は一日も枕を高くして安んずると能はざるなり。然に我國の軍備は單に陸軍海軍の充實にのみ力を盡し別種の防衛を要する空軍の組織に對しては何等の顧慮無きが如し。吾人は斯の如き危險なる國防計劃を批難せざらんと欲するも能はざるなり。

若し空軍を有せずとも空中の防禦は現在所有する陸海軍の航空隊にて足れり、之れを不便なる一方に統一するが如きは不可なりと論ずる者有らば、卉は大なる謬見と謂はざる可らず。既に述べたる如く陸軍の任務は陸上の戰鬪なり、海軍の任務は海上に在り、然るに海陸の境界無く行動し得る空中の敵に對しては果して何れの責任に歸せしむべき乎。戰時に於て陸海兩軍の航空隊間に空中に對する動作の統合起り戰鬪の目的を達すること能はざるに至らば奈何。又平時に在りては徒らに兩者競爭的施設に陷り、或は豫算の競合となり或は施設の重複を醸し、而も航空兵力の必要なる根本義に合致する底の發達は得て望む可らず、何となれば其の施設並に其の發展を期するに多大の經費を要すべき航空兵力を陸海軍内に分立せしめ置く間は陸海兩軍其固有の兵隊又は軍艦の增加に重きを負擔し、他の局部的航空兵力に對しては十分なる考慮を與へられさる可ければなり。是れ假想に非らず實に我國に於ける國防政策の實情にして、我國の航空兵力の大を爲さゞる所以亦此所に存することを知らずや。

又或者は言はむ、空軍を組織して從來陸海軍に分屬せる航空隊を引き放すに於ては、陸海軍固有の戰鬪上密接の連絡を要する動作の技能（航空兵の）低下すべし(一)。戰時陸海軍に必要なる航空部隊の配屬に當り陸海軍指揮官の指揮統御上不便少らず(二)。作戰上陸海空三軍の協調果して圓滑なるを得べき乎否や

(三)と。是れ等は空軍建設の根本義を解せざるの偏見にして、爾く疑慮を要せざる問題なり。即ち(一)に對しては所要の特別教育を爲し、(二)の場合は戰鬪序列の軍例に則り、(三)に關しては陸軍に參謀本部海軍に海軍軍令部の設け有るが如く空軍に又空軍々令部を置き、此の三部の部長を戰時には大本營に在らしめて協調するの制を採れば何等の支障無きを得べきなり。要するに所謂陸海軍の勢力爭ひより起る所の偏見乃至狹量を排して、斷乎として斯の重大なる陸海空三軍齊一的國防政策を確立するに非らずんば我國防は未だ完きものと言ふ能はざるなり。

五

殷鑑遠からず、這般の大戰の初期に於て英本國は獨逸航空機の襲擊を受けたると其幾回なるを知るべからず、首府倫敦の襲はれたるのみにても飛行船にて五十一回、飛行機にて五十七回の多きに達し、是れが爲に市民の殺害せられたる者千貳百六十名、負傷せる者無慮三千五百六十人を算し、其他建築物の被害實に甚大なりしと云ふ。而も倫敦の市街は耐火的建築物を以て成れる爲其の被害は寧ろ尠きかの感無からず、若し之を我東京市に擬したらむには果して如何。全市燒土に化し死傷者百萬以上を數へしやも知べからざるなり。英國は戰爭の初期に於て何故に斯く度々の空襲を受たる乎と云ふに、其當時の英國の航空制度は現在の我國に於けるが如く陸海軍に分れて何等の統一有るなく從つて其進步發達亦遲々たるのみならず斯の如きの國難に會しては尙ほ陸海軍兩當局者間に航空隊の分立を主張し、防空協調の主義を捨てざりしかば施設の重複工場の爭合を爲す等の弊に陷り、肝腎の防空任務に就ては徒らに責任の塗り合を事とするの餘儀無きに至りたる爲、敵の空襲に會して何等の權威をも示すと能はざる所より敵の侵害を容易ならしめたるに外ならざるなり。然るにロイドジョージ氏が首相となるに及びて、一大英斷を以て空軍の統一を策し、次いで航空省を創設して空中勢力の增大を計りたる結果、其技術に於ても兵力に於ても獨逸軍に劣らざる發達を促進し、復た英國を窺ふの餘地なからしめたるのみならず、爾後の陸戰海戰の兩方面に於ても遂に敵の航空機を壓倒するに至り今日戰勝の誇りを全世界に示すことを得しめたるなり。若しロイドジョージ氏に彼の大英斷無く航空政策を從前の儘に放任せしならば、或は英本國は獨逸の航空機の爲に戰爭を中止せざるを得ざる程の大なる損害を加へられたりしならむ歟。今や英國の航空界は日を逐ふて發達し、先進國たる佛國を凌駕せんとしつゝあり。斯くの如き長足の進步を爲すに至りたる所以は實に航空省設立の賜なり。換言せば太宰相

ロイドジョージ氏の英斷の賜なりと謂はざる可らず。噫我國の爲政者中に唯一人のロイドジョージ氏無き乎。今に於て航空政策の統一を期せざれば他日の噬臍の悔を招くこと必せり。吾人は陸海軍の當局者に虚心坦懷以て速に斯の大問題の解決に努力せられんことを要求すると同時に、更に進んで此の問題の解決を獨り陸海軍當局に委することなく國民殊に政治家に於ても眞率に其の研究調査を爲し、斯の國家長久の大計實施の助成に務められんことを切望して止まざるなり。

大本教の不敬事件と當局者の責任

今村力三郎

治國の要諦は責任を明かにするにある、憲法政治は責任政治に外ならぬ、若當局者が自家の責任を擲塞し負ふべきものを負はず、徒らに國民の責任のみを追窮すれば、國民も亦反省すべきことを反省せず、却て反抗心を煽り、亂階玆に開かるゝのである。

問題の眼目を讀者に會得せしむる便宜として、先づ論點を提示する。

大本教の幹部たる出口王仁三郎、淺野和三郎に係る、大正十年五月十日の豫審決定は、神靈界と稱する大本教の機關雜誌に、大正六年十月一日より大正八年八月一日まで約二年に亘り、意志繼續して前後八回、刑法第七十四條に該當する不敬の記事を揭載したりとの事實を認定されたのである。が、二ケ年間、八回も繼續して不敬罪を犯すものを、大正十年まで寛假したのは、抑誰の責任であるかを論究し、將來斯る過を再びせざるやうにと、警戒するのが執筆の主眼である。

東京地方裁判所檢事局が、出口王仁三郎淺野和三郎に對する不敬並に新聞紙法違反事件、及吉田祐定に對する新聞紙法違反事件に付、新聞の記事差止を命令したるは、大正十年二月十二日にして、此命令を解除したるは、大正十年五月十一日である。而して同時に世上に發表せられたる事實は、三百の警官が本部を

包圍したの、十數班に分れて家宅捜査をしたの、刀劍數百口を發見したの、竹槍を用意したの、金銀貨二百萬圓を秘密室から發見したの、命を的に二ケ年に亘りて探査したのと、吾輩の如き小膽者は、見出しを讀んだゞけで腰を抜かしかねないほど大袈裟のものであつた。夫れに檢事正、警保局長、主任警部の苦心談や、功名話まで景氣を添へてあるので、定めて豫審決定は世人を驚倒するに足るものであらうと、怖いもの見たさに讀んで見ると、決定書の內容は、豈圖らんやと喫驚するほど、吾輩の豫想に遠きものであつた。讀者諸君は、豫審決定書を一讀せられたであらうが、本論文の骨子であるから煩を厭はず、時の關係と不敬の回數に關する事實のみを拔萃する。

豫審決定書は、被告等が雜誌神靈界に、不敬の記事を揭載せん事を共謀し、第一、大正六年十月一日、同雜誌第五十二號に、第二、大正七年三月一日、同雜誌第五十七號に、第三、大正七年三月十五日、同雜誌第五十八號に、第四、大正七年五月一日、同雜誌第六十一號に、第五、大正七年十二月一日、同雜誌第七十五號に、第六、前同號第十頁に、第七、大正八年一月一日、同雜誌第七十三號に、第八、大正八年八月一日、同雜誌第九十一號に、犯意を繼續して不敬の記事を揭載したりと云ふにある。不敬罪の場合に於て、其所謂不敬の文章を、豫審決定や、公判の判決書に詳記すると、不敬行爲を繰り返すに等しいから、文章の內容は、勉めて省畧するのが例となつてゐる。本件の豫審決定も、前例に從つて、云々、云々で、內容を省略してあるから、不敬罪を構成する事實を詳細に知ることは出來ない。が檢事が起訴し、豫審判事が有罪の決定をしたのだから、雜誌神靈界に不敬罪に該當する記事ありしものと肯定して、再び豫審決定書を顧みると、其處に多くの疑問を生ずる。即決定書に依れば不敬行爲のありしは、大正六年十月一日に初まり、大正八年八月一日まで、八回に及んでゐるのであるが、此約二年間、繼續して不敬の記事を揭載したる、雜誌神靈界を何故に放任したか。新聞雜誌は、內務省と、檢事局と、司法警察官とが、其職責として每號檢閱して、嚴酷なる取締をするのが。日本政府の遣り方であるのに、是れ等の當局者は、何故に二年間放任したか。吾輩の狹き見聞にては、文書に依り、犯意繼續して、八回に亘り、不敬罪を犯したる前例は無いと思ふ。若是等の官吏が、最初の大正六年十月一日の記事を告發して、之に制裁を加へたならば、其後の七回に亘る不敬罪の發生する事は、絕無であつたであらう。彼等は自己の怠慢に依り、不敬罪を繼續重複せしめたと云はれても、辯解の辭は無からう。

不敬罪は、刑法上重大犯罪の一で、苟も假借するを許さない

罪質を持つてゐる、不敬罪で起訴猶豫になつた例は無い、然るに二年間、前後八回に亘る不敬罪を、其當時に於て處分せず、加之、最後の大正八年八月一日より一年有半の後なる、大正十年二月に至り、漸く其檢擧に着手するとは言語に絶へたる怠慢である。

大本教は最近に起つた宗教で、官民共に注意を拂つてゐるのであるから、其機關雜誌神靈界の記事を見落す筈はない。然るに內務司法の兩當局者が、其不敬記事を適當に取締らざりしは吾輩の深く怪しむところである。

不敬罪は、刑法典中にありても定義の困難なる犯罪で、從つて其範圍も判然しないから、時としては無意識に之れに觸るゝことが無いとも限らぬ。殊に宗教は、絕對を標明とするところより、往々神と人との關係に、妙な結論を生ずることもあり得るのであるから、被告の主觀に於て、不敬になると意識せぬことがあるかも知れぬ。併し不敬罪の成立は、犯人の意識すると否とを問はぬから、當局者としては、苟も不敬の行爲あれば、迅速に檢擧すべきことは勿論である。然るときは犯人も自己の行爲の非を覺知して、恐るべき不敬罪を反覆するが如きことは決してあるまい。之に反し、若當局が檢擧を怠るときは、犯人は其行爲は罪にならぬものとの誤解を生じ、茲に同一又は類似の行爲を重複することゝなり、終には今回の如き未曾有の事件を惹起するに至るのである。

文章犯は、文章其れ自身が犯罪であり、且犯罪の證據であるから、檢擧は實に容易である。他の犯罪の如く起訴前に搜査に努力する必要は無いのであるから、神靈界の發刊と殆んど同時に檢擧し得るのである。然るに當局者は何を苦んで一年半を徒過し、漸く大正十年二月に至つて起訴したのであるか。

豫審決定の發表に先ち、世上に發表したる事實の大誇張なると、豫審決定が之に副はざることゝを對比して推測するときは、或は官憲の大驚が、豫審決定に照應しないので、國民の注意を轉ずる爲め、態と發表したり、檢事や、警察官の功名話をして聽かせたのでは無からうかと疑はれる。

森戶事件、青木事件、帆足事件、野村事件、賀川事件、木村事件、其他最近一二年間に文章犯で起訴された事件は頗る多い。然るに一木村事件が不敬罪たるの外は、悉く新聞紙法違反事件である。當局者は斯くも多くの文章犯を起訴せるに拘はらず、何故は雜誌神靈界の記事にのみ緩慢であるのか、殊に夫れが不敬罪であるでは無いか。

內務大臣や、檢事總長が、自ら雜誌の記事を檢閱せざることは言を俟たないが、部下の怠慢が、致命的に影響あるときに、

其輕重、大小に應じて責任を負ふべきは當然である。津田三藏の大津事變に際し、縣知事の冲守固氏は懲戒免官と爲り、內務大臣（芳川氏と記憶す）は進退伺を出した。警保局や、檢事局に直接の責任者はあるにしても、不敬罪を放任して二年間八回に亘り重複せしめた責任は、內務大臣と、檢事總長が負擔すべきであると信ずる。

諸君は實に忠君愛國の權化である。然るに諸君の部下の怠慢からして、不敬罪を再三のみならず、前後八回に及ぼさしめたることは、諸君の衷心實に恐懼措く能はざるものがあると信ずる、諸君平生の言動に徴して然かあるべきことである。

吾輩は、前段に於て不敬罪の內容が、豫審決定のみにては詳知することが出來ぬと述べて置いたが、若神靈界の文章が、一讀して犯罪を構成するや否を斷定し難いほどのものであつて、直接の檢閱者が犯罪を構成するものたることを解せず、夫れが爲め、大正六年の十月より、大正十年の二月まで、檢擧を怠りしと假定せば如何。檢事局や、內務省の圖書課には、專門的智識ある人々が其局に當るのであるから、素人が判斷し能はぬ事でも、彼等は明白に斷定を下し得べき筈である。然らば彼等は雜誌神靈界發刊の當時、問題の記事を見て如何に判斷したか、不敬罪を構成せずと見たのか、或は一應問題としたが、遂に不敬に非ずと決定したのか。若くは初めから何等の問題に上らざりしか、吾輩は彼等の內部に於ける當時の事情は勿論之を知らざるも、大正十年に至りて、大正六年に遡り起訴されたる事實に顧み、先きに空々然として何等の處置を執らざりし當局に、大なる責任を負擔せしめたることを否むことは出來ない。

政治上の責任は人類道義の觀念に基くものであるから、法律上の無責任を理由として政治上の責任を回避するは陋とすべきである。左らばとて道義の責任は他より強制するを得ない、一に責任者の自發を尊しとする。上にあるものが進んで責任を明かにし、國民をして責任觀念を深く、且、強からしむることが、軈かて憲法政治の美を濟す所以である、吾輩は當局者の責任觀が、吾輩と軌を一にせんことを希ふ。

獨逸の償金支拂を中心として國際經濟上に生ずる變動

法學博士 堀江歸一

國際間に於ける償金の授受

國際間に償金の授受される爲めに、之を支拂ふ國と、之を受入れる國との双方に經濟上如何なる變動を及ぼすかと云ふことは、最も興味ある問題であるが、經濟學の學說に於ては、變動の起り方は大體型が定まつて居るのである。即ち償金受領國は一時的債權國たる地位に立ち、償金支拂國は一時的債務國の境遇に居るのであつて、前者は商品輸入の形態で、償金を受入れ、後者は商品輸出の形態で、償金を支拂うことゝ爲る。換言すれば債務國は商品に依つて債務を決濟し、債權國は同じく商品に依つて、債權を回收するとたふ國際貸借上の原則が兩國に働き出して、一方は輸出超過國に他の一方は輸入超過國に爲るが如くに、償金支拂國は輸出超過に償金領收國は輸入超過に爲るのである。

此原則は日清戰後に於ても、又佛獨戰後に於ても、償金授受に就て關係諸國の經濟狀態を支配した。即ち日清戰後、我國が連年貿易上に輸入超過の趨勢を持續したことは、今日尚ほ吾人の記憶に殘つて居る所であり、又普佛戰爭後、戰前まで輸入超過の狀勢に居つた佛蘭西が遂に輸出超過國に爲つたことも、著明の事實である。斯の如く一國の負ふ償金が其國の輸出する商品で支拂はれる、支拂の義務を負うた國は輸出超過國に爲るとしたならば、償金の支拂は頗る自動的に行はれて、別に償金を負擔する國に大した苦痛を及ぼし、負擔を加へるように思はれないかも知れないが、事實は決してさう云ふものではない。一國が外國から輸入するよりも、多くを輸出する場合に、其輸出する商品は誰れの力で、生産されるものであるかと云へば、盡く國民の資本勞力並に經營に依るのである。斯くして生産された一國の物資が償金支拂の爲めに、外國に輸出される、其結果として其國をして輸出超過國たらしめると云ふのは、取りも直さず、其國の國民に餘分の勞役を課し、斯くて生産された物

資を一種の貢納と同じく、外國に献納して仕舞ふ譯であつて、國民經濟上に大なる負擔を加へる所以たらざるを得ない。

償金賦課の目的

國力の隔絶した國の間に行はれた戰爭には、戰捷國から戰敗國に向つて、或る高の金を交付して、戰局終了の條件とすることがある。米西戰爭の如き、南阿戰爭の如き何れも此例を以つて見られるのであるが、國力の略ぼ相等しい國の間に於ける戰爭では、必ず戰捷國が戰敗國に向つて、若干の償金を賦課するのである。而して之を賦課する目的は主として戰費の賠還と云ふことであるが、同時に戰敗國に對して、戰敗と云ふ事の以外に更に金錢上の負擔を加へて、戰敗國をして將來永い間を通じて軍事上に經濟上に無力無能の國たらしめ、戰捷國の國際上に獲得した優越的地步を鞏固にしよう、即ち戰捷國の國民を枕を高くして、眠らせようと云ふ目的の藏されることを閑却してはならないのである。

獨逸が歐洲戰爭前に於ては、世界列國に對して、一の脅威であつたことは論を俟たない。陸軍國としては佛露兩國を壓倒する力を有ち、海軍國としては英國に拮抗しようとし、更に工藝品の輸出に於ては、次第に年來英國の獨占して居つた販路を侵さうとし、一方に其殖民政策は東洋方面にまで力を及ぼして、地理的に甚だしく隔絶して居る日本の如きにも、前年青嶋の經營に着手して以來、何か東洋に事を構へるに至りはしないかと常に不氣味の感を懷かせた。斯く世界を脅かした獨逸に對して、講和條約に依つて、或る制裁を加へると云ふことに爲れば、其課する條件を通じて、獨逸から世界の平和を脅かすだけの資力を奪ひ去つて仕舞ふと云ふ點に於て、聯合諸國の意嚮は期せずして、一致したものと見える。ヴェルサイユ講和條約で、土地割譲を始めとして、幾多の點に於て獨逸を壓迫する條件の規定されたのは、此趣意から出で來つたものであるが、更に諸國が償金問題の解決に依つて、聯合諸國自ら利益すると共に、更に獨逸に苦痛を與へる方便を得ようとしたのは、爭ふ可からざる事實であつて、現に獨逸の國力恢復に依つて、競爭を受け、壓迫を蒙ることの最も熾烈である佛蘭西が償金額の算出に就て非常に強硬の態度に出で、四千億馬克說を固持したと云ふ事實に徴しても、償金賦課の目的とする所が那邊に存するやは、之を理解するに苦しまないのである。戰爭で潰せなかつたから、講和條約なり、償金なりで、獨逸を潰さうと云ふのが聯合諸國の考案した所であつて、此者が發端に爲つて、今日まで種々の方面に問題の續出し來るものと思はれる。

公債を以つて償金を支拂ふ案

兎に角聯合諸國側の獨逸に賦課する償金の總額は千三百二十億馬克と決定した。而して此償金を支拂ふ爲め、獨逸は五分利付の公債を發行して、聯合諸國に其れ〲割當るのであつて、先づ即時に百二十億馬克を發行し、次いで本年十一月に三百八十億馬克を發行し、殘額八百二十億馬克は獨逸の支拂能力に應じて適宜發行されることゝ爲つて居る。最初の聯合諸國側の提案では、償金は二千二百六十億馬克であつて、四十二年間に亙る年賦で決濟する筈であり、然も其年賦額は四十二年間の始めから中頃に至るまで、餘程重くされて居つた。之に比較すれば公債發行に依つて、償金を支拂ふ今度の計劃は獨逸に對して、餘程負擔を輕減した形であり、又少なくとも支拂を行ひ易い譯であるが、獨逸は公債發行に關聯して、經濟上に如何なる變動を生じるであらうか。最初の提案のように、年々五十幾億馬克と云ふ巨額の金貨を四十二年間に亙つて、支拂ふのであつては、獨逸は到底是れだけの金貨を調達することが出來ない爲めに、償金の支拂不能を訴へざるを得ないことゝ爲るのは、何人も判斷に苦しまない所である。然るに今度決定して公債代用の案であれば、公債を引渡せば、償金の決濟を果すを得るのであるから事、甚だ容易であるやに見へるかも知れないが、公債發行の曉には、必ず利子支拂の義務が生ずるのであつて、而して公債が外國在住の諸國民に依つて、所有されて居る以上は、金貨を以つて、其支拂を了せなければならぬ。償金代用の公債は即時發行の分百二十億馬克であり、本年十一月發行の分三百八十億馬克であつて、此二口が發行されたならば、之に對して獨逸は年々二十五億馬克の利子を支拂ふことゝなる。殘額八百二十億馬克の發行期は別に定まつて居らぬが、聯合諸國と雖も、無期限同樣に猶豫を與へる考ではあるまい、寧ろ獨逸を鞭撻し、督勵して、償金全額の支拂を了せしめんと欲するものに相違ない。而して豫定の通り、千三百二十億馬克の公債が發行されたならば、獨逸が利子として、外國に支拂はなければならぬ金貨は六十六億馬克の多きに上るのである

斯く考へると、即時に金貨を以つて、償金を支拂ふのと、公債を其支拂に代用し、公債に對して、年々所定の利子を支拂つて行くのと、其間に幾何の相違があるか、疑を挾まざるを得ない。唯前者は何としても實行不可能であると云ふ故を以つて、獨逸の方で之を拒絕し、聯合諸國亦之を諒としたに反し、後者は實行に聊か可能性のある故を以つて、獨逸の承諾する所と爲つたのではあるまいか、然も其可能性と云ふのは如何なる程度

のものであらうか、吾人の攻究を要する點である。

獨逸の國際貸借

戰前の獨逸は經濟上の發達に於て、刮目して見る可きものがあつた。殊に國際經濟上の關係に於て、其地位を向上し、又確保したことは誠に吾人の感歎せざる能はざる所であつた。現に獨逸が戰前連年繼續して、十億馬克内外の輸入超過を維持して居つたことの如き、一に國際貸借上に於て、有利な差額を有した結果としなければならぬ。若しも戰後の今日、獨逸が外國に相當の債權を持ち、其債權から或る收入を獲得して居つたならば、償金代用の公債に對して、利子を支拂ふことも、差した苦痛でなかつたかも知れない。然も今度の戰爭は國際經濟上に於ける獨逸の地位に急變を來し、九天の高い所から、奈落の底に落下した趣を免かれない。卽ち海運業は獨逸所屬の船舶の沒收された結果として、著しく衰微し、外國から運賃の形で、債權を獲得することは殆ど不可能であり、殖民地の割讓は自ら獨逸の對外企業を閉塞することゝ爲るであらう、或は外國移住民の內地送金は獨逸人の外國の居住して居る以上は、必ず國内に回收されるようなものゝ、戰後の今日少壯有爲の青年が死傷した柄には、今後海外に赴いて或る職業に從事し、母國に向つて其收入の一部を送遣するが如き者は次第に其數を減ぜざるを得ないのである。

獨逸に於ける國際貸借の狀況が斯の如くであるとしたならば、戰後の今日、對外債權と對外債務とを相殺して、後者の負擔を容易に脫するが如きは、到底望み難き　である。然らば獨逸は如何にして今後幾十年間に亙つて、自國の債務に屬す　償金代用公債の利子を支拂ひ、又其元金を決濟するかと云へば、盡く輸出貿易の働きに賴らなければならないことゝ爲るのである。既に此論文の冒頭に於て論述した通り、國際貸借上の債務國は輸出超過國と爲り、輸出超過に依つて、債務を決濟するに至ることを原則とする。然し此原則の働きには或る限度のあることを知らなければならぬ。獨逸が償金代用の公債に對して、支拂ふ利子は六十六億馬克であるとして、果して是れと同額の輸出超過が獨逸將來の貿易に現出するであらうか。戰前に於ける獨逸の貿易狀態を見ると、輸出九十億馬克に對して、輸入百億馬克と云ふような數字に上つて居つた。今後輸出入貿易が如何なる方向に動くかを確めるには、尙ほ若干の時日を俟たなければならないが、試に上記の數字を基礎として、議論を進めると、假に獨逸が今後能く九十億馬克の輸出を繼續するを得たとしても輸入を二十億馬克位までに減少せしめなければ、六十六億馬克

の輸出超過を實現させることの出來ない道理である。然るに今日の如く獨逸が、戰爭に依つて、經濟上に疲弊を極めて居る場合に、戰前同樣の輸出を維持するは到底望む可からざる所である。其れも聯合諸國が獨逸の經濟的復興に充分の援助を與へると云ふ精神で、資本を供給するなり、原料を調達するなり、相當の手段を盡すことを惜まなかつたならば、存外旨く輸出貿易を振興させるだけに、國內産業の復舊を見るかも知れないが、聯合諸國は決して獨逸に對して斯う云ふ態度に出でない、獨逸の輸出品に對しては、償金支拂の財源を作る理由の下に、二割五分の輸出税を賦課することを强要する一方に、若しも獨逸の物資が低廉なる價格で、聯合諸國に輸入され來つた場合には、之に對して相當の輸入税を賦課して、其輸入を遮斷しようと用意して居る樣の次第である。是れは獨逸物資の輸入に依つて、國內に現に起つて居る失業問題が今日以上に喧しく爲ることを恐れる事情もあるであらうが、償金を支拂はせやうとする場合に、支拂國から物資の輸入し來ることを遮斷しようとするが如き、其何の意であるかを知るに苦しまざるを得ない。而して資本の供給の如き、聯合諸國共ものが之に窮して居る事情である以上は、獨逸の爲めに融通を謀ると云ふが如は望む可からざる數である。随つて年々六十六億馬克の輸出超過を得る望がないとすれば、獨逸は最初の一兩年は如何なる工面をしても、金貨を調達して、支拂に充るが早晩支拂不能の狀態に陥らざるを得ないであらう。

償金問題に於ける矛盾

聯合諸國が償金の收受に熱心であり、結局獨逸に莫大の償金を賦課することゝしたのは、之に依つて各自の國民經濟を潤澤ならしめる目的を持つたからである。然るに一方に獨逸の經濟の復興することには反對である、其輸出貿易に對しては、何處までも之を沮害しようと云ふ態度を取つて居つて、如何にして獨逸から償金なり、償金代用公債に對する利子なりを回收し得るであらうか。之を回收し得るとするが如きは、經濟學の原則の初歩にすら通ぜる者の言である。千九百二十一年三月五日發行の「ステーチスト」誌は其社說に於て、償金問題を論じ其內に「聯合諸國は償金の數量に就て、考へる所多きに過ぎ、而して支拂の方法に就ては考へるもの少なかつた。後者は前者と共に重要なる問題である。如何なる債權者であつても、債務者を苦しめたり、或は債務者に害を及ぼすような方法を以つてしては、債權を回收するを得ない。諸國から財政の專門家は償金決定の會議に召集されたが、專門家の忠告の採用された跡は一として

を見るを得ない」と喝破したのは、吾人の同感を禁ずる能はざる所であつて、頗る公明の議論と見受けられる。元來聯合諸國は戰時數年間獨逸が封鎖狀態に置かれた爲めに、各自の國民經濟上に幾何の困難を感じたであらうが、染料藥品其他化學工藝品の供給に就て、獨逸の物資を絶たれた結果、品質劣等の代用品に對して、高い價格を支拂ふ損失を受けなければならぬ狀態に陷り、今日に至つて尙ほ之を脱するを得ない。獨逸の如き特殊の技藝才能を有する國なり、國民なりは之を生かして、益々其長所を發揮させ、廣く其利益を世界に及ぼさせる工風をするのが肝要である。成る程獨逸の競爭を受けて、之に苦しんだ國はあるであらうが、其競爭があつたればこそ、之を受けた國に於ても、相當の刺戟を受けて、獨逸に對抗するだけの發達を遂げたことは、爭ふ可からざる數である。

然るに聯合諸國は、戰前獨逸の國力の増進する勢が盛であつて、其壓迫を蒙つた事實だけを記憶し、其恐怖心が付き纏つて居るものであるから、獨逸の國力恢復を恐れることに於て、殆ど其度を失したものと思はれる。即ち斯る一片の恐怖心に驅られて、諸國は償金の賦課を利用して、獨逸の國力に根本的破壞を試みようとするものであらう。思ふに聯合諸國は獨逸の發行した公債を所有し、其利子の支配を獨逸に迫る、然も獨逸は輸出貿易を阻害される結果、輸出超過に依つて、之を支拂ふ道を得ないとしたならば、聯合諸國は獨逸に對して、如何なる處置に出るであらうか。獨逸を一の債務不履行國即ち「デフォールチング、ステート」として取扱ひ、獨逸の國有財産なり、收利的物件なりを占領する手段に出るのではあるまいか。果して然らば講和條約は一ツの戰爭を終つたとしても、更に他の戰爭が誘致される譯であつて、是れ位ゐ講和條約なり、國際聯盟なりの精神に違背したことは他に其類を求められないのである。

經濟と人道

私は本來國際間に於て、平和の存續することを希望して已まないものであつて、此點から帝國主義や「ミリタリズム」や、領土侵略政策に反對を表することに躊躇しない。戰爭の如きは國としても、人としても、力を盡して絶對に避け可き所であつて、萬一戰爭の起つた場合には、成る可く其再發を防ぎ、又戰爭に關聯して生じた禍害の後を善くすることに、意を注がなければならぬ。即ち戰爭の實際に臨んで、國と國とが之を一個の死活問題として、力爭するのは、已むを得ないが、一旦講和の成立した場合には、此時を以つて、戰爭の打切られたものとして、總て國際間の關係を戰爭前の舊態に復せしむることを要す

るのである。然るに聯合諸國の爲す所は如何であるか。武力の戰爭では、充分に獨逸に壓迫を加へることが出來なかつた。其處で戰後平和の關係を恢復した後に於て、今後數十年に亘つて償金を賦課するとか、經濟的發展の方便を杜塞するとか云ふような手段で、何時までも獨逸を苦しめ、武力で及ばなかつた所を戰後に緩々果さうとする。歐洲戰爭を計畫し、挑發し、彼の如く永く世界の平和を攪亂した責は誰れが負ふ可きものであるかと云へば、其れは獨逸皇帝と皇帝の周圍に居つた軍閥の頭目に外ならぬ。今や是等の人々は兎に角責任を負ふて居る。然るに此以上に聯合諸國の要求するような莫大なる償金を賦課することは、戰爭に對して直接の責任の無い現代の獨逸國民や、戰爭と全く無關係である將來の獨逸國民に對して、過重の負擔を加へる譯であつて、償金支拂の義務の存續する間は、獨逸國民は人力の及ぶ限りの勞働に從ひ、一方に出來るだけの切り詰め生活をして、剩し得た所のものは、盡く償金代用公債の利子として、聯合諸國の爲めに徵收されざるを得ない。是れが果して西洋諸國民の常に口にする人道に適つた所業であると認めらるゝであらうか、私の疑を挾まざるを得ざる所である。

私は戰爭の眞最中、聯合諸國が巴里に國際經濟會議なるものを開き、戰後獨逸の經濟を壓迫する手段を講じた時に、之を以つて經濟の目的に違背するものであるとして、反對したことがあつた。今や聯合諸國が講和條約なり、償金賦課法なりで、獨逸に臨まうとする所は要するに獨逸六千萬の國民を償金と云ふ桎梏の下に置き、償金支拂に必要なる苛酷の勞役を課するのと同じであつて、詰り獨逸國民に窒息同樣の窮状に置かれざるを得ない。是れが平生正義を唱へ、人道を說き、博愛を旨とする宗敎を奉ずる國民の所業としては、甚だ受け取れない所である。

固より私と雖も、獨逸が戰時國際法を蹂躙して、到る所に亂暴の所業をしたことを記憶する、一方に佛白等諸國が戰後の復興に困難を感じることも思量して居る。是等の國が損害を恢復する目的を以つて、獨逸に償金を賦課するのは、當然の權利であつて、何者も之を妨ぐ可き謂れはない、唯其償金は今日の獨逸人の負擔し得る程度に於て支拂ひ得る方法を以つてしなければならぬことを再言したいと思ふ。

償金問題と米國

聯合諸國が斯くまでに戰爭に依つて疲弊した獨逸を苦しめ、正義人道の觀念に違背して、償金を貪り取らうとするに就ては、諸國の方にも自ら理由がある。其れは償金の回收に依つて、

國の財政困難に當らうとする一事に外ならない。即ち今度の償金は歐洲戰爭中獨逸軍の爲めに、聯合諸國の國民が陸上に於て、海上に於て、將た又空中からの攻撃で加へられた損害を賠償する趣意に基いて賦課されるのであるから、政府は單に一個の取次役たるに過ぎない。然し其償金が實際損害を蒙つた人々の手に撒布された曉には、其一部分は不生產的に消費されるかも知れないが、他の部分は生產資本として活用され、自然諸國に於ける經濟的復興の機運を促進するであらうし、公債應募の財源なり、租稅納付の實力なりを豐にするであらう、然らば償金に依つて、獨逸の苦む所は聯合諸國の利する所と爲る、他人の苦痛ならば、何年でも辛抱する、殊に其苦む獨逸は多年の敵であると云ふ感情が期せずして、聯合諸國をして償金問題に就て、緊張した精神を有するに至らしめたものと解される。

然しながら償金が上記の如く聯合諸國の經濟を潤ほすのは、現金の形態で回收され、其現金が直に生產資本化されることに基くのである。隨つて今度協定された通り、償金が獨逸公債の形で、聯合諸國に支拂はれる場合には、果して如何なる結果を生じるであらうか。公債は一枚の紙片であつて、之を所有する者に利子の形で、所得を與へるが、何人かゞ之に對して資金融通の便を與へない以上は、資本としての働きを爲すに足らない。通例歐洲第一流の國の發行した公債であれば、信用最も確實であり、所謂國際的證券として、何處へ持つて行つても、現金に換へられる譯であるが、獨逸の公債が能く斯る資質を持ち得るかどうか、獨逸政府の公債に與へる擔保又は保證の種類に依つても、違ふかも知れないが、兎に角今日は歐洲何處の金融市場に就て云つても、證券の供給過剩であつて、消化不良の趣を免かれない、隨つて一國が受取つた獨逸證券を他國に持つて行つて能く資本化され得るかと云へば、其れは頗る至難の業に屬するのである。唯此間に於て、聊か望を屬されるのは、米國の金融市場であつて、若しも米國の政府が或る援助を與へて、獨逸の經濟を復興させることを必要と考へ、而して復興した獨逸と密接の關係を持つことを有利であると認めたならば、他の聯合諸國の持ち堪へられない證券は自然米國に流れ込み、米國をして獨逸に對して世界第一の債權國たらしめる。斯くて米國は債權國に爲つた序に、公債の利子支拂に必要なる外債の募集にも應じてやり、獨逸財政の支持者たる地位に立つ代りに、獨逸の經濟社會に對して、一種の優越權を持つように爲りはしないであらうか。米國の金融市場は千九百十四年聯邦準備金銀行の設立されて以來、餘程金融上に統制力の生じた來たことは、明白の事實であり、一方に國家亦民業を指導して、之を或る方嚮に就かせ

ることを辭しないように爲つた。獨逸に對して、如何なる態度を取るかは、米國將來の國策を現はす一端として、最も興味ある問題であつて、若しも米國が思ひ切つて獨逸を援助し、一方に聯合諸國の爲めに、獨逸公債を引受けるに至つたならば、國際經濟上に於ける米國の地位は向上し、進展し、何ものの追隨を許さゞるに至るであらう。唯是れだけの大事業を爲し遂げる人物が今日の米國に見出されるかどうか　姑く時日の經過に徵するの外に、道はないのである。

償金の授受が聯合諸國と獨逸との間に始まつたならば、之を機會として世界經濟の面目が一新されるに至るであらうとの說は、以前から我國に行はれて居るようであるが、償金が公債の形で支拂はれた場合に、果して然るを得るであらうか、此事は一に米國の市場が公債を買入れ得る程度如何に依つて定まる問題である、而して米國と雖も、無限の財力を擁するものではない、戰爭當時に比較すれば、今日は寧ろ財力に於て凋落の傾きがあるのであるから、他國から獨逸公債を買入れたとした所で、其一部分であつて、之を以つて直に世界の景氣を一變し得ると考へるが如きは、輕率に失するの感あるを免かれないのである。

償金問題に就て、我國に如何なる議論が行はれて居るか、私の知るを得ざる所であるが、實際の方面を見れば我國は聯合諸國と何處までも協調して行くと云ふ點から、殆ど列び大名式に數億馬克の償金を收め得るようである。數億馬克でも、無いよりも、有る方が宜しいと云ふ商賣人根性が到る所に行はれて居るかも知れないが、私は日本人としては斯る卑しい考を去つて、一ッ敗殘の獨逸國民を助ける爲めに、償金に關する權利を放棄すると云ふ正義論を高唱して見たいと思ふ。佛蘭西や白耳義と違ひ、領土上に何の侵害を蒙らない、海上で船舶の擊沈された位ひの損害に止まる國が償金を徵收する、何だか戰爭が商賣化したような感を懷かざるを得ない。

泰西名畫家傳

藝術界の赤熱的歡迎裡に第三編發行

第三 ティチアン

文藝復興期の生める偉大なる作家。ヴェネチア派の驍將。百歳の長壽を享けて其晩年まで輝きたる世界稀有の大畫家。彼の驚嘆すべき藝術と生涯を評傳せるクナツクフスの名著は岩崎文學士の麗筆に依りて譯出せらる。挿畫は悉く原作直寫の複製なり

クナツクフス著
文學士 岩崎眞澄譯

中判三百頁繪畫三十七枚入
定價參圓 送料十二錢

第一 ヴン・ゴオグ 四版

最も完備したるヴン・ゴオグ（所謂ゴツホ）傳。底本は當時の事情に精通せるテオドル・デュレとゴオグ實妹クヱスヌの著述を參照し著者三十年間研究の結晶たるもの。

黑田重太郎著

中判三百頁代表作三十枚
定價參圓 送料十二錢

第二 セガンティニ 四版

世界無比の山嶽畫家たる彼の生涯と藝術とを詳說す、神秘的なる其藝術と哀詩を讀む如き其生涯とは惻々人を動かさずんば已まず

佐久間政一著

中判三百頁代表作三十四枚
定價參圓 送料十二錢

東京本郷湯島六丁目 **日本美術學院** 振替東京五八八六

米國の對世界的態度批判

我儘育ちの若旦那
惡く取り過ぎてはならぬ
善い所も少く無い

エム、エー、エル エル、ビー 米田實

一

近頃世人の耳目を聳動して來たのは、北米合衆國の對世界的態度だ、贊成者は「キビキビしい遣り口」と感嘆し、反對者は「傍若無人の振舞」と憤慨し、毀譽褒貶の聲諸方から起つて居る、そが重に同國の對國際聯盟態度に因由して居ることは言ふ迄も無い、顧みて見ると、一九一九年の巴里講和會議で國際聯盟が出來上つたのは米國大統領たるウツドロー、ウイルソン氏の力では無かつた乎、當時佛蘭西首相クレマンソー氏などは、衷心國際聯盟に贊成して居無かつた、是れ一九一八年クリスマス頃、ウイルソン氏が倫敦市會堂の大演説で舊來の「勢力均衡主義」を攻撃し、新平和組織を高唱すると、クレマンソーが之に反抗して佛國代議院で「世上勢力均衡主義を非難する聲があるが、予は同主義を固執する」と挑戰的宣明をしたのでも分るのである、否な獨りクレマンソー氏のみでは無い、歐洲大陸諸國の政治家間にも同樣な態度があつた、勿論彼等は平和聯盟を希望せぬ譯では無かつた、然かも戰禍を經驗し、實際政治の醜陋さを經驗する深き彼等は、自ら平和策を希望しつゝも、ウイルソン流の國際聯盟に贊成する迄には、幾度か躊躇し、低徊し、躊躇した、それが終にウイルソン説に贊成するに至つたのは、實に米國が今後積極的に、獻身的に聯盟の中樞に加はつて、聯盟の維持及發展に努力すると言ふ前提で安心し、之から得來られた結論であつた、然るに愈々對獨講和條約が出來ると、米國上院は、赴援の義務が無いとか、聯盟會議の英國票數が多いとか其他種々の理由を並べて之が批准を拒絶し、更らにウイルソン氏失脚、共和黨候補ハーデング氏が元首に決すると、同國

盟死す」との文句さへ、一度白亞館主人の舌頭に上つたでは無い乎、之ばかりで無い、米國官民の國際聯盟諸機關攻撃は、皮肉で、辛辣な文句で行はれ、一見呉人の越人を見るが如く、些の同情も之なき如くである、曾つて米人の誘導に依つて安心し國際聯盟に加入した歐亞諸國は今や國際聯盟のお蔭で米人の嘲笑、罵詈の目的物と成つて居る、天下斯くの如く割の惡い話しは無い、諸國豈無限の感慨無きを得るであらう乎。

かくて佛伊英諸國でも米國非難の聲は、其壓服的外形に於けるよりも、裏面に於て大分盛んになつて居るが、此頃我日本では一層米國非難が猛烈になつて來た、それは右一般國際聯盟問題の外に、ヤツプ島問題に關する米國の態度が、眼中人無しの概あるからである、尤もヤツプ島問題に就ては、日本全權にも重大な手落ちがあり、ウイルソン氏が成程ヤツプ島が除外されて居たと考へたかも知れぬと首肯せしむる事情も皆無では無い、然かも此事實は外交の秘密として國民には知られて居無い、のみならず、是れは情實の論である、冷かな法理的見地から言ふと、五月七日の最高會議委任統治地域分配には「赤道以北の獨領諸島を日本の委任統治地域とする」旨を決定したのである、ウイルソン氏自身が如何に獨逸全權も來着し、百事輻輳して混亂の裡にあつたとは言へ、此決定を不注意に通過せしめたことは米國側の責任であつて、之が爲めに日本のヤツプ擔當を否認する理由とはなるまいと思はれる、尤も予はヤツプ島問題で、日本も宜しく相當に讓歩す可しとの意見を懐くものではあるが、それは別問題である、彼の米國政府就中ハーデング政府が、大戰中の日本と南洋諸島との長い歴史を無視し、又た巴里會議の決定を輕視し、且つ條約不批准てふ有力なる論據をも利用して、眞向から我がヤツプ委任統治を破碎せんとした遣り口は、我國民から見て「眼中人無き振舞」と感ぜられたでは無かつたらう乎。

二

予は敢て米國の對外的政策の正否、其價値如何を批判せんとするものでは無い、米國が一應國際聯盟に對し又たヤツプ問題に對して右の如き態度を執り來つたに就ては、米國として深き信念を有し、相當の理由を有し、少くとも自己の行ふ所是なりと考へたに違ひ無い、然かも其政策を實現せんとし若くは主張を貫徹せんとして、其執る手段、様式若くは言動に至つては、隨分無遠慮、粗暴であることを否認する譯には行かないのである。

併し世人が能く記憶して置かねばならぬことは、此無遠慮、

粗暴は、彼の悪漢が他を威迫せんとして殊更らに無遠慮粗暴な振舞をする流では無くて、元來我儘育ちの大家の若旦那の無遠慮、粗暴と比す可きものであらうと思ふ、予は從來米人の評をなす每に、能く大家の若旦那の譬へを持ち出したものである、尤も若旦那と言つても遊ぶ若旦那で無くて大に働く若旦那たることは申す迄も無いのである。

米人の斯くの如くなるは、環境（エンヷイロンメント）の影響である、言はゞ多年環境の影響を受けて、今や一の質を成したものである、蓋し歐羅巴等舊世界では、富源も相當に開拓せられ若くは消盡せられた上に、狹い地域に多數の人口が聚つて居る、斯る場所に生活し行くには、個人双互が自制し讓歩し、協同生活の爲めに自己を空うせねばならぬことが第一の條件である、大體米人と同じ民族から成る英國人が遠慮勝ちで、丁寧で、磨かれたゼントルマンに富むのも、コンナ事情からである、ところが米國を見ると、誰か言つた樣に鐵の山から石灰の谷を通して石炭の山を望む位ゐ富源も多い、地域も廣く所謂沃野千里の委も少く無い、ソコに人口が少いので、ノンビリとして自由活動の餘地に富んで居る、生活も容易である、唯だ其缺點は何分新らしい丈け澁味も無く、單純な丈けそれ丈け野次馬的氣象に富んで居ることだ、即ち大家の若旦那と言つても、其家は新家であり、祖父か父親かの時代が成金になつた位ゐだ、貴族やら舊家の若旦那の樣な奥床しさと品格は無いけれど、人に頭を抑へられぬ所から、豪放で、ノンビリとして、且つ我儘勝手な所がある、此氣象、性格が其外交政策に反映し、遂に最近のやうな米國の態度を見るに至つたものに外ならない。

三

併し世人は此我儘な若旦那の一見傍若無人な態度の爲めに、唯だ亂暴だとのみ考へて、其含む内容をも考慮することを忘れてはならない。

假りに國際聯盟問題を檢すると、米國が歐洲赴援の義務を拒んで居るのは、一旦多年の「米洲引き籠り主義」を破つて歐洲大戰に參加しては見たが、今後猶歐洲の紛糾に關係することに就て何だか不安を感じ出した爲めである、是れ恰かも奈翁大戰後の英國が間も無く孤立主義に復歸したと同じ心理だ、一八四八年パアマーストン卿の外交演説にも見えたやうな心理だ、殊にそれが米國を其考へと違ふ歐洲強國の政策を助けねばならぬ運命に陷れたり、多年の國策であつたモンロー主義を危うしたりするとなると、此修正若くは保留を呼號するも、満更ら無理由とは言へ無いのである。

ヤツプ島にしても同樣だ、日本の主張に相應な尊重す可き歴史やら理由やらあることは勿論だが、又た米國として考へると自ら二百萬の軍隊を歐洲に出し、巨億の軍資を費して多大の貢献を聯合國に致し乍ら、自ら寸尺の土地だも取らぬのであるから、海底電線及之に關係ある地域に關する主張位ゐは貫徹させても善いではない乎との感想も起るであらう、殊に巴里講和會議の決定は一應日本主張通りのやうに見ゆるが、ウイルソン氏がヤツプ島保留若くは除外と考へ違つたことも、無理からぬ事情がある樣である。

即ち其態度は隨分亂暴粗野であつても、其主張の内容は、米國其者の立場から考へると、決して徹頭徹尾無理なもの許りでは無い、是れ公平なる研究家、批評家が注意せねばならぬ點だらう。

殊に此亂暴なお坊ちやんにも、なかなか善い所がある、或る種の問題に就て新思想を鼓吹し、人道を說き、人類の向上に盡すことだ、滿更ら惡く許り言ふ可きものでも無からう。

四

だが一つ言つて置かねばならぬことがある、今日の米國は一國民を形成する過程にあるもので、未だ全然形成し終つたと言へぬ、一億の人口中、外人系を算へると、英人系一千萬、獨人系九百萬、拉丁系四百萬、スカンヂナウヰア系三百萬、露其他スラウ系三百萬等で、人口の三分一即ち三千二百萬位ゐは外人系である、内國人系にもこう言ふ分派あることを記せねばならぬ（米國生れの父母の子は血統の如何に關らず内國人系に算す、）是に於て乎、米國人は一國民で無くて數箇の國民の聚合だと言ふ評が起る、如何なる國にも種々の思想やら人物やら居るには違ひ無いが、米國の右の狀態は一層之を甚しからしめて居る。此思想的、人物的集團が盛んに並立し、能く混和して居無いと言ふことは、米國の政治に反映して、他國よりも一層矛盾撞着を多からしめ、時には國際政策の上にも現はるゝ、甲が造つたことを、乙が打破して、それが外國に迷惑をかけても平氣だと言ふやうなことが發生する、又た一方に人道を唱へて、他方に非行が恣まゝにせらるゝやうな現象も起る、ソコデ僞善者と言ふ批評も受けねばならなくなるのである、博愛論の傍らにリンチ（私刑）が行はれ、世界平等、民族尊重、後進者救拔を言ひ乍ら、隣國メキシコに對する米人の略取的陰謀は、最近「プロツト、エケンスト、メキシコ」（前米國官吏著）其他にも暴露せられた通りである、無論之にも前述の如く米國の環境より生ずる「我儘な若旦那氣質」も關係あるが國民が渾然融合し居ら

す、社會學者の所謂「homogeneous でなくて heterogeneous な人口狀態」が重な因由であらうと思ふ。

コウ考へて來ると、我國民も否な世界諸國民も少し所謂 detached mind を以て高處から米人を見る雅量が必要ではあるまい乎、と予は思ふのである、是れ米國人の對世界的態度に對する予の所懷である、若しそれ箇々の外交政策の批評に至ては、短評の善くする所で無く、別に詳細な論議を試むる時があらうと思ふ。

米國の單獨講和

ドクトル、アン、ドロア、ド、ユニヴェルシテー　法學士　杉村陽太郎

一

米國の上院は去る四月三十日四十九對二十三の多數を以て對獨及對墺單獨講和に關する「ノックス」氏の共同決議案を可決し同案は次で下院に付議せらるることになつた。

單獨不講和に關する千九百十八年九月五日の倫敦宣言に加盟せざる米國としては獨逸との講和に付き全然任意の措置に出で得る筈であるから嚴密なる法律的見地より之を論ずるときは米國今回の行動を以て穴勝不法なりと論斷するを得ず、否、如斯は參戰の當初より米國側に於て夙に豫想し又聯合側各國に於ても倫敦宣言加盟拒否に關する米國側の態度に依り當然斯かることも有り得べしと推測せねばならぬ理由もあつたのであるから今更ら別段驚く程の事もなく國際上に自由の地步を占め殊に歐洲の事件に依り妄りに觸せられざらむとする米國本來の國策に鑑み共和黨側の主張こそ眞に米國の國論を示すものであつて彼の國際聯盟の建設を高調せる「ウイルソン」大統領の政策の如きは寧ろ米國古來の國是と立國の根本精神とを沒却せるものなりとさへ論斷することも決して不可能ではないのである。

然しながら巴里平和會議は開催前なればいざ知らず米國の元首が世界に宣明したる平和原則十四ヶ條に基き開かれたる平和會議、否一步を進めて論ずれば會議に代表者を參列せしめたる敵味方の諸國政府が場合に依りては其の意に反して迄も右十四ヶ條に揭ぐる大原則の拘束を受け幾多困難なる交涉の後始めて締結せられたる平和條約の儼存する今日米國側に於て單に倫敦宣言に加盟せずとの理由のみを以て其の行動の自由を留保し得ざるべきは理の當然であつて諸般の理に對獨休戰條約の締結、平和會議の招集及「ヴェルサイユ」條約に關する幾多の外交文書

宣言を一瞥せば直に首肯し得らるる所なのである。又此の點に付き條約を以て一紙屑なりと言放てる前獨逸帝國の宰相「ベットマンホールウエヒ」氏の不信を責めたる平和條約署名各國は確に米國政府の不德を詰責せねばならぬ立場に在りと信ずるのである。

戰後に於ける米國の國力增進は歐洲と亞細亞との力を以てするも尙且之に匹敵し得ざるやを恐れしむるものあり從て「トライチュケ」の所謂「力は法なり、權利の基礎は力なり」との主張を以て幾分眞理あるものなりと云ば米國側の自由行動を目して却て眞理の命ずる所に從ふものなりとなし得ざるにも非ずと考へらるるのであるけれども吾人は「法は力なり、力の基礎は權利なり」との信條を有するものであるから不幸にして斯かる似而非なる國際道德に盲從することは能はず又吾人外國人には此の點に付き米國上院の權限如何又大統領選擧の內幕如何等米國內部の問題に付き考慮するの必要もなく又理由もないと確信するものである。

米國と國際聯盟との關係及國際聯盟と國際聯合との關係等に關する卑見は已に之を公表する機會を得たから（大觀三月號、五月號及六月號參照）茲には之を省略する。唯々米國の單獨講和問題と右等の諸問題との間には密接なる關係があるから彼此對照して考察するの要あることと丈けを附言して讀者の考慮を仰ぐのみである。

二

單獨講和に關する「ノックス」氏の共同決議案は四項に分かれ第一項と第二項とは獨逸に對するもの又第三項と第四項とは墺地利に對するものであるが、而して此の兩者は全然同一の文句であるから、茲には單に第一項及第二項即ち獨逸に對する分のみに付き主として法律的見地から論評を下さうと想ふ。

第一項　決議案は其の第一項に於て戰爭狀態の終結せることを規定すると同時に北米合衆國政府が或る一定の條件が充たさるる迄の間其の管理に歸する獨逸人の財產を保留 retain すべきことを掲ぐる。而して北米合衆國政府に米國と獨逸國との間に米國側に於て滿足し得べき次の如き條項を包含する條約が締結せられ且兩國に依り批准せらるるに至る迄の間前記の獨逸財產を保留せんとするのである。

一、獨逸國政府が千九百十四年七月三十一日以後自ら又は其の代理者に依り故意に米國市民に加へたる損害に關し米國市民より提出したる一切の請求に對し滿足を與へ得る措置を講ずること（對獨平和條約第二九七條（ホ）號參照）

二、獨逸國に於て一切の米國市民に對し居住、通商航海、工業所有權に關し最惠國の待遇を附與すること（對獨平和條約第二六四條第七號、第三三七條、第三三一條及第三〇六條參照）

三、獨逸國に於て獨逸人の財産に對し北米合衆國が行へる差押及其の措置を總て確認すること（對獨平和條約第二九七條及附屬書參照）

四、將來締結せらるべき條約以前に起りたる事實に對し獨逸國より北米合衆國に對し何等金錢上の請求を爲さざること（對獨平和條約第二九七條附屬書二及第四三九條參照）

單獨講和に關する共同決議案は右の如く米國政府が獨逸に對し主張せんとする或る種の要求を明定し而して前記の各事項は將來米獨兩國間に締結せらるべき條約中に規定せらるべきものとして掲げられたるは明である。是等の諸要求は既に示したるが如く「ヴェルサイユ」條約の諸條項中に之に相應する幾多の規定を見出し得るのであつて對獨講和に際し米國側より斯かる要求が提出せらるることは事理固より當然に屬し之に對し深く說明を加へる程の必要を見ぬのである。然し乍ら茲に特に注目を要する一事は是等の要件が決議案中に規定せられたる方法及形式の問題であつて先づ米國政府は一度平和を克復するも尚且獨逸人の財産を保留せんとし而して決議案の文句は retain なる語を使用し對獨平和條約第二九七條に於て retain and liquidate 即ち保留及清算と規定するとは異なるのである、從て右に關し米國政府に於て執らんとする措置は單に一時的のものに過ぎず又其の目的も一に獨逸人の財産を保存せんとするに在るや明である。別言せば右は米國議會に於ける單獨講和に關する共同決議案の通過と將來締結せらるべき平和條約の批准との間に於ける一種特別の措置と見ることを得るのである。

斯くして米國は其の掌中に歸れる貨物を保留し之に依り決議案に列記せらるる各種の要求全部を貫徹せんとする鞏固なる決意あることを示すものである而して是れ決議案の特質を示すものであつて決議案は條約の成立迄の間に於ける一時的の制度を定めんとするに過ぎぬのであるけれども決議案が米國より獨逸に求めんとする金錢上及經濟上の要求に付き詳細に規定するに拘らず將來締結せらるべき平和條約の他の個條に付ては何等言ふ所なきは察するに是等の要求と右に述べたる獨逸人の財産保留とを相對立せしめ後に至つて之を提出せんとするものとなるべしと考へらるるのである。或は更に進んで米國側に於ては領土又は政治等に關する諸問題に付ては條約上全然其の規定を設くることを避け其の將來獨逸と締結せんとする平和條約に於ては單に米國市民の經濟上又は金錢上の利益を擔保せんと

爲め特に必要なる點に付てのみ規定せんとする底のなりとも想像し得るのであるが若し米國側にして斯かる方策を執るが如きことあらんか米獨平和條約は「ヴェルサイユ」條約に比し絶對に異なれる組立てを有することと爲るべく而して斯くの如きは聯合側諸國に取り由々しき大問題とならざるを得ぬのである。

第二項　決議案の第二項を一讀する者は何人と雖も其の規定の餘りに奇怪なるに驚かざるを得ぬであらう。實は吾人と雖も規定其のものの意義を確むる上に頗る困難を感ずる次第なのである。蓋し第一項に於ては規定の目的も確定し其の執らんとする措置も明瞭に了解せられ之に依りて平和克復後に於ける米國政府及米國市民の法律上の立場を明確ならしむるの結果を生じ得ることと敢て深く説明する迄の要もない所であるけれども第二項に至ては唯々單純なる政治的性質を有するの宣言に過ぎぬのである。即ち米國は休戰條約又は「ヴェルサイユ」條約（但し主たる同盟及聯合國たる資格に於てのみ）に依り獲得し得る一切の權利及利益は飽迄之を留保せんとするのである。右は固より今直ちに米國側に於て是等の權利を行使し得べしとの趣旨には非ず、蓋し斯くの如きは一國の一方的意思表示に依りてのみ行ひ得ざる所であるからである。然しながら本問題に關しては玆に次の如き根本的困難の存在することを見逃してはならぬ。即ち米國は本來「ヴェルサイユ」條約の定むる各種の義務を履行するに非ざれば其の權利を行使し得ざるべき筈なるに拘らず聯合側諸國と異なり斯かる義務又は不利益は之を認めずして單に其の利益及權利のみを獲得せんとするのであるから米國側の主張を貫徹せんとするが爲めには實際上至大の困難が生ぜざるを得ぬのである。即ち第二項に揭ぐる留保は到底實行し得ざるものと言はねばならぬ。

斯く米國側は「ヴェルサイユ」條約を批准せざるに拘はらず恰も之を批准したるが如き資格を以て該條約に依り付與せらるべき筈の權利及利益は總て之を獲得せんとし然かも該條約の定むる義務は寧ろ之を認めんとせぬのであるから其の態度の利己的なる眞に唾棄すべきものがあるけれども、更に深く本問題を攻究するときは（或は共同決議發起者の意思ではなかつたかも知れぬけれども）其所に更に他の或るものが伏在するを見出すのである。即ち米國側に於ては單獨講和を提唱するに拘らず巴里平和會議の産物たる主たる同盟及聯合國の一たる地位は之を拋棄せざらんとすることであつて此の點は米國の政策が將來他の四大國の政策と近接し其の間に或る種の連絡を生じ遂には相協力して進むに至らしむる連鎖なるかに解せらるるのであるから共同決議案研究者の斷じて輕視すべからざる要點である。

三

右に依り吾人は二方面の異れる觀察を下し得るのである卽ち第一點は米獨兩國間の平和克復に付き米國側が單に其の經濟的利益に關する主張を爲すの外又他の要求を提出せずとの點であつて、第二點は一見米國側の利己的政策を露骨に提示して其の權利に對し絕對的要求權ある旨を規定するが如くに察せらるるけれども將來米國をして主たる同盟及聯合國中に仲間入せしめんとする傾向を察知せしむるに足るものである。別言せば米國側が世界大戰後に於ける平和確立の事業に付き聯合側各國と協力して進まんとする意向を暗示するものである。

此の二つの方面は右の如く全然相異なれる性質を有するのであつて決議案起草者の趣旨は恐らく當初は第一項のみに依り、米國の權利及利益を保護することを以て其の唯一の目的としたのであるけれども事物自然の成行に依り遂に主たる同盟及聯合國の一たる其の地位を恢復せんとするに到らしめたものではあるまいか。米國側が久しき以前より歐羅巴政治に參加することを避けんと力めたるに拘らず遂に事此處に至れるは其の權利及利益を獲得せんとせば[illegible]聯合側の一國として、他の四大國と共に平和條約の實施に當るに非ざれば到底其の目的を達する事不可能なる所以を覺つたからではあるまいか。卽ち平和克復の事業を單に獨逸と亞米利加との間の關係にのみ局限し所謂單獨講和なるものを名實共に實現せんとすることは事實到底不可能なるを自覺し、假りに米獨兩國間には其の形式に於ては單獨講和と認むべき獨立せる特別の平和條約が締結せらるるとしても此の平和條約たるや「ヴェルサイユ」條約と平和を保つて起草せらるるに非ざれば到底實行すべからざるものなるのみならず若し或る重要なる點に付き「ヴェルサイユ」條約が變更するが如き結果を生ずるものなるときに米獨平和條約其のものが結局實行至難に陷るべきことを理解し、遂に斯かる苦肉策を講ずるに至つたものかと解せらるるのであつて斯くの如きは世界平和の爲めには勿論、又之を聯合側の利益の點より觀察し又之を米國側の面目の點より考察するも最も賢明なる考案なりと云はざるを得ないのである。

四

此の一文を草し終つた後吾人は「ハーディング」大統領が聯合側の最高會議、大使會議及賠償委員會に代表者を派遣すべき旨を決し且下院に於ける共和黨の領袖は「ノツ・ポー」氏の其同決議案の討議を延期しと　且經濟問題其の他重要問題の[illegible]は

を先にする方針なる旨を通告し斯くして「ノックス」氏の決議案は多分歐羅巴の形勢が全部解決せられるに至る迄即ち凡そ向ふ一ケ月間位委員會の手に保留せらるることゝなるべしとの情報に接した。

「ウイルソン」氏攻擊の火の手が意外に熾烈となり今や如何にして之を消し止むべきかに苦悶せる共和黨領袖連の苦心は右の情報に依り恰も手にとる如くに窺見せらるるのである。戰後の世界に於ける民主的專制君主が如何にかして其の渦つて自ら造れる罠より脫せんと焦慮する樣は自業自得とは言へ眞に一代の奇觀　あるが所詮は　の問題である。結局は妥協より外に途がないのである。共和黨政府必ずしも智者なきに非ず何人か必ず出でゝ此の難問題に對し滿　なる解答を與ふべく如何に米國人が其の優越的地位に上氣したりとて世界を敵として然も何日横行濶歩せんとするの愚を敢てせぬであろう。英と言ひ佛と言ひ何れも切に米國側に於て何等かの妙策を案出し以て聯合側各國既得の權利を毀損せず　て米國側の面目を立て斯くして一日も早く戰後に於ける國　關係の　定を得んことを希望して已まざるは　更ら縷說の要なき所であるけれども人あり若し地球上　人が最も斯かる妙案の提出を鶴首して待てるかと問はば吾人は直に「ハーデイング」大統領其の人なりと答へんとするのである。

米國の對世界的態度

文學博士　三宅雪嶺

○瓜の蔓に茄子は生らず、矢張瓜が生るのであつて、唯地味及び培養で變種が出來たりする。明治維新の少し以前から約二年間、英語教科書となつて居つたピーター、パアレー萬國史は、米人グウドリッチが兒童用に作つたものであるが、其中に英國人は國内で良い人であつて、國外で無理な事をするので宜しくないと書いてある。米人の眼に英國が左う映じたのである。英國の紳士は模範的として評判であるに拘らず、對外的態度に於いて何の處置に出づるか測り難いとされて居る。米人はつく〴〵之　感じ　遺憾の事としたが、今や已れ自ら之と同樣の狀態にならうとして居る。新　地方　その生活及び氣分が英國に似て居れ、他は隨分亂雜な所あるだけ、其國外に力を伸す場合、英よりも無理な事を爲しはせぬかと疑はる。

○

米國の建設は決して平和裡に於いてせず、奮戰健鬪の連續である。米國獨立といふ事其事が既に喧嘩腰を意味し、力を以つて威脅するものに對し何處までも力を以つて抵抗しようとし、所謂無抵抗主義など全く考へ及ばぬ所にかゝる。初代大統領ワシントンが隱退する時、事業上に力を歐洲に伸し、其政治上紛爭に與らず、何處迄も一致して自らの力で自ら維持すべしと云ふて居る。當時人口三百數十萬、海岸より二十里奥に入れば、人跡無い處が多かつた程であつて、辛じて自ら維持し得る位の事、それでも斯く自信が堅かつた。歐洲の外交に携はらぬと云ふので、歐洲列國と遊び平和主義と思はれ、自らも其外交に携はるの無益有害を知つたが、苟くも自らの力の及ぶ處、他國をして指一本觸れしめないとの意氣込みがある。

○

一八〇三年、那翁一世がルイジヤナを米に賣却した。後のルイジヤナと違ひ、誠に廣大たる土地、實に從來の米を一倍するのであつて、價は三百萬圓に過ぎぬ。那翁の云ふには、斯くて太西洋に英國と海上權を爭はうものが出來上ると。前に佛國が

米の獨立を扶けたのは英の力を殺ぐが爲めであり、更に大なる領地を讓つたのも、之をして英を抑へしめるが爲めである。米は自由國と知られつつ、歐洲において英に當り得るものと看做して居つた。一八一二年米國が英と衝突し、軍艦五隻を得たのは英の海上權に一擊を與へたものとして、那翁の豫定がいくらか當つた譯であるが、それでも猶々英と爭ひ得る迄に百數十年を要した。那翁は何時でも海軍を製造し得るかに考へ、それでトラファルガーに失敗したが、米國に對して遠からず多く軍艦を作り、英に當らうと考へたらしい。若し那翁が存命中に米の英と海上に爭ふのを見ようとしたならば、大いなる誤りであるが、米と英が海上に爭ふべきを見て取つた所、確かに的中つて居る。但だ那翁が遠からぬ事としたのが、百數十年もとあつては、有繫の英雄も見損つた譯である、然し一方に新世界に於ける自由國として賞讃された所のものが、英國と海上權を爭ふの運命あるとは、分つたやうで分らぬ事であつて、他國人で全く斯く思はぬのがあり、米國人自ら斯く思はぬのが少くなかつたが、年一年其方向を指して進み、今や漸く之を事實の上に現はさうとして居る。

○

考へて見れば、米國の現狀は由つて來る所遠く、何の不思議がない。歐洲の那翁戰役の爲めに騷いで居つた頃、米國は之れで莫大の利益を得た。後の世界戰役と較べものにならぬにしても、歐洲に戰亂ある每に儲け得る事になつて居る。米國で事業上のみ歐洲と交涉し、外交上に沒交涉にならうとするのは、平和の爲めにするやうであつて、自らの利益の爲めになる所がある。歐洲の外交に與からずとも差支へなく、斯かる事に取紛れて居るよりも、他に幾層か有利なる事を求める。嚮きに歐洲大陸が戰亂で忙殺された時、英國が之を他所に見て世界に植民地を獲得し、太陽の沒せざる領土を作る事になつたが、米國は英國まで歐洲の戰亂に騷いで居る時、米洲に大なる領土を拓くに努めた。十三洲の獨立した頃迄に小さなもので、それが今日見るが如きに至つたのは、歐洲が戰亂に疲れて居るに乘じ、容易に手に入れ得たに出る。那翁がルイジヤナを賣却したのは、時に取つての得策であつたか何うか。佛國人は植民に適せぬといふが、後ちに植民地を尋ね廻る位なら、ルイジヤナを手離さねが可かつたらう。普通ならば何とか之を維持し得たらう。維持し得なかつたかも知れぬが、賣却が早過ぎたと思はれ、それだけ米國は幸を得て居る。

○

米が大なるルイジヤナを得たのは好い拾ひ物をした次第であつて、之を得ると共に墨西哥と國境の爭ひが起り、墨西哥政府は迚も米の敵國でなく、術策に繼ぐに術策を以つてし、米に於いて之を何とでもあしらふ事が出來、事ある每に、出兵說が盛んになり、出兵すれば必ず勝つ。遂に墨西哥灣に出で、更に太平洋に出る事になる。露國のピョトル一世が太西洋に港を得るに苦心したといふのが一つ噺になつて居るが、米が墨西哥灣及び太平洋に顏出したのは遠く之に優つて居りながら、何程の注意を惹かず、歐洲で斯かる事が何うでもいゝやうに心得て居つた。偶ゝ其世に那翁三世が墨國に力を扶植しようとしたが、時既に晩く、モンロー主義の下、美事刎ねつけれた。

○

米が墨西哥と爭ふ時、歐洲諸國も之に與るの餘力無かつたかも知れぬが、米をして思ふ存分に力を伸ばさしめて居る。露國までがアラスカを七百萬圓で米に賣つて居る。米が廣大な領土を占むるに至つたのは、土地成金の最も著しいものであり。費す所甚だ少く、得る所甚だ多い。人の氣の付かぬ間に大きく土

地を買込み、後ちに地價騰貴して大地主となると云て居る。而して之れ米の發明でなく、其親なる英國得意の方法であつて、英は既に世界に散在する植民地を得、米は斯く散在せぬ代りに良い土地を纏めて得て居る。英も隨分有利な土地を得て居るものゝ、今日の所米ほど好い所が無く、他日加奈陀や濠洲や阿弗利加やが如何になろうか、必ずしも米よりも發達せぬと限らねど、現に米に優つて居ると言へぬ。米の今日世界に雄飛するのは、地の利を得る所が最も與つて居る。

○

米は土地を得るに於いて親に劣らず、或は親優りの形がある。斯く親なる英國に似て居るだけ、對外的態度に於て亦之に似ねばならず、若し似ねならば、時機が熟して居らぬに由る。獨立當時から他國人に負けまい、他國人に勝たうとの意氣込みがあり、其以前からして左うであり、獨立して愈々さうなり、後ちに領土を擴大するに從ひ、愈々其勢を盛にし、南北戰役で十分に自信を固めるを得た。ペリーを日本に派遣したのは、東亞細亞に勢力を扶植しようとしての事であつて、強く取り懸らなんだのは、歐洲でも餘り力を用ひなんだのと異ならぬ。歐洲で東洋政策に熱中し初めてから、米でも西班牙と戰ひ、比律賓を領有するに至つた。英國は自國が小さくて他に土地を得るの必要あるが、米は自國が頗る擴大であつて、何は折もあらば土地を得ようとする。大きな地主が何處ぞ格安の土地がないかと見廻して居るやうな所がある。併し何にしても自國は頗る大きく、之れに割合して人口が少いので、歐洲の國々が土地熱に浮かされた程目立たぬ。獨逸の如き、少しでも隙があれば、土地を獲ようとし、僅かの土地を得るが爲めに、頗る苦策を廻らした。ニユーギユニアの一部を獲たが如き、生き馬の眼を拔くの手段を以てした。而して何程の利益が得るかと云へば、多く云ふに足らず、油斷も隙もあつたものでないと恐れられながら、其割に得る所が少い。世間と世界に評判になり、獨逸は侵略主義で世界を征服するものと云はれる。其後に掛けて米國は頗る大人しく、生き馬の眼を拔くやうな事をせず、取れる隙があつても、濫りに取らうとせぬ。實は獨逸程焦せらなくともよいからであつて、金持ちが相場に關係し、金無し程焦せらぬやうな所がある。焦せらずして得る所が却つて大きい。米國に油斷ならぬ國と云はれ、印度で[illegible]と稱するが、獨逸が白耳義の中立を破るやうな事をせず、兎も角も名義の立つやうな事をする。以前は左うでもないが、近年相當に名義の立つやうにし、世界戰役で獨逸よりも名義に於いて優つて居る。[illegible]

と交渉頻繁、外交振りに於いて之に似た所ある英國でも尙は左うであり、歐大陸より離れ、外交の因襲ない米國で、名義を重んずるは事の然るべき所である。

○

然し歐大陸の外交に較べて陰險でなく、稱して正義公道に據るとするが、何程まで正義公道の觀念を具へて居るか。只比較的の事であつて、大いなる差違が無い。建國當初は相應に理想を重んじ、之に近付かうとし、次で國力の増進するに從ひ、理想よりも事實に重きを置き、南北戰役以後、歐洲の强國と變りがない。交通機關の整はぬ間、歐洲と別になり、十日間で往復し、電信電話の自由になつて特別の違ひを見ぬ。南北米洲が今よりも大きければ、勢が今程切迫して居るまいが、米洲も最早や理想を追ふ所ではなく、實際の上に立つ所となつて居る。歐大陸の國家と違ひ、大陸を一纏めにした程の大きさであるだけ、歐洲と趣を異にするも、新世界といふ程異つて居らず、英國の息子と云ふ所があり、母の遺傳が何れ程あるか、英人よりも更に雜駁なる所に違ひが起る。英國よりも更に優つた所を示して呉れゝば、世界の進步に益するのであるが、果して然るを得るか何うか。英も加奈陀及び濠洲が未知數であつて、今は急に發達を望み難い。阿弗利加が如何になるかが問題である。遠き將來を考へれば、亞細亞大陸の廣大なる未開地が新國家を現出する所とも思はれるのに、それは餘りに遠い。米國は今一層好くなり得ると豫想された、其割りに進まぬ所、惜しむべき限りであり。南北戰役で統一しなかつた方が可かつたとも云はれる。併し多年歐大陸で行はれた外交の懸引は、米國に於いていくらか秘密を減ずる事になり、其處に外交の進步を見るとする。

日米と國際的惡戲者

法學博士 林 毅陸

日米問題に就いて議論をなす事は、現在の自分としては些か迷惑である。能ふべくんば可成差控へて居たい。併し茲に只一言丈け述べて見たいと思ふのは、假りに日米と國際的惡戲者と題すべき事柄である。

何れの時代に於ても國際間に惡戲者は絕えない。國と國との間に種々の問題を紛起せしめ、更に其衝突を助長激成して、其間に自己の特殊の目的を達せんとする陰謀者は常に存して居るのである。國際問題を取扱ふに當りては、此種の陰謀者、若く

は惡戯者が、常に何處にか潜んで居ると云ふ事を注意より逸してはならぬ。佛蘭西の諺に「亂れたる水に於て漁りする」と云ふのがある。即ち水を攪き亂して之を濁し、波を起さしめ、其混雜に乘じて魚を捕へんとする者である。國際間に於ては此種の術策を抱いて殊更に波瀾を激起せしめ、紛糾を利用して巧みに陋劣陰險なる野心を遂げんとする者ある事を常に警戒せねばならぬ。即ち日米關係に就いても、我輩は此意味に於て、兩國の識者及び一般國民が、相當の注意を拂ふの必要あるべきを思ふのである。

元來日米の親交は歴史的のものであり、且つ大局の利害より見て、二國相協提携して太平洋の平和維持に努むべき大使命を有する事は、今事新らしく云ふ迄もない。兩國の關係は極めて密接に且複雜にして、自然其間に各種の交渉案件が發生し易い。其中には互に議論を戰はさねばならぬものも勿論あるであらう。是は日米近く相接して其の關係の密なるより生ずる必然の結果であつて、寧ろ怪しむに足らない。而して互に誠意を以て腹臓なく意見を交換する中には、自から相當の解決に達すべきである。然るに兩國の間に種々の問題あればとて、直ちに之を以て國交の大局上に大動搖を與へざるを得ざるかの如く想像するは、餘りに淺果敢なる話である。此事は兩國の識者に於て十分承知して居る事であると思ふ。又一般國民に於ても日米國交の基礎の如何に固きやは、十分諒解して居る筈である。

然る處茲に國際惡戯者なる者あり、動もすれば日米間の問題を殊更に誇張して波瀾を激起せしめんとする事がある。實は日本とアメリカとは最近の大戰のため比較的に大なる損害を被らざりし唯一の二國である。日本は大戰に際して聯合軍の勝利のため能ふ限りの努力をなしたのであるけれども、地理上の關係よりして歐洲戰爭の慘害を直接に受くる事割合に少かつた。而して反つて此戰爭中に商工業の大發展を來し、大いに富力を增した。是は實は他人の嫉妬の種とならざるを得ないのである。又日本は五大國の一として新地位を占めて國運の隆々たるものあるも、見る人に依りては不愉快の感を起すかも知れぬ。一方に於て米國は大戰のために三百萬人を動員し、歐洲の戰場に於て大いに働らいたのではあるが、併し米國も此戰爭中に商工業に於て大なる利益を獲得した事は勿論日本の比ではない。而して自然嫉妬の標的となるべき關係となつて居る。又大戰後の國際政局に於ける米國の勢力は非常に強大なるに對し、之を嫉視すると同時に之を妬むものもあるべき筈である。實に日米二國は現在の世界に於ての好運國となつて居るのである。これで國際的惡戯者より云へば、此日米をして相爭ひ、相撲ち、互に大な

る損傷を被らしむると云ふ事は、正に其嫉妬心を慰むる所以であらうし、又斯くの如くして日本並びに米國の力を弱めしむるは、大いに面白しとなす事であらう。從而日本をして大喧嘩を爲さしめ、傍らより手を拍つて之を見物したいと云ふが如き意地悪き悪戯を企て、且其間に於て何等かの利益を獲得せんとするの陰謀を廻らすが如きは、確かに有り得べき事である。

嘗て滿洲問題のため日露衝突を來し、遂に開戰となりたる其當時に於て、帝政的獨逸の陰謀者に、日露衝突より更に一轉して英露衝突を激起せしめんと希望して居つたやうである。而して愈々英露衝突の際に、勢ひ又更に進んで英佛衝突ともならざるを得ない。斯くすればベルリンに於ける帝國主義的陰謀家は、居ながらにして天下を制し得ると考へたであらう。兎に角一時英露衝突を醸成せんとして、陰險なる術策の弄せられた事は、蔽ふべからざる事實である。是は當時の有名なウイリー、ニツキー文通即ち獨逸ウヰルヘルム皇帝と露西亞のニコラス皇帝との間に往復せられたる文通に依るも、其一斑を示して居るのである。

今日の國際政局に於て、是程の大陰謀者があらうとは思はれないけれども、然も初めにも云へる如く、國際悪戯者なる者は常に絶えない。根柢ある大術策より割り出されたる、組織的の陰謀とまでは行かずとも、何か或興味より、又は或事情よりの一時の利己心より、故意に悪戯を演じて日米の國交を亂さんとする者に必ず存在すると思ふのである。或は一笑に附し去つて可なりと云ふ程のものであるかも知れない。而も取るに足らざるが如き悪戯者の悪戯も、虚構の浮説流言より陰險なる離間中傷となりて、兩國の正直にして經驗少き人々の誤解を助長し、兩國人の神經を徒に刺戟し、初めには區々取るに足らざるが如きものなりしものが、何時とはなく兩國間に甚だ面白からざる重大の影響を與ふるに至ると云ふ事が往々にして起り得る。此等悪戯者は實に日米兩國を呪ふものである。世界の平和を呪ふものである。思慮と冷靜とを缺いで其の術中に陷り、彼等の悪戯の犠牲となるが如きは、愚の至りと謂はねばならぬ。此點は日米兩國人に於て、大いに注意警戒するの必要があると思ふ。我輩自身は、如何なる悪戯者の悪戯も到底日米國交の大局を亂し得るものとは信じない。兩國親交の基礎は斯く薄弱のものとは信じない。即ち大體に於て大いに樂觀して居るものではあるけれども、昨今の事態に鑑み、右の點に就いて注意を喚起する事も、必ずしも無益ならずと思ふのである。

米國の外交振りを評す

法學博士　浮田和民

米西戰爭以前米國の外交政策は全く消極的で、歐羅巴には干涉せぬ代り、新世界に歐羅巴の干渉を許さぬと云ふのが大體に於いて所謂モンロー主義であつた。歐羅巴諸國が亞米利加の土地を侵略し、殖民地を脅かさない限り、米國は歐羅巴に一切かまはぬと云ふ所謂自給自足の國是を執つたから、勢ひ外交政策は全く消極的であり、寧ろ殆ど無外交政策であると云つても好い位であつた。然るに千八百九十八年の米西戰爭に依つて玖馬を西班牙より獨立させ、比律賓を買收し、布哇を併合するに至つて米國は到底從前の消極的外交政策では立ち行かなくなり、自分自らも思はざる結果となつた。即ち米國は米西戰爭以來初めて國際上の大强國となつた。之れは米國としても意外であり、世界としても大いに驚いた所であつて、即ち米國は國際上見逃がす事の出來ぬ大要素として認められた譯である。而して爾來米國は歐羅巴の國際問題などに自然關係するやうになつた。米國は新世界の事に歐羅巴の容喙を許さぬが、歐羅巴は米國が歐羅巴に於ける國際事件に好んで干渉を許した。米國は兎に角、歐洲諸國の移民の行く先きで、なるべく米國と親善の關係を保つ事は利益であり、且つ米國と戰端を開く事は合衆國獨立戰爭以來歐洲は手を燒いて居るし、西班牙の始末も知つて居るからさう云ふ事は考へもしない。それで米國は歐羅巴を恐れる必要がなかつた。殊に英國は其領土が世界に散在して甚だ薄弱な帝國で、それを防ぐために大海軍を持つた譯であるが、それが米國を脅かすに足らなかつた。米國が百年以上モンロー主義を主張して無事に經過したのは、大西洋（アトランチックオーシャン）ありて歐羅巴と米國の間に大なる溝渠を作つた事と、その大西洋に英國の强大なる海軍ありて歐洲列國を牽制し、米國を保護して呉れるかたちになつて居たからである。獨立戰爭以來米國人と英國人とは常に感情に於て融和せず、米西戰爭に至るまで米國人は英國人を嫌忌し、英國人は米國人を輕蔑して居たけれども、實際に於て米國は英國海軍に依つて保護されて居たのである。元來モンロー主義は國際上の原則でもなければ、十九世紀の間は歐洲諸國に依つて承認されて居なかつたから有效なものではなかつた。けれども大西洋と英國の海軍とは英國の殖民地を保護する計りでなく、米國を保護する結果となつたので、猶ほ米國としては陸にも海にも軍備を擴張する必要もなく、且つ外交上簡便政策を執る必

要もなかつた。米國は内部の開發と國内の需要を充たすだけの工業を奬勵する事で滿足であつた。然るに米西戰爭の結果は米國を國際的國たらしめ、自然列國の忌憚する所となつた。米西戰爭の際も、歐洲諸國は、英國を除いて、西班牙に同情して干渉を試みんとする傾向もあつたが、英國の反對と、英國の海軍とが米國を保護する結果となつたので、爾來英米の親善が成立した。米國は南阿戰爭に際して好意の中立をなし、英國の同情に酬ゐた。英米親善は米西戰爭以來新らしき外交上の事實である。而して此度の歐洲大戰は、米國をして最も世界に重きをなさしめるに至つた。米西戰爭で國際上の強國となりし米國は歐洲大戰に依りて事實上世界第一の強國となつた。其強國と云ふは、軍備に於て強いといふ意味でなく、軍備以上の大強國といふ意味で即ち地理上の大強國、經濟上の大強國、又た民族上の大強國、而して必要に應じて軍事上の大強國たる可能性を持つ意味で世界第一の強國となつた。換言すれば、此度の歐洲大戰は敵味方五分五分の戰爭をなしつゝあつた。米國が參戰する迄は陸に於ては獨逸が連戰連勝、海上に於ては聯合國は航海に惱まされ、何れ勝敗が決まるとも分らなかつたが、米國參戰の後二年にならぬ中に獨逸軍の大敗退となり、形式では米國が歐洲を救ふたと云ふ結果になつたのである。而して國際聯盟は米國參戰の結果として成立した。而も米國の上院が之を批准しなかつたため、國際聯盟は實際に於て殆ど無效に終つて居る。將來米國が國際聯盟に參加するやうになれば、國際聯盟は有效なる世界の外交機關となるかも知れぬ。今日歐洲列國が戰後の國際問題に米國の參加することを歡迎して居るのは、米人の傍若無人なる言論態度に、列國何れも嫌忌の情を催して居るにも拘はらず、米國の經濟的又道德的援助が戰後の歐洲を救濟する最大の要件であるからである。

米國の世界に於ける今日の位置は斯くの如くであるが、今後の米國は更に發展すれば、歐洲に米國の平和を命じ得る位置に在り、又可能性を有つて居るのである。之れは日本として厭やでも應でも眼中に認めなければならぬ事實である。

要するに十九世紀に於ける米國の外交は頗る幼稚なもので、消極的であり、而して實際上の利害關係がなかつたから、米國人の標榜する外交上の主義は人道的であり、其政策は實際宣傳的に止まつてゐたのである。然るに米西戰爭以來、米國の世界に於ける位置が大革命をなしたゝめに、最早米國としても宣傳的人道主義の外交政策を以て滿足する事は出來なくなつた。第一、國内の經濟生活狀態がこゝ二三十年の間に大變化を

なしたゝめに、現在の米國は前世紀の米國とは實質に於て大革命をなしたものと見なければならぬ。前世紀の米國は國內の開發、內地の需要を充すに足る工業を以て滿足したが、今や北部のみならず、米國の南部諸州すら工業地となり、富は世界に冠絕し、古今に卓越せる米國であるから、勢ひ海外に放資し、世界に經濟的大發展をなさねばならぬ必要を生じたのである。前世紀に於て米國は民主共和主義の自由政治を標榜して世界の模範たらん事を期し、各國の亡命者又は移民を歡迎し、所謂人道主義の宣傳を以て米國の特色としたのは實質の國民的精神であつたが、それは未だ世界の國際的事實に接觸せざる時代の國民的精神であつた。其精神は今も殘つて居るのであつて、而して益々之れを世界に有效ならしめんとしつゝあるのである。それと同時に米國の經濟的大勢力は米國の資本を海外に放下し、又米國內に於て製造する貨物を海外に輸出する市場を獲得する必要を生じた。云はゞ米國は一方の手には道德上の帝國主義を標榜し、一方の手には經濟上の帝國主義を實行せんとしつゝあるのである。要するに米國は新世界に歐洲列國又は日本の干渉を許さぬといふ點に於ては同く第十九世紀のモンロー主義を維持し善にも惡にもモンロー主義を徹底せ　めんとして居るが、同時に世界の如何なる地方にあつても、米國の利害が存する以上傍觀はしないといふ外交政策を執つて居る。只その參與すると否とは米國自身の自由意志に一任することの可能なる天與の位置に立つて居るのである。アルメニアの委任統治は歐洲列國が與へんとしたが米國が受けなかつたのである。米國の外交政策は其起源新らしく、而て其將來は無限の希望を持つて居ると云ふ丈けで、未だ具體的の實質を具へて居ないから、今日に於て之れを斷定的に批評する譯には行かぬ。只支那に對しては門戶開放、機會均等が米國の國是で、其主義を妨碍する國は日本たり英國なり、又は何國なるを問はず反對する。而も必しも武力を以てする對外政策ではない。勿論米國の外交政策は最早實行的外交政策の時代に入つて居るが、未だ前世紀の宣傳的外交政策を離脱して居ないから、之れに對應する日本の政策も頗る宣傳的外交政策に出づる必要がある。軍備擴張で米國の外交政策を豫防するは拙劣なる外交政策と云はねばならぬ。但し米國の帝國主義は專ら經濟的帝國主義で發展するから、日本も經濟的帝國主義で行かなければならない。無暗に軍備擴張で資本を浪費する代りに亞細亞及び南米等に於て、米國の門戶開放機會均等主義に對抗し、又米國のモンロー主義を亞細亞に適用し、日本は亞細亞大陸殊に西伯利に於て特殊正當の權利を有することを主張し、又は新世界の各方面殊に南米に於て、日本の經濟的發

展をなし得る準備が必要である。最早劣等なる移民を輸出して殖民地を發展せしむるやうな時代は經過した。此上は日本の有效なる資本を海外に放下し、優等なる製造品を世界の各市場に頒布し、又優等にして世界の歡迎するやうな移民を出すやうにしなければならぬ。玆に吾人として警戒を要するのは、米國の位置に對する正確なる諒解と、世國の經濟的壓迫に對抗し得る準備をなす事が最も急務であると思ふ。移民問題は日本人に取りて頗る不愉快なる問題といふだけで其の内容を分析して見れば雙方に於ける人種的偏見を除く外一として圓滿に解決の出來ぬ難點を見出すことは出來ない。虚心坦懐に問題を取扱へば早晩圓滑に問題を解決することが出來よう。唯だ時間の問題である。近時頻りに日米戰爭の噂があるけれども何の爲めに戰爭するか何の必要あり又何の機會があつて戰爭するか一向譯の分らぬ噂である。天下これほど馬鹿らしき愚論はないのである。

亞米利加對世界問題觀

杉森孝次郎

一八九一年に、荷蘭文人イサ・デ・キャロは、即位後四年目といふ、壯年のウイルヘルム第二世を、犀利の筆さきで縱横に論評し最後に、恰絶な一聯の數行を以てその小品を結んだ。その數行は「他年——その他年のなるべく遲着せんことを神明に祈る也、この熱烈な、接する者をして愉快に感ぜしむる、想像に富贍な、眞摯な、恐らくは英雄的な心魂を有する若か者が、歐羅巴の運命を統宰しつゝその伯林宮城に坐するを見んも知れず——さもなくば、倫敦はホテル・メトロポールに於いて、かれがその追放の手カバンから、悲慘な面影をして普魯西及び獨逸の打ち凹まされたる二重冠を取り出だしつゝあるを見ん」といふのだ。

當年の獨と今日の米とは、共通質も多いが、不共通質はそれ以上に多い。われらは、荷文人の故智を、現在のわれらの米國觀に踏襲することは出來ない。けれども、この小部分としての共通質が、妖麗の如く、幻影の如くに、われらの豫感に投像する。

一九一四年の六月二十八日に、中歐の一隅に突發した一事變は、たしかに世界戰爭の烽火であつた。一九一八年の十一月十一日は、世界大戰劇の初幕の終了だ。第二幕は太平洋なのではないか。人類はまだ生きてゐる。そして依然たる好爭者だ。一爭を爭闘し去るごとに、大規模の爭闘をかれは準備する。生の戰ひよ。眞も、善も、美も、古往今來、價値は戰ひの所產では

ないか。

大戰をなかにはさんで、米國の地位は一變した。一戸變した。歐獨塊土、地に委して、北米の星條旗、天に沖して翩翻たり。宛かもこれ、六王畢りて四海一、蜀山兀として阿房出づといつた圖だ。舊世界の血を吸ひ拔いて、新世界の蛟龍が、その爪牙を長じ、その羽翼を伸ばす順序になつた。そも／＼一六二〇年に、五月花丸に新信の身を泛べ、荒浪の、西洋を打ち越えた一百一人の夫、妻、子の血管には、敬虔魂と共に戰闘心、健闘心と共に支配欲、覇氣が注流してゐた。最近の禁酒令だに、婦女階級の示威現象とのみは固とより見られない。絕對を悅ぶ浪曼主義、英雄主義がその背景を形成してゐる。ただその浪曼主義、英雄主義が、新世界の民の場合に於いては今日までのところでは、量目能率が尙ばれる割合に、質的精粹が閑却されてゐる。

大統領ウィルソンは平凡な人だ。買ひかぶられた英雄だ。しかし、國際聯盟の主唱者としてのかれは、傳統的亞米利加主義の軌跡を歩んだのだ。一見奇矯なる理想主義の十有四條を掲げたのがそれだ。曾て史的評論家エミル・ライヒも言及した通り、亞米利加人は元氣だが、その元氣の質が新開地式だ。植民地式だ。さびがない。恐らくは深みも足りない。門口と玄關が亞米利加の象徵だ。裏口と背戸は、歴史の結晶たるが故に、亞米利加の未得權ではあらうが、既得權ではないのだ。ローズヴェルトとウィルソン氏とでは、性格の對照的相異だが、なほ且つ、亞米利加式理想主義を、一形と、他形に於いて誇示した。

最近共和黨が中央の勢力となつて來たのに、亞米利加式理想主義の一進歩だ。指導的理想主義が流動的理想主義になり、漸くにして國際的理想主義になる兆象だ。正當性は別問題として、現に今、經濟的から實質的に傾いて來た。罪のない亞米利加ではなくなつて來た。平和の天使では無くなつて來た。最初から、世間から假想された通りの、單純なかたちに於いての、平和の天使でなく、實は獨立以來、或ひは新移住以來、亞米利加人は一度たりともなかつたのだ。共和黨が代表する亞米利加は、中南米はいふもおろか、加奈陀をまでも、なるべく早く聯邦に包容せん內心だ。その意氣や、壯にして又た自然當然だ。現に人口に於いて、英國の倍を超え、自然資源において、英國の四倍を優に計量し、財力に於いてさへも、英國に對して、百倍近くの債權者たる昨今の亞米利加だ。英國に對して、これほどの優位を占めてをるといふ事は、佛その他舊世界の各國に對して、現在の亞米利加が、いかなる優勢的位置にゐるかの明瞭なる證明だ。

歐洲は大小幾多の獨立國に分裂してをる。其仲間にさへも、

國交はしば〳〵脅威される。況んや、佛獨間をや、英露間をや、バルカン諸小國間をや。英佛伊に取つての大戰の勝因は、ひとつには、疑ひもなく、ロイド・ジョージ氏その他の功績に屬する「軍令の統一」にあつた。中歐勢は、カイゼルの一人に、また獨逸の一國に、統導されて進退した。しかるに、英佛伊の方は各別行動を執つた。これが全大戰史の過半前期が、中歐勢の勝利を語り、その敵勢の收鈍を語る一因であつた。共和黨・亞米利加に、雄圖大略のマキアヱリ信者が生まれたら、かれは、現在の歐洲列強列弱の、適度に、亞米利加に取つて適度に相鬩牆する狀態の保存及び發展を策するだらう。

歐洲に、たとひそのうちの一國、たへば英國に於いてたりとも、眞に民族自衛、跨世界民の誇りと遺産と希望に開眼した思想家、政治家が現はれたら、かれの學、かれの術は、全歐一國を策するに存するだらう。前揭のライヒも、歐米戰爭を豫言し、その際に、歐洲合衆國が激成されるだらうと觀測した。ただ、ライヒは、たしか、合衆して一團となれる歐洲諸民は、驕奢にして自制するところなき亞米利加の世界的覇心を打ちひしぐに相違ないと期望したかに記憶する。果たして歐洲一國が現實となる時があらうか、あるとしたらいつか、それが出來たら、歐米戰爭に於いて、歐が勝つに相違ないか、この種の問題は、到底架空談に終はる。しかし、歐洲諸民相せめぐ現狀は、遠慮なくば、必らず近憂あらんの古言を、例證する方法だ。

一七七六年七月四日に、獨立の宣言を採用したる十三合州國の議府は、約百五十年を經たる今日、獨立の自由を叫ばず、侵略の自由を、國際聯盟破毀に於いても叫ぶ。自治を與へられた菲南は、頃刻にして寇掠を試み、普佛戰に屈辱せる獨は、近攻遠略の覇將となつて大戰の前夜まで續いた。左傾の流を急にした活泉は、その泉源の無盡に相應して朋潮に氾濫する。氾濫は潮流に代表されず、浸蝕に代表されること久しからんとすれば、人間の道德がその現勢を壞滅する新時期が再到する。目下の亞米利加は、衝動だ、本能だ、想像だ。企圖だ、敢行だ。反省ではない。願望すなはち個個ある希望ではない。加速力が秩序に挑戰するかたちだ、騎虎の勢ひだ、翻つて目下の亞米利加が要するものは理性と、打算と、道德的文化的雌伏及び雄飛だ。經濟的雄飛はすでに開始された。これに道德文化の修飾を附けよ。

新ロシヤと現在の亞米利加と、この兩者が時代の兩極星だ。勞働專制と、資本專制と、大洲地日をこゝ隔てゝも、交通の手段の發達によつて、空間の意義の一變した今日、社會觀の劇爭が、この兩者を軸としてしばらく發展しよう。人間性は、しかしながら、趣一たるが故に歸一する。勞働專制の長短と、資

本專制の長短とが、この兩星の對照の結果として闡明されよう。

曾てバトラー博士も、多少似たかたちに於いて唱へたやうに、合衆國は南北兩米大陸を自治圏とし、歐洲は阿弗利加を合して自治圏を形成し、亞細亞また一大自治區に進達することは、理性の命だ。

亞米利加對世界問題の場合に於いても、私の意見は、亞米利加人も、非亞米利加人も、人格的個性主義信者に改宗する要ある事だ。米日戰の如きは、その發作因を今日にして不聰明の一自覺に移し去る事、世の思想者の必要務だ。

アメリカ魂を理解せよ

一 新歸朝者

アメリカ人のすることは皆アメリカ魂の發現だ。アメリカ魂は大和魂とは大分違つたものだ。双方で理解することが困難な程違つたものだ。アメリカ魂を理解せぬ日本人にアメリカ人のすることが不思議に見えるのは、むしろ當然だ。僕は今與へられた問題の前提として、大和魂とアメリカ魂とを比較して見よう。問題は別、解決する人がゐるだらうから。

日本人が、人に雇はれて働くとする、彼は、その雇主のためには犧牲にならうと云ふ精神を發揮する。

アメリカ人はそうではない、自己の責任をはたせばそれで滿足してゐる。

日本人には忠義と云ふ精神があつて、自己を捨てても、他のために盡さうと云ふ氣を起す。

アメリカ人はそ ではない、お互ひのためならば、協力もしやうだが、自己を捨てては萬事休すからと、自己と云ふものにはなか〳〵執着する。

日本人は、上に、一人を戴いてそれに向つて自己の存在を傾ける。日本人は家に主人と云ふものがあつて、家族はそれに隨つて和してゐる。

アメリカ人は、そうではない。風の吹きまはしがよければ、自分も大統領になれると思つてゐる。家のなかは、夫婦のなかが單位で夫婦あつてのホームである。子供が大きくなつて結婚すれば他の單位を作る。日本のやうに家長にたて籠してはゐ

い。

日本人が、人に雇はれるには、先づ學校の卒業免狀がゐる。實力は二の次ぎだ。然しアメリカでは、實力を先へ見せる。免狀などを見せると却てきらはれる。

日本人が會をこしらへると、會の規約と云ふものを先へ作つて、それに合はない人は除名し、それに適しない事件が起ると、會は、こはれてしまうやうだ。

向ふでは、事件の方を重んじて、會則はどしどし變更する。新らしい人が入會すると、その人の爲にまた新らしい規約を增すやうなこともある。

向ふの裁判所にはジユウリイと云ふものがあつて、罪人を人間として取り扱ふ。日本にはそれがない。法律と云ふものは、一人の爲に曲ぐべからざるものになつてるさうだ。

斯ふ考へてくると、どうも日本人とアメリカ人は合はないらしい。

こちらで向ふを嫌はなければ、向ふでこちらを嫌ふのは無理もない。

＊　＊　＊　＊

日本人の百姓が渡米して百姓をすると、朝は暗いから起きて、晩は暗いまで働く、手元が見えなくなつて止むを得ず家に歸つてくる。

日曜だらうが祭日だらうがそんな事に頓着しない。

向ふの百姓は、時間をきめて働く、少し遲くまでやれば、刈り上げる事のできる仕事があつても、それを、オーバタイムまでして濟まさうとはしない。

他へ對して見つともないから、よさうと云ふやうなありさまだ。

日本の百姓は、未來の目的と云ふものに向つて骨身を惜まず働くが、白人の百姓は、その日その日の生活を樂しんで、かなりに骨身を惜んで働く。

向ふにゐる日本人の商人は、いつでも物を賣り崩して、自分の方へだけ顧客を取らうとして遂にはつぶれてしまふ。

白人の商人は、よく賣れる品物は、諸方の値段と平均を取つて、だんだん賣り上げてゆくらしい。

向ふにゐる日本人の工人は、人より多く物をこしらへて勝とする。然し白人は、決してそんな事をしない。なるたけなら技も手の遲い人を標準にして仕事をしやうとする。

米國軍隊に加はつて出征した日本人は、ちきに、一冒險的氣性を發揮して、ぼかんとやられたさうだ。だが、米國兵に、なるたけ、みんなと一緒におくれないやうに進んで、一緒に敵の

トレンチへ到達したと云ふ話をきいた。

日本人の、野菜を賣りに出る百姓の車は、我れ勝ちに、マアケットへ、先陣をきめ込む。そして第一番の車は、もう野菜を賣り崩してゐる。第三番が元直で、第四番は損になつてしまう。第五番からは棄て賣りである。

その弱點を知つてゐる白人のマアケットでは、第一から第五迄の野菜を少しづゝ買つて賣價のレヴエルをこしらへる。荷物を澤山つけて家へ歸つた日本人の百姓は、お互ひにこぼしてゐる。今日は澤山賣れなかつたと云ひあつてゐる。

アメリカで出來た日本の商店には、そう大きいのはない。尤も私の云つてゐるのは日本から大資本を持つて來た何々組と云ふやうなのは含んでゐない。小さい商店が澤山ある。資本を合して合名組織にすると、すぐ内訌が起つて沒落する。そうしてその商賣は損をしてはゐなかつた。たゞ感情の衝突のために解散したのだそうだ。その感情衝突の原因はと云ふと、お互ひが好意を以て我れ勝ちに働いたためだと云ふ。

白人の小商人が共同すると、その勞働時間をお互ひに制限して、人の分迄は決して手をつけない。デスクの上に事務は山積されてゐても、當事者の來る迄は、棄てゝある。彼等は、人の仕事を手傳ふと云ふことは、その人を侮辱する所以であると考へてゐる。

どうも、日本人の性質は、いつでも、三角形の尖端をねらつてゐる。アメリカ人の性質が、とかく平行線上に力強く座らうとしてゐるのに反してゐる。

斯う考へてくると、どうも日本人とアメリカ人は合はないらしい。

こちらで向ふを排斥しなければ、向ふでこちらを排斥するのは當り前の事だ。

* * * *

日本人の結婚は、男女互ひに運を天に任して結婚をする。凡て偶然の神樣に任してある。その結婚のやり方は、お互ひの外に、何ものかによりすがる目あてを置いての結婚である。またその家の繁榮と云ふやうなものを目的としての結婚で、二人の愛を云ふことにはあまり重きを置いてゐない。

アメリカ人に嫌はれた寫眞結婚なども、歸するところはそこから出てゐる。

ところがアメリカ人の結婚は、全然、男女相互の愛を目的としてゐる。彼等は二人の愛のために、他樣な事は、犧牲に供してしまふ。結婚をするに當つても、互ひによく知りつくして決して第三者の手にゆだねない。膝詰めの談判で結婚をする

日本人が、アメリカ風の自由結婚をきらつたのは、そこにあつたぢやなかつたか。

日本人の愛と云ふものは、云はゞ天の一方にかかつてゐる。私たちの云ふ義理と云ふものも、帰するところは、夫のため國のためと云ふことになる。

然し、アメリカ人の愛と云ふものは、お互ひのハアトのあひだにある。戦争にゆく時にも、我等は我が愛する妻子のために敵が國内に來ないやうに戰ひに行 のだと云つてゐる。ミスタア、ウイルソンの為に戰ふので 無論ない。

私は、大統領リンカアンが、セントルイスへ來たときに、土地の百姓がどろまみれな仕事着のまゝで、停車場へ迎へに來て、大統領と握手をしゐる 畫を見たことがあつた。

また、リンカアンが、ピツツバルクのある建物の階段で、土地の職工とそこに腰かけて話しをしてゐる 畫を見たことがあつた。私はその時、その繪にあつたリンカアンの風采にうたれて、アメリカのデモクラシイと云ふものを おぼろげながら會得したと思つた。

私たちは、楠正成が、湊川で正行と別れる時の繪を、子供の時から見せられて來た。

また、高山彦九郎が、皇居を拜して泣いたと云ふ、その話しも聞かされて來た。

近くは、乃木將軍の殉死の話しも知つてゐる。そうしてそれらの人々の心持ちにも同感の出來る魂を養はれて來てゐる。

だが、大勢の日本人に、なぜ、リンカアンが偉大だと云ふことがわかるだらうか。また大勢の亞米利加人に、我等の誇る忠節と云ふことが呑みこめるだらうか。

若し、それがお互ひに、呑み込めない、とすると、どうもお互ひの折合ひは面倒だ。

こちらで交際しにくいと思はないまでも、向ふで交際しまつぴらだと云ふのは當然のことだ。

* * * * *

私は、大統領ルーズベルトが、桑港へ巡遊して來たのを見た。

子供たちが、屋根の上へあがつて、大聲でダツデーなぞと呼んだり、口笛をふいたり、なかには感きはまつて自分のかぶつてゐる帽子をなげつけたりするところを見た。

大統領が、それに對して、歯をむき出して、手をあげて、笑ひ顔を見せたところを見た。

その時に、私たちと一緒に れを見てゐた日本人は、あまり悦ばなかつた。

そして、日本の天皇陛下の鹵簿肅々と、行幸あらせられる時の壯觀を語つてゐた。

アメリカの大統領の笑ひ顏が、崇高でないと云つて、彼等は笑つたほどだつた。

また、私は、大統領ウイルソンが、ヴエルサイユの平和會議に出掛ける前に、紐育の子供たちが「ミスタアウイルソン、ゴーイングトウ、フロンス。ミセスウイルソン ゴーイングトウ、チユウ」と云ふ流行唄を唄つてゐたのをきいた。

一日本人が私にその意味をきいたから、私がその説明をした。するとその日本人は、不快な顏をして、アメリカ人のあまり平民的なことを罵つた。

デモクラシイはその文字で解釋するごとくさうわけなく摑めるものではない。

それが摑めないとすると、アメリカ人と云ふものはわからない。わからないと自然、喧嘩もするし、敵視されるやうにもなる。

なにはともあれ、日本は忠と云ふ理想を奉じてゐる國で、アメリカはデモクラシイと云ふ實際を踏んでゐる國だから、日本人が向ふへ行つて、あまりその理想を高調すると、自然、うまくは行かないわけになる。

米國の世界政策構成の主要素

法學博士 吉野作造

亞米利加の對世界的態度については我國に二種の誤解がある。一つは傍若無人に我儘を押通さうとするのが米國流だとする者で、他は米國は今尙はワシントン、リンカーン以來の正義公道を以つて立つ國だとする者、是れである。所謂基督教の先生方などは、其接する宣教師などを通してのみ米國を觀、其最近の社會的經濟的發展の狀態に餘り注意しない所から、動もすれば極端な樂天觀に陷り易い。然るに他の一方には米國最近の態度を皮相的に觀、殊に日本に對する彼等の反感を氣に掛け、且つ吾々同胞をして常に緊張した氣分に在らしめようとする者なども加はつて、此次ぎは米國と衝突するのだなどと論ずるのもある。常に假想敵を有たなければ國民の元氣は作興し得ないなどと考へて居る連中は、得たり賢しと米國の脅威を宣傳し居る。是等の二つの考は共に米國を、少くとも其對外的態度を正當に解したものと云ふ事は出來ない。米國の對外的態度

云ふまでもなく頗る傍若無人である。否然吾々に取つて脅威でないとは云へない。然し又米國を以つて直ちに吾々の敵と視るのも誤りだ。米國には又確かに正義人道の基礎に立國の方針を置かうとする有力なる團體もある。只、是等の思想が實際政治の上に如何に消長するかが問題である。是等の點について予輩の考ふる所を極めて簡單に述べて置かう。

米國の對外的態度が常に世界的である事は昔から著るしい特色である。建國の精神から云つても、世界の虐げられた人々に自由の天地を提供せんと云ふのが趣意であつた。從つて米國には民族といふ觀念が無い。來る者は拒まず、米國に來た者又米國で生れた者は、凡て米國人とするといふ建て前であつた。近頃排日問題の如きが盛んに起つて、之れとは反對の趣を示すやうになつたけれども、之は他の特殊の原因に出るもので、前の原則は依然として渝らない。獨り米國民族の純正を保たんが爲め（否、米國民族なるものが初から存在しない）ではなく、米國の國土に於ける或る理想の實現を傷けられん事を恐れて排日運動をするのだ。よし之れが誤解であるにしろ、兎に角米國といふ土地を或る理想の發現地として、世界の人と俱に樂まうとする根本思想に之れを疑ふ事は出來ない。此點に於いて排日問題を人種問題だなぞと說くのは極めて淺薄な考へである。此事は現に屢々本誌上でも述べた事もあるし、又餘談に亘るから今は是れ以上說かない。何れにしても米國建國の趣旨は世界の人々の爲に米國を經營するのだといふ理想を取つて居り、而して此精神は今日に於いて尙ほ有力に活いて居る事は疑を容れない。

從つて米國人のやる事は何をやつても着眼が世界的だ。今日公私兩面を通じて凡ゆる世界的運動を列擧して見たなら、恐らく其大半は米國に發端すると云ふてよからう。是等の點も一々詳證を擧げる煩累を避ける。斯くして彼等は又自ら世界の問題を自分の問題とする氣分になる事も當然だ。此態度は今度の戰爭並に講和會議に對する米國の關係を考へて見れば能く分る。要するに米國は本來何事を考へるにも世界的に思索し又判斷する。他の國にも斯ういふ態度は見られないではないが、米國程著るしいものは無い。米國の對外的態度を觀察するに方つて、先づ此事を念頭に置く必要がある。

斯う云ふと人或はモンロー主義は何うかと質す者があらう。モンロー主義の當初の精神は歐羅巴大陸の事には特に關係しないから、米大陸の事には歐洲諸國から干涉して貰ひたくないと云ふに在る。一種の門戶閉鎖主義である。問題を一地方に局限するといふ態度である。之は確かに世界的な考へ方と相容る

ものではない。之が米國外交の傳統的根本原則たとするなら、之と共世界主義とは如何に調和する事　出來るか。

モンロー主義を其起原について考へて見ると、之は當時歐洲の神聖同盟が米大陸の植民地　干渉して、自由主義の運動を撲滅しようとしたから、之を放任すると米國の理想が傷けらるゝといふ事を大いに恐れたからである。從つて單純に自分の事は自分で處理するからといふ自主獨立の態度を形式的に主張したのでになく、自由といふ理想の實現を少しでも傷けまいといふ內容を有つて居つたのである。無論モンロー主義は其後全然濫用されないとは云はれない。けれども其當初主張せられた根本觀念から云へば、彼等が最も大事と考へた自由の理想の實現の爲めに已むを得ず唱へたもので、此點に於いては排日問題と同じく、實際の事情に促されて已むを得ず取つた主義なのである。唯斯う云ふ主義は一度び實際の社會に關ると根本の理想から切離して形式的に又部分的に固執せらるゝ事はある。或る疾を癒す爲めにコカインを注射する事が度々重なると、遂に其疾が癒つた後までも其注射を續けねばならぬやう　狀態になるのと同樣である。根本の理想に對する執着が弱いと、遂に是等の形式的な部分的な原則によつて過まらるゝが、有難い米國の根本精神たる世界主義は常にモンロー主義と闘つて、必要以外に此主義の跋扈を許さない。現に今度の戰爭に米國の參加したのは、明白にモンロー主義の要求に從つたものではない。實際の政界に於いては、何處の國でも、いろ〳〵矛盾した主義が雜然と行はるゝ事が免かれない。短い時期を限つて見れば、其間には矛盾もあれば混亂もある。只吾々は其間に何れの主義が正系であり、何れの主義が傍系であるかを區別して、結局に於いて強く米國を率ゐる思想の何たるかをはつきりと見定める事が必要だ。此點に於いて予輩にモンロー主義は漸次世界主義によつて洗練せられて行くものと信じて疑はない。而して此事はモンロー主義の歷史から觀ても斷定は出來ると思ふ。

更にも一つ考へねばならぬ事は、最近米國に於ける所謂ナシヨナリズムの勃興である。獨自一個の見を主張し國際聯盟の加盟を拒んで居る態度などを見て、米國はもはや世界的精神を捨てたと說くものがある。然し予の觀る所に據れば、之も亦大いなる誤りだ。所謂ナショナリズムといふ考へ方には二つの種類がある事を注意せねばならぬ。一つは偏狹なる我意を主張するもので、初めから毫も他と共同する考を缺くものである。米國の國民主義は少くとも此種類に屬するものではない。第二は自國民族の世界文運の進步に於ける使命の自覺から、自家の見識の世界に敬重せられん事を要求し、之が爲めに少しも他に讓歩せざ

事を背ぜざる態度を云ふ事がある。戦前の獨逸は確かに此主義を極端に押通したものと云へる。米國に斯かる考へが無いとは云へない。けれども米國に於ける最近のナショナリズムの考は、之れとも亦少しく趣が違ふやうだ。茲處に於いて第三種のナショナリズムを考へなければならない。それは共同の問題は共同して定める。之が爲めに必要とあれば犠牲も拂ふ。戦前の獨逸のやうに強いて自我を主張しない。けれども共同に多數決で定めた事だから其儘之に盲從するといふ事はしない。何うせ同じ結果になるにしても、いよ／＼斯うすると云ふには、やはり最後の決定を自分でする事にしたいと云ふのである。米國の最近の態度は即ち此處に在るやうだ。例へば國際聯盟規約第十條に關する議論を見ても、歐洲に事變が起つた時、飽くまで出兵を拒むと云ふのではない。必要あらば出兵もする。けれども理事會が定めたからとて出兵の義務を生ずるのは困る。出兵の必要及び其範圍は皆で相談して定めた理事會が之を指定する、それは宜しい。けれども確實に出兵の義務を負ふのは、米國の議會で之を議定した上の事にしたいと云ふのである。國際聯盟に對する米國の態度も究極する所此點に在ると觀ている。而して米國は何故に斯う云ふ態度を固く執つて動かないかと云ふに、畢竟歐洲諸國の國際的思想に疑を抱いて居るからであらう。英佛諸國が眞に國際平和の進捗に誠意ありや、或は國際平和の名の下に聯盟を利用して自國の利益を圖らんとするのであるまいか。此疑惑には予輩も多少の根據ありと信ずる。然らばうつかり理事會の決議にも盲從し得ないではないか。本當の國際平和の精神に忠實であればある丈け、自家獨立の見識を固執せんとするに至るは當然である。斯う云ふ所から米國の昨今の國民主義は、其世界主義の本當の實現を冀ふ所から起つたと云つてよい。米國が斯ういふ態度を執つて居る結果、如何に英佛諸國の我儘を牽制して居るかは、對獨賠償問題やシレジア問題などにも顯はれて居るではないか。

之を要するに米國の對外態度の世界的なるは、昨今殊に鮮明を極めて居る。ウイルソン時代に於いてもさうであつたが、ハーディングの時代になつて更に一層露骨になつた。無遠慮の誹は免かれない。けれども其情實に拘泥せざる點に於いて、正々堂々の態度を多とせざるを得ぬ。日本は或る意味に於いて表向き米國と反對の立場に立つて居るやうに見えるので、動もすれば之を-觀-得ざるの嫌ひはあるが、少しく冷靜に觀察すれば、恐らく何人も此點については予輩の觀察を疑ふものは無からうと思ふ。

世間には能く世界的といふ事と正しい事とを混同するものがある。（尤も世界的だと云ふ事を感情的に嫌ふ者もあるけれども。）然し世界的だと云ふ事は唯其態度を云ふので、世界的に振廻すところの物の善悪はまるで別な、所謂內容の問題である。戰前の獨逸は其侵略的軍國主義を以つて世界的に跳梁した。米國の對外策の世界的なるは此意味に於いて怜むべきものなるか何うか、彼は如何なる內容を其世界政策の中に盛るのか、此點を更に考へて見る必要がある。

米國の世界政策の內容を構成するに與つて力ある要素は、大體に於いて三つあると云つていゝ。假りに予は之を名稱けて有識階級、實業家及び勞働者と云つて置く。甚だ漠然たる區別であるが、是等のものが中堅となつて代表する三つの階級に米國の社會を分ける事は、決して不當な見方ではない。

第一の有識階級は政治家、學者、論客等所謂社會の指導階級に屬するもので、米國の內外に對する輿論を作るに最も有力なる階級である。是等の階級の政治理想の根本が何處に在るかと云へば、卽ち建國以來のピューリタン的人道主義に在る事は疑ないと信ずる。細目の點に於いて、無論いろ〳〵の差違はある。けれども近くはウイルソンにしろハーディングにしろ、又は少しく遡つてマッキンレーやルーズベルトやタフトにしろ、彼等の根本思想が遠くワシントンやリンカーンと大いに相交渉するものあり、之を一貫する大理想の橫溢するものゝ看取するに難くない。此思想が實に米國をして大ならしめたもので、又此思想の勢力が衰へざる限り米國は永く世　に其大を誇ん事が出來る。實際問題を通じて目前の米國を觀るに方つて、吾々は常に此勢力が當該問題の取扱ひの上に如何に活いて居るかを愼重に見なければならない。

第二に實業家の勢力はまだなか〳〵米國に於いては有力である。彼等も米國的教養を受けたものである丈け、個人としては第一種の人々と甚だしく理想を異にするものではない。けれども其資本家企業家といふ立場から、知らずして所謂資本主義的利害の打算に囚へられる。若し米國に昨今甚だしく侵略的色彩ある其政策の上に表はすものがあるとすれば、それは疑も無く此勢力の影響であると云はなければならない。此勢力が國內に於いて最も大いなる禍を釀したのはトラストであつた。米國の有識階級が如何に其壓倒の爲めに苦心したか分らない。對外的方面で最近最も多く識者を悩まし　ものは墨西哥問題であらう。資本家の利害を暫く計算の外に置く事が出來たならば、米墨の國交はあれ程紛糾せずに濟んだらうと思ふ。一旦反感を有すると國民は只徒らに昂奮して互に罵り合ふのであるけれども、其根本の所は資本家の利害の打算に誤られた事が多い。此點に於いて米墨の關係は又日支兩國の關係に似て居る。何處の國でも資本主義の跋扈する所は常に侵略主義の橫行する所で、米國なども

對外政策が段々變り初めたのは、丁度資本主義の發達と作つて居るのである。米國の人道主義も怪しくなつたとか、傍若無人に利己的政策を以つて突進するとかいふ說は、實に全然根據が無いのではない。加之、時として此第二の勢力が第一の勢力を併吞して、最も露骨に侵略的政策を振廻した事すらある。

併し乍ら最近の米國政界を見ると、一方には有識階級にして實業家階級と結托する者もあれば、又他方には之を非として兩者の連合を斷ち、否、資本家的勢力の抑壓を目的として奮起したものもないではない。實を云ふと最近の政界は此二つの勢力が相交替して政界を支配したと見てもいゝ。多くの國が有識階級と資本家階級との結托によつてます〳〵禍を深くしつゝある際に、兎も角も最も資本主義の盛んな米國に於いて之が粉碎を期する勢力の奮起を見るのは、先づ〳〵賴母しい方だと云はなければならない。

次ぎに第三に勞働階級の勢力が昨今段々勃興しつゝある事を注意する必要がある。米國以外の國に於いては資本家階級が餘りに有識階級を併吞して禍を深くしつゝある所から、勞働階級の之に對する反感を不當に刺戟して、今や階級鬪爭を激成しつゝある。此形勢は昨今米國にも及んで居る事は、夫のI・W・Wの盛んなるに見ても分る。唯併し乍ら米國に於ては、人少くして而かも富源は盡くる所を知らず、勞働者の境遇は、資本家との比較の問題を別にすれば、先づ頗る幸福だと云はなければならない。そこで全體として勞働者は歐羅巴大陸と同じやうな意味に階級的自覺を遂げて居ない。此點に於いて米國の勞働運動は一種特別のものである。從つて勞働者といふ獨特の影響を實際政界の上に何れ丈け及ぼすかといふ點になると甚だ心細い。彼等が階級的に自覺すると、動もすれば矯激に流れる。着實な態度で實際に重きを置かれるやうになるといふ考が資本家的に墮する。けれども漸次彼等の勢力は認められて來た。而して彼等は實業家階級とは政治上の意見に於て反對の立場に在るから、彼等が段々勢力を得るといふ事は、有識階級と資本家との結托に對しても有力なる對抗要素になる。此意味に於いて米國に於ける勞働運動の將來は大いに注目に値するものと思ふ。

之を要するに米國の政界の實際の方向は、資本家と政治家との結托と、並に之を非なりとする理想主義的政治家の一群との勢力の兼ね合ひによつて定まる。實際上から云へば、甲が勝ち或は乙が勝つといふ變動はあるが、大體に於いて米國の態度の歸する所は、此兩勢力の今後に於ける消長如何によつて定まる。而して此兩勢力の消長の上に多大の關係を有するものは、即ち勞働運動の將來である。予は結局に於いて第一と第三の勢力が相結んで遂に第二の勢力を抑へるやうになるのが、大勢の歸する所だと信ずるが、唯第二の勢力が之に處して如何なる道を取るかは今より豫言は出來ない。只差當りの問題としては人道主義的政治思想もなか〳〵有力ではあるが、資本家の勢力も亦隱然重きをなして居る事實を看過す事は出來ない。

醫學博士　ドクトル

羽太銳治氏著

婦人性の研究

四版

定價二圓
郵稅八錢
四六判
裝釘瀟洒

渾沌たりし婦人性の問題は本書に依り始めて釋然たり

本書は社會問題、思想問題及び心理學、倫理學、生理學、病理學一切の方面より、特に女性を赤裸々に解剖したるもの。先づ歐米諸大家の女性觀を述べ、醫學上より婦人の體質、生殖器の構造と其作用、及び婦人性慾の心理を說き、結婚を論じ、姙娠、分娩の狀態及び婦人病の手當法を敎へ、最後に婦人特殊の犯罪を擧げて賣淫論に及ぶ。何人も一讀再讀すべき良書。

—本書を讀むべき人々—

(一)思想家は　婦人問題研究の爲
(二)敎育家は　兒童敎育方針の爲
(三)父兄は　家庭敎育參考の爲
(四)經世家は　社會政策資料の爲
(五)刑法家は　婦人犯罪研究の爲
(六)未婚者は　童貞貞操保持の爲
(七)夫婦は　家庭圓滿和合の爲
(八)婦人病者は　其の疾病治療の爲
(九)姙婦は　其の出産準備の爲
(十)一般婦人は　社會的覺醒の爲

內容大略

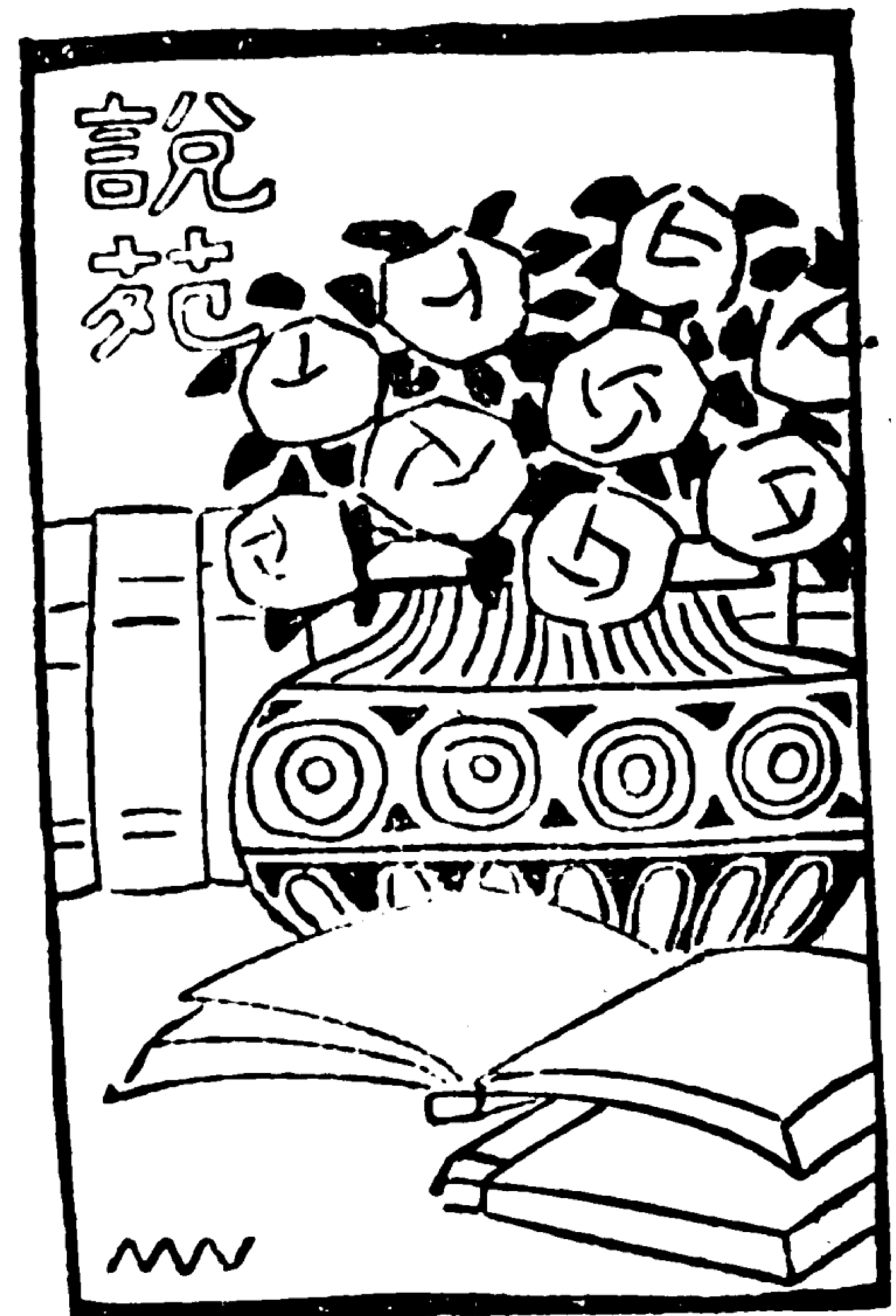
ウオードの說：ショッペンハウエルの女性觀：婦人の性的特徵と其精神的能力：婦人の生涯：月經：結婚：姙娠：分娩：婦人の罹病率：婦人病：婦人の性慾：婦人と犯罪：賣淫論

□一般性慾學　十五版
醫學博士　羽太銳治氏著
二圓八十錢　郵稅十二錢　菊判

□性慾と近代思潮　六版
醫學博士　羽太銳治氏著
二圓　郵稅六錢　四六判

□性慾研究と精神分析學　十五版
醫學博士　榊保三郎氏著
二圓　郵稅十二錢　菊判

東京南紺屋町　實業之日本社　振替東京三二六番



水郷舟遊と高山跋渉

小杉未醒文
森田恒友畫

水國雜信

出船

高瀬船は帆をあげて大利根を遡る。恒友君は胴の間に、予は舳に立つて居る。送つて來た太田君主従は、艫の方に居て、繋いで曳いた小さい持船が、ともすれば波を喰ひさうになるのを見つめて居る。予の頭上には、三角の青い小旗が翻る。十日ほど水郷の間に、船住居して見やうと云ふ、恒友君との先月からの企てが、今日から實現されたのである。高瀬船は此の邊に數が多いから、上陸して船に歸るなどの場合の目印しに、小旗を妹に染めさせた。何か絞りませうと云ふから、フト風と云ふ字を書いて白く絞らせた。船住居に風と云ふのはチト縁起が善くない、と云ふ説が出たが、船に風がなくては動くまいと與排した。その縁起がよくないことが、忽ち我等の出鼻を挫いた。見よ、太田君と船頭の親子とが、艫の方に立ち騒ぐ、高瀬の艀と太田君の小でんまとが一度に波を喰つて、艀は水船、小でんまは腹を出してしまつた。捲いた帆が流れる、板子が流れる、七

輪も茶碗も沈んだらう。親爺は倅を叱咤して、大帆を卸す。高瀬の脚が留まつて、水船の水を掻い出し、腹を出した小でんまを淺瀬に曳いて、えんやえんやと引き起す、かくて高瀬が再び帆を揚げ、洲の上に板子を集める太田君の船子の姿や、棒杭の上に突立つて、帽打振つて挨拶して居る太田君の形が、次第次第に小さくなり、舵が一つ曲つて、全く見えなくなつたと思ふまもなく、親爺と倅は復たも帆を下し碇を入れた。暮れるまでには浪逆の浦までと云つた豫定は、どうしたのだ。いや此の風で、荻原の角が廻れません、荷が輕いから、淺瀬に持つて行かれる、船底が泥について、此の波に夜中叩かれたら、朝までには船が羽子板になつて仕舞ひます、と親爺が云つたが、實は先刻の騷ぎで、船夫の常として緣起を擔いだものらしい。半日の行程三里に滿たでは、此の先きも思ひやられて快くないが、扨て致し方もない。胴の間を二人で整理して、板子の上に蓆を敷き、荷を片寄せて、火鉢に火を起し、味噌汁と飯とを倅に云ひ付けた。お袋もせいじの裡に居るには居るが、是は先刻の騷動にも、曾つて顏も出さぬほどの强の者で、只肥つた體を持てあつかひ、親爺と倅を使ひ廻すだけの大夫人でおはす。日は漸く落ちかゝり、河口に近い大利根の川幅廣く、枯蘆茫々たる間に、時々鴨の或は群れ、或は孤り飛ぶが見える。太田君のいは如何なつたか、多分船を岸邊に捨てゝ、歩行して六日村に歸つたらう。彼は予の狩の友、先祖は二百年前に江戸の七[illegible]を脫して、所從を連れて太田村を開いたと云ふ、其の小モーゼは何に憤つて裃を脫したか、何に感じて江戸の紛華を雁鳩水鄕の江天快活に見替えたか。寂びしさも思はれる、羨ましくも思はれる。今の何代目かの小旦那は好漢愛すべし、村の者は昔四十軒あつたのが二十軒になつた。四十軒の頃の先祖のうち、思ひ切つた人が出て、小作であつたのへ悉く地面を分與してしまつた。此の農奴開放は或は子孫の爲にも善かつたかも知れない。今以て彼の家は村の宗主である、昨夜は彼の家で村の者の囃子を聽かされた。雛の節分で、連中が閑でもあつたらうが、一令の下に村內のオーケストラが集まつて來たのも愉快であつた。その囃子の事も書いて置かう。胴の間の百目蠟燭の下から、恒友君が、酒が溫まつたと呼びかける。空は全く暮れた。明日は潮來まで行けやうか。

平馬鹿早馬鹿

今夜は村の音樂を聞かせませう、と英男君が云つたので、酒を早く切り上げて待つて居た。去年の初冬此太田村に來て、石油發動船を雇つて、一日大利根を狩り廻つた時の事、晝食の材

料を仕入れに、松岸に船を着けた。冬日春の如く暖かに、三階造りの妓樓の屋根には、陽炎も立つばかり、開け放つた樓の上には眠げな目をした女共も出て川を見て居た。名物の下總豚の甘脆に舌鼓打ち小女が運んで來た、臺の物なりのすしの大皿も、胴の間に半すぎて平らげられた頃、忽然として川上の方から、蘆間がくれに物の音が起つて來た。大鼓笛、鼓のしらべ、陽氣に野趣を帶びて次第次第に近づく。やがて蘆場を出はづれて、二艘の川船を横に並べた上の、オーケストラが現はれる。笛太鼓の音、浦曲に響き亘り、笛吹きは頬の裂くるほど、太鼓打ちは兩手に天をも打つばかり、向ひ岸の赤松も、水中の河童蟲も、船上の旗幟も、見て居る我等も、共に立つて舞ひ躍つて跳ねさうな囃子である。旗幟の字に依れば、新兵何某の入營を送るとしてあつた。我等とても、此の囃子の如くに送られ、此囃子の如くに調練し、此の囃子の如くに戰ふならば、舞ひ躍り跳ねて砲火に死ぬを喜ぶでもあらう。此事を云ひ出して、も一度彼の陽氣な音樂を聞きたい、と獨り言したので英男君が我等への御馳走に一黨を召集したのであらう。日は既に暮れて三日月もいつしかに宵暗となり、幾十年の煤に光る臺所の焚火を圍んで人影動き、坐敷には佛壇の蠟燭、雛壇にも蠟燭、古い雛の衣裳おぼろげに照り、話も途絶え勝ちになつた頃、門の外田圃の方から、太鼓の音が近づいた。やがて人音庭に入り、緣側に物置き囁き合ひ德利の酒の廻る氣配もする。障子の硝子から覗いて見ると、提灯の字には青年統一團としてある。信州の農民は人毎に物を知り理に強く、片端から村會議員であり國會議員であり得る。越後は大農小農今も猶昔の如く、大農は君主であり親分であり、小農は家來であり子分である、境を接しながら、兩國の農民の時代は幾十年かの差違を示す、山本君は露西亞から農民藝術の種を持つて來て、是を信州に播いた。若し是を越後に播いたなら、大分又色彩の違つたものともなつたであらう。此處の農民はいづれに屬するか、提灯の題字から察するに、どうも越後系らしい、かゝればこそ此家の若大將が、專制的善政を布き得るでもあらう。オーケストラの御家來衆は、東京の客が聽き手と知つて、はにかんで中々太鼓を打ち初めない、一度開いた間の障子を奥さんが閉めて行つてから、臺所より今夜の曲目を廻し、皷の皮を彈ぢき試み出した。

しやんぎり　越中　金丹小櫻　大阪
吾妻　獅子　平馬鹿　早馬鹿

此の他まだ認めてあつた、通計二百。八十種ばかりは此の連中の手に入つて居ると云ふ。いやあ、と一聲して大太鼓が鳴る、笛が鳴る、大太鼓は庭の中に笛は二つ緣側に、太皷、皷が三つ、



太　田　濱

大皷が二つ、此外に三味線も入るのだが、今夜は三味線は弾きは夜釣りに行つて留守だと云ふ。すり鉦が一つ、大かはを打つには、竹の箆の尖を細かく割つて、紙やうの物を編みつけたもの「此邊の者は、大かはは竹べらで打つものとしか知りません」皷を打つには、左の手を右の肩にかへさず、左の肱から肩の下にかけて打つ、「彼れは、普通に打つたのでは掌がうまくかゝりません、百姓の手の皮は堅いから」吾妻と云ふのは、しんみりとして寂びしいものであつた。金丹小櫻は題の如くにも艶麗であつた、早馬鹿平・馬鹿に至つて尤も此の連中の眞骨頭を出す、「矢張り平原と大河との間の產物ですね」と森田君が呟いた、予は耳に音を聞いて、心に川の流れを思つた、流れても流れても盡きぬ水、一つの波二つの波、千の波萬の波、相押し相追つてひたすらに海を指して行く。靜かに、而も喜んで、動いて、而も怠らず、かゝる事をらちもなく思ふ間に、踊れ踊れと英男君の云ふまゝに、五十男が紺の絞り女の單衣を、股引の上に着て庭の中に踊り出した、「左治平です」せえい、せえい、あせえい、と合の手に諸聲に調子を合せる、踊りに踊る、此處は天明かに日暖かい松岸の川の上ではない。故に彼の時の如き廓然とした陽氣さはない、その代りに一種の凄氣

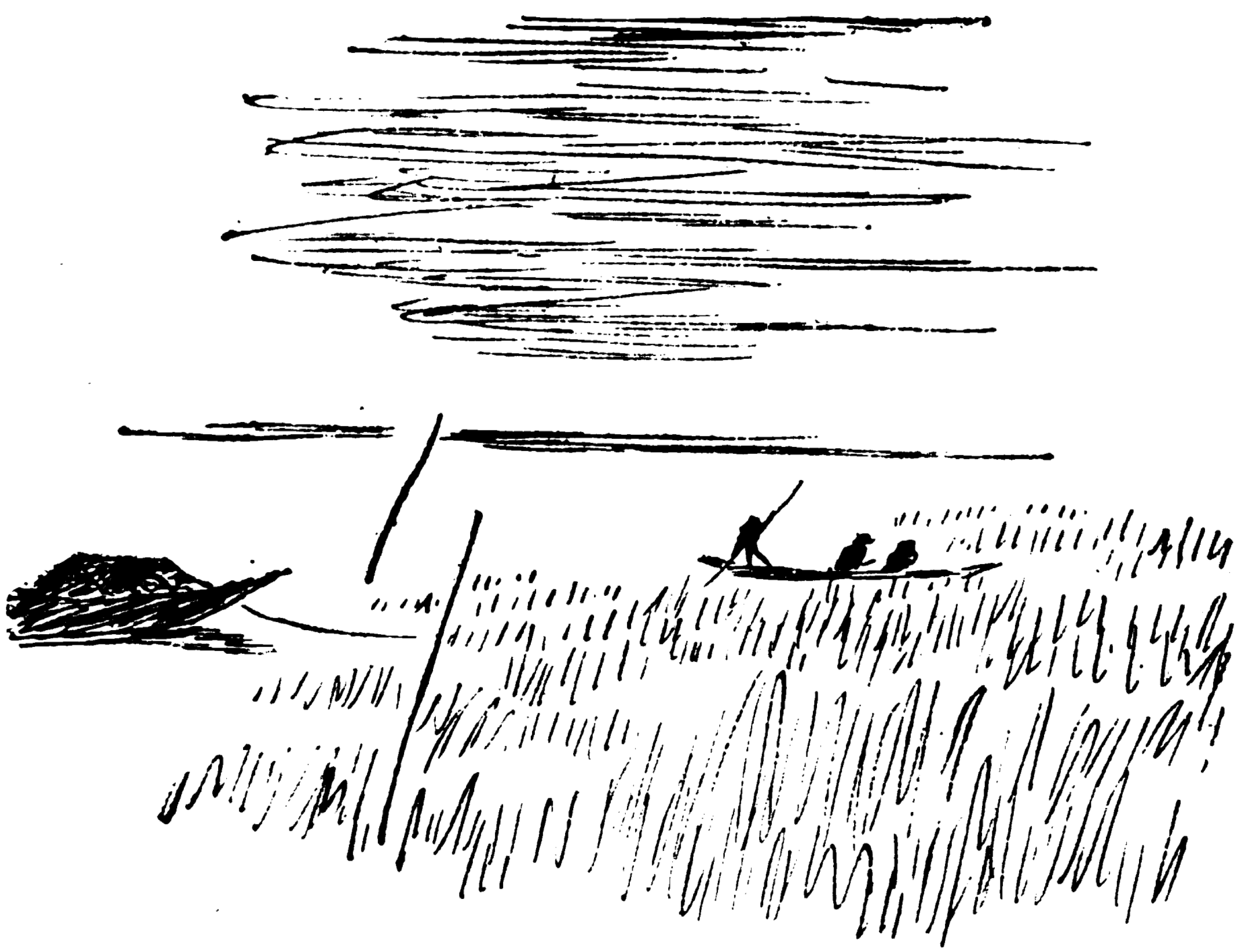


暴風

が漂ふ。見よ背景は眞暗だ。人々の姿は其處に石油ランプの光に朦朧と浮き出す。踊りに踊る、踊り手の頭の上には星が二つ三つ光って居る。

二度目の船出

昨日高瀨で出た太田の河岸から、我等は復たてんま船に帆を揚げた。ならひと云ふ風の吹きつのるまゝに、船は舳を波に突き込む程奔る、岸の枯蘆も、下総の丘も常陸の松も、皆悉くあとへあとへと退つて行く。今朝、我等は高瀨の胴の間で、頰に當る雨に目を覺ました。船頭親子は頭の上で、頻りに働いて居る、苫を葺くと云ふのだ。苫はよくが、帆をあげる様子はない、どうするのだと聞くと、此の雨では帆が濡れ、此風では矢張り萩原の角が難儀だと云ふ。さてさて高瀨と云ふ船は不自由なものだ。いや船頭と云ふものの時間と、我等の時間とは、恐ろしい勘定の相違があるのだ。我等は旅に居る、彼等は家が船だから、つまり家居して居るに過ぎない。二日でも七日でも、何處に碇さうとそれは只我等が東京府下の田端なり乃至は代々木なりに住んで居ると等しい。處で此の天氣は變る見込みがあるのかと、寢ながら聞く。その見込みはありませんと、苫



繫船

の上で答へる。雨は頰を打たなくなつたが、胴の間は苫の爲に再び夜の如く暗くなつた。出て見れば雨横さまに降りしきり、雨の中にはむぐつちよ鳥の鳴く聲ばかり、此の態では半日も一時間も留り兼ねる。二人は荷を始末し、冷飯を喰ひ、伜に艀を出さして、ともかく太田まで歸らうと、向ひの岸へ上陸した。

萩原方面は天然痘猖獗に就き、同方面より來らるゝ人は、此村に立寄ることを遠慮されたし。

と云ふ文句の立て札が、松の間に立ててあつた。縣道の曲り角の處に、蓆圍ひの小屋が出來て居て、三人ばかり農夫の若いのが居たが、我等を見て立出でゝ、萩原方面から來た疱瘡神ではないと確めた上で、帳面に名を記さして放免して呉れた。疱瘡の關所を辛くも出はづれると、鹿嶋の砂原と砂の丘とが限りも知らず續いて居る。砂原の間には田の土もかへされて、蛙が鳴く。雨はいつしか止んで、生暖かい風が少し强くなつた。學校へ通ふ小供が、チヨロチヨロと來ては、ヒヨコリと頭をさげて行く。その内に昨日出た太田村の太田家に歸り着いた。小旦那の英男君がかくと聞いて直ちにてんまの艤裝をした。三人船頭皆逞ましく、一番帆を順風に張つたから、昨日半日の水路を忽ちに過ぎ

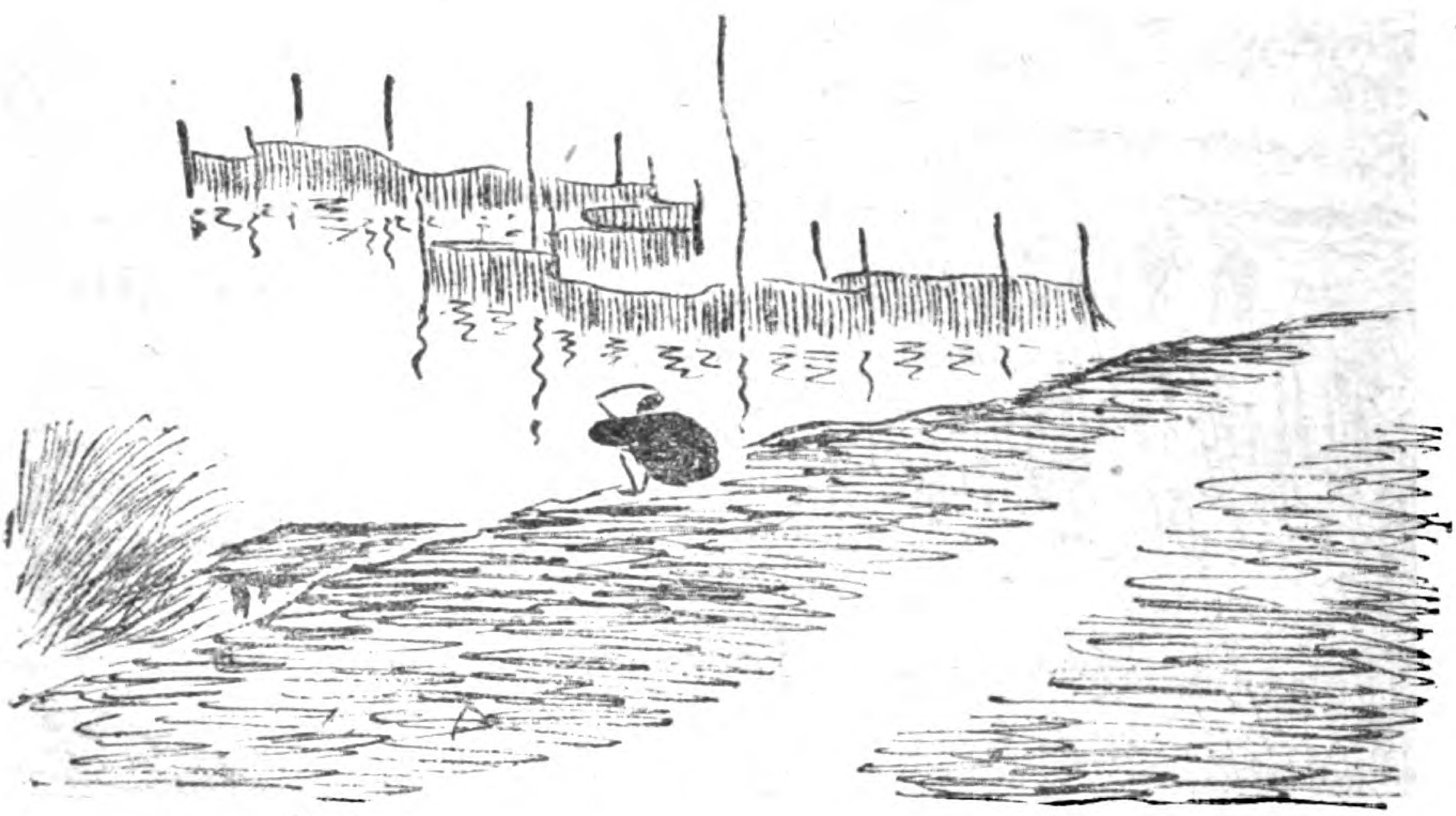


て、今倚蘆の間に苫を被て居る高瀬船に横付けにしたのは、番茶三杯の間であつた。荷を受取つて此の川船の巨人に暇をくれ、萩原の角も難なく廻つて、浪逆(なさか)の浦に日少し傾く頃漕ぎ込つた。右には息栖明神の森、その向ふ遥かに鹿嶋の森、正面の蘆の上遠く、潮來の稲荷山の松、左に香取のコンモリと平たい森影も望まれる。

むぐつちよ

むぐつちよ

むぐつちよと云ふ水鳥、面白い水鳥ではある、「此頃此の鳥が、二十錢に賣れます、寝小便の藥になると云つて。だが、それは只寒中も水の中に居て、冷えさうもない風(ふう)だから、冷え症のものにはいゝだらう、と云ふだけの事でせう」と船頭が話して呉れた。小さい鳥で、枝に留まらしたら鳩位、羽がホンのお印しほどで、背黒褐色、腹が白茶故、ペンギン鳥に似た處もある。それでも水を擦つて、飛ぶことは飛ぶ、予はまだ彼の五尺以上高く飛んだことを見ない。鐵砲を持つて船で行けば、鴨の奴は利口者で、遠くからハラハラと立つ、殘つた鴨かと見れば、むぐつちよ鳥である、禁鳥ではあり、撃つても食膳に上らぬから、彼等は昔も今も眞菰(まこも)と蘆の間に天命を樂しんで居る。ヒヨロヒヨロ、ヒヨ



菅

ロと鳴く聲は、又なく寂びしい。飛べば二三十間、若しつぶりとむぐつて、割合に大きな水搔きで、水の間を潜れば、二丁も先の思いもよらず遠きに、ヒヨコリと出る。

ぶんぬけ

芝宿の宿屋に、大觀君と白嶺君とが一晩泊りで遊びに來た。あくる朝船二艘を雇つて、一艘は釣の船、一艘は鐵砲と寫生の船、鴨にも會はず暖かい春の與太浦に浮んで、釣の方の船は何處へ行つたらう、と船頭に問へば、ぶんぬけに行つたんべえと云ふ。ぶんぬけとは何だと問へば、來る日も來る日も雨ばかりで大利根の水は次第に增す、十六嶋を圍んだ幾里の長堤は、內と外とに數尺の差ある水面を隔てゝ、危く持ち耐えて居る。其時堤を見廻りの人が、ふと內側の田の中に、フツフツと水の湧き出すのを見出す。顏の色が颯と變る。卽ちぶんぬけである。堤の外の水が、何かの間隙を傳はつて、土鼠の穴ほどの道を內側に求めた。見て居るうち土鼠の穴が大蛇の穴になつて、大利根の水倒まに衝き入るや、堤がドツと切れて、十六嶋は樹の梢と家の屋根ばかりになるであらう。その穴の通つた處、深く堀れて長く埋まらず、沼に殘つて鮒と鯉との棲處となる。



〰〰 ぶんぬけの釣り 〰〰

十二橋

十二橋を七つ目で、予と恒友君とは船を下つた。大觀君と白嶺君とを剩した、芝宿の飛脚船は、狹まい水路の木の間を洩れる麗日を、チラリ、チラリ、と浴びながら遠ざかつて行く。橋を一つ、又一つ、くゞりくゞつて行く、桃散りかゝり、ぼけの花朱に、柳色づく間に、無花果の枝は、小さい固い白綠の芽を點しつゝ、むくつけく立ち交つて居る。此の木の葉の大いなるが、重なり疊んで、幹も枝も見出しがたくなる頃は、眞夏の靑空熱に燃えて、水さへたま溫くなつた中に、手足細く腹のみ脹れた村の子供等が、小船に戲れ橋から跳ねて芋錢君の河童を思はしむる群をなし、岸に近い小家には銅色の親爺が、高枕してひる寢して居るであらう。今はまだ、親爺も嬶も田の間に忙がはしく、子供等は田螺採り小魚釣りに永日を暮す。その一人である十ばかりの腕白が、手製の竹竿に小魚籠を提げて、予を見て立ち止まつた、「あにを打つだ」予の手には銃があるが腰には鳥の一羽も居ない、「あんでも打つさ」「雀を打つか」「雀は困るな」「百舌を打つか」「百舌もチト困る」「鴨を打つか」「鴨ならば打たんでもない」「此の木には彼の鳥が來る

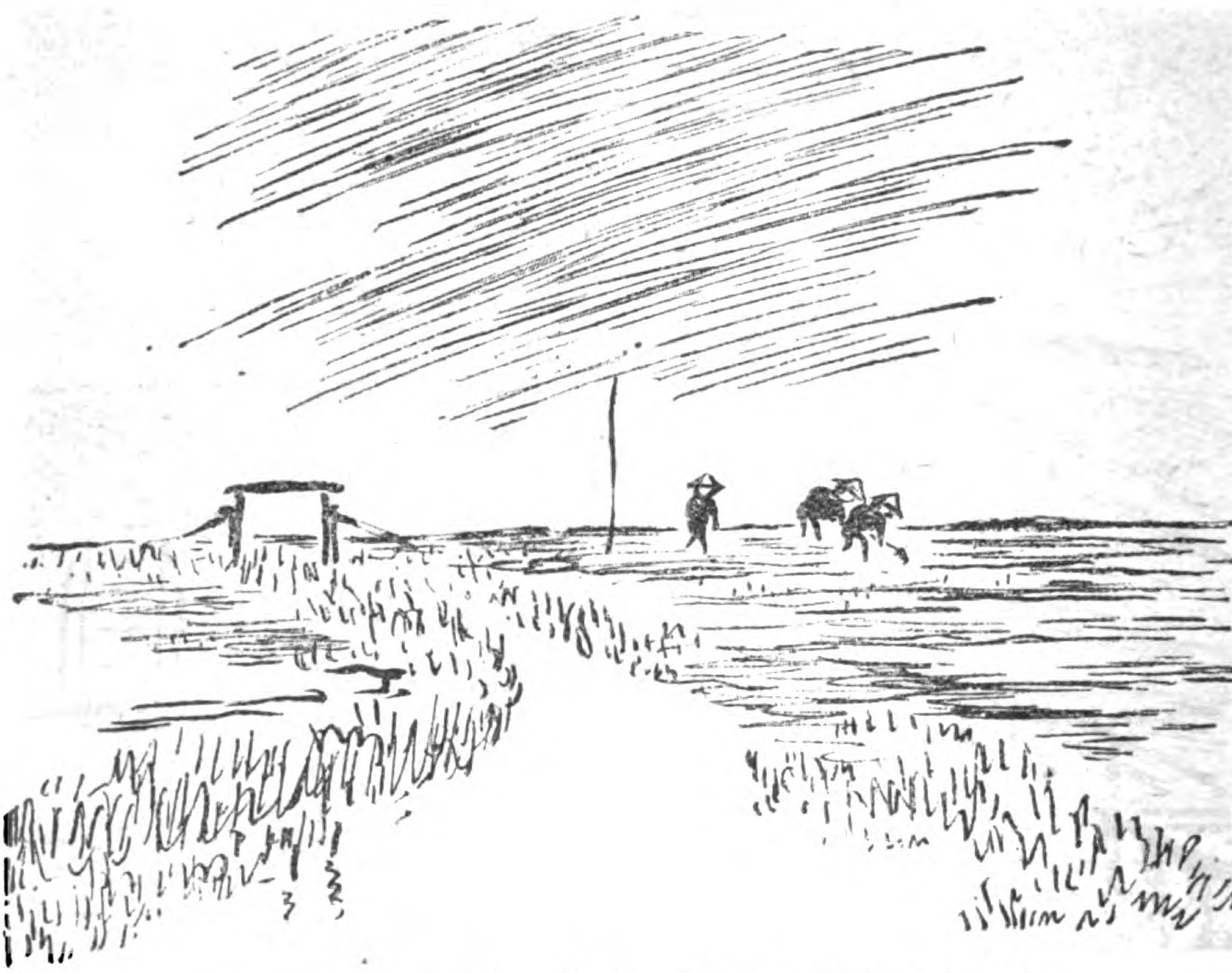


十六島

だ」「此の木で打つたら、おまへのチャンに小言いはれべえ」「彼の森にはあんでも居るだ、狸も居るだ」竹竿の指す處、北利根を隔てゝ田の中に鬱然とした森が見える「彼處(あすこ)に月が出るだ、眞赤な月が暗夜にボーと出て、上つて、ポタリと落ちるだ」「おまへが見たのか」忽然として小童の顏が大きくまん丸になり、赤い口をガツと開いて「俺(おれ)が月だあ」となつたらば、鐵砲打ちタヂタヂでもあらうけれど、然うは行かず、きまりの惡い顏をして「ウムニア、みんなが然う云ふだよ」小童はさつさと向ふへ行く、恒友君と予とは、村屋を隔てゝ運河に沿ふて、十二橋を出外れると、田の間に水路は見えず船も見えず、腰より上の人が前後に身を曲げつゝ動くが見える。大觀君の櫓を漕ぐ船頭であらう、「オヽイ鵜の剝製を頼んだぞう、忘れて吳れるなよう」「オヽイ忘れずに大利根へ捨てゝ行くぞう」白嶺君の聲ばかりする。

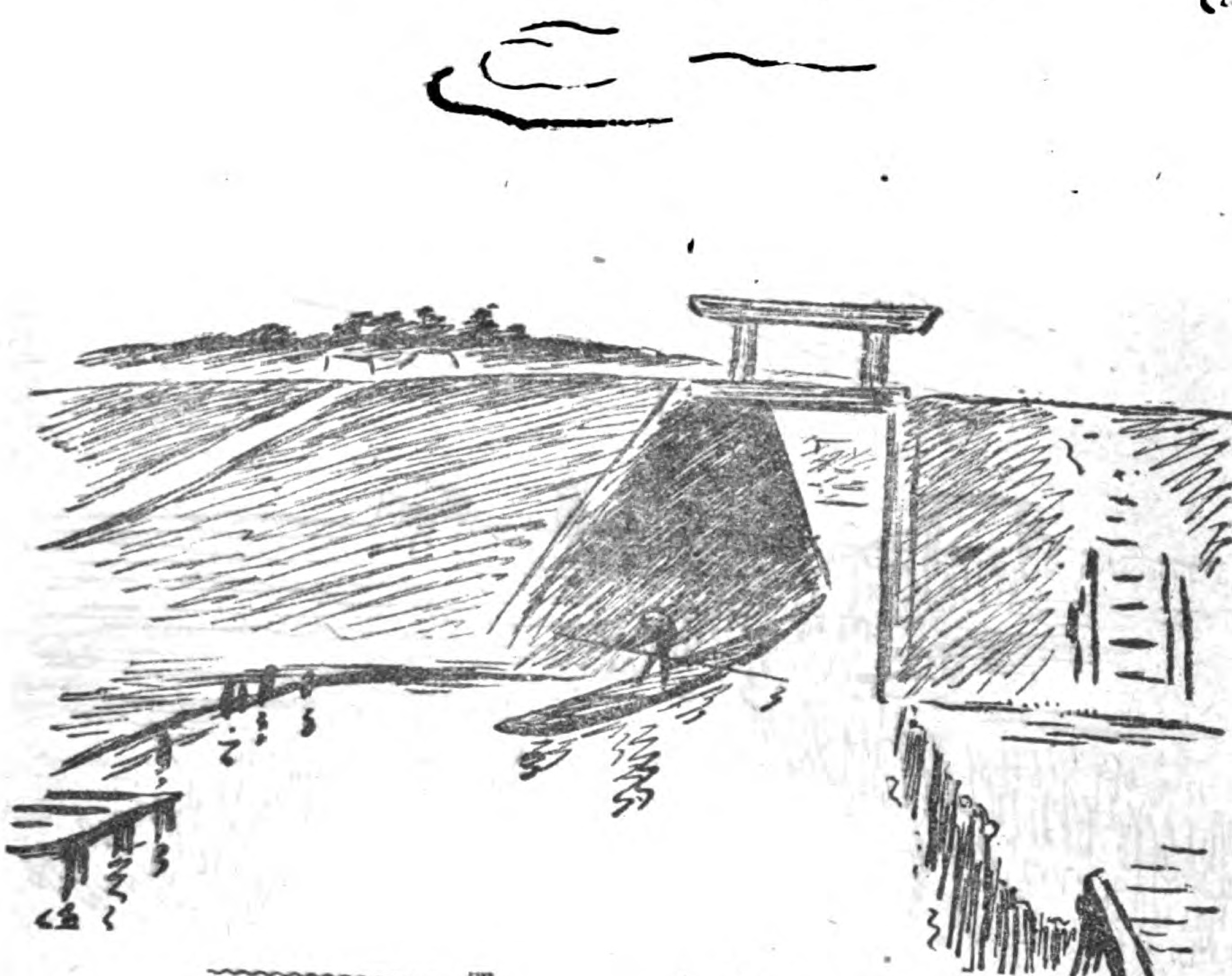
春日欲暮

二人は加藤洲(かとうず)の渡しを渡る、渡守は女、四十餘りの瘠せた中婆さんである、水の上には、サツパ船に一人づゝ、遠く近く江底の泥を搔くが見える、燕子漣を擦つて飛び、日はやうやく西に近い。堤を歩み田を越えて、小橋を渡れば潮來



與太浦ぎし

の色町となる。引手茶屋の二階の欄干には赤い布團が干され、河岸には色町ぶりに柳が垂れる。細い路次を通れば、中庭に木蓮の紫を隔てゝ、女共二三人、夕化粧の諸肌を脱いて居た。後になつた恒友君が、笑ひつゝ來る。「何です」「えゝ化粧をしながらも人を呼びますぜ、寄つてお出と云ひました」色町を抜けると畠に桃咲き李白く、棕櫚の下には菜の花が輝く「稲荷山へ登つた事がありますか、無い、登つて見ませう展望の爲に」山には櫻が咲いて居た。東京の普通の櫻と少し違つて、靑い若葉が白い花と交つた、山櫻の種かと見ゆる優しい櫻である。草に坐して十六嶋を目の下に、香取の森、佐原の甍、下總の村々の煙を望む。春日遅々として漸く暮れんとす。山も水も朧々とかすみ渡つて、斜陽の光も紗一重隔てたやうに、天と地と正に情に耐えざるの時である。丁度此頃、大觀白嶺二君の船が、與太浦に出かかつた。あとで聞いた話であるが、水路の少し廣くなつた邊で、二百艘の小船が鮒を釣つて居る。見て居るまに限りなく釣れるので、二人も頻りに釣りたくなり、船頭を奔らして、近處の農家から釣道具を借り集めて、日の暮れるまで釣りに釣つたと云ふ。



水門

夜のえんま

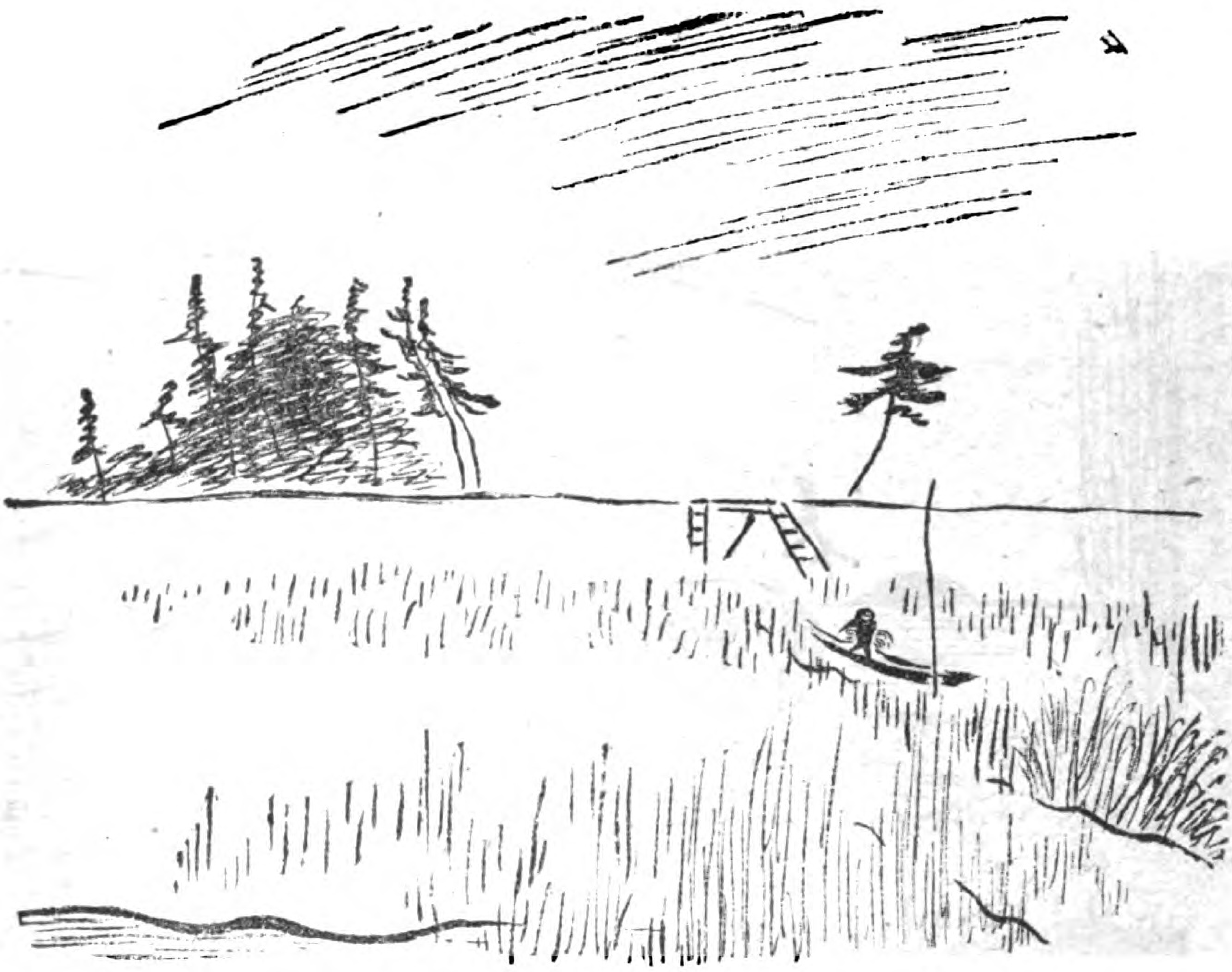
夕方の「えんま」を、てんま船で行くは、輕い車で平らな細路を走るやうに心地よいものである。水路が谷まるかと見て、麥の青い畠に突き當れば、曲つた左なり右なりに、此度は黑く耕やした田の間をまた同じやうな幅で向ふへ延びて居る。或は十字路、或は三叉二尺三尺又は六尺の巾、「えんま」とは如何書くか知らぬ。十六嶋のサツパ船が、泥を乘せ、稻を載せ、或は泣く子を田の中の母の懷へ運ぶ。墓參りにも、親類の婚禮にも、平原の小徑の用をなす、此の水鄉の通路を、えんまと云ふ。モウ蛙の聲が其處此處に、喧しまい程ではなく聞える。地平線を遮つて、夕雲を撫でさうにそよぐ枯蘆の間には、むぐツちよ鳥の聲もする。田の中、畠の上に働いて居た水民は、各其のサツパ船にとり乘つて、何時散るともなく夕靄と炊煙の裏に入つてしまつた。時に日は全く入り果てた。我等の舟もチト急がずばなるまい。森と茅屋と多少の丘陵とが點在する平濶渺茫の間に、西天の餘光は分秒の移るがまゝに消えて行く。與太浦に浮ぶ島影も見えずなる。雲透きにばらばら松の遠いのを牛堀と、杉のむら立ちを、潮來と、コンモリと平たい森を香取と見



浮島

る。杉のむら立ちを右にし、コンモリを左に遠く、ばらばら松を指して行けば、即ち我等の正しい航路であるが、えんまは夕闇になるまゝに、一種の迷路と化してしまつて、或時はばらばら松が背ろになる、其處此處の村家に、小さく點々と灯の影が心細げに光る。彼處に各々暖い汁と飯と、家族の談話とがあるだらう。時には遙かに、潮來の色町と覺ぼしき大鼓の音が聞える。水の底での音の如く又人の云ふ狸の遠囃しの如くにも聞える。我等の船はしばらく彷徨の裡に休息する、水の上を擦らんばかりに、鳩ほどの大いさの鳥が黒い田の土から、暗い畠の中へ、投げられた如くに出で、沒した。夜鷹でせうと船頭が云ふ。沼泥の匂ひが夜氣と共に人を包む。くさめして風引くほどの冷やかさが、チト空いた腹に染みる、グッグッと云ふやうな音が、船の底の邊、又は田の土の中あたりに聞える。蛙でもなささうな。かくて船の上に苫着て一夜明かすとも、さして難儀ではあるまじく思ふ。しかし乍ら牛堀の芝宿の宿屋は、遂其處に近くあるべきである。そこで船頭は再び棹を取つて、ばらばら松を雲透きに透かし見る。

水の香



浮島

牛堀と芝宿は、小川一つ隔てゝ北利根に面して並んで居る。芝宿の清水屋の二階の戸を、朝早く眼覺めて開く、水の香が面を撲つ、水郷特有の匂ひ、霞ケ浦を思ふ毎に此の香が直ぐに心に上る。早稲の香や鹿嶋戻りの小百姓と云ふ句は、十四五年前に芋錢君と此邊に來た時、彼の翁の咏んだ句である。彼の人の句としては、餘り上出來ではなさゝうであるが、是も潮來あたりを思ふ毎に心に上る句である。潮來は一里川下、潮來の宿屋から昔或る朝鹿嶋へ行かうとしたら、宿の年増の女中が二錢銅貨を巾着から出して、是を鹿嶋樣へ上げてくれと云ふ。御賽錢なら上げて置いて上げやうと云ふと、御賽錢は立て替では利きませんからと云つた。その二錢は型の如く預かつて、果して忘れてしまつたが、その二錢が出た寄れ切れの巾着は、如何云ふものか今も覺えて居る、寂びしいかな巾着。

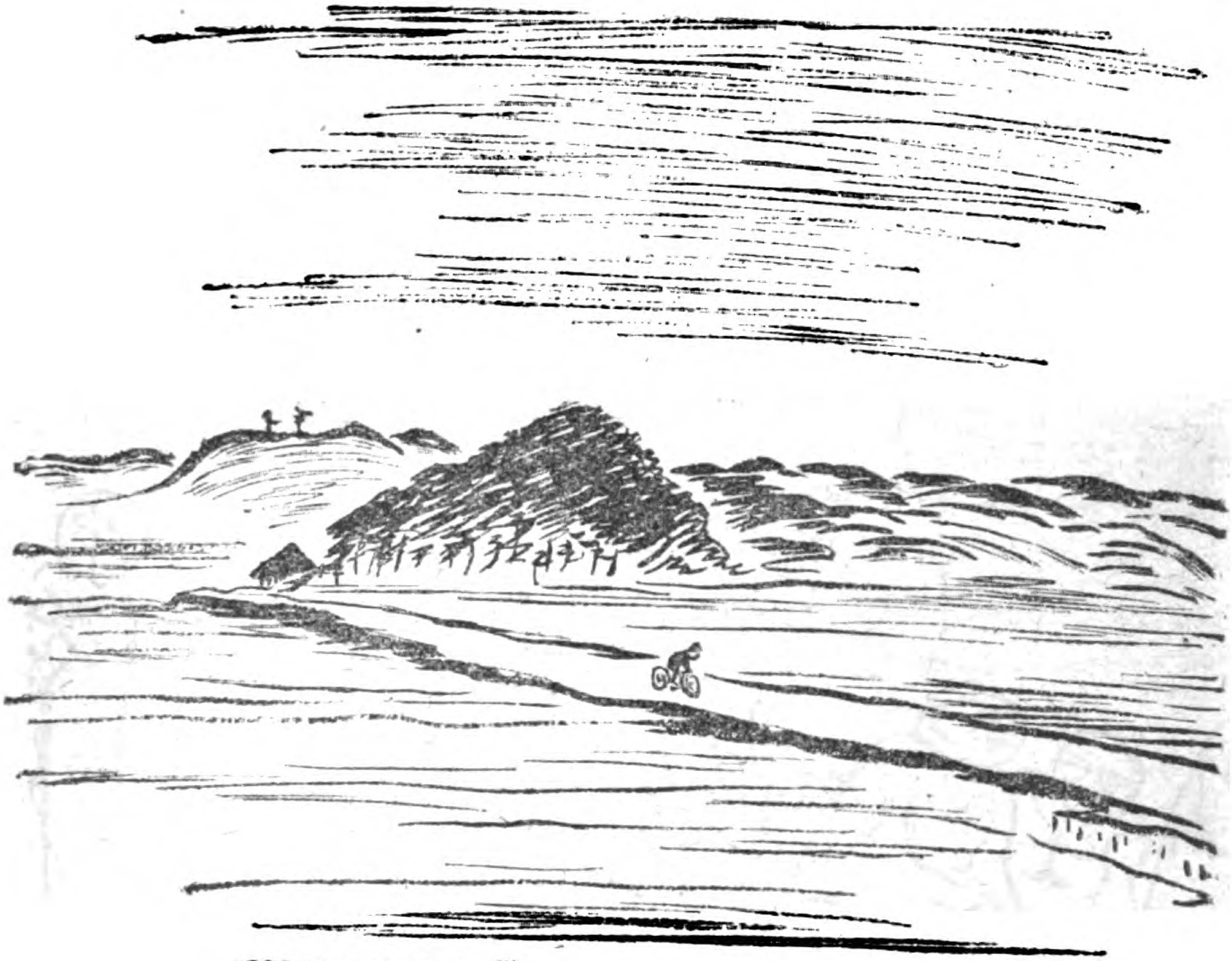
大南

江戸崎の方へ行からとて、芝宿から船を出して浮嶋の影を廻つた。其の船頭を朝呼びにやつたら、家には居ず、とかうするうちに宿の湯殿に寢て居たのを引起した。此男が前の日、大觀君を佐原へ送つて行つた、其歸りが夜の三時



丘山石人

になつた、そこで家へは歸れず宿の湯殿へ寢込んだと見える。時は利根川うしろは蓮池、蛙の性ならサッサと飛び込め、と云ふ舊句が潮來にある、御手當が好かつたので扨ては船頭蛙となつたと見える。湯殿から起きて來て、今日は大南が限って吹きますと、船を出すに難色を見せた、寝不足で億劫になつたかと思ふから、構はず船を出した。浮嶋のやはら（泥の洲を云ふ）の蘆原は目の限り廣かつた。桃はまだ紅（くれない）を殘して居るに、日は例ならず暖かつたので、浮嶋村の岸では、小供が淺瀬に泳いで居た。小船で狩りに來た連中は、昨夜來の合宿の人々か、鷲を打つたとて、船頭が頸を持つて引立てゝ見せた。猛鳥の半死の爪は苫を掴んで放たなかつた。浮嶋を出離れて古渡（ふつと）へ一里の沖を望む時、見る見る湖水白み亘り、山の根が煙つて風颯と落ち來り、波は船に逆らひ立つた。大南が果して吹き出したのである。後で土地の人に聞いて見ると、此の時我等が、早くも船を捨て陸に避けたのは、良い分別であつたさうな、大南の波とて、海の波から見れば孫のやうなものであるけれど、船の作りが是れに耐えない。さて又海の船の作りにすれば、此處では使ひ憎からう。去るにても風字の旗に絡りまで祟りをなす。



縣道

江戸崎

船を捨てた我等の荷は、湖の岸の茅屋に、妻と子と二人で住んで居た中老人の漁夫を頼んで擔はした。彼等は此處で、蝦魚と雑魚とを漁つて居る。浮嶋の方を顧みると、船は見えず帆ばかり大きく傾いてふくらんだのが、五つも六つも續いて見える。わかさぎの網を岸傳ひに曳く漁業である。彼の船の帆柱は、孟宗竹に限つたものであるさうな。網を強く曳く爲に、船を小さく帆を大きく、檣を撓はせるやうに造ると云ふ。一里餘りにして古渡の里に着いた。昔は盛りであつたらうと思はしめる此の村は、吹きつのる風の下に、しんかんとして人氣も餘りなかつた。俥夫が村に二人居る、一人の俥夫の家を人に聞いて、火の見の下に尋ねて行つた處が、昨日怪我をして寢て居ますと云ふ。一人の俥夫に荷を運ばして、更に橋を渡つて江戸崎に向ふ。霞が浦の水は細く此の橋の下を潛つて、少しく廣がつて入江となり、江戸崎に入つて了る。入江を圍んで緩るい丘陵が起伏して居る。尤も高き丘の上の松の下から、浮嶋かけて湖水の望みが佳いと云ふが、今日は照りながら靄立つて、眺望一里を出です、晴嵐と云ふ字は斯様な時の事かと思ふ。江戸崎

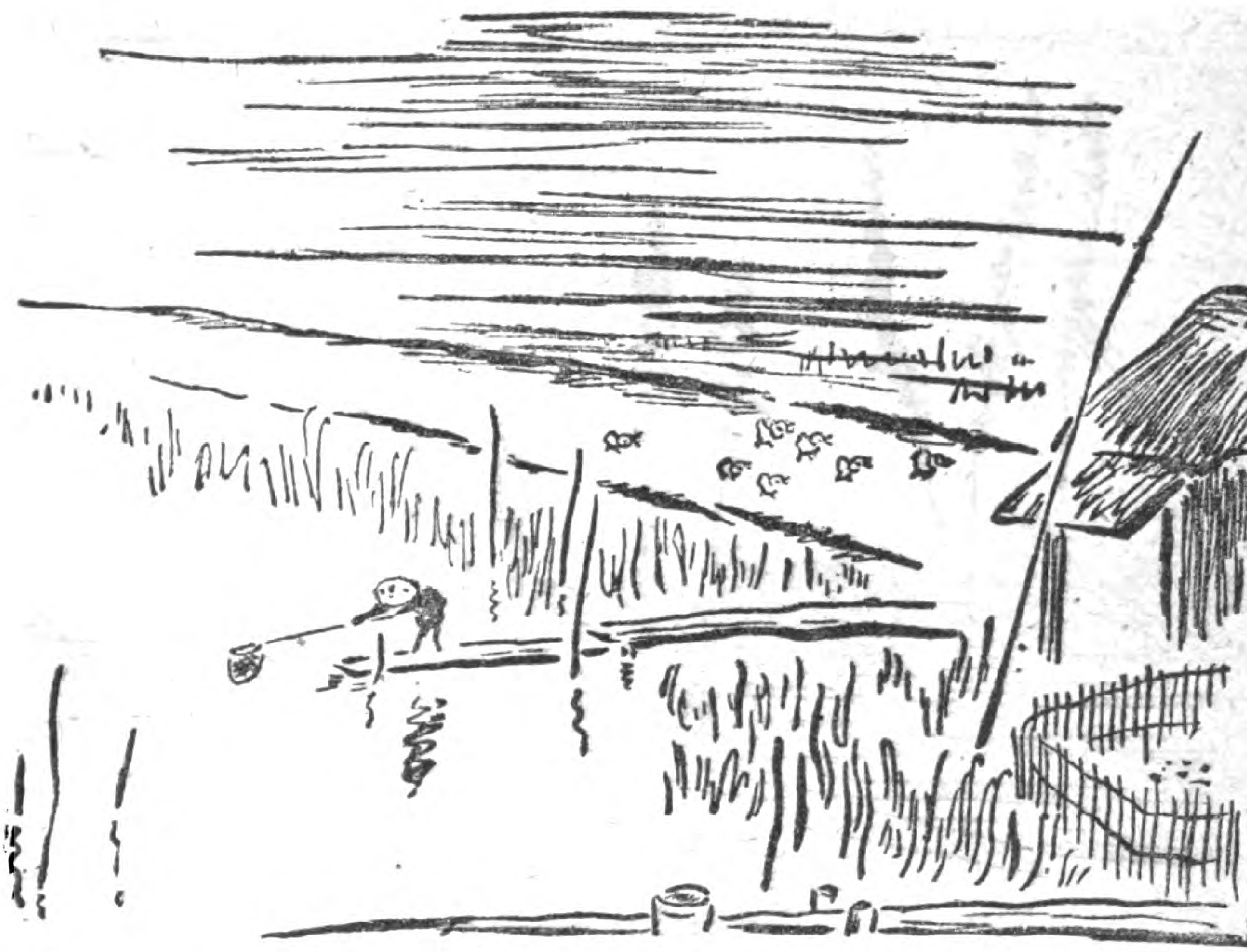


春田

に着いて、宿屋に茶を呑む頃から風もやゝ靜まつた、古い宿屋の奥の間、うす寒く暗く、閑庭に花落ち物寂びながら、女共の顏のみ白いのがおかしい。

羅漢山

宿の向ひは警察署、白壁作り、破風の處に漆喰ひの唐草が、緑青と朱とで彩られ、明治初年の西洋まがひの建築が物珍らしかつた。署の横手に正定山大念寺、古い山門を入ると本堂に並んで庫裏、庭の花共の間から、和尚夫婦が女客と對坐して居るのが見える。光明遍照十方世界、大きな字の屛風も見える。靜かな寺住居を思ひやつて居る頭の上で、花火が鳴り人聲がドット哄る。丘の上では自轉車の競走會があるのだ。丘へ上ると人の垣の中の丸い平地で、土地のチャンピヨンが色々のジヤケツを着て、半鐘の音を合圖に驅け出す。此の半鐘は下の御寺の借り物でもあらう。丘からは前の入江が望まれる。花は到る處に咲いて、麥の旣に穗を出しかけたのさへもある。振り返つて見ると下の街道を隔てゝ欝然と茂つた杉森の丘がある、杉の下に此方の見物にも劣らぬ程の人數が、ジツとして立ち群つて居る、と見たのは石像の大集團であつた、彼れは何んだと子供に

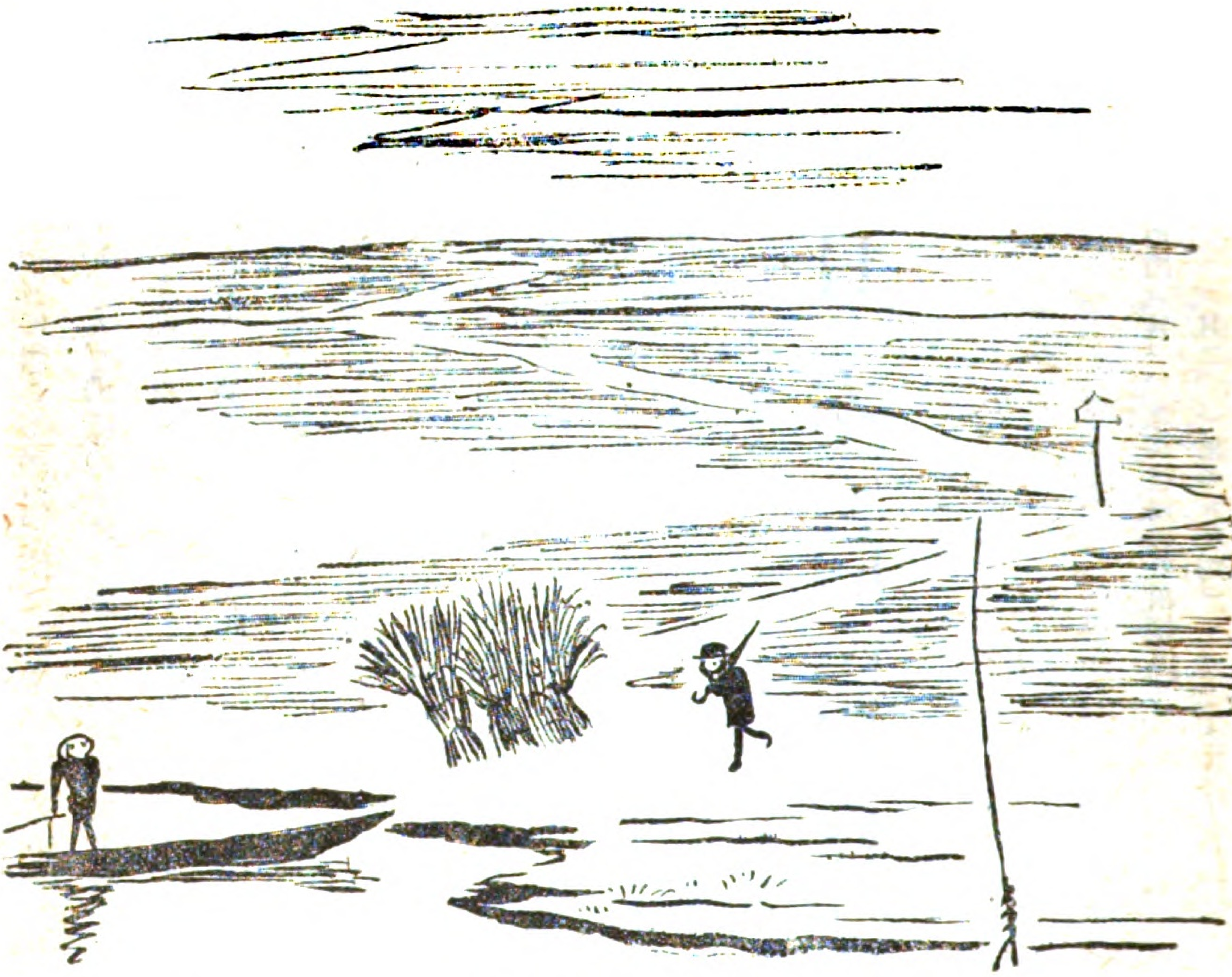


ひよつ子

聞くと、羅漢山だと云ふ。そこで羅漢山に行つて見る。羅漢達は全身に苔を被むつて、様々なポーズをして坐立して居る。多くは首が落ちて、落ちた首を繼いだり、又其まゝに拾つて載せたりしてあるので、體裁が變じ、つり合が外れて、意外に無氣味であつたり滑稽に見えたりする。樹下石人、何を此の連中は人無き夜半に談るやら。

笠踊

晩酌の後恒友君が按摩を召んだ。ハイ今晩はと云つて、這入つて來たのは、大きな首の色の黒い女按摩であつた。目が又恐ろしく大きい。此の瞬きせざる大いなる目は、物を見ない。しかし夜になつて主は寢ても、眼は暗中を見るが如くにも明いて居るだらう。按摩さん家は何處だと聞いたら、隣りですと答へた。隣りならば、今日の午後に、便所の窓から覗いた家に相違ない。目なき人の住む小さな家は、道理こそ晝も倘雨戸を閉して、庭は荒れ方題に荒れて居た。荒れ庭と閉せる小家とは、其時予をして餓鬼艸紙の巻中の印象を想ひ起さしめた。やがて按摩は友の肩にとり付く。太皷の音が、近くに聞えるのを按摩に訊せば、大念寺の境内で毎晩催す八木節ですと云ふ。それを見やうとて



大利根の渡し

出る。出たあとで按摩が、トロトロと假睡んだ友人の肩へ、いきなり喰ひつくと云ふ荒唐無稽な妄想も、フト出るやうな女按摩の姿であつた。又存外に優しい正直な心根でもあらうのに、五根の不足なるものは何彼につけて憐れである。

大念寺では、森閑と年古りた山門の横手に、三つ四つ紅提灯が縄からげの舞臺を彩どつて、三人の子供が、花笠を揮つて踊つて居た。笛と太鼓と唄ひ手が之に屬いて、見物はチラリホラリと、暗い中に七八人立つて居る。子供〻眞面目で、ふだん着のまゝの處へ、花笠ばかり目立つのが二人、中の一人は上衣の肌を脫いで、友仙の長襦袢を出して、傍目もふらず踊りに踊る。同じ調子、同じ動作、繰り返し繰り返し、百年も前から、百年の後までも、いつまでも夜で、いつまでも紅提灯で、と云ふ心持ちで踊りに踊る。友仙の長襦袢の子は、白いものを塗つたのでないかと誤つたほどに、色白く唇赤く、長襦袢の貸し主が、若し姉ならば姉の容色が思はれる、その內に歩をめぐらして、宿に歸つた。宿ではまだ女按摩が、友人の腰を壓して坐つて居た。

大師巡

二臺の車は丘を上り丘を下る。李の花に酒を思ひ、菜の花

に眠くなり、畠に出た。畠の間の路に、濃紫の目を射るやうな裾模様が、老婆の背に懸つて居た。傍に血色の悪い若い女、それを圍んで農女が三人、濃紫の下には赤ん坊が眠つて居る、嫁に行つて初めてのお産に里へ歸つて、子を連れて夫の許に行くを、此邊で産立と云ふ。農女の一人が老婆と話す、二人は後へ廻つて、赤ン坊の裾模様を撫でつ引きつ、八ツ口の緋色に手を差入れつして檢てゐる。老ひたるは娘の産立を思ひ比べて居るか、若いのは己が未來の參考にするか。絹布と女との間には、毎に自得あり羨望がある、麥の中に於ても、桑の間に於ても、丘を出外れて古利根の卑濕を行く。遠く大利根の堤の上下に、笠着た群れが百人も動く、彼れはと聞くと、大師巡りだと云ふ、やゝ近づく、畠の墓の傍に、酒と重詰めとが並べてある。新佛の供養に、大師巡りに馳走する爲だと云ふ。大師巡りの婆さん達の騒がしさ、早今迄に二三度の供養にも有りついたか、堂の前の空き地に環を作つて、サア笠踊りの組は初めた初めたと叫喚いて居た。俥夫が曰く「彼れは下總の衆です、どうも大師巡りに若い者を遣ると、兎角ダラケて歸つて來ます、何しろ彼の騒ぎで七日も八日も泊り歩くものですから」夫れも無理はないが、一人の俥夫が曰く「なあに、年寄りでも危いもんです、二里三里も離れた村の衆と一緒になる、昔馴染などもありましてな」夫れも無理はないが、行過ぎた後から、八木節の歌の合唱の聲が追つて來る。予は心の中に、昨夜の大念寺の美少年を想ひ出す、大利根は少し濁つて、まんまんと目路遠く流れて行く。

日本高嶺の高嶺

大町桂月

一　日本高嶺の門（其一、北高嶺踏破の根據地）
二　同（其二、一里のお花畑）
三　日本高嶺の門（其三、海拔七千尺の温泉）
四　日本高嶺の堂（其一、直立四千尺の峭壁）

一　日本高嶺の門（其一）

日本と英國とは、世界一對の島國であるが、英國には五千尺以上の山が無いのに、我國には富士山や新高山を別にしても、五千尺以上の山が到る處にある。殊に八千尺以上の高山が、駿河、甲斐、遠江、信濃、飛驒、加賀、越中、越後、上野、下野一帶の國に、數へ切れぬほど集まつて居る。その中で越後から遠江へかけて、日本を横斷して居る山脈の中に、一萬尺内外の日本高嶺が三つある。第一は遠江、甲斐、信濃に跨れる赤石山系で、之が日本南高嶺である。第二は木曾駒ケ嶽の連峯で、之が日本中央高嶺である。第三は飛驒、信濃、越中、越後に跨れる飛驒山脈で、之が日本北高嶺である。

高嶺は英語のアルプスに漢字を充てたのである。歐洲では伊太利北境の高嶺がアルプスの稱を獨占して居るが、アルプスは高嶺の義である。なほ夏も消えざる雪を戴いて居る白い嶺の意も加はつて居る。高嶺は高いばかりでなく、雪溪を有して居らねばならぬ。日本高嶺の中で、北高嶺が、最も能く高嶺の高嶺たる所以を發揮して居る。御嶽も、乘鞍嶽も、北高嶺に屬して居て、山の脈は引いて居るが、寧ろ獨立した山であつて、嶺ではない。眞の北高嶺は、燒ケ嶽から起つて、槍ケ嶽連峯となり、二つに分れて西は劍嶽を有する立山連峯の支脈となり、東は白馬ケ嶽を盟主と仰ぐ後立山連峯の本脈となつて居る一帶の高嶺であつて、長さは二十里に餘まつて居る。笠嶽、赤牛嶽、大天井連峯、有明山などの支脈もある。一萬尺内外の山が十六七、九千尺内外の山が十八九もあるが、其粹を拔けば、槍、劍、白馬の三嶽である。白馬に登つたら、先づ日本高嶺の門に及んだと云へる。槍を攀ぢたら、日本高嶺の堂に上つたと云へる。劍を窮めたら、日本高嶺の室に入つたと云へるのである。

北高嶺は盛夏でも雪の國である。雪溪が數里も連つて居る。

がある。到る處のお花畑に天上の花が咲いて居る。飛ぶことの出來ない雷鳥が子をつれて歩いて居る。西には立山溫泉、東には中房溫泉、葛溫泉、南には白骨溫泉、平湯溫泉、蒲田溫泉、上高地溫泉、北には祖母谷溫泉、栂溫泉、蓮華溫泉、鐘釣溫泉、黑薙溫泉があつて、溫泉の國とも云へる。この高嶺踏破の根據地とも云ふべき信州の大町へは、汽車が通じて居るので、東京から十五時間で達して、對山館の客となつた。大町は松本と越後の糸魚川との間の唯一の都會であつて、中學校もある。海拔二千四百八尺、大町盆地の中心にあつて、松本盆地よりは五百尺も高い。對山館の主人の百瀬愼太郎氏は、北高嶺を悉く踏破して居る。文章を善くし、寫眞をも善くする。活きた『高嶺』である。案内の人夫も、信濃方面では、この地が最も多い。

白馬の入口の四つ屋といふ部落まで、大町から六里の路を、乘合の自動車で走つた。一里も行くと、平原が盡きた。左右から山が迫つて來て、前に湖水が現はれた。木崎湖といふのである。南北二十五町、東西十町、周囘二里ぐらゐで、薩摩芋の形をして居る。南 尖つて居る。北も、もとは尖つて居たであらうが、三分一ぐらゐは、あせて田になつて居て、田と湖との界が直線になつて居る。南方には、小部落がある。旅館もある。夏期學校もある。東方にも、西方にも、北方にも、小部落がある、東岸を通つて、湖から三十町ばかり行くと、中綱湖とて、木崎湖を二十分した位の、小さな湖水が現はれたと思ふ間もなく、すぐ後になつて、前に靑木湖が現はれた。南が尖つて、無花果の形をして居る。周囘は木崎湖と同じく二里もあるが、南北が少し短い代りに、東西が少し長くて、面積が少し大きく、水も木崎湖よりは澄んで居て、全體の光景が木崎湖よりは出世間的である。

大町を發したのは、午後六時十分であつたが、七時二十分、四ツ屋白馬館に着いた。滿員であつたので、なほ半里ばかり自動車を走らせて、森上といふ部落の松北館に投宿した。

二　同（其二、一里のお花畑）

同行は原田三夫、加藤美論、葛原玆、加藤重雄の四氏、人夫三人、午前七時森上を發足して、白馬に向つた。日本高嶺の門に入らむとするのである。森上、四ツ谷あたりは、山間の小盆地で、海拔二千三百四十尺である。四ツ屋から白馬の前にまで五里と稱して居る。森上からは少し遠くなるけれども、四ツ屋を經ないから、ほんの十町ぐらゐ遠くなるだけである。三十町ばかりで田が盡きて、草の原となつた。山が兩方から人を壓して居る。右の方の草の中に、松川が音を立てゝ居る。右手の山の傾

斜面には白樺が白い幹を見せて居る。草の中には、日光キスゲの黄い花が特に目立つて見える。この草の原が一里ばかりで盡きて二股橋へ來た。白馬獄より出る北股川と白馬槍ケ獄より出る南股川とが、こゝに相會して居て、橋は南股川に架つて居る。十分ばかり休息して、橋を渡り終へると、鶯が一聲啼いた。

北股川の水音を右にして森林の中を行き、終に北股川を丸木橋で渡つて、白馬尻に着いたのは、丁度十二時であつた。海拔五千百八十八尺、四ツ屋から三里、小屋があつて、數十人も宿泊することが出來る。下る客、上る客、數十人落合つて、ごたごたして居た。こゝで午食して、午後一時十分發足して、雪溪にとりついた。これから雪溪一里、お花畑一里で、白馬の頂上へ達する。高嶺の特色が、これから見られるのである。

雪溪は二十度ぐらゐの傾斜をして居る。氷のやうに堅くはないが、綿のやうに柔くも無い。そして、其面がのぺつに平らでなくて、見渡す限り、一尺四方ぐらゐづゝ、鱗形になつて居て、人が上下するに都合よくなつて居る。風が水面に起す波を、こゝでは雪の面に現はして居るのである。雪溪の幅は狹い處で一町、廣い處は二町もある。左右にいくつも支雪溪があつて、雪溪の壯觀を添へて居る。上から吹いて來る風が、溫いかと思へば、冷くなる。冷いかと思へば、又溫くなる。休んでは登り、登つては休んだ。獄雀が絶えず仙樂を奏した。

二時間の雪溪登りは、世にも面白かつた。葱ビラに取りついて、お花畑が始まつた。一種の野生の葱が多いので、葱ビラと稱するのである。ビラとは傾斜面のことである。葱ダヒラに至つて、路が平らになつた。見渡す限り、樹木は無い。唯這松が這つて居る。這松は雷鳥の巣になつて居る。霧がかゝると、雷鳥が巣から出る。霧が收まると、巣に引込む、可愛さうに、飛べない鳥である。羽が冬は白くなるが、夏は灰色になる。それが霧の中に現はれるから、少し黑ずんで見える。烏よりは少し大きくて、丸味がある。

雷鳥の親と子お花畑かな。

お花畑は、天上の花園と云ひたい。高嶺の上は、空氣が澄んで居て、日光の紫線が直射するから、人の顏は黑くなるが、花は鮮になる。美しくなる。光澤が出る。平地に移したら、その鮮さも、美しさも、光澤も無くなる。高山植物の花を見ようと思ふなら、高嶺に登らねばならぬ。然るに人間はアダム、イブ以來、罪の子である。人間の手が折角のお花畑を荒して、白馬のお花畑が其實を失ひかけて居るのは、實に慨かはしい次第である。

午後六時、白馬の頂上の小屋に投宿した。霧が深いので、

頂に登るのは、明朝に讓つたが、翌朝もやはり霧が深かつた。それでも午前四時五十分に小屋を出で、五時五分に絶頂に達した。西方だけ霧が開けて居て、數十條の雪溪を帶びて居る劍嶽、立山一帶の高嶺が、如何にも雄壯な姿をして居た。白馬の絶頂の東面だけは、絶壁となつて居る。他は緩かな傾斜を爲して居て、奇拔でもなく、雄壯でもないが、何となく親しい山である。

三　同（其三、海拔七千尺の温泉）

午前七時、小屋を辭して、加藤氏(美命)と一人の人夫とは、昨日の路を下つた。私は他の人々と共に、嶺上を南に進んで杓子嶽を攀ぢた。拳大の小石がごろ〳〵して、木も草もない。唯駒草があるのみであつた。駒草の花は、世にも可憐である。お花畑に群を爲さない。他の多くの高山植物の草の生長し得ない石原に超然として孤生して居る。色と云ひ、形と云ひ、場所柄と云ひ、眞に天上の花である。

駒草や雲の上なる石の山

杓子嶽を下つて、なほ嶺上を南に進んだ。『黒百合だ』と云つて、原田氏の指すを見れば、高さ四五寸の百合である。花の色が黒い。天女の死んだ時、花が喪服を着たのかと思はれる。古人は之を怨女の化身と見立てた。昔、佐々成政が越中に居つた時、讒言を信じて愛妾を殺した。その愛妾の怨魂が化して此黒百合となつた。それとは知らずに、成政は豐太閤の機嫌を取らうと思つて、この花を太閤の政所に獻じた。政所はこれを太閤にも見せ、淀君にも見せて、大に得意がつた。淀君は口惜しくて堪らず、わざ〳〵黒百合を取寄せ、わざと、之を粗末に取扱ひ、他のいろ〳〵の珍らしい花を丁寧に飾つて、政所に見せた。『さては、成政は珍らしくもない花を獻じた』と云つて、政所は成政を怨んだ。『政所にだけ獻じた』と云つて、淀君も成政を怨んだ。兩女から怨まれて、成政は終に身を亡すに至つたといふ傳說がある。

白馬槍嶽の絶頂に達して、休息すると、葛原氏は『アイスクリームを御馳走する』と云つて、雪へコンデンスミルクを混じて、一同に分つた。なるほど、アイスクリームの味がする。高嶺でなくては味はれない珍品である。白馬と白馬槍との直徑は一里ばかりもあつて、杓子がほゞ其中央に位して居る。こゝから見ると、白馬も可成り奇拔な形をして居る。午食を終へて、十一時十五分に發足した。南股川の源の雪溪を下つた。一人の人夫が最先にあつて、私は其次にあつた。二三間先きに割目が雪溪を横斷して居るを見たので、『割目がある』と叫んだ。人夫は驚いて立留まつた。そして割目をよけて、左の巖壁を傳つて

雪渓に戻つた。『四五日前に通つた時は、こんな割目は無かつた。もう今年は通ることが出來ない』と、人夫が言つた。歐洲のアルプスで死ぬるものは、幾んどみな雪渓の割目に陷つて死ぬるのであるとのことである。日本の高嶺でも、雪渓の上下は面白いには面白いが、唯だ割目の危險を忘れてはならぬと思つた。

午後一時、槍溫泉に着いた。海拔七千尺、日本の溫泉の中で、最も高い溫泉である。巖が自然の湯槽を成して居る。側に掘立小屋があつて、番人が居る。雨は降つて居たが、私は之に浴した。雲が頭上を去來する。嶽雀が近く仙樂を奏して居る。我は神代に生れかへつた心地がした。

二時十分發足して、人よりも高い虎杖の藪を潜つたり、絶壁を横に這つたりして、南股川の溪谷を下り、六時二十分漸くにして昨日の二股橋に來て、ほつと一息ついた。この南股川の溪谷は、難路ではあるが、深山幽谷の氣分が味へる。殊に雲の上に溫泉のあるのが振つて居る。七時二十分四ツ屋へ着いて、加藤氏（美命）と共に、白馬館に一泊した。翌日、大町の根據地へ戻つて、葛原、加藤（重雄）二氏と別れた。

四 日本高嶺の堂（其一、直立四千尺の峭壁）

白馬に登つて、日本高嶺の門に及んだから、これより槍を攀ぢて、日本高嶺の堂に上らうとするのである。それにしても、何の路を取らうかと考へた。汽車で松本まで戻つて、島を、德本峠を經て上高地溫泉に達し、それから梓川を溯つて槍に上ることも出來る。大町から直に高瀨川を溯り、葛溫泉を經て、烏帽子嶽、三ツ嶽、鷲羽嶽、二俣嶽、双六嶽を縱走して槍に上ることも出來る。然し私は對山館の活きた『高嶺』と相談の上、有明驛に下車し、宮城を經て、有明川を溯りて、中房溫泉に投宿し、一寸後戻りして有明山に上り、進んで燕嶽に上り、大天井嶽に上り、常念嶽、北穗高嶽を縱走して槍に上ることに決した。

夕方風呂に入ると、思ひがけずも學習院教授の藤澤吉野氏に過つた。同行二人、人夫六人、十日を費して、針木嶽から北へ縱走し、白馬より下つたが、白馬の頂上の小屋で、宿泊帳に私の名を見たので、

宿帳の頁繰りつゝ圖らずも君の名見出でぬ懐しきこゝろ

一首の歌を贈られた。宿帳に友人の名を見るのは、嬉しいものである。それが普通の宿帳でなくて、山上の室帳であるなら、なほ更の事である。氏は私より一日おくれて白馬の頂上に宿したのである。

君來ると知らば白馬の山の上今一夜寢て待たましものを

大町に一泊して、翌日午前八時、大町驛を發し、九時有明驛に下車した。西方三里の外に、有明山が富士の形を成して、雄視して居る。信濃富士と稱せらる名山である。滿山みな樹木、而かも孤立して居る。東から北高嶺を見ると、此山が最も目立つて居る。その麓の宮城まで、有明驛から二里半ある。同行は原田、加藤の二氏、馬車を利用して宮城に着いた。有明神社に詣でた。『信濃の日光』と云はれて、建築の美が、北高嶺に異彩を放つて居る。寶物に珍らしい物が多い。附近に數十の古墳もある。神官に案内せられて、正福寺の不動堂を見た。鎌倉時代の建築であるとの事である。觀音堂の下の巖窟をも見た。こゝに穴居した太古の土豪の話も聞いた。有明神社の有神山に於けるは、淺間神社の富士山に於けるやうなもので、淺間神社の奥社が富士の嶺にあるやうに、有明神社の奥社が有明の嶺にあつて、東京から參詣する講社の連中も少くない。宮城から登るのが表口で中房溫泉から登るのが裏口である。祠前の旗亭に午食し、二時半宮城を發して、七時に中房溫泉に着いた。この間三里、路は中房川の右岸に沿うて居る。左の崖から、支溪がいくつも瀧になつて居る。右方に有明山を仰ぐと、筍のやうな巖峯がいくつも直立して居る。奥になるほど、高くなつて居る。立つて居る地が三千尺もあるが、なほ上に四千尺あまりも直立して居る山壁を仰ぐので、實に天下有數の壯觀である。北高嶺では、此處から有明山を仰ぐのと、上高地から穗高嶽の三本槍を仰ぐのと、祖母谷から劍山を仰ぐのとが、直立せる山壁を仰ぐ壯觀であるが、此處が最も優れて居る。北高嶺を離れても、この直立四千餘尺の山壁を仰ぐ、壯觀は、妙義山にもない。耶馬溪にもない。朝鮮の金剛山にもない。殊に白雲が下部と中間とをぼかして居たから、一層崇高の感に打たれた。

中房溫泉に一泊して、明くれば、雨が降つて居た。私は案内者と二人で、午前十一時發足して有明山の頂上を窮め、午後七時に戻つた。實に險しい山である。頂上は南北に長くて、有明神社の奥社がある。十數人宿泊するに足るべき小屋もある。樹木の中で、殊に目に着いたのは、朝鮮松である。幹は直立して居る。拳大の實もある。他の松の色は、多少黑ずんで見えるが、この朝鮮松だけは、鮮かな綠である。『表口よりは、表口の方がなほ一層險阻であつて、路も長い』と、案内者が云つた。昨日、

私は地圖を見て、宮城から中房まで三里、有明山へ廻つても一二里の路損であらうから、廻つて見ようかと思つたが、廻らなくてよかつた。廻つたら山上で日が暮れて動けなくなつたであらう。現にこの苦境に陷つた人が少なくないとの事である。

中房溫泉は有明山の後、大天井連峯の前にあつて、海拔四千八百二十五尺、夏も暑さを知らぬ。幾棟もあつて、二三百人投宿することが出來る。夏は林間學校があつて、暑を避けて、溫泉に身體を養ひながら勉强することが出來る。溫泉のある處は、必ず俗惡の分子が伴ふものであるが、この溫泉は少しも俗の分子が無い。惡の分子は猶更ない。淸淨潔白の仙境である。

五　同（其二、海拔五千尺の數里の平地）

中房溫泉に二泊して、同行三人、人夫四人、手前八時溫泉を發足して、十二時大天井連峯の頂に取付いた。北へ峯を傳ふこと三十分で、燕嶽の頂上に達した。花崗岩の細砂が一面に撒布せられて居て、蹈むも勿體ない位に思はれた。唯霧が深くて、展望は利かなかつた。引返して嶺上を南へ〳〵と進んだ。蛙岩、爲右衛門岩などの奇巖があつた。右は這松、左は花畑、これだけが雲霧の上にあらはれて居る。急な登りになるかと思ふと、身は大天井嶽の頂にあつた。雲霧が少し開けて、西南一二里の外に、槍ケ嶽が見えた。これ實に日本北高嶺の盟主である。峯頭は數百尺の巨巖で、其名の通りに、槍を立てたやうである。上高地から登つたのでは、槍は三角形を成して居て、槍らしく見えない。私は中房から登つたのを嬉しく思つた。殊に雲の開けたのを天祐と思つた。

午後五時半、東天井嶽の麓に着いて、一行七人が二ノ俣小屋を占領した。食料は用意して居る。飲用水には雪がある。燃料には這杉がある。生でも、能く燃える。人夫がそれ〴〵晩食を調へてくれる。湯がわくと、コーヒー、シロップをこしらへた。飯が出來た。味噌汁が出來た。八時に晩食を終つて、八時半に、ぐつすり寢込んだ。

嶽雀の聲に起されると、夜が明けて居た。東天井嶽の頂に上つた。晴天である。東西南北どちらも能く見えた。日本中の高山は幾んどみな見えた。唯富士山だけは見えなかつた。午前七時十分發足して、東天井嶽を左にし、やがて後にして、一ノ俣溪谷と二ノ俣溪谷との間の峯上を南に進みつゝ、下つた。中山峠から右に折れて居て、二ノ俣溪谷に下つた。溪に沿うて下つて、九時二十分池と稱する處に着いた。もと池があつたが、今は川原になつて居る。二町四方もあつて、處々に木が枯れながら立つて居る。溪水に汗を洗つて、木蔭に横つた。人夫は晝飯

用意に取りかゝつた。『虹が見える』といふ聲に、起きあがつて、洞中の天を仰ぐと、なるほど虹が見える。然し普通一樣の虹ではない。月が帶びろやうに、太陽が暈を帶びて居て、その暈の上半分の周りが虹になつて居るのであつた。

午食を終へて、十一時四十五分に發足した。二ノ俣の溪流は、下るに從つて大きくなる。十二時二十五分に、『槍どう』に達して、益々大きくなつた。『どう』とは、二流の相合する處を云ふのである。卽ちこゝは大天井嶽から發する二ノ俣の溪流と槍ノ嶽から發する槍澤の溪流とが相合して、梓川となる處である。水の分量は、どちらが多いか、一寸判斷がつかぬ。山では槍ケ嶽の方が有名であるから、『槍どう』となつて居るが、長さは二ノ俣の方が長いから、梓川の水源は、大天井嶽となつて居るのである。

梓川の左岸を下つた。細徑が絕壁の上に通じて居る。棧道といふよりは、寧ろ丸木橋といふべきものが、數知れず架かつて居る。東天井嶽から出る一ノ俣の溪流を入れて、梓川が益大きくなつた。穗高嶽の北端の屛風岩か、いかめしく對岸に見えると思ふ程もなく、北穗高から發する本谷ー奧穗高から發する唐谷との水の相合した橫尾谷の溪流が加はつて、梓川がなほ一層大きくなつた。水の幅が數十間もある。溪流は幾んどみな傾斜の急たものであるが、梓川は五千尺の上にありながら、數里の間平地を流れて居るのである。而かも花崗岩の山から出る水であるから、清冽この上もない。內地には珍らしい楡の木が多い。又內地に珍らしい楊も多い、その楊の花が風に散つて、時ならぬ雪を降らした。屛風岩が盡きても、對岸の穗高嶽の巖壁が、高く且つ長く連つて居る。その穗高の連峯とこちらの大天井連峯との間は數町に過ぎぬ。その間を梓川が自由自在に幾んど音を立てずに流れて居る、この數里の細長い山上の盆地は、槍ケ嶽に一層の仙趣を添へて居る。河童橋へ來て、北に穗高の峨巖を仰ぎ、南に六百、霞澤、峭壁を仰ぎ、燒嶽の噴烟を望み、梓川の清流に俯し、我を忘れて、雲烟の中に立ち盡した。杜宇が頻りに鳴いて居た。上高地溫泉の一軒屋に着いたのは、午後六時であつた。

六　同（其三、日本高嶺唯一の活火山）

杜宇の聲に曉の目を覺ました。原田氏は下痢をしたと云つて、弱つて居る。飯も食はぬ。健胃固腸丸を飮んで、辛子粉をねりつけた紙を腹に張つた。『今日一日靜養し給へ』と云つて、午前九時四十五分、私は加藤氏と共に、宿を出でゝ燒嶽に向つた。梓川の右岸を十町ばかり下ると、梓川が大正池になつて居

て、池中に枯れながら立てる林が、新しく出來た池の歴史を語つて居る。燒嶽が噴火して、梓川の水を堰いたので、この池が出來たのである。堰くことが、もつと烈しかつたら、上高地全體が湖水になつたであらう。右へ山路を上つた。一面に白檜が多い。下は熊笹に掩はれて居る。途中で午食して、十二時燒嶽の峠に達した。これから加藤氏は一人の人夫をつれて、蒲田温泉、平湯温泉、白骨温泉などを廻り、根據地の大町で逢ふことを約して、別れた。私は一人の人夫と共に、燒嶽の頂上へ登つた。少し上ると、木立は盡きたが、天地が濃霧に包まれた。怪獸が居るかと思ふと、巖である。登りつくして前が絶壁になつて居るらしいから足を留めた。右の方の尖峯が横に口を開いて、烈しい音を立てゝ居る。噴烟が霧よりは少し濃く立ち昇つて居る。噴火口はまだ他にいくつもあるさうであるが、濃霧の中に半盲目となつて居るので、一の噴火口を見ただけで下つた。峠からは往復一時間を費した。更に硫黄嶽に上つた。こゝでも處々に硫氣を吐いて居るが、極めて微弱である。且つ山も燒嶽よりずつと低い。燒嶽は日本高嶺中唯一の活火山である。硫黄嶽は半活火山である。この二山は信濃と飛驒とに跨つて居る。私は信濃の言ひ方に從つたが、飛驒では、硫黄嶽を燒嶽、燒嶽を硫黄嶽と云つて居る。

午後四時、宿に歸つた。雨が降り出した。原田氏は下痢は止まつたが、飯も食はずに寢て居る。この夜の杜宇は殊にあはれを感ぜざるを得なかつた。

夜が明けると、更に驚いた。雨は強くなつて、暴風が加つた。山は怒つた。谷は叫んだ。天地も崩るゝかと思はれた。唯原田氏が雞卵を食ひ出したので、一と安心した。午後になつて、雨も止んだ。風も収まつた。私は獨りで田代池を探り、大正池の出口を窮めた。歸つて來ると、原田氏が居ない。散歩が出來るやうになつたかと、益喜んだ。

次の日、原田氏は幾んど回復した。されど衰弱して居るから、私と行動を共にすることが出來なくなつた。私は是から穗高嶽へ上つて、槍ケ嶽へまで縱走しようとするのである。この縱走は、日本高嶺中で、最も危險と稱せられて居る。あらゆる山嶽の難場中の難場である。こゝの案内の出來る人夫は、極めて少ない。賃金も他の處の倍額を要する。荷物も他の處の三分一も持てない。幸に私は人夫に畠山善作といふ中房第一の剛の者を得て居る。荷物の大部分は別に人夫を雇ひ、梓川を溯つて、槍澤小屋に運ばせることとした。午前六時二十分、上高地温泉を發足して、河童橋の上で、原田氏と手を分つた。原田氏はこれから徳本峠を越えて、下界の人となるのである。

七　同（其四、北高嶺第一の難所）

　河童橋から十町ばかりで、梓川と別れて、穂高嶽に取付き、十一時二十分に頂上に達した。上の方は手で歩かねばならぬ處もあつたが、危險といふほどの事はなかつた。携へた握飯を午食に充てた。上高地温泉から仰いだ六百山は既に脚底に落ちた。燒ケ嶽からは五六條の烟を噴いて居る。目ざす槍ケ嶽は近く目の前に見えるが、途中で露宿して、明日の夕方でないと、達することが出來ないのである。十二時二十分發足して北に下つた。危險はこれから始まる。槍ケ嶽までの直徑は二里であるが、絶えず絶壁を上下せねばならぬ。歩くよりも、寧ろ這ふのである。足よりも手を多く用ゐねばならぬ。手よりも頭を多く用ゐねばならぬ。霧がかゝると、盲目になつて、頭を用ゐることも出來ぬ。絶壁と云つても、巖がしつかりして居れば、さまで危險でもないが、穂高から、槍までの連絡では、手でつかまる岩が動く。足で蹈む岩も動く。自分の手足を托する岩は大丈夫でも、上にある人の岩が落ちたら、自分は微塵にならねばならぬ。それで危險なのである。殊に霧が危險の度を一層高めるのである。

　危險であるから、この縱走を企つるものは極めて少ない。從つて雷鳥が多く棲んで居る。少しでも霧がかゝると、必ず這松から這ひ出る。多くは子供をつれて居るので、猶更可愛らしい。

　這松に霧かゝるよと見る程に目の前近く雷鳥立つも

　二時二十分奥穂高の頂上に達した。これからの下りが、殊に危險であつた。どちらを見ても絶壁である。何處から下り始めて、どちらへ向いて好いか、判斷が付かぬ。『呼ぶまで待つて下さい』と云つて、善作君は右へ斜に進んだ。呼ばれて、之に從つた。なか〳〵下りない。右へ〳〵と廻つた。いつまで行つても、脚下は絶壁である。これでおりられるかたと思つたが、善作君はおり始めた。少しおりて、又左へ〳〵と這つた。峯稜へ下りてから、右へ〳〵と、ぎざ〳〵……石原の傾斜面を下りた。一大巨石が、數箇の石に支へられて、窟の形を成せる處に至つて『これが今夜の宿です』と云つたので、やつと安心した。午後四時二十分であつた。

　この石窟は五六人橫になることが出來る位の廣さがある。二人で中へ入つて、荷をおろすと、轟然たる音が耳を貫いた。善作君は驚いて飛び出した。私は石が墜ちたのであらうと直覺したが、窟の上の方には、墜ちる石が無いと見定めて置いた。あつても、窟の蓋になつてゐる巨石を如何ともすることが出來ないと見定めて置いた。それで安心して見ると、果して石が二三十

間先の横の傾斜面を轉下するのである。石と石と鬪つて火を發し、砂烟を起し、轉々又轉々、まるで活きた怪物が走るやうであつた。

『火の素』で木を燃した。鍋の雪が湯になつた。飯が出來た。晩食して居ると、又石が落ちた。寢に就いても、又落ちた。一夜の中でも三回落ちたのである。數千萬年の間には、多くの石が落ちたことであらう。そして穗高連峯の高はどれだけ減つたかわからぬ。幸に私の歩いて居る間には、石が一つも落ちなかつた。

なほ私はこの穗高の石窟に感謝せねばならぬ。如何に石が落ちても、この石窟だけは大丈夫であることは、前にも云つたが、穗高から槍まで、直徑二里、上下數里の間、一寸の平地もない。馬の背のやうな峯稜か、石が重なり合つた傾斜面か、さもなくば絕壁ばかりであつて、一夜の身を托すべき處は、唯この石窟だけである。

八　同（其五、殺生小屋の一夜）

次の日、午前六時三十分に發足し、前日と同じやうな危險を冐して、北穗高の嶺を窮め、横尾根を上下し、漸くにして槍ヶ嶽の肩に達したのは、午後四時十五分であつた。數十丈の巨巖が峯稜の上に突起して居る。峯頭として、世にも奇拔を極めて居る。天下一品である。一寸見ると、登れさうにもないが、登つて見ると、案外容易である。巖がしつかりして居る。銅線を垂らした處もあつたが、それをつかまなくても登れた。二十分で頂上に達した。小さな祠を伏し拜んだ。私は今日本北高嶺の最高處に達したのである。然るに二三町先きは展望が利かぬだけの霧が、天地を包んで居た。この數日間の經驗に由るに、朝早くなら晴れて居るが、正午近くなると、霧が生ずるのである。それで私は今一度、明朝早くこゝに登らうと決心した。一里ばかり下ると、槍澤小屋といふ營業の宿屋があつて、暖く眠ることが出來るけれども、一里の險山の上下は徒勞である。朝早くと思つても、後れるかも知れない。幸に槍の肩から數町の下に、殺生小屋の石窟がある。持つて來た米は盡きたが、私は晝の辨當の半分を餘して居る。善作君に聞くと、善作君も半分を餘して居る。二人の晩食には不足ではあるが、一人には十分である。

『その半分を僕に與れ給へ。僕は一人で殺生小屋に寢て、明朝起きぬけに再び槍に登る。君は槍澤小屋まで下りて晩食を得給へ。穗高縱走の無事を祝して、僕がおごるから、一杯やり給へ』と云つて善作君と別れた。蒼然たる暮色が、私一人を山の上取り殘した。

私は燃料を集めた。雪を取つて來た。『火の素』で火を起した。一つの飯盒で味噌汁をこしらへた。今一つの飯盒で殘飯を煖めた。生れて五十年、私は始めて他人の殘飯を食つたのである。それでも、母親が子供の殘飯を食ふぐらゐに思つた。山が私の神經を平和にしたのである。饑が私を乞食にしたのでは無い。夜に入つたが、風の音もせぬ。何の聲も聞えぬ。石も落ちて來ぬ。唯空に十二夜の月があるのみである。今夜の月は、私に無言の物語をするのである。五六人横臥されるだけの石窟の中に、私は横になりながら、心の中に明朝の槍の上の眺望を描いた。明朝の晴天を祈つた。この外に思つた事が無いかと云ふに、無いでも無い。私は未だ全く仙化して居らぬ。「こんな時には、ウイスキーの小瓶でも一つあると好いがな」と思つた。

九　同（其六、日本の高山唯一目）

十二時に目が覺めた。石窟の外へ出て見ると、月は穗高の峯に落ちて、餘光が唯槍の上部を射て居た。空は明るい。大丈夫、夜が明けても晴天だと喜んだ。寒暖計を見ると、華氏の五十度であつた。又眠つて午前四時二十分に目が覺めた。直に發足して、五時三十分、私は再び槍の絶頂に立つた。日は既に昇つて居たが、惜しや、理想の展望が得られた。信濃一面は雲の海である。その雲の海が、却つて下界を美化して居る。

足もとの信濃は雲の海となりぬ淺間戸隠島山にして

高山だけが雲の海の上に頭を出して居る。日本中の高山は、悉く見えた。富士山も見えた。私の眼界以外には、日本に臺灣を除いて、八千尺以上の高山は無いのである。今私が立つて居る槍ケ嶽は海拔一萬四百九十二尺である。南に向へば、北穗高嶽（一〇、〇〇七）奥穗高嶽（一〇、二四〇）穗高嶽（一〇〇一、九八）前穗高嶽（九、五九八）硫黄嶽（六、九一〇）燒嶽（八、〇六一）少し離れて乘鞍嶽（九、九九七）更に離れて御嶽（一〇、一〇九）が峙つて居る。北に向へば、双六嶽（九、四三九）三俣嶽（一に蓮華、九、三七〇）鷲羽嶽（九、四五〇）野口五郎嶽（九、六五〇）三ツ嶽（九、三八四）烏帽子嶽（八、六四九）蓮華嶽（九、二三四）針木嶽（九、二六〇）鹿島槍ケ嶽（九、五三六）白馬槍ケ嶽（九、五八〇）杓子嶽、九、五七一）白馬嶽（九、六七九）が屹立して居る。これ北高嶺の主脈である。三俣嶽から分れて、黒部五郎嶽（九、三七〇）上ノ嶽（八、七八二）藥師嶽（九、六五六）淨土山（九、四七八）雄山（立山の主峰、九、八七三）別山（九、五二一）劍嶽（九、八九二）が連つて居る。これ北高嶺の西の大支脈である。

東に向へば槍ケ嶽から赤岩嶽（九、一三六）を經て、大天井

嶽（九、四四三）となり、北して燕嶽（九、一二〇）有明山（七、四八五）が聳え、南して東天井嶽（九、一七六）常念嶽（九、〇九八）蝶ケ嶽（八、七九二）六百山（八、一三七）霞澤嶽（八、七〇〇）が聳えて居る。これ北高嶺の東の大支脈である。

　なほ鷲羽嶽と野口五郎嶽と間から黒嶽（九、八二六）赤牛嶽（九、四五二）の支脈が出て居る。黒部五郎嶽から南に笠嶽（九、五六二）の支脈が出て居る。以上は北高嶺の全部である。

　御嶽の東に、木曾駒ケ嶽（九、七五六）寶劍嶽（九、六七九）空木ケ嶽（九、四五二）南駒ケ嶽（九、三七九）などが、數里の長さに連つて居る。これ中央高嶺の全部である。

　中央高嶺の東に遠く白峯北嶽（一〇、八六五）白峯間ノ嶽（一〇、五二五）東嶽（一〇、三八二）赤石嶽（一〇、二九六）荒川嶽（一〇、一七五）鹽見嶽（一〇、一一四）仙丈嶽（一〇、〇〇八）白峯農鳥嶽（九、九八五）聖嶽（九、八二八）甲斐駒ケ嶽（九、四八六）鳳凰山（九、三七四）などが塊まつて居る。これ南高嶺の全部である。

　一萬二千四百六十七尺の富士山は、超然として天外に玉座を占めて居る。その前に八ケ嶽（九、五四七）がある。金峯山（八、五六三）國師嶽（八、七一二）甲武信嶽（八、一九五）朝日嶽（八、五一七）などが、八ケ嶽の左に連つて居る。近く雲の海の中に蓼科山（八、三四九）がある。淺間山（八、二二八）がある。妙高山（八、〇七二）がある。低いけれども、近いから高く見える戸隠山（六、三〇六）五地藏山（六、五八四）西岳（六、七一六）乙妻山（七、六四〇）高妻山（七、七六二）の連山がある。御嶽の西に遠く加賀の白山（八、九一七）が、雲の海に長鯨の如く横はつて居る。以上の山々に日光白根山（八、五〇六）日光男體山（八、一九八）を加へたら、日本の高山は盡きるのである。

　孔子は五千尺の泰山に登つて、天下を小とした。浩然の氣を養ふには、山の頂より眼を放つに限る。私は日本を小さい島國と思つても、槍の上から、日本中の高山を見渡して、日本も馬鹿にならぬと思はざるを得なかつた。前を見た。後を見た。右を振り向いた。左を振り向いた。私の目も心もくる／＼廻つた。昨夜五六尺四方の石窟の中に小さくなつて寒さに顫へた身が、今日は暖い日の光に融けて、日本中に擴がるかと思つた。

一〇　同（其七、脚下の雷雨）

　二時間も槍の上の眺望に耽つた。槍の肩から、少し下つた處で、二三人の登山者に逢つた。其三人目に、小野寺楠一郎氏が居た。昨日穂高の上で相逢つたが、氏は梓川を溯つて來たので

ある。下の方を見るとあそこにも二三人、又あすそこにも四五人、都合數十人、數十町の間に散在して、山が俄に賑やかになつた。石室へ戻つて、殘つて居る食物を食ひ盡し、荷物を纏めて下つた。昨夜身を暖めて呉れた毛布が、今日は大なる邪魔物になつた。坊主小屋を過ぎて、雪溪をすべつた。お花畑を踏んだ。槍の上に二時間も居ようとは思はない。あまり遲いので、心配して義作君が迎ひに來てくれて、重荷がおりた。馬場平の槍澤小屋へ着いて、上高地から他の人夫に托した荷物にも逢つた。ゆる〳〵休んで、午食して、十一時四十分に發足した。

三十分で、數日前に通つた『槍どう』へ出た。いよ〳〵上高地の仙境に別れるのである。溪流に對して、ゆつくり休んだ。白い蝶が一つ來て、私の肩にとまつた。一寸飛んだが、また來てとまつた。莊子は夢に蝶となつたが、私は眺めて居りながら、蝶になつた。上高地は蝶までも、神の心である。人を恐れない。下界の蝶も、もとはこのやうであつたであらうが、人間といふ魔物の爲めに、神の心を失はざるを得なくなつたのである。

さらでだに立ちさり難き神の國蝶きてとま 我肩の上に

二ノ俣の溪流を溯り、圓形の虹を見た『池』を過ぎ、中山峠で、數日前の路と別れて、東に下り、一ノ俣の溪流を溯り、更に其支溪を溯り、溪盡くると共に、常念小屋に着いた。午後四時十五分であつた。

こゝは大天井連峯の頂であるが、海拔七千八百二十尺で、連峯上の凹處である。すぐ南に常念嶽が崛起して、富士の形を爲して居る。高さは大天井連峯の第二流であるが、兩肩が低くて、地盤が廣いから、高く且つ偉大に見える。その頂上と常念小屋との間は、海拔千二百九十尺の差がある。石が重りあつて居るが、穗高のやうに動かぬ。傾斜も急でない。處々に這松が這つて居る。私は一時間で頂上に達した。近く西に槍、穗高の連峯が見える。大天井嶽から見た時は、槍も、穗高も、まだ他人であつたが、踏破してからは、友人になつた。殊に穗高でも槍でも一夜の身を托したから、親友のやうに思はれる。嬉しい。なつかしい。殘照を受けて紅に、黄に、紫に、いろ〳〵の色になつた雲の衣を纏うて、槍も踊つて居る。穗高も踊つて居る。その踊が千變する。萬化する。寸時も停止しない。世にも面白い夕の光景であつた。

下りてくると、十三夜の月が白く常念嶽の上にあつた。信濃の平地には、黒い物凄い雲が滿ちわたつて、雷鳴がして居た。私は却下に雷鳴を聞き、頭上に明月を仰いで、一夜を常念小屋に過した。この小屋は營業して居る。百人内外は暖かに眠ることが出來る。この夜の相客には、成蹊實業學校の生徒十三人を

つれた同校の先生の梅地愼三氏があつた。

下界には夕立すらし足のもと黒雲さわぎいかづち轟く

次の日、一ノ澤の溪流を下つて、いよ〳〵私は日本高嶺の堂を辭した。穗高驛から汽車に乘つて、根據地の大町に戻つて、善作君と別れた。加藤氏に逢つて、私は天上の消息を傳へた。加藤氏は下界の消息を傳へた。三男が一高に入つたとの消息が、東京から來て居たので、斷酒を解いて、一杯傾けた。

二　日本高嶺の室（其一、雲の戰）

日本高嶺の門に及ぶのみならず、堂にも上つたが、これから愈日本高嶺の室に入らうとするのである。即ち劍に登らうとするのである。門の白馬なら、案内の人夫が無くても間に合ふ。天幕は要らぬ。食料品一切の用意が無くても好い。堂の槍でも、上高地から上下するだけなら、矢張さうである。然しこれからは、さうは行かぬ。人夫が要る。食料品が要る。天幕が要る。カンジキも要る。カンジキが無くては、劍嶽には登れないのである。

カンジキは木と鐵と二通りある。いづれも草鞋の底にくゝりつけるのであるが、木の方は冬に雪の上を歩くに用ゐる。これは雪に踏ん込まぬ爲めのものである。足の三倍もあつて、圓い形をして居る。鐵の方は夏に雪溪を上下するに用ゐる。これは凍つた雪の斜面に辷らぬ爲めのものである。足の半分ぐらゐで、鐵輪から大きな釘のやうなものが三本出て居る。私は大町で鐵のカンジキを買つた。

私は天幕を用意して居たが、私の天幕は兩側に三枚づゝ接ぎ合せて、尖つた屋根を地に卸したやうに仕立てるものであつて、かさばらぬから、持運びには都合が好い。分離することも出來る。一人の場合は、兩側一枚づゝでも間に合ふ。平地に張るには、都合が好い。山でも土の山なら、張れるが、石の山では張り難い。對山館の『高嶺』が、私に圓錐形に仕立てる天幕を貸して呉れた。重さが三貫もあつて、分離することが出來ぬ。持運には人夫を要するが、天幕としては、この方が完全である。

加藤氏と別れて、同行は二人の人夫だけである。往復十日と見積つて、四十足の草鞋を用意した。草鞋だけでも重荷である。米は一斗だけ買ひ入れた。これは立山の室堂までの食料である。室堂で新に買ふつもりである。副食物としては、梅干、くさやの干物、干瓢、味噌、砂糖、牛肉の鑵詰、これだけである。別にウイスキーを買つた。これは殺生小屋の未練が頭をもたげたではない。昨日の祝杯が後を引くでもない。高山に登るに、ウイスキーを携へねばならぬことは、登山者の心得の一箇

餘となつて居るのである。風雨雲霧などの爲めに困憊し切つて、氣が遠くなつた時には、ウイスキーは人を蘇生せしむる靈力を持つて居る。普通の疲勞には砂糖が妙藥であるが、疲勞の極に達した時は、ウイスキーの外に、妙藥が無い。下戸でも高山に登るには、ウイスキーを携へねばならぬ。飲用にするのでは無い。藥用にするのである。私は東京から携へて行つたが、穗高縱走の時は既に盡きて居た。なほ私は寶丹と絆創膏とを携へた。ウイスキー、寶丹、絆創膏、これで山上の萬病を治するつもりである。も一つ、蛇頂石がある。これは毒蟲にさゝれた時に用ゐるのである。

人夫の一人は、赤面(つら)であるから、赤鬼と名付け、他の一人は青面であるから、青鬼と名付けた。赤鬼は三十四歲、青鬼は三十歲である。赤鬼は丸い目をして居る。快活で、能くしやべるが、おつちよこちよいである。青鬼は細長い目を　て居る。おとなしくて、無口であるが、深切であつて沈勇があると、一目直に見て取つたが、日が重なるに從つて、北質を露はした。

八時十五分大町を發足した。氣持のよい晴天である。九時三十分鹿島川に架れる大橋を渡つて、少し行くと、路が二つに分れて居る。左は葛温泉への路で、高瀨川を溯るのである。右は針木峠を越えて、立山方面へ行く路で、籠川を溯るのである。私は右の路を取つた。

大出といふ小部落に、西正院といふ廢寺があつて、遠山品右衞門といふ男が少しばかりの雜貨を賣つて居る。休息して茶を飲んだ。この人は黑部の主と云はれて居る。冬は北高嶺を獵して廻り、夏は黑部川畔の小屋に住んで、岩魚(いはな)を釣り、一生を高嶺に過した。こんな剛の者でも、年には、かなはぬ。二三年前から、獵も釣も罷めたとの事である。年を問へば、七十と答へた。十二三の小娘が來て、『おぢさん、しやぼんをおくれ』と云ひながら、疊の上へあがつて、自分で取つて行つた。

籠川の左岸を溯つて、溪谷に入つた。山と山との間が數町もあつて、川原が廣い。大町平原が後に見え出した。上るとなしに上つたのである。二人の青年が二人の人夫をつれて來るのに行逢つた。人夫はいづれも二十歲前後であらう。ひよつこばかりだ』と云つて、赤鬼は一寸舌を出した。左にも、右にも、支溪がいくつもある、本溪の川幅がだん／＼狹くなり、水の分量がだん／＼少なくなる。針木峠の雪溪が見え出した。午後四時四十分大澤小屋に着いた。人夫が晩食の仕事をする間に、私は數十間下つて、川原をぶらついた。夜に入つて、七月十五夜の明月を木の間に仰いだ。

明くれば、晴天である。六時二十五分、私は獨り先づ發して、

二十分で雪溪の下に達した。雪溪の底から溪水が滾々と流れ出して居る。顧ると祖父嶽が金字形を成して天を摩して居る。火を焚いて待つて居ると、赤鬼靑鬼が來た。七時二十分から、雪溪を登り始めた。鬼は荷物が重いから遲い。私一人になつて、振り向いても鬼が見えぬ。三人の靑年の下り來るのに逢つた。後に一人の人夫が居た。その人夫が私に向つて『何處へ』と問ふから、『劍』と答へると、じつと私を見入つて、『私は長次郎です。劍は難儀ですは。大事にして下さい』と云つて、別れて行つた。長次郎の名は豫てから知つて居た。越中の人夫の剛の者である。始めて劍ケ嶽の長次郎谷を發見した人である。その名は劍ケ嶽と共に不朽である。身體は大きくて、高い。年は四十あまりに見えて、柔和な顏付である。『劍は難儀ですは。大事にして下さい』の一語が、神託のやうに聞えた。

九時二十五分、針木峠に達した。海拔八千三百八十五尺である。大町から立山方面へは、東から西へ行くやうになつて居るが、こゝの峠だけは、北から南へ越すやうになつて居る。東には蓮華嶽が聳え、西には針木嶽が聳えて居る。針木嶽は少し高いが、小さい。蓮華は少し低いが、大きい。靑鬼に晝飯の仕度を賴んで、私は赤鬼に導かれて蓮華嶽に上つた。初は這松の中を泳いだが、後には駒草の多い石の峯をいくつも上下した。一時間で頂上に達した。北は針木嶽から白馬ケ嶽まで、峯また峯が續いて居る。南は烏帽子嶽から槍ケ嶽まで、峯また峯が續いて居る。白馬の果が越後の親不知になるのである。西は直徑二三里を隔てゝ、立山連峯が見える。南の藥師嶽は雄大である。北の立山は俊秀である。二山の間には、五色原がある。ザラ峠がある。鬼ケ嶽がある。龍王山がある。劍嶽は見えなかつた。

又一時間かゝつて、峠に下りて、午食した。こゝは信濃と越中との界である。越中から雲が押寄せて來た。信濃からも雲が押寄せて來た。珍らしや、雲が戰を始める。聲は立てないで、數萬の雲兵が、兩方から怪手を振りかざして來る。どうなることかと見て居ると、越中の雲兵が信州の雲兵を突倒し〳〵、峠を越えて、信濃へ流れ込んだ。天地混沌、赤鬼の赤も消え、靑鬼の靑も消えて、唯薄黑い一塊物になつて仕舞つた。

一二　同（其二、籠の渡）

針木峠から南へ溪谷を下ること一里、蓮華から出る溪水を合する處から西に向つた。午後五時、南澤が南から落ち合ふ處に至つて、天幕を張つた。三四町四方も平らからで、砂が白い。山の傾斜が急でないから、洞中の天が狹くない。駒鳥が啼く。嶽雀が啼く、鶯が啼く。杜宇が啼く。溪流の音も音樂的である。

西方が開けて居て、立山が見えた。十六夜の月が、その頂を明かに照らした。

圓錐形の天幕の高さは一丈に餘り、底は直徑一丈もある。七八人は横になることが出來る。くゝつた紐をはづすと出入が出來る。一尺四方の窓から、空氣が自由に出入する。その窓には蓋が外に向つて斜下するやうになつて居るから、雨になつても、降り込まぬ。中央に金屬の棒を立てるのであるが、其棒は押込めば、三尺ばかりになる仕掛になつて居る。その底が深く地に入つて居なくても、頂から三方へ綱を出して、支へてあるから、如何なる烈風でも、綱の切れぬ限りは、天幕の倒れる氣遣はない。小屋に寢るよりは、この天幕に寢る方が、却つて氣持がよい。四十足の草鞋の中のいくつかゞ、私の枕となつた。私は平生書物が無くては眠られぬ。蒲團の中に入つて、書物を讀む。讀み疲れて、自然に眠る。電燈は付けばなしである。然るに終日足を勞すると、書物が無くても眠られる。今の人は頭ばかりを重んじて、足を忘れて居るが、頭寒足熱は人生の原則である。意識的に、無意識的に、頭寒足熱の要領を得た人は、長生もする成功もする。足を忘れた人は、幽靈である。幽靈では、世に榮える筈が無い。ちと天幕の御利益に預るが好い。僅々二三日では不可ぬ。一週間以上になると必ず頭寒、足熱の要領が得られるやうになるのである。

午前四時十五分に目が覺めた。二十分ばかり經つて、駒鳥が啼き始めた。天はなほ暗い。駒鳥は朝一番早い鳥である。七時半、日が當り出して、鶯が啼き始めた。南澤から黑部の本流までは、殆んど路が無い。岩を傳つて、溪流をあつちへ渡り、こつちへ渡る。渡るべき場所には、小石を積重ねて、目印にしてある。一時間半も、この溪谷を縫つて、九時五分に黑部川に達した。水の幅は三十間もある。右を見ても廣い。左を見ても闊い。どちらからも、山が迫つて居ぬ。水が平らに、のんびりと流れて居る。懸崖から懸崖へ、四本の銅線を一つにして、引渡してある。それへ幅一尺、長さ二尺ばかりの板を四本の銅線で、ぶらさげて、上には滑車を設けてある。もとは籠であつたであらう。今でも籠の渡と呼んで居る。私は先づ之に乘つた。川の中央までは、つる〱と無造作に進んだ。それから上りになる。手に力を引れて、上の銅線を引張らねばならぬ。水面までは七八間もある。水が清くて、魚の游いで居るのが見える。休んでは進み、進んでは休む。休むと魚を見た。進まうとすると、銅線の二三間先きの方の赤蜻蛉が先きへ飛び移る。私が進めば、蜻蛉も進む。蜻蛉と魚とが、籠の渡に興を添へた。崖に近づくに從つて、手の力を要することが多くなつたが、それでも私は敷

島一本喰ひ切らぬ間に渡り終つた。さつと十分間かゝつたであらう。二人渡るなら、二十分かゝる。三人渡るなら、三十分かゝる。私の後で赤鬼が渡つたが、帽子を對岸に忘れて來た。徒渉して取つて來た。青鬼は別に上流を徒渉した。平の小屋に小憩した。これは黒部の主が本陣にしたものであつた。

一三　同（其三、北高嶺唯一の樂園）

越中澤を上り、刈安峠を右に越えて、中の谷を上り〳〵て、午後二時五十分ザラ峠に達した。これから西へ下つて立山温泉に一泊すれば、翌日は富山に達することが出來る。富山から立山温泉、平の小屋、大澤小屋に三泊して大町へ出られる。越中を領して居た佐々成政が、天正十二年の冬、近臣數人を連れて、こゝを通つたことがあつた。それは織田信雄と豐臣秀吉と不和になつた時、織田方の成政は、德川家康を説かうと思つて、こつそり濱松まで出掛けたが、家康が既に秀吉と和を結んだ後であつたので、空しく歸つたのであつた。明治になつて、舊金澤藩士がこゝへ路を通じたが、後、廢れた。三宅雪嶺博士は學生の頃、夏休みに郷里の金澤への往復に、この路を取つたさうであるが、今は普通の旅人は通らなくなつた。私は二十年前立山に登り、立山温泉に宿したことがあつて、その時この路を通らうと思つたが、案内者を雇ふだけの雜錢が無かつたので、思ひとまつた。その時の思を今日一二里だけ除きて、遂げたのである。温泉まで下れば全部遂げるわけであるが、それはまた後廻しにして、ザラ峠のすぐ南の五色原に登つた。

午後四時に歩を停めて、天幕を張つた。附近には這松が多い。雪田の水がちよろ〳〵流れて居る。白山一華の白、南京小櫻の紫、深山鹽釜の紅、栂櫻、兎菊の黄、這松や草の葉の青の中に、自然の模樣を作つて、眞に五色原の名に負かぬ。立山連峯の頂になつて居て、西端には鷲、鳶の二山が一寸頭を出して居るだけで、東も、南も、北も、ひろ〳〵と見渡される。東に傾斜して居るが、極めて緩である。南北に凸凹はあるが、さまでの高低は無い。東二三里の外には、後立山連峯が見える。越中から云ふと、立山連峯の後になるから、後立山連峯といふのである。その、連峯の中で針木嶽が最も高く尖つて見える。連峯の隙間から、八ケ嶽が見える。烟を吐く淺間が見える。南は槍ケ嶽が野口五郎の後に槍を立てゝ居る。北は立山の東、龍王の間に光つた頭を出して居る。西端に上ると、立山温泉が脚下に見える。五色原は北高嶺唯一の樂園と稱せられて、東嶺踏破者の垂涎する處である。

『霧小便が來た』と云つて、赤鬼が先づ天幕に入つた。急に霧

が來たが、其霧は滴を帶びて居るのである。『霧小便』は忽ち止んだ。青鬼が薊を採つて來て、味噌汁にして食つた。夜に入つて、十七夜の月が明かである。近く雷鳥が頻りに『ぐい〱』と啼いた。

一四　同（其四、二十年ぶりの立山）

午前三時半に目が覺めて、寒暖計を見ると、華氏の五十度であつた。四時半になつて、青鬼が起きて、火を焚いて、呉れたので、好い氣持になつた、嶽雀が啼き出した。日が出た。滿目の天上の花は、露に一層光つて、生々して居る。

目もあやに露も色ある花畑明けなんとして嶽雀啼く

八時十五分發足して、二十分でザラ峠に下り、北に鬼ケ嶽を攀ぢて、十時十五分其頂に達した。午食して、十一時三十分發足し、三十分で、龍王山の頂に達した。十二時四十分淨土山の頂に達した。いよ〱立山の一部に達したのである、脚下に室堂が見える。地獄谷の熱湯が見える。雪溪が白く、ミクリガ池が青い。南はこの淨土一帶の山、北は大日嶽一帶の山、東は雄山、大汝山、別山に取り圍まれて、立山の懷が廣い。花崗岩に噴火したのである。

下つて雄山との鞍部の一ノ越から、少し室堂の方へおりた處に、少しばかりの平地を見出したのは、一時四十分であつた。直に天幕を張つた。米を買はねばならぬが、外交の衝に當るには、青鬼よりも赤鬼が適任である。私は赤鬼と共に二時から發足し、雪溪を横斷して、室堂に至つた。赤鬼は米を買つて、すぐに引返した。私は八町下つて地獄谷を訪うた。熱湯の沸騰して居る池もある。靜に溫湯を湛へて浴することの出來る池もある。烈しい音して硫氣を噴く岩も少くない。立山は噴火山とは云へないが、噴火の餘勢が殘つて居て、日本高嶺に一種の壯觀を添へて居る。

戻りに室堂に立寄つて、祠官室を訪ひ、二十年前登山して世話になつたことを謝し、佐伯茂治氏に面會を求めると、『東京に出て居る』といふ。『他に、當時の祠官の方は居られぬか』と問ふと『誰も居らぬ』と答ふるのみで、とりつく島がなく、大に失望して、天幕に戻つた。私の二十年前の立山登山は、私の最も苦んだ登山であつた。私は人夫を雇はずに獨りで、富山方面から登つた。室堂と不動堂との間で、日が暮れた、雨が甚しく降り出した。風も強い。咫尺辨ぜさる闇となつた。闇に案內を知らぬ室堂に向ふのは無謀である。通つて來た不動堂には掘立小屋があつて、水を貯つて居るから、掘立小屋へ引返した。通つて來た路であるが、闇では盲目である。路かと思つて進め

ば、木で塞がれるので、失望して引返す。又塞がれて、又引返す。幾度も岩に轉んで、兩手の先は血でぬら／＼する。胸の時計まで破損して、時がわからぬやうになつた。洋傘の骨は風に折られる。私は洋傘を頭の上にすぼめて巖に踞し、このまゝ一夜を明かさうとすることは三度に及んだが、寒さと饑餓と不安とに襲はれて、のそ／＼歩かざるを得ぬ。歩くといふよりは、寧ろ這つた。手に草鞋がさはると、さては人の通る路かと思つて喜んだ。やつと彌陀ケ原の草原へ出てからは、轉んでも危險がなくなつたが、何處に掘立小屋があるやら、方角がわからぬ。小屋のすぐ側を通つて居ても、小屋が見えぬ。幸に小屋の主人が私の足音を聞きつけて、火を點じたので、小屋がわかつた。『この眞夜中に、人間がおりてくる筈が無い。天狗かと思つた』と云つた主人の言は、今でも耳に殘つて居る。翌日登り直して、祠官の佐伯茂治氏に優遇せられ、室堂の祠官室へ入れられて、世にも嬉しかつた。今度は人夫をつれて、天幕を用意して居るから、祠官室に優遇を望まぬが、それでも祠官が昔なじみだけに『まア話して行け』ぐらゐの事をいふかと思つたのであつた。

霧小便が本降となつて、日が暮れた。天幕に當る雨の音を聞きながら寢に就いたが、右腕が冷たいので、目が覺めた。起き上つて、小さな小田原提燈に火を點じた。右の肩から腕へかけて、洋服が濡れて居る。シャツも濡れて居る。平地と云つても、少し傾斜があつたので、天幕の外に雨を導く小溝を拵へて置いたが、溝の不完全な爲め、雨が流れ込んだのである。天幕の内へ小溝を拵へて流れ込む雨水を幕外へ導くやうにした。時計を見ると、まだ十時半である。寒暖計は五十八度である。又横になつた。右腕の冷たさが、不快でたまらぬ。身體がぞく／＼する。よし／＼、ウイスキーを一杯藥用した。

夜が明けても、雨が降つて居る。火を焚くことが出來ぬ。飯を拵へることも出來ぬ。昨夜の餘りの飯と私が室堂から買つて來たパンとで、朝食を濟ました。數十歩の外をがや／＼云つて、人が通る。窓から覗くと、百人あまり續いて居る。昨夜室堂に宿つた信者たちが祠官に導かれて、雄山に參詣するのである。又二時間ばかり經つて、がや／＼音がする。參詣から歸るのである。信者が歸つて了つてから、何の音もせぬ。唯雨が天幕を叩くのみである。うと／＼して居ると、幕外に人の聲がするので、起き上つた。室堂から祠官が使をよこして、私を迎ふるのであつた。喜んで之に應じて、天幕を收めて室堂に赴いた。

二十年前の祠官は居なかつたが、氏子總代として詰めて居る人の中で、佐伯小源太といふ一老人が、二十年前にも詰めて

て、私の事を知つて居た。赤鬼青鬼は普通の信者と群居し、私だけ祠官室に迎へられた。祠官室の隣りに、幕を張つて、築地宜雄、中村左衛門太郎、國富信一、今道周一、川上宜孝、山崎隆壽氏の中央氣象台の一行が陣取つて居た。その中に三中の正木助次郎氏も加はつて居た。夜、その一行に招かれて、ライスカレーの御馳走になつた。

立山は北高嶺唯一の靈山である。富山方面から上下するやうになつて居る。千年の前、佐伯有頼が開いたのである。越中の男子は十三歳になると、何人も登山して、始めて一人前の人間になると云はれたのであつた。今も毎年四五千人の信者が登山する。佐伯茂治氏が東京に出張して、講社を設けて居るので、東京からの信者の登山も多くなつたとの事である。室堂は享保年間に前田家の建てたもので、幅四間長さ十間、大きな材木をつかつてあつて、がつしりして居る。

明くれば、霧は掛つて居たが、雨は霽れて居た。午前八時室堂を辭した。天幕を張つた跡を右に見て、一ノ越に達したのは、八時五十分であつた。天にも昇る心地して、二ノ越、三ノ越、四ノ越、五ノ越を經て、雄山の絶頂に達したのは、九時四十分であつた。絶頂は尖つて、雄山神社がある。天の窟戸を開いた手力雄命を祀つてある。乃木大將の『雄山神社』と書いた額が掛つてゐる。東郷大將の『敬神』と書いた額も掛つて居る。この日は霧に妨げられたが、眼界は越中平原と日本海とが加はつて、槍ケ嶽よりも廣い。雄山、淨土山、大汝山、別山、劍嶽の五山を總稱して、立山と云ふのであるが、雄山が盟主であつて、雄山の事を立山とも云ふのである。五萬分の地圖では、雄山の海拔が劍嶽より少し低くなつて居るが、雄山の最高峯には、雄山神社があつて、三角點を設けることが出來ぬ。それでずつと低い處に三角點を設けたら、海拔が低くなつて居るのであつて、實際は劍嶽よりも高くて、一萬尺に餘つて居ると、立山の祠官は主張して居る。私の少年時代では、日本第一の高山は富士山、第二は加賀の白山、第三は越中の立山と云はれて居たのである。今の測量では、立山は一萬尺に接近して居るが、白山は九千尺に足らぬ。臺灣を除いて、富士山を第一の高山とすると、南高嶺の北嶽が第二の高山である。それから間ノ嶽(南)槍ケ嶽(北)東嶽(南)赤石嶽(南)奧穗高嶽(北)槍高嶽(北)荒川嶽(南)鹽見嶽(南)御嶽(北)仙丈嶽(南)北穗高嶽(北)乘鞍嶽(北)農鳥嶽(南)劍嶽(北)立山(北)といふ順になる。立山は十七番の高山である。然し山の價値は必ずしも高さのみには關せぬ、八千尺以上もあれば、先づ高山である。立山は稱名、常願寺の二流がある。稱名の大瀑がある。山上に方一里の彌陀ケ原がある。地獄谷があ

る。雪渓がある。立山温泉がある。近く五色原がある。日本高嶺の室の劍嶽も、廣義の立山の一部分である。雄山神社の神嶽がある。日本北高嶺は單に此立山を富山方面から登つてゐるだけでも、天下第一流に位する名山の價値がある。

一五　同（其五、雪溪の三日）

雄山から北に上下して、十時二十分大汝山に達した。なほ北に上下して、十二時五分別山に達した。頂上は砂地で廣い。雪田がある。其半が池になつて居る。池畔に小さな祠もある。こゝに午餐して、一時間半も休息した。唯空しく休息したのではない。霧と根くらべして、眺望を縦にしようとしたのである。身の近くには霧は無いが、雄山は霧に隱れたり、現はれたりする。後立山連峯の上部は霧が開けない。それはどうでも好いとして、私は劍嶽を見たい、劍嶽は北に峯つゞきになつて居るが、淨土山、雄山、大汝山、別山が相連るやうには連つて居らぬ。離れても居らぬが、殆んど獨立して居る。それが半以上は霧に蔽はれて居る。下に黒い巖巖が現れて居る。雪溪が二つ三つ現れて居る。それらの雪溪が劍澤の雪溪に合して居る、その劍澤の雪溪は劍嶽と別山との間の溪谷を埋めて、東北の方に向つて遙に斜下して居る。霧が下から剝げかゝる。嬉しやと思ふと、又霧がさがる。又剝げた。又さがつた。じれつたい。敷島はのべつに不平の氣を吐いた。もう思ひ切らうかと幾度も思つたが思ひ切らなくて好かつた。とう／＼霧が兜を脱いで、劍嶽の全豹が現はれた。

あゝ、何といふ、雄姿を盡した山であらう。下部は綠樹を帶びて居るが、半以上は眞黒い巖が劍を立てゝ居る。雪溪が幾條も頂に達して居る。全山の何處を見ても、力がある。山全體にも力がある。山の英雄と云はうか。山の豪傑と云はうか。『秋風に草木の露を拂はせて、君が越ゆれば關守もなし』と、梶原景季が白河の關で詠んだ歌にても知らるゝ如く、三十萬の大軍を率ゐて、奥州に殺到した源頼朝の威勢を、山に寓したら、この劍嶽になるであらう。アルプスの雪を越えて、羅馬に殺到したハンニバルの猛勇を、山に寓したら、この劍嶽になるであらう。造化の手は、えらい力を發揮したものである。凡そ天下に山は多しといへども、人を威壓する劍嶽の雄姿は、またとあるまいと思つた。

雄山から別山に來るまで、絶えず左に室堂を見下した。劍嶽を見たので、その室堂と別れ、カンジキを用ゐて、劍澤の雪溪を下つた。平藏谷の雪溪を左に仰ぐと、『こゝからも劍嶽に上れるが、[illegible]りにくい』と赤鬼が言つた。午後三時十分、長次郎谷

の雪溪の入口に着いて、山壁膚寸の地に、天幕を張つた。この一點を除いては、前後左右、どこにも天幕を張る地が無いのである。洞中の小天地、上を見ても雪溪天に朝して居る。横を見ても雪溪空を塡して居る。下を見ても、雪溪の果が知れぬ。劍澤の雪溪の幅は、百間ばかりもある。長次郎谷の雪溪の幅は、四五十間もある、世にも雪溪の壯觀を極むる處である。天は霽れて碧玉の色をして居る。山壁の樹を帶びた處は綠で、骨を露した處は黑い。日に照されて、じつとして居ると、暑くもない。寒くもない。嶽雀と鶯が掛合で啼く。白い雲がをり〳〵おとづれる。『天氣で嬉しいなア』と、無口の青鬼が言ひ出した。『山は天氣がいゝ』と、赤鬼が合鎚打つた。何處かで水音がする。青鬼が行つて鍋に水を汲んで來た。赤鬼は嶽蕨と小さな筍とを取つて來た。『その筍は何といふのか』と問ふたら『ヘイチクダケ』と答へた。味噌汁にして、舌皷を打つた。米と味噌とだけ持つて來さへすれば、副食物の心配はない。山は下界に無い珍味を供へて與れるのである。

朝、目を覺ますと、憘しや、快晴である。嶽雀と鶯に、杜宇が加つて、合奏して與れる。鶯が箏なら、嶽雀は三味線である。杜宇は尺八である。頑石も踊り出しさうである。『劍は難儀ですは。大事にして下さい』と云つた長次郎君の語を思浮べつゝ、午前五時二十五分から、長次郎谷の雪嶽を上つた。

見上ぐれば雲井につゞく雪の溪天つ御國に行く心地する。

傾斜は急であるが、カンジキのお蔭で辷らぬ。のそり〳〵と這ふやうにして進んだ。右にも支溪がある。左にも支溪がある。中央の本溪を取つた。巨巖路に當つて、雪溪が二つに分れて居る。左の雪溪を取つた。巨巖と山壁との間は二三間しか無い。巨巖に接する處も、山壁に接する處も、雪溪が融けて、口をあいて居る。而かも傾斜は急である。左右どちらへ、よろけても、命が無い。長次郎君の注意を感謝せざるを得ぬ。一世一代の大事を取つて、無事に登つた。

筍の如く兩側に屹立して居る岩峯は、だん〳〵低くなり、小さくなる。上の雪溪もだん〳〵短くなつて、天と私との間が近くなる。七時五十五分に至つて、雪溪が盡きた。こゝは頂上であるが、絕頂では無い。手を用ゐて、左へ峻巖を攀ぢた。幾ばかりかと思ひの外、這松が這つて居る。深山[illegible]釜、栂櫻、千島桔梗などの花もある。絕頂に達したのは、八時二十分であつた。巖石の間に、三角點がある。この山は古來人の登ることが出來ぬと稱せられて居た。登つた者はあつたが、歸つたものは無いと言はれて居た。明治四十年に至つて、始めて陸地測量部の人

が長次郎君に案内して貰つて、登山のレコレードを作つた。その時絶頂に折れた錫杖があつた。熊が持つて來たものでもあるまい。昔こゝに登つた豪傑があつたに相違ない。然し師らぬ一人であつたかも知れぬ。登山のレコードが出來てから、こゝに登山するものが、ぽつ／＼あるやうになつた。門の白馬は誰でも登れる。堂の槍も、さまで困難は無い。室の剣に至つては、長次郎君の云つた如く難義である。眺望は霧に封ぜられたが、こゝの眺望は別山の上と大差はあるまいと思つて、霧との根くらべはしなかつた。空罐が二つあつて、名刺が一杯入つて居た。足駄が片足あつた、

下る方が登るよりは一層難義であつた、危險な左溪を避けて、右溪を取つた。十時四十分漸く天幕に戻つた。私は愈日本高嶺の室に入つたが、剣だけで云ふと、別山から剣を望んだら、剣の門に及んだものである。剣の絶頂を窮めたら、剣の堂に上つたものである。剣澤つゞきの雪溪を踏み盡して、始めて剣の室に入つたものである。槍にも雪溪があるが、たいしたものでない。白馬の雪溪はまづ壯觀と云つて好いが、剣の雪溪に至つては、天下無類である。北高嶺の最大特色を發揮して居るのである。

午食して、十一時半に發足した。剣澤の雪溪を下つた。雪溪中斷して、二丈ばかりの飛瀑となつて居る處がある。左の巖へ絡んで、雪溪へ戻つた。別山川が右から來り會する處から、暫し雪溪と別れて、虎杖の藪を漕つた。川原へ出て、雪の橋を渡つた。絶壁に遇つて、右へ徒渉した。又左へ徒渉した。川原の中に一大石の兀立するのを右に見て、やがて後にして、左折して、三の窓の溪谷を溯ると、又雪溪が始まつた。兩側が絶壁で、雪溪の底から水を噴いて居る。とても雪溪に取りつけさうにない。赤鬼は驚いて、唯まご／＼して居る。青鬼は本領を發揮した。一寸右崖を攀ぢ、少し行いて、崖を下り、左へ溪流を渡つて、身を躍らして、雪溪の末端に立つた。顧みて麾いた。私も赤鬼も之に從つた。雪溪に取りついたは好いが、一寸先は雪溪が橋になつて居て、下を水がごう／＼流れて居る。橋の厚さがわからぬ。厚ければ好いが、薄ければ萬事休する次第である。赤鬼は青くなつた。青鬼は思ひ切つて、『一所では、あぶない。私が渡り終るまで待つて下さい。南無阿彌陀佛』と云つて、先づ渡つた。荷物を脊負つて居る青鬼でも渡れたからと思つて、私は平氣で渡つた。赤鬼は恐る／＼渡つた。仰げば、三の窓の雪溪も天に朝して居る，やがて右の雪溪へ移つた。左へ曲らうとする處に、絶壁が相迫つて居る。『雪溪が口を開いて居なければ好いがな』と云つて、青鬼は先に進んだが、忽ち『萬歳』と

叫んだ。雪溪が口を開いては居なかつたが、口を開く處である。斜線である。漸くにして登つた。こゝの溪谷を小窓と稱するのである。雪溪が天に朝して居る。『こゝを登り切ると、早月川に下られる』と、赤鬼が言つた。右崖を攀ぢて、池の平に出た。小さな池があつて、一面に草が生へて居る。梅溪草が多い。だら〳〵上つて、午後三時二十分、峠に達した。小黑部鑛山の事務所の小屋が三四棟ある。廢鑛となつて、人は居なかつた。下つて小黑部の溪谷に入つた。雪溪を渡つて、水の流れる側に平地を得て、天幕を張つた。午後四時二十分であつた。

溪谷と云つても、上の方で展望が開けて居た。實に能く澄み切つた空であつた。夜に入つて、星の光が晝よりも明かなくらゐであつた。午後七時に眠つたが、十時半に覺めた。月はまだ東峯の上に出ぬが、西峯の上部が其光を受けて、明るかつた。寒いから、月の出を待たずに、又眠つた。

明くれば、微雨になつたが、やがて止んで、曇天になつた。午前六時に發足した。少し下ると、雪溪が盡きた。これで、いよ〳〵劍の室にも別れたのである。あゝ三日間の雪溪、私は唯天上を歩く思がしたのであつた。

一六　同（其六、猿飛の奇峽）

鑛山のお陰で、路はあるが、難路である。蛇が多い。蝮も居る。赤鬼は又青くなつた。『先へ行つて呉れ』と弱音を吐く。『蛇が恐くて、山が歩けるものか』と云つて、私が先に行かうとすると、青鬼が遮つて、先に立つた。私が續かうとすると、赤鬼が遮つた。青鬼は蝮を二つ、縞蛇や青大將を、數十も見たさうであるが、私は蝮も蛇も見なかつた。

黑部の本流に出たのは、十二時半であつた。黑部川に沿うて、路が通じて居る。下ると、鐘釣、黑薙などの温泉を經て、泊に達することが出來る。私は溯つた。猿飛の奇狹を見た。千尺の斷崖が相迫つて、二つの屛風を立てたやうになつて居る。兩崖の間は、二間とは無い。曲つて居るから、長さはわからぬ。大溪の水が總束せられて、跳りながら、すばらしい勢で流れて居る。實に美しい。又壯んである。

左から祖母谷の溪流を入れる處の一寸上の方に、釣橋が架つて居る。長さ二十間もある。幅は二尺ぐらゐである。銅線で釣つてある。橋も銅線であつて、横に板を並べてある。その板は細長くて、凡そ二尺毎に置いてある。飛石を傳ふやうに、板を傳ふのである。傳へば橋が動揺する。然し兩側に手すりの銅線があるから、それをつかみさへすれば、安全である。

釣橋をわるたと、路が祖母谷の左岸に通じて居る。祖母谷の

水も可なりに多い。路は殆んど平である。祖母谷温泉に達したのは、午後二時五十分であつた。小さな温泉宿が一軒あるが、廢屋になつて居る。家が傾いて居るのを、つつかへ棒で支へて居る。戸締りもない。奥の一間に着物が掛つて居て、食器がある。食料もある。まさか山賊でもあるまい。入口の爐を切つてある處に陣取つた。

川べりへ下りて、露天の温泉に浴した。數日間の汗を洗ひ落して、氣持が清々した。少し上の方の右から、祖父谷の溪流が合して居る。祖父谷と祖母谷と相合しても、別の名が付かずに、祖母谷で通つて居る。こゝの祖父は入婿のやうである。祖父谷の水は祖　嶽から發して居るのではない。唐松嶽から發して居る。祖母谷の水は、白馬嶽から發して居る。祖母谷が祖父谷を入れる少し上の方にも温泉が出て居て、湯氣が昇つて居た。

食後、青鬼赤鬼は出でゝ浴した。赤鬼が大に叫んで戻つて來たから　何事かと驚いたが、何事でもない。霧小便が降つて來たのである、もしや夜に入つたら、奥の間の主人公が歸つて來るかと思つたが、夜が明けても歸つて來なかつた。海拔二千七百八十八尺である。夜一時半目が覺めて、寒暖計を見ると、七十二度であつた。朝起ると、六枚だけ餘つて居た。くさやの干物が紛失して居る。赤鬼は口惜しがつて、探しまはつたが、何處にもなかつた。

午前七時發足した。數町で、祖父谷と別れて南越の山坂を登り、餓鬼山の中腹で午食し、十二時四十五分大黑鑛山に達して米を買つた。唐松峠を越ゆる頃、雨になつた。八方山に達したが、展望は利かなかつた。少し下ると、鑛山用の掘立小屋がある。無斷で借用することにした。午後五時であつた。

食器もある。五六人分の蒲團もある。燃料もある。唯燃料だけを使用した。雨を聞きながら眠つたが、午前二時起された。鑛山の人が男二人、女一人『おゝ寒い』と云つて、入つて來たのである。その人達は、鑛山へ行くのである。火を起して、あたゝまつた。ぢろ〳〵私達を見た。赤鬼だけは蒲團を借用して居たので、きまりの惡い顏をして居た。別に三人が寢るだけの餘地はあるが、寢ずに、二時三十分、雨を衝いて、登つて行つた。鑛山へ着かぬうちに、夜が明けるであらう。

夜が明けても、雨が降つて居たが、午前七時發足して、八方山を下り切る頃に霽れた。平川に浴うて糸魚川街道に出た。半里ばかり北すれば、白馬の入口の四ツ屋に達する。南して飯田に至り、對山館の支店に午食した。十一時半發足した。青木、木崎の二湖は、さきに往復とも東岸を通つたから、今度は西岸を通つた。いづれも西岸は山が高くて、直に湖に迫つて居るが、

東岸は山が小さくて、湖水から少し離れて居る。東岸から見るよりは、西岸から見る方が趣がある。木崎湖の南端へ來ると、一の神社がある。神殿は再建中である。額が無いから、祠の名が分らぬ。二人の鬼に問うたが、知らぬ。聞いて呉れと、賴む。と、赤鬼は、はにかんで、村人に聞かうとせぬ。靑鬼が聞いて呉れて、分かつた。阿部神社で、仁科盛遠を祀つてあるのである。その盛遠の城址が神社の南方にあつて、石碑が建つて居る。東久邇宮殿下御手植の檜がある。福島大將手植の杉もある。城その物は、要害でも何でも無い。後は湖水、左右は山、唯前の一方だけ防げば好いやうな地勢になつて居るのである。盛遠は承久の役官軍に屬し、蠣波山に北條朝時と戰つて討死した。春風秋雨七百年、從四位を追贈せられて、枯骨聖恩に霑うたのである。

午後五時、根據地の大町に戻つて、私はこゝに日本北高嶺の踏破を終つた。白馬に四日、槍に十日、劍に十日を費した。旅館に九泊、營業の小屋に三泊、無人の小屋に四泊、石室に二泊、天幕に五泊した。溫泉に浴したのち、四箇所であつた。白馬の雪渓一里、お花畑一里を見て、他の高山には見られぬ北高嶺の特色に感服した。その歸路の海拔七千尺の溫泉は、高山の興を添へた。穗高から槍への縱走は苦しかつたが、痛快であつた。數里の間平らに海拔五千尺の上を流るゝ上高地の溪流は、槍の價値の一半を分つものと思つた。劍を中心とする三日間の雪渓は、北高嶺の精粹である。針木峠を越えて二十年の宿志を果して、立山に再遊したのも、嬉しかつた。直立四千尺の山壁を仰ぐ中房溫泉の道中も振て居る。天上の花を集めた五色原は、眞に天上の樂園である。峯の形を云ふと、槍も奇拔であるが、私は劍の雄姿に隨喜渴仰せざるを得ぬ。百年の前、谷文晁は日本名山圖會で、能く劍嶽を描いて居る。(完)

稚兒が淵

(兒が淵傳說)

藤澤衛彦

日城東海の中、桜綱國柄野の海底、一夜頻りに鳴り動き、突如として、江の島は湧き出でた。

縁起はいふ。ただ見る、白浪、碧空に注ぎ、黒雲、滄海に垂れ、洋洋たる百灘、天地を分たず。其鶏鳴に及んで、龍女の梵樂、波間に起り、天童の曇花、遍に盡きて、孤島、海上に湧出す。今の江の島これなり。此時に當つて、天女忽ち其島に降臨したまふ。十二神將、天女を擁護し、遠近の村里、遙に此奇端を拜す。時、率川宮(開化帝)御宇六年四月の事なりと。

されば、袖が浦、袂が浦と續く浪路に行き暮れて、汐りに急ぐ介屬の群が、造化の姿麗しき圖案の種々相を片瀬の逆潮に委して、春、江の島の磯に故なく砕けそめてから驟て二千年に餘る。稚兒が淵の傳說は、その浦和の貝殼が、まだ島人の生活の貝細工に編まれ出されなかつた昔に來由される。

中古、加茂の役公氏小角、孔雀明王の法を呪し、鬼神を使つて採薪汲水の所爲を勸めさせ、白雲に乘つて出行し、變化自在であつた事を忌まれ、外從五位下韓國連廣足に讒されて、文武天皇の三年五月、伊豆國大島に流された。島の泉津の岩窟に行ひすまして、次年、遙に北海を眺むれば、紫雲靉靆として浮べるが見える。行いて雲の起る處を尋ぬるに、江の島の西山、金窟(岩屋)の中であつた。入りて止る事七日、勇猛精進にして、冥感を請ひ、發願して申さく、『われ冥應を受けて此處に來至す願はくは、天女よ、その眞身を影現したまひ、以て世間を利益せしめ給へ。』と專ら不動明王の呪を念誦した。其第七日に及ぶ夜、香雲、窟中に起り、光明、宮裏を照し、忽然として天女化現したまふを拜すれば、八臂の尊體であつたといふ。天女の妙容は告げらく、『われ、無量劫より、善方便を成して、苦の衆生を度す。昔、在化を鷲峯に收めて、跡を此島に垂る。應に知るべし、國王及び人民を擁護して、安穩を得しめんとなり。汝、長夜を利せんが爲に、わが化現を求む。實にこれ大悲者なり。』と。行者、親しく天女の生身を拜し、神教を愼み受けて、敬禮

頓首、鎭護國家の祈願の爲に、一尺八寸の利劍を金箱函二重の内院に奉納した。これ、辯財天顯現の最初であるさうだが、稚兒が淵の傳說は、そのやうに古い時代の物語ではない。

徳川の中葉頃、此島の天女を、格別無上に信仰したといふので有名な、田沼浪人逸名氏が、まだ青年時代の話である。かれ或年の參籠に、ふと、『俺は、年頃、このやうに深く信心してゐるが、どのやうな尊容の天女であるか、未だ正眞の御姿を拜んだ事が無い。どうかして一遍見たいものだ。』との大願が發し、それより只管其事を念じ奉つたところ、天女も、祈願の切なるを納受せられしか、或夜、内殿の扉を少し開き、差覗いて拜まれさせたまふた。そこに寶冠きらめき、御衣ゆらぐあたり、容貌美麗なる女體の御姿、殊には、觸らば靡かせもしたまはん風情に見上げて、青年は、潜上にも、忽ちに懸想し、日夜心をかけて戀ひ慕ひ、愛欲の思ひ頻りにして念ずやう、『あはれ、拜ませられずば、このやうの妄念も起るまじ。かく拜まれさせたまひたる上は、天女の神通もて、切なる戀を不便に思し召し、ただ一度の婚(まぐはひ)を許させて、深き煩惱を救はせたまへ。』この念願叶はずは、死も辭せざる一心に凝されて、結願の夜、天女は青年の戀を許された。『汝が祈願の切なるにもだしかねて、今宵、一度の枕をかはし遣はすべし。』と、物恥かしげに×××××、錦衣の裳を掲げ、莞爾として××××へ入り給へば、××の情愛いと細やかに、首尾殘るところなき後朝の別れ、青年は殊にそれを辛く思つた。稀なる美しの容姿は幻に輝く、えならぬ御肌の匂ひは永く我身に殘つて、戀しさ懷しさやるかたもない。『どのやうな罪を蒙るとも、今一度の逢瀨を是非に免させ給へ。』と青年は一筋に慕うて、晝夜の差別もなく念じ續けた。寬大なる哉、わが天女は、心よげに忍ばれて、再び青年の望みに委せられた。わりなく打解けたまふ御情の、嬉し、初めに增る可愛さの身悶えに、狎るゝが如き愚かしい青年は、『永久に替らぬ、誓きせぬ愛を許せ。』などと。矜りかに口說いたものだ。貪慾は天女の憎むところ、足るを知らぬ人間に交りを許した事を、天女は、どのやうに深く悔み惱まれた事であつたらう。『汝のものは汝にかへす。』と、昂ぶる怒りに、天女が青年の二度の immisio seminis を彼に打付けられた光景のすさまじさ、穢れに戰く青年のあはれさは、共に痛々しい想像の限りである、稚兒が淵の傳說は、これ程、此處の天女の品威の隕落した後代の物語でもない。

傳說は、青年が戀の時代を少しく遡る。昔、天女根本の寶宮岩屋を領する一山の總別當江島寺岩本院の一和尚も、亦一旦この天女に馴染め得たといふ。青年の上は知らず、眞言宗要帶

の老僧にまで、天女が、何故にしかく弘誓の舟の情を示されたかと疑ふを止めよ。わが江の島の辨財天女に對しては、何れの信心の僧俗も血の混亂を見た程、それ程この天女の生身が、ぞつとする美しさであつたといふ傳說を、それらの靈婚傳說が證據立てるには充分である筈だ。緣起作者はこれを豫期して、さて其處に、天女の容顏美麗にも決して述はされなかつた高僧例へば役行者小角などの奇蹟を、堂々と述べるつもりなのであつたらう。

今、靑年も和尙も居らぬ。壽命百年壽期百秋の法を呪した行者も死んだであらう。然し、江の島靈蹟龍窟は以前の如く存在してゐる。島神奧津宮を西に下り、崖に沿ふて右すれば稚兒が淵、左すれば岩窟である。深奥幽暗、每歲八月、海波打入つて汚穢を洗ふ、俗に呼ばるゝ掃除波の不思議に淸めらるゝところ天女は今猶儼然と住居されてゞあるが、常人には見られぬ。江の島出現以來、幾多僧俗の此岩窟を尋ねた者の數は知らぬが、緣起作者の說によると、兎に角、今日まで、天女が生身を拜し得たもの、役小角以來たつた八人に過ぎぬといふ。八人の遺蹟は窟內に歴然と保存せられてある。昔は崖傳ひ、中頃棧橋を崖に廻し、今隧道を拔けて窟口に下りる。窟口は南に向ひ、高さ七間、濶さ三間ばかり、窟中暗昧、土人燭を灯して嚮導するに從へば、忽ち巖壁に倶利迦羅龍の彫らるゝを見る。かくて行くこと四十餘間、橋を越えて窟は兩岐となる。これを金剛、胎藏兩界の穴と名け、ここに弘法大師の作と言はるゝ兩部大日像を安置してある。側の岩壁からは淸水が流れ落ちる、これが大師の加持水。續いて蛇形池、日蓮趺座石、空海臥石、護摩の爐、曰く何、曰く何。入るに隨つて漸く狹く、路窮る處に岩を穿ち壇を造り、小祠を建てゝある。兩部は、胎內くぐりを以て通じ、金剛界に入つて、胎藏界より歸る。胎藏界の奥また小祠を置いてあるが、窟は爰に盡くるにあらず、石を疊んで限りとするのだといふ。自分の案內者は、燭を揭げて、これが仁田拔穴だと說明した。然し、寶曆九年印行の「江島大草紙」には、『仁田拔穴、山二つより南の石壁に、昔は穴の形ありしとなり、今は無し。傳ふ、仁田忠常、富士の人穴より入りて、此山の半腹へ拔け出でたりと。云々』と見え、「江島畫圖」にも、處が違へて出てゐるから、案內者は出鱈目を言つてゐるのだ。島には今十三人の案內者がゐて、邊津宮の鳥居側詰所に屯してゐるが、此傳で、壽永何年何月弘法大師様がなどとやられるからたまつたものでない。緣起は概ね作爲の怪物に過ぎないが、江の島の如く古きに至れば、其處に何等かの暗示が潛められてある。案內者の出鱈目に至つては烏滸の沙汰だ。歷史も年代も顧みず、知るや

知らずや、彼、毎日、何百何十人かの善男善女を欺いてゐる。曾て源頼朝、北條、畠山の輩を従へて江の島に參詣された折、時の案内者が、此穴をどう説明したかは訊ね洩したが、天文十八年、北條氏康江の島廻りの條には、仁田抜穴など、口碑にも存してはゐなかつたらしい形跡があるから、抜穴傳説は、全く「東鑑」建仁三年の物語に附會した、徳川時代の捏造であつたであらう。それが、寶暦の記録に一旦『此穴今無し』となり、近頃案内者に復活さるゝとは、咄、何たる幸であらうか。

龍窟に最も緣故の深い八人といふのは、役行者の外、養老の泰澄和尚、天平の道智法師、弘仁の弘法大師、仁壽の慈覺大師、元慶の安然和尚の六人、降つて、鎌倉時代に、文覺、日蓮の兩上人であるが、八人が天女の生身を拜する緣起傳説は、大同小異であるから省く。ただ、日蓮上人此窟に籠り、石に趺坐して大度の冥感を祈り、自ら法華經を書寫して窟の内院に納むるといふもの、役行者奉納の利劍と共に、一年の事變に失はれて、假にも、今の寶物中に、其姿を見せぬといふは遺憾である。

八人の外にも、勿論多くの名僧知識が此窟　訪れ　。鎌倉五山の僧で、一時、此窟を訪ねなかつた者は甚　稀であつたとさへ傳へらるゝ。稚兒が淵の傳説は、最もこの窟詣での盛んに行はれた頃の物語である。

然し、もとより、美しいゆかしい傳説ではない。痛ましいあはかな物語である。さう、稚兒が淵の傳説は、戒めが現世に齎した醜恥の記念である。性慾といふ怪しい虐げに傷かんとした未だ世づかぬ美少年が、振袖のまゝに閉込められた悲しみの深淵である。淵には、はかなき憂ひの渦が卷いてゐる。同情が其處から湧き起るべき傳説である。

「名所之栞折」に、『江島は鎌倉の西にある孤島にして、一條の砂路を通じて片瀬に達す。巉巖絶壁、樹木蓊鬱として、云云』とあるところ、來て見れば、江の島は浪路遙かに片瀬の海に浮び、砂路ならぬ一條の棧橋によつて繋がれてゐる。棧橋の袂には澤山の網が干されてあつて、其處の砂濱に數名の漁夫が焚火をしてゐる。『稚兒が淵はどの見當になりますか。』と尋ねると、『此見當だが、島陰で見えない。』と、漁師は巉巖絶壁樹木蓊鬱の邊を指す。『どんな言ひ傳へがあるんだね。』といへば、『可かわいさうなお稚兒さんが陥つてるだ。』と漁師。

二千何年かの春、朝まだきの事である。今し、江の島を訪れた一人の沙門があつた。彼は、何の宿願かあつて、日を重ねて龍窟に參籠の身であつたが、一かど分別ありげな僧に見えた。彼は相變らず、すたすたと山を登つて行つて、山上でほつと一息ついた。見れば、まだ若々しさの失せない元氣な顔をしてゐ

る。

参道の途中、沙門は、遙に二人連の來かゝるのを見た。風俗によつて、一人は寺の兒だと知れた。侶伴の一人は餘程の老人らしい。近づくに從つて、推量通りだつた事を確めた。お稚兒は、染めた半絹の袷に、白い練絹の奴袴を穿いてゐた。唐輪に結んだ髪は水が垂れるやうに思はれた。姿はいかにも優しい。色は飽くまでに白い。じつと瞻めてゐるうちに沙門の心は亂れて行つた。容るゝ愛嬌、目元のしほに、彼はたまらなく魅入られてしまつた。魂をも奪はれてしまつた。氣味惡さうにして、お稚兒の一行は、そつと通り過ぎて行つた。暫くやり過してから、沙門は思はず身振ひした。氣が付くと、もう、お稚兒は山を下りかけてゐる。はつと思つて、彼は其後を追つて行つた。そして、お稚兒の侶伴の老人を呼び止めた。流石に、お稚兒には呼びかけにくかつたと見える。『何ぞ御用のござつてか。』と、老人は審しげに尋ねる。『ぶしつけながら御住所がうけたまはりたく……』と、沙門は懸命に答へる。一時ためらつたやうであつたが、何氣なげに、『鎌倉相承院の白菊。』と、老人はお稚兒の名をいふ。沙門は、われから『おなじく建長寺の廣德庵にて、自休藏主と申す。』と名乘つて、一禮して踵を返して行つた。

自休、それより戀慕の思ひ止み難く、いかにもして忍びよるべき便を求むれど、白菊は、絶えて諾する色もない。月を重ねて切に訴えあぐれば、白菊、せん方なく、或夜まぎれ出でて江の島に行き、扇子を渡守に託して、『われを尋ぬる人あらば見せよ。』と言ひ遺し、江の島南岸の淵、岩屋へ下る坂の巖下に身を躍らして、あはれ人生の蕾の身を、逆卷く激浪に委し終つたのであつた。

自休慕ひ來つて、その扇子を見るに、それには次なる二首の歌が記されてあつた。

白菊としのぶの里の人とはば
思ひ入江の島と答へよ。

うき事を思ひ入江の島陰に
捨つる命は波の下草。

自休、これを見て、思ひに咽び、詩一律、歌一首を詠じて、それに和し、彼も、そのまま海に沈んで死んだといふ。その詩

懸崖嶮處捨二生涯一、十有餘霜在二刹那一、
花質紅顔碎二岩石一、蛾眉翠黛接二塵沙一、
衣襟只濕千行涙、扇子空留二首歌、
相對無言愁思切、暮鐘爲レ執促二歸家一。

その歌、

白菊の花の情の深き海に
いかにもして忍びよる

ともに入江の島ぞ嬉しき。

白菊の身を投げた淵といふので、それより、その淵を、稚兒が淵（又、兒が淵）と呼ぶといふ。

今、白菊が塚は、鎌倉日金山にあり、自休の像は、西御門の法花堂にあるといふことだが、自分はまだ見ない。

俗說に、白菊、自休と通じたるに、其事、人に知られて恥かしく、二人約束して、遂に入水したといふは當らない。諸書を考へ合するに、大抵其說符合して、何の約もなく、白菊まづ身を投ぐるがやうに記されてゐる。卽ち「鎌倉物語」には『兒が淵といふは、山より岩なめらへ下りてある狙石より北の方なり。こゝを兒が淵と名付くる事、若宮別當僧正院（「江島大草紙」「鎌倉志」などは、相承院に作る。）に、白菊といふ行童あり。其形妙にして、一度、紅顏を見初めしもの、寸々の腸なり、聞くもの肝を消さずといふ事無し。かゝりける處に、建長寺の貧僧、（「大草紙」などは、建長寺の廣德庵に、自休藏主といふ沙門の山に作つてある。）いかなるひまにか見初めたりけん、胸の燃火を烟にたくらべ、思ひを田子の浦によせ、數の文積りければ、行童、情の道のわりなき方にひかされ、忍ぶ山、忍びて通ふ道もがな、一夜の情かけまほしと、心を碎きけれども、僧正の思ひ、又深き事蒼海を極め、高き事雲を凌くせり。行童、幼き心にも人知れぬ情をかくるも、僧正の法衣の一重なる思ひをやぶり、まだ逢見ぬ戀路に、あす迄の命をかこちける。この夕暮にも、亡き人と聞けば、わが命ちとせを保つとも、岩木のたぐひなるべし。しかじ、命を捨てゝ、二人の思ひのわくかたなき心の程をあらはし、又、かゝるいやしき姿に思ひをよせける情の恩、死してや報ぜんと、江島へまゐり、後生善所と祈りつゝ、かの淵の、蒼く、奈落の底まで涌返りたる浪の汀に打ちのぞみ、云云。』歌を遺して入水し果てたと見えてゐる。その歌といふものも、

白菊としのぶの里の人とはば
　おもひ入江の淵と答へよ。

とあつて、それも唯一首ほか載せてゐない。白菊の歌の第五句を、『淵と答へよ』としたのは恐らく「鎌倉物語」の傳寫の誤謬で、これは、『思ひ入り』といふ詞を、直に江にかけ、その儘江の島ゝ轉じて、卽ち『思ひ入江の島と答へよ』とした「江島大草紙」などの記錄の方が歌意が通る。歌も「大草紙」には、扇子に書き遺すことにしてゐるが、「物語」は、淵にのぞんでの辭世のやうにしてゐる。これも「大草紙」の方が、趣あつておもしろい「物語」が『汀に打ちのぞみ、硯取りいで』などとしてゐるのは如何にもわざとらしい。筋も「大草紙」のは、似ふ、昔

建長寺の廣德菴に、白休藏主といふ沙門あり、陸奥の信夫の人なり。宿志ありて、江島に參詣す。時に、山中にして美少年に逢ひぬ。藏主、これを伴ふ翁に問へば、鎌倉相承院の白菊といふ兒なりと答ふ。これに由つて、竊に通ぜん事を求むれども、絕えて諾する色なし。猶、ともかくもなりなんと、切に聞えければ、白菊、情ある者にて、せんかたなさに、或夜まぎれ出て江島に行き、扇子を渡守に與へて曰く、我を尋ぬる人あらば見せよと云ひて別れぬ。其扇子に歌あり、(此間に、例の二首の歌)と詠じて、この淵に沈めり。白休、慕ひ來て、此歌を見て思ひに咽び、一律賦す。(此間に、一律の詩。)歌に、(此間に、一首の歌。)を詠じて、また此淵に身を投げたり。これ故に兒が淵と名くとなり。云云』とあつて、至つて簡單である。後世、稚兒が淵白菊の傳說は、皆、此間に胚胎するもので、「鎌倉大觀」に『昔、建長寺の雛僧自休藏主、兒白菊の色香に迷ひ、云云』とか、「大日本百科辭典」に『古昔、雪の下相承院の白菊が、云云』などの根據は、私にはわからない。

個々の相違は兎に角、これを要するに稚兒が淵の傳說は、古僧侶が孌童を寵した事歷の、醜い耻の記念であるに論はない。白菊に、その Paederastie を拒否した憐れな犧牲者に外ならぬ。男色の事たる、もと唐來の妙味であると言はれ、最初の輸入者については、永く弘法大師の上に不名譽な疑ひがかけられてゐる。夙く支那に此事の行はれてゐた事は史乘に歷々たるところで、先づ「後漢書佞幸傳」に、『董賢字聖卿、哀帝立拜黃門郎、寵愛良、常與上同臥起』と見え、「史記佞幸傳」には靈帝、衞の珍子瑕を愛した事を載せ、詹々外史の「情史」嬖情篇には其條目四十一の多きに亙り、就中、佘大夫が擬作の疏に、『奏上欲使童子後庭誕育可廢婦人』とあるな、如何に支那に此風の大に行はれてをつたかが知られる。日本に這入つたのは勿論支那からであらうが、古く「舊約全書」の申命記にも『汝、女と寢る如くに、男と寢る勿れ。』など見えるし、希臘、羅馬の古代にも行はれた證據があるから、何處が元祖の國だかちよいと判然しない。本邦に於て最も行はれ初めたのは平安朝時代で、「拾遺集」にも、

あまた見し豐のあかりのもろ人の
君だに物を思はするかな。

など見え、その頃、禁庭に於ても行はれたらしい形跡があるが、殊に盛んに行はれたのは言ふ迄もない圓頂社會に於てであつた。本居內遠の「賤者考」は、これを、佛法渡來の後、僧の女犯を禁ずるより出でしものであらうと同情し、平田篤胤は、『名僧も陽の鍋はのぞくなり。』と眞向から嘲罵してゐる。何も

にせ、彼等の間に、一種傳統的の勢力を振つて、如何に廣く如何に永く行はれ來つてをつたかは充分に證明せらるべき記錄が輻湊してゐる。就中、高野七十那智八十と諺にもあるほど、眞言宗派のうちに、斯道の剛の者の多かつたといふことは、如何に、弘法大師傳來の傳說に、皮肉の響を與へる事であらう。貴族、武人の間に於て、此風の助長された原因は外にあるが、總て、孌童が、概して、その容姿外飾を優柔艷麗ならしめた事は何れの社會に於ても爭はれぬ事實を示す。かくて、その稚兒をして、女にもしまほしき容姿にあらしめ、以て對者の注意を喚起せしめた事は、性の自然的要求でもあつたのだ。このやうにして、美少年は、次第次第に男性的意氣を離れて、優柔なる女性を模するに努むる形にあつた。『鎌倉無宿と肩書に、島で育つた、名さへ、辯天小僧菊之助。』と、音羽屋の名乘るを聞けば勇ましいが、元を正せば、江の島の、岩本院の稚兒上り、たかが女に化けた美人局、優柔女のやうな若衆陰間の手間に過ぎなかつたものだ。

歌舞伎傳說に於ける辯天小僧でさへ、そのやうにして Urning の反映に過ぎぬ。白菊のには、最も、名さへ、姿さへ、心さへも優しい。然し、『思へば此身は寒菊の、させる眺めは無きものを、秋の野菊としたまはす、孚み立てゝ子の如く、養ひたまふ僧正の、恩義もあるに目を忍び、忍びかねたる陸奥の、信夫の里の人にしも、關の櫻と身をなして、餘所に吹くなる春風に、誘はれ行くは本意ならず。さりとて辭まばいとどしく、彼人さまの御心に、物思ひをば添ふるのみ。とても命を打捨てずば、此身があかき心根を、示さん由は無きものと、思ひさだめてかくのごと、覺悟を極め候ひぬ。』と、美妙齋か、その「少年姿」に敍した新體詞華は、彼が例の「鎌倉物語」に取材したらしいので、白菊をして、若道の情知りの如くにし過ぎた憾みがある。

由來若道に相思相愛といふ事はない。お稚兒が念者にこがるゝなどするは、好色本作者の作爲によるもの、白菊は、その心からの情に迷ふて入水を覺悟したでない。恐らくは、相承院と自休藏主との葛藤を豫期し、まだ世づかぬ稚兒の、途方に暮れて自殺したものであつたらう。これが證左を諸國稚兒が淵傳說の上に求めるに、或は、寵を他の美童と爭ひ、相互ひに軋轢した結果他を殺して己も死ぬ。さういつた意地づくから來るものなど、原因は多々あるが、皆、われから衆道のために身を果すではなかつた。

二千百九十年(享祿三年)五月十一日は、播磨國飾磨郡増位山隨願寺の會式の日であつたので、愛染堂の前で、宿坊、北谷杉の坊を始め、諸寺諸山の法印達、其他俗客の人達、遊宴して時

を過した。闌の頃、藥師寺の兒小辨は手振に、櫻木の小猿といふ兒は詩歌に、座興を助けたが、當物の事から爭論に及んだ。其時、小猿は、櫻木山の桂村新左衛門と共に、山方の人達に打擲され、宴席は忽ちに騷動した。それと見た杉の坊の執事寛憲といふ法師、日頃、小猿に心を寄せ、文を通はしてをつた者、小猿を引連れて、蔭山の山に落ちて行つたが、櫻木の小猿の悲しみと怒りは、寛憲の慰め兼ねた程に強く、たうとう、淵に身を投げて怨み死んだ。それから、その淵は、兒が淵と呼ばれるやうになつたのであつたが、此騷動が原因となつて、山の俗衆と、藥師寺方とは、一大刀杖を振ふに至つたといふ。

此傳說は、「播磨古所傳聞」にも「英賀日記」にも、詳細に記されてをることで、飾磨地方の大騷亂となつたのであるが、然も、今、口碑は、このあたり憐れの一人のお稚兒が、戀の怨みに身投げたといふ、兒が淵傳說を語り次いでをるに過ぎない。

江の島の兒が淵は、都に近く、かつは名所の地にあるので、獨り其名を高くしてゐるが、其割に似ず、事件は簡單である。諸國の兒が淵の傳說といふものは、概ね其軌を一にしてをるので、今、名のみにして、事蹟の傳はらずなつたものが多いのに白菊の場合は、優しげな詩歌が傳つてゐるので、一層その名を普遍的ならしめた態にある。

白菊の塚は、鎌倉の日金山にあつて、俗に兒塚といふさうだ。兒塚傳說にも段々ある。下總國滑川町西大須賀區字四つ谷の路傍の小林中、小祠を設けて兒塚と呼んでゐるのは、藤原師賢の子、父を尋ねて此地に至り、害に遭ふを弔ふところと、「下總名勝圖會」は記してゐるが、「廻國雜記」は、これを、白浪に害せられた稚兒の塚のやうに記してゐる。伊賀國名賀郡神戸村大字上神戸の戸世山蓮明寺の兒塚は、寺の美童の情の記念塚だと、「湯舟齋記」に見え、「舊記」には、又、「往昔、蓮明寺に、梅丸といふ兒あり。近邊に住みける男、彼に心を通はして、只管託ちけるところに、彼兒申すやう、上人を討ち候へ、其後心安く契るべしとありしかば、かの男、これに應じて、上人を射るべしと約諾す。其日に及びければ、兒は、住僧の衣を着て、一間所に臥しければ、男、これをねらひより、おしへのまゝに討ちければ、俗にてはあらず、兒を討つ。上人おきれはて、悲しく思ひ、松の木卒都婆を立て弔ひけるに、程なく、此卒都婆より、枝葉盛り茂れり。相依つて、生卒都婆と名付く。云云」などと見えてゐる。

類似の傳說で、入水者が女であつた場合には、性的關係が一變するので、頗る美しい傳說となるのが普通である。所謂妻爭ひの傳說で、諸國にも段々あり、傳說としても、かなりに古く

萬葉時代の櫻兒、桂兒など、扱ひやうによつては、立派な夢幻的劇詩が成立つであらう。就中、下總の眞間の手兒奈は、入水傳説と、その墳墓傳説とを併せ語り次ぎ、然も、その傳説みづからが、一篇の詩を成してゐるやうに見える。

眞間の手兒奈は『鷄が鳴く、吾妻の國に、古に、有りける事と、今日までに、絶えず言ひ來る、云云』と「萬葉集」に記録された勝鹿の眞間娘子で、非常な美人と見え、麻衣に靑衿をつけ、佐麻を裳にはおりきて、髮かきけづらず、沓も穿かねど錦の綾の中に包める齋兒も、手古奈にはしかず、望月のごとくかがやきわたる面に、花のやうに笑みて立てば、夏蟲の火に入るやうに、港に船の入り來るごとく、人々が懸想するとまで、歌に詠まれた。然し、手古奈は、われ故に、かうした人々が相爭ふ、その思ひを、苦しくして長らへたとて、いつまで風に散らぬ花かは、人の心を騷がせまいと、眞間の入江にかぐはしい其名を永久にとどめて、沈みはてたといふことであると、かう歌ひ傳へてくれた高橋連蟲麻呂は、その「詠ニ勝鹿眞間娘子ニ歌」の反歌に、

勝牡鹿之眞間之井見者立平之
水挹家牟手兒名之所念。

と、その處女の上を偲び詠つた。

其後の事であつたといふ。山部宿禰赤人は、一年、勝鹿の眞間娘子墓の邊を過つて、同じやうに、偲びがての歌を捧げた。その反歌の一つに、

吾毛見都人爾毛將告勝牡鹿之
眞間能手兒名之奧津城處。

手兒奈の墓は、江戸川の流、葛飾の野、共に俯視すべき國府臺の崖下、沼の東南、継橋よりは百歩ばかり東の方の、一小丘上に古樹を存し、樹下に石祠を安じて、今に參詣の人を絶たぬが、運命の同じであつた白菊の墓は、鎌倉を訪ふものに、どれだけの感興を繋がしむるか疑問である。

白菊は江の島の淵瀬に投じ、手兒名は眞間の入江に身を果した。然も、同じやうに、世間から戀ひ慕はれた身が、白菊が男であり、手兒名がかであつた事によつて、われわれの感興は、どれだけの違ひを持つかわからない。手兒名は、歌を知らなかつたが、其後も多くの人達が憧憬の的となつて、古今の歌人に稱へられてゐるに反し、自ら歌も詠じた白菊は、心にはゆるさなかつた一自休藏主の他に、今、どのやうな讃歎者を持つであらう。同情の點に於ても、かれの美しく、これの如何にあはれである事よ。思ふて江の島の龍燈の松あたり佇めば、兒が淵に渦卷く藍の色悲しく、來去幾千年の波の音も憂ひげに聞ゆる。

土佐山海經

田中貢太郎

大正九年の四月から九月の末にかけて、土佐を漫遊した私は、自分の郷國でありながら、はじめて土佐と云ふものに接した氣がする。第三者のあなた方は、土佐に對して、幾何の智識を持つてゐるだらうか、普通教育を受けた人なれば、お神さんに馬を買つて貰つて、それが出世の糸口となつて土佐の藩主を贏ち得た山内一豐、蛤を江戸から貰つて行つて、浦戸港の入口へ撒いた野中兼山、薩長の討幕運動へ横合からチヨツカイを出して政權奉還の功をせしめた後藤象二郎、薩長の惡玉官吏と結托して、巨萬の富を作つた岩崎彌太郎、それから維新の志士で阪本龍馬、中岡愼太郎、自由主義を呼號して、我國の憲政を促進した板垣退助、東洋のガンベッタと云はれた馬場辰猪、黒幕政治家として異色のあつた林有造、一年有半の著者中江兆民、數奇の文章家田岡嶺雲、叛逆者幸徳秋水、奥宮健之。鰹節。珊瑚。まあそんなものであらうと思ふ。一體土佐人は單純だ。敵でなければ味方で、敵でもない味方でもないと云ふ所謂ゆる緩衝地帶がない。それと同じやうに、土佐の事物も單純にして簡單だ。從つてあなた方の持つてゐる土佐　智識も、土佐人の私の持つてゐる土佐の智識も、それが幾らか細かくなつてゐると云ふだけであまり變つた事はない。やはり土佐人式に單純だ。

私はその土佐を今回本當に知つた。土佐は自由黨の發祥地だけに、今でも政黨熱が盛んで、セルの袴を穿いた前額のすつこけた村落政治家が、山の奥の炭燒小屋にまで黨派的色彩を着けてゐる事や、その他、人事に關して云ひたいこともあるが、爺さんと媼さんとを郷里へおいてゐて、あまり憎まれ口を利くのも得策でないから、罪のない土佐の印象と傳説の方へ話を向けやう。

土佐は地圖を擴げるまでもなく、半月なりと云へば詩的に聞えるが、本當はちび鎌の形をして太平洋に面し、東端の室戸岬と西端の足摺岬には、榕樹が生え、タモの樹、イタビ、濱牛蒡、ホウがあるなど、南洋の島嶼を髣髴さするものがある。又足摺

岬の上から見ると、直ぐ眼の下を黒潮が紺碧色をして東へ東へと流れてをり、遠くの方水平線に近いあたりを、外國航路の汽船の通つてゐるなど、南洋の孤島にゐるやうな氣がする。足摺から西になつた奥内村の海上にあるビロウ島は、その名の示すやうに、ビロウの檳榔樹と、榕樹が生え茂り、島の人の何を運搬するにも、頭へ載せてやつてゐるなどは、どうしても本物の南洋系であることを語つてゐる。その附近の海上には、ビロウ島の他に沖の島、柏島、鵜來島がある。その鵜來島は象皮病の本場で、一斗桝ほどの足首をした娘などが歩いてゐる。たにしろ、土佐の海岸は青山が聳ち潮が紺藍色の明るい色を見せて、その山と湖の具合などはどうしても南島の景趣である。

要するに、あなたがたは、海岸線に立つて見る月が、何處から見ても、又、春夏秋冬、季節によらずに赤味の強い夏の月のやうな大きな月に見えることを第一考へてもらひたい。これから高知市を中心にして、生活の様式に大阪の色彩のある、平地の尠い、南洋的な土地を想像すればよい。そしてあなた方に覺えて貰ひたい事は、戰國時代に長曾我部元親と云ふ豪傑がゐた事、四國八十八ケ所の道筋で、土佐の國内にも十五六ケ所ある札所を參詣する遍路の巡禮が、四國八十八ケ所、同行二人と書いた菅笠をかぶり、重い荷物を背負ひ、首にサンエ袋を掛け、金剛杖をついて、疲れた足を引き摺るやうに歩いてゐる事、それから貧弱な現實へ、地理的に起る白日夢の幻想を綯い交ぜて、生活の豊富を誇りながら、冥想的な眼をして安如として酒を呑んでゐる、一部人士のある事である。

高知市は水郷だ。浦戸港の入江の裾になつてゐて、町の南を水の澄み切つた鏡川が流れ、町の北には眞菰の生えた大きな川溝があり、町の中にも入江から續いた堀割の水が本町の裾にまで通じてゐる。その堀割には、石油發動の巡航船の姿が見え出してから、今はその數もめつきり減つたが、それまでは堀割を中心にして、ゴンドラにまごふ屋形船が、入江の内を往來してゐたものだ。市の入口になつた堀割の岸には、夜も晝も三味線の鳴る世界があつて、その岸の下へと着けた四人船頭の屋形船へは、其所の二階から鼓や三味線を持つた若い女が降りて來て乘つた。鏡川と堀割の口になつた洲の上には、私が少年の頃には、繪にある龍宮のやうな反り棟の三味線の鳴る家があつた。其所には今も料理屋があつて、私達は數回其所に遊んだ。洲の續きには、滿潮には水の底になる沮洳地があつて、蘆や蘭草が一面に生え、晩秋初冬の候にかけて、漢詩にあるやうな景趣が見られた。夏の夕暮の眺望も面白かつた。其所から東になつた

入江の岸に聳つた五臺山が薄すらと暮れ、市外の果から五臺山の麓へと架した長い長い青柳橋が消え、洲に茂つた芦の青葉に櫻の灯が映えた。月の夜は殊に趣があつた。鏡川の上流には、筆山と云はれた潮江山が夢のやうに浮いて見えた。奇形な瓢に似た浦戸の入江は、左右から出て來た山で絞られてゐた。漢譯して其處を孕門と呼んでゐる。私等は屋形船でその孕門を通つて港口の桂濱などへ行つた。

高知の町の大體は、町づくしで識してある『高知の松ケ鼻、番所を西へ行く。農人町、菜園場、新堀、魚の棚、紺屋町、種崎町、打ち越えて、堺町。本町八丁通しましよ。そこらで、桝形、一丁二丁三丁四丁五丁目の觀音堂でをさめた』本町五丁目は高知市の上の町はづれになつてゐた。水郷の高知市でただ一つ高いのは、高知公園の丘である。藩主の山内家が二百七十餘年間居城してゐた所で、今も三層の天主閣が木立の間にその姿を見せてゐる。南麓には縣廳、裁判所、警察、大林區署などがあり、縣廳の前の元の城濠であつた小さな堀溝の向ふには、市役所がある。梅雨の頃、その公園の上に一軒ある旅亭に登つて、新緑に掩れた市街を下瞰した趣はちよと得難い趣である。

公園の東で、もと大手口であつた入口の右側には、藩主の山内一豊を祭つた藤並神社といふ社があり、その前には、鎧を着、鎗を持つて馬に乘つた一聯の銅像がある。その銅像が東京で出來た時、私の知人の某氏がそれを見に行つてゐると、其所へ來た小學生の一人が、

『ヤア、お神さんに馬を買つて貰つた人がゐらア。』

と云つた。これは口さがない京童の捏造でもなんでもない。

高知城はもと大高坂城と云つたものだ。其所は南朝の忠臣大高坂松王丸などが、後醍醐天皇の第七の皇子花園宮滿良親王を奉じて、北朝方に當つた所で、市役所の前の大銀杏樹のある所は、その松王丸の戰死した所だ。

公園の北に當る洞ケ島山に、洞ケ島神社と云ふ有名な社がある。その社のある所は、瑞應寺と云ふ寺であつたが、明治維新後、神佛が分離した際に、廢寺となつたものである。洞ケ島神社は、その寺の住職であつた薫的を祭つたものである。寛文四年の事、山内家二代の藩主忠義公が亡くなつた際、その菩提寺になつてゐる潮江の眞如寺の住職の了谷が、その諡を選んで、竹巖院雲公龍山大居士とつけた。すると薫的が、

『岩の上に竹と云ふ字を置くは、竹の枯れる兆があるから、不吉である。松巖院と改めるがよからう』

と云つたが、了谷が用ゐなかつたので、薫的が憤つて罵詈した。奉行の孕石頼母が仲に立つて、和解させやうとしたが、

的が承知せず、反抗を續けたので、止むを得ず獄に下した。薫的は獄中生活をすること七年指を嚙み切つて、その血で白無垢の小袖に經文を寫したり、後には舌を嚙み切つて投げつけると云ふやうなこともした。そして、とうとう寛永十一年正月十日の朝、二十一日間の絶食で、趺座したまゝに眼を閉ぢずに死んだ。で、東野と云ふ弟子が、一度その屍を小高阪山に葬つたが、生前薫的の怨んでゐた者が皆不思議な死方をするとか、いろいろな迷信的な事があつたので、享保十二年、瑞應寺の内に改葬した。それが洞ケ島神社である。

高知市の傳說は他にもあるが、他國の人にまで知られて有名になつてゐるのは、播磨屋橋に關する傳說であらう。

私が物心着いてからも、播磨屋町から浦戸町へ行くに、堀割に架けた長さ十六間、巾二間の橋があつて、その橋の兩側には、小間物などを賣る店があつた。維新前までは歳暮や節句には夜市があつて、市中の一番繁華な所であつた。天保五年の頃、黑い羽織を着、坊子頭へ頰冠して、その小間物屋へ簪を買ひに來た若い僧侶があつた。五臺山の竹林寺の脇坊で妙高寺の純信と云ふ僧であつた。それは寺の近くの鑄掛師の娘に迷ふた痴情の結果であつた。

『おかしな事やな、播磨屋橋で、坊さん簪買ひよつた。』

と、云ふ浮名が擴まつた。その歌は、今

『土佐の高知の播磨屋橋で、坊さん簪、買ひよつた。』

と、修正せられ、土佐唯一の俗謠として歌はれてゐる。その播磨屋橋は明治四十年、電車が開通して國道が改築になつた時、橋も改築せられて、兩側に店も無くなり、平打の簪に擬はした唐草を付けた鐵の欄干付の橋となつてゐるが、あまり情趣がないので、元のやうな橋にすると云ふ議論が最近起つてゐると聞いた。

六月の末から七月にかけて、幡多郡を歩いた。それは楊梅の熟する頃で、私達は苺のやうな木の實を到る處で買つた。幡多郡は郡と云ふよりは、寧ろ國と云ふ感じがある。一體幡多の人は、他郡の人と比べると、理屈ぽくて、その上徹底し過ぎてゐて、ちよと厭な感じがする。しかし幡多と云つても、宿毛だけは、小野梓、岩村通俊、林有造などの人材を出した所だけあつて、此所だけは別世界をなしてゐる。

幡多の首腦となつてゐる所は中村町である。町の西端を四萬十川と云ふ大河が緩く流れてゐるが、町の高さと水面とが、あまり落差がない。そこから海岸の下田までは一里半位はあつた。私達は汽船の中で、その下田の海岸は、波が荒くて上陸す

るに不便であると聞いたので、手前の上川口から上陸して、車を中村へと驅つた。

『こんなに、稻が出來てをりましても、この邊の百姓は安心が出來ませんよ、すこし雨でも降らうものなら、すぐ水の底になつてしまひます。』

その日は稻田に交つて植えられた柳行李の材料になる杞柳の葉に、冷い風が吹いて晩秋のやうに寒かつた。車夫は四邊の稻田をつらつらと見た後に、路の左側になつた高い臺地の上を指さして、

『あの上を船が通りますからね、この邊の水と來たら、それや凄いもんですよ。』

といつた。その八月になつて、果して四萬十川始め幡多の川と云ふ川が氾濫して人畜の死傷があつた。

氣をつけて見ると、中村に入らうとする所に一ケ所、街の八阪神社の前にも一ケ所、水を防ぐ木戸の板をはめる爲めの樋が、石の面に刻んであつた。その低い中村町に、愛宕山と云ふ瓢形の丘があつて、そこには土佐一條家の代々の諸卿を祀つた一條神社がある。長曾我部を始め、土佐の土豪に迎へられて、繼嗣房家卿と共に、文明十年、岡豐の長曾我部の居城へ下向し、その翌年、中村へと移つた教房卿以來の邸宅の跡であつた。

結構を京都の御所に模して、中村御所と呼び、房家卿を始め房冬卿、兼定卿と繼いで、房家、房冬、房基の三卿は、國司の宣下を蒙つて、土佐の國司となつてゐた。兼定卿になつて四萬十川の向ふ、宿毛の手前の平田に別墅を構へ、村の娘のお雪と云ふのを寵して、それが爲めに政治を怠り、遊獵にかこつけて度々平田村へ行つたので、平田の入婿と笑はれるやうになり、これを諫めた家老の土居宗三を手打にしたので、爲松など云ふ他の家老が、兼定卿を幽閉して、家督をその子の內政卿に讓らした。それを聞いて、お雪も入水した。今、平田村の藤林といふ所の、房家、房冬、房基三卿の墓のある側の田の中に、南無阿彌陀佛と六字の名號を刻んだ石碑がある。其所には御前が波石と云ふ小溝があつて、それがお雪の死んだ所だと云はれて居る。

兼定卿は後に長曾我部の爲めに計られ、龍串に遊びに行つてゐる所を、追はれて九州に走つた。內政卿も後に長曾我部に追はれたが、二人とも人の殺す所となつた。明治皇后は、その土佐一條家の後であらせられた。教房卿は、一條禪閤兼良卿の嫡子で、一度は關白となつてゐた。その教房卿が土佐へ來たのは土佐の諸豪に推戴せられたのにもよるが、一つは、幡多は一條家の莊園で、それが應仁以來廢滅に歸してゐたのを再興する

めでもあつた。その墓は中村町の東北半里の奥御前谷と云ふ所にあつた。

私は房家卿の墓に詣つた歸りに、區裁判所の後の墓地に迷ひこんだ。其所には、十藥の花が白く咲いてゐた。ふと見ると、叛逆者幸徳秋水の石碑があつた。その側には、秋水の師匠のまたその師匠になる、木戸明の墓石があつた。木戸明は國史略の著者で北朝正統論者である稲垣松苗の門下だ。

六月の二十七日、私達は龍串行を思ひ立ち、沿岸通ひの汽船に乘つて、三崎へと向つた。その前々日の夜から霖雨模様になつた空は、その日も時々雨を送つて來た。前々日は足摺岬に遊んでゐた。清水から沿岸通ひの汽船に乘つて、先づ足摺の手前の松尾まで行つた。足摺の附近は、海にただれ込んだ山の腰が、斷岩絶壁になつてゐて、すこしの親しみもない荒涼とした姿を見せてゐた。松尾の人家などもその絶壁に石を築き添へて、無理にその上に建てたと云ふ風であつた。艀からおりて、眞砂で石畳にした路を上つて行くと、小さな社があつた。その社の背後には、周圍四尋半あると云ふ大きな榕樹が蛸根を張つてゐた。路ぶちの崖にも一二本小さな榕樹のあるのを見た。

足摺の岬端までは一里半位あつた。其所には四國八十八ケ所の内の三十八番の札所になつた金剛福寺があつた。私達を案内して行つた清水の男は、住持に私達を會はさうとしたが、住持は病氣で何所かへ養生に行つたと云つて留守であつた。寺の本堂脇には紫陽花が咲いてゐた。

もう夕方であつた。頭の小さい、布子の襦袢を着た、のつそりした年寄やら若衆やら分らない男が手引をした。岬端には燈臺があり、その背後になつた所に望樓があつた。望樓の入口には、竹を立てて鷄を飼ふやうな巣をこしらへて、それに二三羽の雉の子を飼つてあつた。寺の本堂の前から崖の方へ行かうとする路に動石と云つて廣さが二間位、高さ四五尺ある大きな石があつて、片手で押してもぐらぐらと動いた。槓杆の理屈に合つたものだらう。この傍に、一坪ばかりの窪地に熊笹の短い莖ばかりのやうになつて生えた所があつた。それは龍馬が來て嚙み切るから長く延びないと云ふので、龍馬笹と呼んでゐた。

斷崖に臨んだ大きな石の窪みに水が溜つてゐて、海水と共に滿干すると云ふので、潮干滿石。石の左側の崖の崩れから一と柄杓位の水を出してゐるやうな瀧がある。そこから海に向て呼ぶと海龜が浮いて來ると云ふので、龜呼石。

『おい龜さんを呼んでくれんか。』

と、清水の男は手引の男に云つた。

『もう、今朝、呼うで出ましたから、もう出ますまい。』

と、云つて呼ばない。

『ああ、さうか、それはしまうた。』

と、清水の男は仰山に云つた。霧のやうな雨が海の上にあつた。海は物凄く鳴つてゐた。足許には薊の花が咲いてゐた。その日は松尾で一泊して、翌朝、足摺の主峰の白王山に登山する連の男を送り出しておいて、私一人は人夫に荷物を持たして徒歩で清水へと歸つた。途中に中の濱大濱など云ふ部落があつた。中でも中の濱は中濱萬次郎の故郷で、その住んでゐた家が保存せられてゐた。萬次郎は天保十二年、漁に行つてゐて無人島に吹き流され、後にハワイから英國に渡り、十一年目の嘉永四年に歸國したが、丁度攘夷の盛んな時であつたから、日本一の外國通として旗本に拔擢せられた。福澤諭吉、大鳥圭介、榎本武揚、箕作麟祥、細川潤次郎などは、その門下から出た人才であつた。その當時、萬次郎が中の濱へ歸省した時、赤い毛布を持つてゐたので、附近の者が珍らしがつて、見物に來たと云ふ話がその土地に殘つてゐる。中の濱は七八十戸位の淋しい漁村であつた。……

三崎へ着いたのは、その日の薄暮であつた。その土地に一軒しかない旅館で晩飯を喰つて、土地の有志に案内して貰つて出掛けた。千尋崎の小丘の根本になつた丘の下を通つて、南の海岸へ出ようとした所で、大きな雨が來た。取付の人家の軒下にかけ込んで、雨の通るのを待つて海岸へと出た。海岸には、つくね芋を置いたやうな小さな丘があつた。それは第三紀層の赤褐色砂岩からなつたもので、まばらに松などが生えてゐた。それが有名な龍串であつた。指で押しても痕のつくやうな砂岩が波の爲めに削られ刳られて面白い形になつてゐた。

――岩あれば名あり磯山五月雨るる――

私にこんな句が出來た。磯に亂立した岩の一つ一つ、丘に聳へた岩の一つ一つ、皆それぞれ名があつた。磯から向ふ側に廻つた所で、その丘の角に一つ、その並びの方の丘の角に一つ虬の口を開けてゐるやうな岩があつて、阿吽の龍石と云はれて昔から有名で、龍串の名もそれから起つたものだと云はれてゐるが、年々の暴風雨の爲に、下顎などが缺けてしまつて、昔を知つた人に聞かないと想像の出來ないやうになつてゐた。

その日は潮が滿ちやうとしてゐる時であつた。大竹小竹と云ふ大きな竹の形をして、所々に節のやうな所もある岩が、干潟の磯に長々と出てゐるのに、濁のある波が絡つて見えた。その大竹小竹なら、海の中の龍ぐらゐ串刺しに出來るだらうと思つた。

八丁ばかりの磯がもう終らうとする所に波の中に、筍のやうな大きな岩が立つてゐた、それを面向不背山(めんこうふはいざん)と云つてゐる。それに近い所の磯に、ごろりと人のごろ寝をしたやうな岩があつて、注意すると、一方に頭に擬はした石がある。座頭の畳寝石と云ふ石だ。明治になつてから、天下に名をあげたいと云ふ男がいろいろ考へた末、その石の首を缺いで持つて行つたが、志と違つて、名があがらなかつたのか、その人の何人であつたやら何人も知つた者はなかつた。

座頭の畳寝石から向ふの方に、平坦な畳を敷いたやうな岩がある。それが千畳敷で、一條兼定卿が九州へ追はれた時、この千畳敷で遊山をしてゐたが、長曾我部の間諜の一人が走つて來て、

『中村の臣が謀叛をして、その兵が此所へも向つて來ましたから、早くお逃げになるがよろしゆうございます。』

と、云つた。兼定卿は驚いて、沖に繋いであつた御座船へ乗つて、豊後の方へと落ちて行つた。その海に臣の港と云ふ名がある。港の沖には入船嶋と云ふ嶋が横はり、左の方に長嶋と云ふ島があつた。雨は時をりぼろぼろとやつて來た。

龍串を見た後で、千尋崎の岬端になつた見殘しの岩を見ようと云ふことになつて、船を雇ふた。物知りの有志は、

『見殘しは一條公が、龍串の景に見入つて此所の磯の面白いいを見殘してしまつた。』

と、さも一條公の云つた言葉のやうに云つたが、その實、それは河田小龍と云ふ畫家のつけた名であつた。

船を出した所で、風が出て海が荒れだした。仕方なくその手前の小さな灣に船を著けて、千尋崎の峰傳ひに歸つて來た。路ぶちには櫻の花のやうな花片をした大きな野茨の花が咲いてゐた。

——磯山の小路に雨す花いばら——

中村町から三里ばかり東へ行つた所に、入野の松原と云ふがある。私達はその入野の小學校へ迎へられて、宿毛の歸りに車を寄せた。

その夜は薄雲の流れた空に月があつた。私達三人は宿を出て暗い松原を横切つて海岸へと行つた。細い灰のやうな砂濱で、幾ら踏んでも踏みごたへがしなかつた。足の先には沈んだ氣味悪い憂鬱が絡つてゐた。沖の方を見ると、古綿のやうな鼠色の雲が重り重つて、暗い海の上からは、冷めたい氣味悪い風が吹いて來た。砂の上に腰をおろして、それをぢつと見てゐると、何か神祕な物の影が海の中から這ひ上つて來て、磯の波の微白

く崩れてゐる渦で踊り狂つてゐるやうに思はれて來て、何んとなく襟元がぞくぞくして來た。

私達は其所に長くゐる氣がしないので、直ぐ引返した。歸る道で浪華節か何かの旅藝人の興行があるらしい風で、ある一軒の家に澤山の人の集つてゐるのを見た。その軒には薄暗い提燈を一つ釣してあつた。

その朝の事であつた。未だ夜が明けたばかりで、私達は雨戸を閉めずに障子にしてある二階の蚊帳の中で、うつらうつらとしてゐた。と、下の方で人聲がしはじめたが、やがてつかつかと階段を上つて來る足音がして、私達の南隣の蚊帳に寢てゐた先輩の枕元の方へと行つた。私は女中にしては酷い歩き方をする奴だと思つた。

『この中に何人が寢てをりや、幽靈ぢやねや、氣の毒なもんぢやねや。』

若い女のしやがれ聲がした。どうも蚊帳を捲つてゐるらしい。私は狂人が來たな、と思つて、眼を開けた。足音は私の枕元の方へ來た。そして、蚊帳の裾が捲くれあがつて小さな青白い女の顔が覗いた。

『此所にも幽靈はつかしか、氣の毒なものぢやねや。』

私は狂人が亂暴をはじめては困ると思つて、若しそんなことがあるなら、直ぐ飛び起きて行つて摑まへやうと、用心した所で、女は蚊帳の裾を放して、階段の方へと行つた。

階段の口には、下のお神さんと何人か他に來てゐて、女をだましておろして行くやうな氣配がした。私は宵に下の火鉢の傍に、白粉をこてこて塗り、口紅を小さな口元に一杯につけた、細面の娘のおづおづした眼で私達を見てゐたのを覺えてゐたから、てつきりその娘であらうと、氣の毒に思つてゐると、宵に給仕をした狐のやうなきよんきよんした女中が、お詫かたがた煙草の火を持つて來た。

『あれは、この傍の娘ですよ。』

と云つて、不幸な女の話を喋つて行つた。女の家は、その旅館の筋向ふの丘の麓にあつた。通りから一段高い所に二三軒並んだ小家の内の一つで、二階の窓から出ると、その家の前に獨桑の一叢があつた、その葉が朝の海風に動いてゐた。

女の父親は車夫であつて。女は村の農家へ緣付いてゐたが、亭主になる若者が、亂暴で酒癖が惡いと云ふ所から、父親は娘の將來を案じて取戻した。女に未　のある若者は、私等の泊つてゐたその旅館へやつて來て、そつと女を呼んで貰つたり、人を頼んで父親に交渉さしたが、父親は頑として承知しない。それが爲めに自暴になつた若者は、ある日酒を飲んで、父親を

す積りか、それとも本當に殺す積りであつたか、短刀を懐にしてやつて行つた、そして、二言三言云ひ爭つた揚句、男は短刀を拔いて父親に切り付けた。氣の强い父親は、手傷を受けながら鐵棒を取つて若者と渡り合つた。若者はその場から直ぐ駐在所へ自首して出た。女は姙娠してゐて、その時はお產をしたばかりの所であつたが、血を見て逆上してしまつた。それは私達がその村へ行く二ケ月ばかり前の事で、父親の傷は癒えてゐたが若者はまだ未決にゐるとの事であつた。

『なに、あれは、親爺が惡いですよ、――さんは、氣前の好い男で、なんでも人にやりましたよ。』

女中は朝飯の給仕をしながら、加害者の男をほめた。

飯が濟むと私達は松原へ散步に行つた。松原の東寄の所には社があつて、それに並んで高等小學校があつた。狹い校舍ではもう授業が始じまつてゐた。その松原の松は、皆すんなりと空に高く延びて、杉の木のやうな感じがした。社の緣側に腰を掛けて、その高い松の梢に眼をやると、光のない朝月がぼんやりと見えてゐた。

十一時からの講演には數時間があるので、暫くその附近を散步して、十時頃になつて歸つた。そして、砂に汚れた足を洗つて、二階へあがり、乾いた咽喉を茶でうるほしながら、何かの拍子に家の背後になつた桑畑の向ふに眼をやると、今朝の女が何か云ひ云ひづんづん向ふの方へ步いて行くのを、その父親であらう、ふとつてがつくりした男が、それをやるまいとして、袖を控へて引戻すやうにしてゐた。私は默つてその容を見てゐた。

十一時が近くなつても、學校からの迎ひが來ないので、此方から行く事にして、先輩と一所に出て、先刻狂女の步いてゐた路を行つてをると、敎員らしい洋服を着た男が、二人の男の子を連れてやつて來た。その一人の子供の手に小さな桶があつた。

『これを先生に上げやうと思つて、昨日校長が子供にほらせました。』

洋服はかう云つて、子供の手から桶を受取つて、それを先輩に見せた。中には蜊交りに二十個ばかりの貝が入つてゐた。その貝の中に、貝殼に寫眞版に取つた模樣のやうな微な模樣のあるのが二つばかりあつた。

『あア小袖貝か。』

と、私は云つた。これは尊良親王の御息所が、鳴門で難に逢つた時、流した小袖の模樣であると云ふ傳說のある貝であつた。私達が行つた小學校の應接室にも、その小袖貝の模樣のはつきりしたのを三つばかり額へ挾んで掛けてあつた。小袖貝を尊良親王に結び付けたのは、尊良親王の流謫せられた遺蹟が上川口

の傍を流れてゐる白田川の奥にあるからで、其所には親王を迎へてゐた有井莊司の館の趾があり、莊司の馬の鞍と云ふのを傳へた子孫の家もあるとの事であつたが、私はとうとう行かなかつた。

安藝の安藝町には、暑い盛りを數日滯在した。旅館の前には樹齢四五百年にもなろう云ふ老松があるので知られた寺があつた。その門は車の立場になつて、先曳の犬をつれた車夫が、のんきに煙草を喫んでゐたり、將棋をさしてゐたりするのが見られた。境內には赤と白の夾竹桃があつて、それが午後の陽にだらけてゐるのを好く見た。物憂いやうな波の音が午睡の枕元に毎日聞えた。

その安藝町の北半里の土居村は、私の友人の故郷で、親類の者が住んでゐると云ふその家があつた。田畝の間に家造りした村落で、河原石を塗り込んだ土塀のある家が所々眼についた。其所には青々と茂つた城山があつて、その麓には土佐藩の家老であつた五藤家が代々住んでゐた。家の前にある城濠であつた小濠には、白と赤の蓮の花が銹のある水の上に一面に咲いて、お羽黒蜻蛉がその葉蔭を飛んでゐた。

その城山は、元安藝國虎の居城であつたが、その國虎は、長曾我部の滅す所となつた。永祿十二年、八流山で長曾我部の大軍を防がうとしたが、不幸にして利を失ひ、その一人の家臣は敵に間道を敎へ、一人の家臣は、井戸に毒を入れた。それが爲めに城は陷つた。國虎は老臣黒岩越前に命じて、一條家から迎へてゐた夫人を幡多へ送り返し、長子の千壽丸を阿波に落して後に、城から西南にあたる黒鳥村の淨貞寺と云ふ菩提寺へ行つて自殺した。老臣の有澤岩見がそれに殉死した。そして幡多へ一條氏を送つて行つた黒岩は、その日から六日おくれて安藝へ歸つて來たが、靜かに一七日の間、國虎の追善を營んだ後に、己もその墓前に自刄して國虎の後を追つた。

私達は土居へ行く道でその淨貞寺を訪ふた。廢寺同樣になつた小さな寺の磴道には、一匹の黒い蛇がゐたが、人の足がその胴体へ觸れさうになるまで逃げなかつた。國虎主從の墓は、本堂の敷地から一段高くなつた崖の上にあつた。有澤の墓は南側で、法名は便久嚴居士、黒岩のは北側で、法名は桂岩芳樹居士としてあつた。その墓の傳説に緣のあつた墓の隅の大杉は、もう切られて根ばかり殘つて居た。

淨貞寺を出て北へ行くと、直ぐ井の口村で、路から右へ入つた所に、岩崎彌太郎の生れた家があつた。草葺の小さな家で、隣家に住む其所の管理人に賴んで中へ這入つて見ると、その內

に當時の糸車や、圍爐裏の上にさげた自在鍵などが保存してあつた、しかし、平床に掛けた彌太郎彌之助兄弟の引き延ばし寫眞には、ちよと厭な氣持をさせられた。私達はそれから土居へと行つた。

私達を乘せた車は、朝早く東へと向つた。平日であつたら、定期の自働車が室津にまであつたが、前々日の大雨で奈半利川の假橋が落ちてゐたので、仕方なしに不便な車に乘つた。しかし、その車に乘つた爲めに、かねて見たいと思つてゐる墓や寺を見る事が出來ると云ふ喜びもあつた。

九時頃安藝の町から三里ぐらゐ行つて、田野と云ふ村にかかつた。私達の通つてゐる道は、海岸線にある漁村を縫ふてゐる驛道であるのは云ふまでもない。薄靄が流れて、八月の空も曇くはなかつた。干魚の香のする田野の人家の間を大半行つて、土佐日記の那波の泊とある奈半利川の岸にもう出やうとする所に、すこし奥まつて小さな寺があつた。其所には二十三士の墓と云ふのがあつた。元治元年、田野の郷士に清岡道之助、その同姓の治之助等二十三人が、討幕を斷行しない姑息な藩論に憤慨して、野根山へ立て籠つた。藩では驚いて、兵を出した。私の村は浦戸港の入江の東南の岸にある村であるが、その私の村の川島と云ふ豪家へ、ある日の事、四五人の若侍が、穗を拂つた槍を持つて飛び込んで來た。家の者は驚いて膽をつぶしてゐると、

『水を飲ましてくれ、野根山に騒動が起つた。』

と云つて、其所にあつた柄杓を取つて水桶の水を飲み出したので、家の者は安心したが、藩の狼狽方はそれによつても分る。

二十三士は進退谷まつて捕へられ、その年の九月五日の晩、奈半利川の河原で西と東の兩岸に分けられて斬罪に處せられた。野根の生れで、私の友人のお父さんになる人は、田野に泊り合せてゐて、それを見に行つたが、道之助が辭世の句を朗吟して、

『あゝ男子、鼎鑊……』

と云ひかけた刹那に、その首が前に落ちた。血がその横手の松明の火に映つた事まで、今に覺えてゐると云つた。その友人のお父さんは、土佐に潜行してゐた江藤新平と赤野で行き合つて、

『野根山の方へ行かずに、阿波の方へ行く道はないか、』

と問かれたが、金を禮にやると云はれたのが癪に觸つて、

『私は知らん』

と云つて、分れたと云ふ逸話を持つてゐる。

二十三士の墓は、本堂に向つて左手になつてゐた。その墓には青い苔が生へて鐵柵も錆びてゐた。奈半利川の岸に出た所で私は二十三士の處刑せられた場所を知りたいと思つて、傍で渡船を待つてゐる村役場員らしい男に訊くと、

『それは、私には分らんから、その家の老人に聞きなされ。』

と云つた。堤によせかけて建てた茶店があつた。私はその茶店へ行つて、庭先で稻荷鮓司のやうなものをこしらいてゐる老人に、

『二十三士の斬られた場所は分りますまいか。』

と訊くと、老人は氣受よく戸外に出て來て、直ぐ上手になつた、川端の桑畑尻になつた濁りのある水の落ちてゐる落口へ指をさして、敎へてくれた。

『あすこですよ。』

其所へ渡船がやつて來た。私達は安藝から連れて來た車と其所で別れ、川向ふの立場から違つた車に乘つた。

俗に羽根崎とも云はれてゐる中山崎と云ふ岬を廻つて行くと、羽根の人家が來る、北所の小學校の前を行き過ぎて、ちよつと曲つた所に、道の左になつて月見草などの咲いた地所があつて、藁小屋が潰れてゐた。小屋の向ふに石を築いて土壇にした小さな祠があつた。よく見ると、傍に記念碑もある。それは岡村十兵衛の祠であつた。十兵衛は御分一役と云つて、浦奉行のやうな者であつたが、不漁凶作が續いたので、初めに山林を拂ひ下げたが、又々凶年が來たので、今度は藩廳に上申して、官廩を開いて救恤しやうとした。藩廳の方ではのんきに構へて返事もしなかつた。十兵衛は何時までも浦人の飢餓を坐視するに忍びないので、遂に自分の手で官廩を開いて浦を賑はした。そして、その始末を再び上申したが、それにも何の返事もないので、彼は慨然として貞享元年七月十九日の夜、自刄してしまつた。

私達は車から下りて、その境内へ入つてゐると、藍の腰卷一つした肥つた裸の男が、素足で片手に桑籠を持つてやつて來た。それはその境内から人家の屋根越しに、そぎ葺の大きな屋根の見える八幡宮の神官で、そして十兵衛の祠の祭典を司つてゐる人であつた。

『こんな風をしておつて失禮でございますが、私は北所の神職でございます。あなた方は何方から御出になりました。』

私達が事情を話すと、

『少しまつて居て下され。調べて本にしたものがありますから、差し上げます。』

かう云つて歸つて行つたが、直ぐ白木綿の着物に藍の袴を

け、片手に二冊の小冊誌を持つて來た。

もう十一時頃であつた。私達は神官に別れ、行當岬を廻つた。もうそのあたりから、岩の形や、草木の態などが、高知市附近とは違つてゐた。砂糖黍のやうな荻が、山の樹に交つて見え出した。土佐の東南端になつてゐる室戸が岬の雄大な姿が眼に着いた。岬の上の燈臺が、叢りの容の下に白く見えてゐた。

室津に着いて晩い晝食をすました。私達は、室津岬を見るつもりで、土地の有志の一人に連れられて出たが、津寺に立ち寄る必要があつたので、車は先へやつて置いて、その前まで歩いて行つた。

津寺は港の中を石垣にした室津港の岸にあつた。その津寺の入口の左側に、小さな白木の社があつた。それは一木神社と云ふ社である。寛文年間、野中兼山が室津港の東に並んだ津呂港を開鑿したが、狹くて、多數の船を入れる事が出來ないので、兼山の死後、即ち延寶七年に、一木權兵衛が主任となつて、その室津港を開鑿し始めたが、港の口に當つて大きな礁があつて、それが砕けない爲めに港口が出來ない。權兵衛は海の神に祈願を籠めた。

『私の身を犠牲にして、御前にたてまつります。どうかこの岩が砕けますやうに。』

そして、翌日その礁を砕きにかゝると、不思議に綺麗にとれてしまつた。從つて工事も非常に捗つて、思ひ通りに完全に出來上つたが、出來上つたその夜、權兵衛は海神に誓つた言葉を重んじて、自殺してしまつた。それは延寶七年六月十七日であつた。

室戸岬の海岸は、足摺岬の海岸と違つて、海と山との間に畑地や砂濱があつて、懐しみがあつた。私達は先づ最御崎寺に登り、燈臺に行き、測候所にまはり、それから、岬の東端にある路をおりた。其所には大きな岩窟があつて、中に霧がかかり、蝙蝠の鳴く聲がしてゐた。炭酸瓦斯の臭もした。見付には石龕が微かに見えてゐた。空海の修業した所だと云ふ傳説があつて最近まで空海の作と云はれた如意輪觀音の石像を安置してあつたがそれは國寶となつて最御崎寺に保存してあつた。その附近は一面に奇岩怪石が聳つてゐて、榕樹やタモの木などが、その間に根を張つてゐた。

ブルジョアの手先

淺澤[illegible]麿

一

俺はブルジョアの手先だ。然に眼のないブル共の作つた會社の仕事をしてゐる。無論働らいた金で食つてゐるんで、餘計な金なぞは一文もないのだから、ブルその者でないことは確かだ。たゞ形式が立派にブルに出來てゐるんで紛らはしい。或るブルの所謂合法的脱税手段に使はれて、××萬圓の財産が俺の名義になつてゐる。俺はかう見へても千圓からの多額納税者だ。家はといふと、×千坪からの屋敷で、門内に巡査が住んでゐるほどの構ひだ。勿論俺の所有物でも貸借物でもない。矢ツ張ブルの放資物の一つに過ぎないんだ。お負けに××萬圓位の手形の五枚や十枚は、何時でも俺の振出になつて、市中の銀行へ廻つてゐる。俺を信用して銀行が金を貸すんでは固よりない。自箇振出のお體裁に使はれてゐるに過ぎないのだ。これで以てブルたるの段取は立派に附いてゐる譯だ。序を以て見掛けを云つて置くと、俺の人相と來ては頗る貧相だが、着てゐる物は、地質ならスタイルなら、一般ブルの服裝と大して變らない。これはブルの仕事の中へ這入り込んで、旨い汁を吸はうとする人間が、勝手に寸法を取りに來て、勝手に仕立ててよこしたものだ。探偵に見せたらワイシャツの古ぼけてゐる所などから足が附くのだが、素人眼には大底見透かされずに濟む。時計なんかもブルのブラ下げてゐる物と同じものだが、これだけは俺のポケツト、それも増資割當株の處分殘りか何かの不時の收入が變形したものに過ぎない。同役が一人なしにブラ下げてゐるのに、俺一人粗を極めてもゐられまい。ゐたつて可いんだが、この社會は何でも世間並でないと通りが惡るい。理窟を考へたり言つたりしてゐる暇に、人並にして納まつてゐる方が手數が掛からなくて可い。

斯う見た處では縱から見ても横から見ても、紛ひなしのブルに出來揚つてゐる。裁判所へ出たつて、證人の供述でもなけり

あ、金持だか貧乏人だか、本統のことは判りはしない。何の事はない、鄭寧に細工の出來てゐるブルの鍍金だ。餡こはシッカリ貧乏人で出來てゐる。同じ金を欲しがる人間世界でも、遠くにゐて欲しがつてゐる分には罪はないが、眼の前へ當てがわれてゐながら、これは貴様の物でないと云はれてゐるのは、イヤなものだ。ブルの手先といふ者にはかういふ變な役目もある。

二

俺はブルの假面をおッ被されてゐるだけで毫もその實質を備へてゐないことはこの通りだ。だから何も贅澤はしてゐない。プロレタリヤの仲間では割に旨い物を食つてゐるかも知れぬが、旨い物でも食つてゐないと持たないやうな弱い腦と激しい仕事を持つてゐる。菜ッ葉を食つてゐろなら、俺は差當り外の仕事を見附けなければならないだらう。それに俺は人一倍食ひ辛抱だ、丁度いゝ相棒があるので、事情の許す限りは、旨い物屋を漁る道樂を持つてゐる。魚河岸の柳屋が種が良くて、錦水の膳が素敵である位のことは知つてゐる。俺は外に道樂のない人間だから、食ひ辛抱である位は御容赦を願ひたい。プロの世界だつて活動寫眞位は必要の慰安になつてゐる筈だ。贅物だつて前

に云つたやうな一枚看板ならブル並かも知れないが、餘計なものは一枚だつてありはしない。この間も×會社の×專務の園遊會に招ばれて、園遊會にはモーニングを着るものであること、そのモーニングを持合せないものは恐らく俺位であることを發見した位だ。廣いうちに住んでゐるのが不都合なら、自分にも餘計のものだから、何時でも引上げる。子供等が飛び廻るに大きに便利だが、何も是非踏み止まつてゐたい譯でもない。

全體人間の生活で、必要と贅澤の分界からしてハッキリしてゐない。縱しハッキリしてゐた處が、暮し向を見ただけで、幸福だか不幸だか判るものではない。社長の×なんかは隨分勝手な眞似を、それこそ明かに必要以上にやつてゐるのだが、大して幸福にも見へない。贅澤も感興性が麻痺して了つたんでは、大威、退屈なだけのものだ。女は何人かあつても、小說家の書くやうな愛情なんてものを經驗しちやゐない。いつかも內輪の晩餐會に、いつになく沁々とした調子で『どうかして一遍女に惚れて見たい』なんて云つてゐた。俺はこれで立派に金持の心細さが浮き出てゐると思つてる。あらゆる別嬪に刺戟を感じなくなつてゐる金持の身になると、責めて一人でも可いから、美貌の外に實のある女を見附けて惚れても見たいと思つてるだらう。處が實のある女は異常な富に妨げられて寄りつかないだらうし、

歡心を求めに來る女は實を持合はさないから惚れてやる氣遣ひはない譯だ。自分の方だつてさうだ。酒の席で氣紛れに歡興を洩してゐる位で、本統に人間のまことに廻り逢はうなどとも考へてゐないし、自分からまことを人の腹心に置くなんて氣もないんだ。自分にまことがなければ女は惚れないし、女にまことがなければ自分が惚れない。そのまことが慾と驕だらけの仕事に妨げられて、かう逃げ廻つてゐる以上は、惚れる女も惚れられる女もない筈で、全く相憎なものだ。

どうも金持なんてものは本統は存外ミジメな者だ。贅澤なぞはハタから見るほど愉快なものじやない。たゞ愉快なのはハタから見られてゐるといふことだけだ。十年ばかり前に自働車の流行り出した時、これも社長の×が新調のヤツへ乘つて來て、社の玄關へ降り立つた時は、小鼻の筋肉が極度に緊張して、如何にも得意の絕頂、モウ一ト息で心臓が破裂しやしないかと案じられる位だつたが、今日では却つてそのお蔭で用が殖えて仕方がないらしい。贅澤もハナの内の快感だけは或は幸福の部類かも知れないが、新鮮な感覺は物の半歲とは持たない。新鮮な感覺の幸福は貧乏人にも讀書人にも誰にもある。金持ばかりを羨ましがることはない。

三

考へて見れば金持も不憫なものだが、唯越に寢せないことは仕たい放題をして有り餘つてゐる癖に、無理な慾を搔くことだ。是さへなければ寢して可いんだが、是あるがために社會から眼の敵にされるんだ。今に本統の敵にされて酷い眼に逢う時が來るかも知れぬ。そこを考へてくれると可いんだが、それがまた甚だお芽出たく出來てゐて、存外安穩な月日を送つてゐる。或る者は何　にも知らないでそれをやつてゐる。或る者は知つてゐつても何程のこともあるまいと思つてゐる。或る者は一層負けぬ氣になつて強く出てゐる。さうして酷い眼に逢う時を早めてゐる。皆慾に眼が暗んでゐるからだ。

それはその時々で色　な脅かしがあるにはある。物價調節だ通貨收縮だ操業短縮だ配當制限だ輸出制限だ金利引上だ、或はまた相續稅の增徵、庭園稅の設定、中でも勞銀値上げが一番利きが宜しい。能く考へると怖いことだらけなんだが、もつと猛烈なのになると、隣を潰すに充分なんだが、よくしたもので、お跡からビア樽のやうな大臣が出て來て總理演說をしては安心させてくれる。方々で演ずる弱いものイジメが大底強いもの丶勝利に歸する。(全くだあの偉さうな新聞屋の職工イジ　メを見

るが可い。)楽することはないといふ氣になる。どうも新聞雑誌で見てゐる資本家の地位と、現在の資本家の實情とは、どうしてかうも違ふのかと大に迷はざるを得なくなる。言論運動がチヤラッポコなのか、資本家の惰眠が深いのか、俺は固より知らない。

四

彼等は寄るとさわると政府から何かの恩典を得る趣向を考へる。法律を旨く切抜けて負擔を輕くする算段をする。でなければ金を有利安全に廻す工風か、事業の經費をつめる工風だ。あとは女の話に極つてゐる。極く手近かなことで云ふと、今度出た新所得税法だ。ホンの鼻糞ばかりの社會政策を加味した、而もその上に貴族院で骨抜きになつた、アノ税法で取立てられる金が、人に由つては三倍五倍、大きいのになると三十倍位になるのがあるのだが、殖へる割合から行けばゑらいが、取り分から行くと、何でもないことなのに、それがブル共には莫迦らしくて、只取られるやうで、思ひ切れないのだ。或るブルの仲間では五百圓宛持ち寄りして、上等の法律屋を抱へて、ミッシリ理想的な脱税法を研究させてゐるさうだ。全く度し難い連中だ。

既に立派な經濟が立つてゐるのに、當路の者を擁して、申譯だ請願だと騒いで、何程かの德分に有附かうとする。自身に出掛けて行くと、嘘八百を並べて民業を保護しろの救濟しろのと云ふ。手下を差向ける時は、夜なべまでさせて勝手な怪しい數字をコマ〴〵並べて持つて行かせる。當の役人か筋の立つたことを云つて通さないと、『生意氣な小僧だ』と云つて、局長だ大臣だと高飛車に出る。では許可するからこの收益は必ず何々の外に使用してはいけないとか何とか、役人の顔の立つやうな條件が附いて下がる。下がつて了へばどうしやうと此方の勝手だ。條件も糞もないといふことになる。

政府を屁とも思つてゐない連中のことだから、下僚に對しては亂暴である位は當り前なんだらう。掛かるだけのものしか掛かつてゐないのにモット經費を節しろと來る。無理でも何でも經費を減じて純益を殖して見せないと承知せぬ。少しでも理窟のつくものはつけて負擔を免れるやうな整理方法を案出させる、手先は『どうもかういふ法律があつて不味い』といふ。『モッと能く外の方も調べて見ろ』と來る。『條文が如何にもハッキリしてゐるんでどうにも工風が附きません』などと云つて了ふ手先では駄目だ。『モウ一應調べて見ます』と云つて引下がる。他日いゝ汐を見計らつて旨く切抜けて『どうも仕方がないな』と云は

せて了う。かういふのがブルの手先の上物なんだ。

仕事は大體×萬圓より上らないものに出來てゐる。×萬圓の經費は泣いても吼えても要る。だがそれを使つたんでは×萬圓しか純益を見せない。ブル共は仕事がどれだけのものであらうとも、是非×萬圓は蹴出さうとする。何を標準でもないんだ。純益を殖やし、配當を殖やし、株價を釣り上げやうとするだけだ。株價を釣り上げたからって外の者へ賣附けて肩拔けをしやうと云ふのでもない。どうせ重役をするほどのブルだから何千何萬といふ株を持つてるからさうは手易く片附かないに極つてゐる。たゞ百萬圓の財産評價が百五十萬になつて行くのが有難いんだ。銀行から一株で四十圓借出せたものが、相場が上がれば外の銀行で借替へて五十圓引出せるのが難有いんだ。その十圓の借增でまた有利な株でも持たうといふのだ。あわよくば合併だ買收だと騒いで、それをマンマと有利な關係に移して儲けやうといふのだ。健實な財産にして置けば安心なものを、無理な經費の節約などをして、營養不良なものにして了つて、それで膨れたと思つて嬉しがつてゐる。全くお芽出たいものだ。(全體彼等は事業その物に興味があるんでも何でもない。況して國家的な考などは毛頭ない。それにその事業一つが事業でないのだから、不幸にして不味く行つたら、外の事業とチャンポンにして埋合せをつければ可い位に思つてゐるのだ)

唯お芽出たいで濟む分には無難だが、それをやるために經費の節約と來ると、茲にブルの手先の御難が初まる。五枚の罫紙は多い。三枚にしろと云ふ、十俵の炭は使ひ過ぎる。取締りを厳重にして七俵にしろと云ふ。何の根據もなくて天引に儉約させるやうとする。云ふ通りになつてゐれば、儉約でなくて吝ん坊になつて了ふ。吝ん坊處か仕事の要所へ行くと物によつては仕事が出來ないことになる。でもブルの手先は仕方がないから『ハイ〳〵』と云つて豫算表から削る。削つても要るものは要から、年度末の決算には矢つ張要るだけのものが金に出て來る。『可けないと云はれても、決算のどさくさに有合せの理由で辻褄を合せて行く。理由などはいくらでもあるもんで豫想しない事故などへ引ッ張つて行つて可い加減にコジ附けて了うんだ。それに素人といふものは――重役は大方素人だ。玄人出の重役でもお勘定が上手になつて欲が深くなると、大底素人になつて了う――誰にでも眼に着く紙や炭の儉約を八釜しく云つてゐる内に、それが技術方面や現業方面で大變な金目の無駄になつて行くのを知らずにゐる。紙や炭の儉約の尻が飛んでもない處へ行つて、營業用の帳票類が用紙の代りになつたり、高い木部の材料が薪になつて炭の代りをしたりする。ブルの眼の前で密

された一回の節約が、眼の届かない處へ行つて十回の盜賊になる。だからと云つてそれを正直に持出してブルに抗爭するブルの手先は馬鹿で、『ハイ〳〵』と云つてその鼻元思案を實行する振りをしてゐるブルの手先は悧巧だといふことになつてゐる。ブルにも當りの惡るくないやうに云つて置いて、蔭へ廻つて精々無駄を防いで、ブルの不明を補つてゐるやうな善い心掛の手先は先づ見當らない。

五

紙や炭の次は人間だ。『あそこへあの人間は要るまい、罷させろ』とブルは云ふ。朝早くから夜遲くまで、雨が降つても風が吹いても突ツ立つてゐる人間、それも暖かい飯を樂に食べるだけのものを貰つてもゐない人間、それでゐて仕事にヘグれまいとして猫を被つて辛抱してゐる人間、さういふ人間を『要らないから罷せ』の、『あいつは老ぼれてゐるから已めさせろ』のと云つて、可哀さうに二十年も勤續して孫をウヂャ〳〵持つてゐる人間を眼の敵にする。『アレは仲々能くやります。アレがゐないと×の方が手が缺けて作業に手違ひが出來ます』てなことを云つて嘆き止めても、何の彼のと月に三十回か四十回に過ぎない人間を邪魔にして已めさして了う。五人揃はないと過勞、間違ひを來すに極つてゐる仕事でも『三人位にしろ』と云ふ。『人が減せなければ人手に代る簡短な設備を考案して見よ』と云ふ。出來つこのないことでもやつて見ると云はないと『研究心が足らない』と云ふ。仕方がないから西洋でやつてゐる立派な機械を持出すと『そんなに金が掛るんならお前に頼まない』と來る。問答に果てしがなくなると、構はず比例、お前は何人、お前の方は何人と天引に減員を押附ける。それで行けても行けなくても『兎も角それで請合つてやつて見ろ』と來る。それ以上の押問答はモウ手先の禁物になるからグズ〳〵に引上がる。さうして或る者は無理をして正直に減す。或る者は申譯に何人か減す。災難は頸を斬られたプロだ。仕たい方題な樂をして浪費に濫費を重ねてゐる自分達ブルは、全然別の世界の人間のつもりでゐる。

それも平生手厚くして置いての上なら兎も角だが、何の彼のと文句を云つては出し澁る。出すことは舌でも厭なんだ。思ひ切つて出してやらないから、ヤ居殘だ時間外だ特務手當だ公休手當だと云つては刻んで持出す。刻んで出せば金高が少ないからブルも澁々判を押す。或る下ッ端などは高々三十九六回の支給を受けるのに、給與種目が十二種にもなつてゐる。十二種にも別けて貰つてどうにかからにか丁度可い金高になつて了ふ。

紙や炭と同じ理窟で仕舞には同じ事になる。同じ事だけならまだ可いが一々手當々々と小刻みにする癖が附くと、何か少し變つた仕事が出ると、手當を出さないと動かないことになる。何のことはない勞働の切賣りだ。（その弊に堪へなくなつて、給與種目を整理して、大綱に括つて賞與の時に手加減でもしやうとすると、ブルの手先仲間でまだ均衡が取れないとか不公平だとか云つてテンデにグズ〳〵云ふ。仕舞にはブルをそツち除けにして手先仲間のイガミ合になる。さうして結局ブルの術中に陷る形ちになつたりする。どこまでも馬鹿々々しく出來てゐる譯だ。手先共も平生ヤレ三菱がどうの久原がどうのと他の善いことばかりを言立てて愚痴を滾してゐる位だから、一層束になつてブルに打ツ突かるが可いんたが、そこがまた先手の悲しさで、それほどの勇氣も出せないし、縱し虛勢を張つて見た處が、一睨みで縮み上がつて了うんだ。少し骨ツぽいことを云ふヤツは、ブルからは『見込のないヤツ』にされるし、同類からは『まだ靑いヤツ』にされる。つまり木偶の坊で頭が上がらないと極つてゐるのがブルの手先だ。

給與の慘目な話は獨下ツ端ばかりの問題ではない。俺なんぞの手先階級だつて同じ事だ。俺は今引掻き集めて三百圓カス〳〵になるが、それがボンと三百圓出されるんじやない。本給だ、手當だ、囑托手當だツて小刻みにして出されるのた。半期賞與だつて、辭令で出されるの、封金で出されるの、囑托名で出されるのとから六色もあるんだから手數が掛かる。それで三百圓で樂に喰へるかと云うと却々そんなもんじやない。金が一文もないから死んじや定めし嚊や子供が困るだらうと、保險が附けてあるが、それにイキナリ年四百圓は持つて行かれる。三度や四度は一緒にゐる者に酒を振舞はぬと思ふやうに動かないから、それに二百圓やそこらは飛んで了う。年に三千圓の金が殘つてそれがどうなる。飯を食う人間が九人もゐて、家賃は要らないと云つたつて二百圓は掛かる。あと五六百圓が漸く俺の小遣ひだ。月五十圓では何處へ行つたつて一人前のブルの手先にはなれない。友達にでも引ツ張り出されりや一遍に無くなる。これで一朝病氣にでも取ツ附かれたら法が着かないだらう。息災でゐた處が、餓鬼はズン〳〵大きくなる。子供一人大學へ入れるに五千圓は要るさうだ。その工風がつかないとなると、差詰給仕にでもするより仕方がなからう。イヤ愚痴もこの位にして置かう。

六

困つたのは一昨年の夏からかけて賃銀騷動のアフリを食つ

ことだ。雜誌屋は理義明白に相違ない甚だ御尤な、然し頗る太平樂な理想論を擔ぎ出す。プロ共は善いことにして騷ぐ。食へないヤツも食へるヤツも、質の善くなヤツも善いヤツも、一緒になつて騷ぐ。『手當を倍にしろ』『給料を八割增にしろ』と云ふ。かういふ時のブルの手先は全くミジメだ。連日連夜會議をする。手下からは今にも騷動が持上つて作業が留まるやうな大袈裟な注進が來る。適當に案を纏めて一同神妙にブルに持出す。ブルは『フフン』と鼻でアシラつて見せる。內心怖くても何でも『フフン』と來なくては可けないものと見える。却々提案の通りには承知してくれない。それ相應に旨い理窟を附けて遣り直しを命ずる。『お前等までソンなことでは可かん。モツとシツカリしろ』と云ふ。『騷ぐヤツは已めさしちまへ』と云ふ。腹は見へ透いてゐても鼻ツ端が强いからアシラひかねる。腹では適量に割引しながら然るべく引下がる。また額を鳩めて妥協點を見出して曲りなりにも案を通す。皆々應分の增給に有り附く。こんなことを夏から去年の春へかけて四遍も繰返させられた。それで旨く治まつて見た處が、ブルの方からは『人の氣も知らないで奉公人根性を出して、下へばかり氣を取られてゐる』と思はれる。プロの方からは『ブルの走狗の癖にブルとグルになつて俺達をイジめるんだ』と思はれる。寢不足の赤い眼をして骨を折つても一向に同情してくれ手がない。やり切れないのはブルの手先である。

　ブルもブルだが、プロも亦プロである。雜誌で見るやうにプロは善玉、ブルは惡玉と極つてはゐない。プロにも隨分酷いのがあつて、人騷がせばかりしてゐる質の良くないのがある。そんなのに音頭を取られるプロ共だから推して知るべしだ。良くすれば良くするでつけ上る。惡いと惡いでブツ〳〵の言ひ通しの上にサボる。良くしたからツて生活が改善せられるんでも何でもない。惡酒を飲んで無駄遣ひをして了ふ。碌でもない女を引ツ張つて寄席をホツつき廻つたり、印絆纏で靑切符などを買つて、檢札車掌に煙突を食はせたりするのは、皆んなこんな玉である。かうなると食へないといふのが本統だか、食へると認めるのが本統だか、薩張判らなくなつて來る。金持をどの邊で押へつけて、貧乏人をどの邊まで引上げるが可いか、法律ででも極めて貰つて置かないと、吾々ブルの手先は全く見當が附かない。何處まで彼等を良くするかも問題だ。何處まで良くすれば彼等が滿足するかも問題だ。ここは理論じやない、實地當面の急務だ。雜誌屋のやうに簡單に片附けて了はないで、ブルを苛めると同時にプロの身繕ひをさせるが可からう。彼等がブツ〳〵云はなければならぬのなら、するだけの仕事を立派にして

置いてブツ／＼云ふが可い。でなければ出て了つてお世話にならなくなつてからやるが可い。それでも良くしてくれないたら非はブルにあるかも知れぬが、良くしてくれないからサボると云つたんでは、それで帳消しになり、恨みツこなしになる筈だ。返報がへしにサボつて置いて、その上にブツ／＼云ふとなると、モウそれはブルと同罪だと云つて可い。(この間に澤山理窟がはいる處だが、先を急ぐからやめる)

「ある上に慾張る」のと「ないからサボる」のと、似たもの夫婦の寄合世帶に出來てゐるんだ。

七

下等なのはプロばかりではない。ブルの手先のそのまた下ツ端などになると、プロ同樣下司張つた口調で、年中ブルの陰口と自分の生活の慘目を吹聽して生きてゐる。かういふ手合は、寄ると障ると、洋服のボロの說明、血色の惡い冷かしツこ、女房子供の愚痴、物價の高いわかり切つた話から、ブルの不人情その贅澤、その身代の金高詮議、果ては已れもあやかつて見たい。一日で可いからなんて弱音、ヤツ等の話題は大抵こんなことに限られてゐる。それだからツて大して反抗の氣勢を揚げるでもなく、深い人生に突入つて煩悶するでもなく、人道的に義憤を起して弱者の犧牲になつてやらうといふでもなく、さうかと云つて愛惜を盡かして商賣替をするでもなく、相も變らず新聞を讀んで、茶を飮んで、辨當を食つて、ストーブにあたつて、無駄口を利いて生きてゐるのは滑稽である。

ブルの押附る無理な節約が、かうした色んな悲喜劇になつて實現されて行く。さうしてそれがどんな結果を生むか、財政の基礎が不安固になり、有體財産が不健康になる。人間が過勞になり低能率になり惡素質になり不平怨嗟の情が昂まつて行く。健全に發達して行ける事業が資本家の貪食の殘肴になつて行き、和樂的に經營して行ける集團が資本主義の冷やかな組織に進化して行く。仕事に興味を持つて英吉利風の經營をして行きたいと思つたり、人間を鮮活な問題に引上げて人道的な狀態に改めたいと考へたりする殊勝な人間には、迚もブルの手先は勤まらない。

八

ブルの手先たるもの玆に大に發奮する處あつて然るべきだが扨居馴れて見ると、いつの間にか骨拔きになつて了つて、結局下ツ端と五十步百步の處に留まつてゐるに過ぎない。云はば下ツ端に少しばかりノーブルな皮を被せて、チョツト小猾るく立

廻つてゐるのがブルの手先である。

俺の仲間は四人あるが、俺を除いた三人が兎も角も皆官立大學を出て一人前の學問をしてゐる癖に、どれもこれも同じやうな調子に安ッぽくなつて了つて、一人の志士的な、少くとも紳士的な考を持つてゐるものはない。況して生に面して深い考察を試むるなんて者は一人もゐやしない。仕事にした處が肩書きが手傳つてくれたと云ふに過ぎない凡物で、いつまでも判任官級でゐて然るべき部類だ。俺は大學といふものはモウ少し洒落たもんだと思つてゐたが、全く存外なものだ。尤俺の處のだけが素質が惡るいのかも知れぬが、無駄話が初まると、學校でチャンをしてゐた時の話や、人のノートを借りて試驗をパスした話に極つてゐる。そんなことを云つて自分の大學出であることを忘れさせぬやうに念を押してゐるのだから鼻持がならない。俺も固より無趣味無定見で第一無學だが——さうだらう俺は靑二才の時に漸く田舍の商業學校を出たつ切りだ。原書などは無論讀めぬ。片假名を澤山使つて嚇かす文章などは出來ないに極つてゐる——アトの同類だつて、何の役にも立たないことを松屋のノートに書き溜めたといふだけで、何にも知らないにも程がある。いつかもその一人と茶話の末に變挺な話に外れて、古臭い宇宙觀などを喋々し初めるので、俺も俺一流のプラグマティズムで應戰した處が、「客觀的主觀觀念論に據れば……」なんて黴臭いアカデミックな調子に出て來たので、馬鹿々々しくて已めて了つたことがある。何れ高等學校で覺えて來た位の處なんだらう。鼻元思案にもならない觀念哲學だ。音樂、詩歌、小說、戯曲、何一つ解つちやゐない。時たまコジツケの落首を廻してよこして嬉しがつてる程度だ。宗敎などになると猶更お宗旨違ひで、神樣があにもないにも、テンデそんなことが問題になつてゐない。下手なことを云ひ出すと僞善者扱にされて了ふ。どれもこれも仕事をして、それから酒を飲む、之れが人生といふものだと心得てゐる連中だ。

俺達の社會では、碁を打つか謠曲を唸るか球を突かないと仲間外れになつて大に損だが、俺は何も出來ない。藝者買は全體藝者なるものが大月並に出來てゐる上に、俺は三味線が脊蝿い人間だから、金を出して藝者買をする氣にはならない。尤女は嫌ひじやないが、注文通りの女なんか何處にもゐさうもないから、つまり出來ない相談だ。酒は好きだが、耽溺するほどの酒量でないから、酒席の長座は迚も遣り切れない。酒を飲んでメートルを揚げることなら大好きだが、旨い話相手もないし、大抵のヤツは酒や女に氣を取られてつまらない話の趣を合せてゐるに過ぎないから已めだ。

こんなチグハグな手合が一緒になつてゐて格別衝突も摩擦もなくて過して行かれるのは、いづれがんでちや食へないからなんだらう。さういふ處へ行くと大學もヘチマもない。貴いて頭が良くて、仕事がヘキ〳〵して、俺達を料較してくれると可いんだが、さうでもない癖に同類で候で吾々の前に場塞げをしてゐるんだから甚だ迷惑な譯だ。何でも頭が良くなくちや可けない。頭が良くさへあれば文句はないんだが、世間といふものは忙しいとイか却々良い頭の選り分けたんかしてゐやしない。片ツ端から冒頭で人擇りをつけて了ふ。俺はいつでも道樂の方では文學士なるもの、仕事の方では法學士なるものに邪魔されてゐる。折角暇で遊んだり働いたりしてゐるのに、餘計なものが飛出して來て、餘念もないものを脅かすのは閉口だ。

九

俺達の上にマネージする男が一人ゐる。マネージヤアと云つた處が、俺達の中から昇上つたもので、孰れ似たり寄つたりの人間だ。唯少しばかり餘計にブルの方へ踏込んでゐる位の違ひに過ぎない。全くの小僧上りだから、仕事が頭一杯詰まつてゐるだけで、識見も理想もあつたものではない。何か云ふと『君は理想家だから可けないよ』つてなことで、理想からはとくの昔に墮落して了つてゐる俺でも、この男こどから見ると、まだ兩過ぎて可けないらしい。『さう書いてあるやうにに行かないものさ』と『そんなことで治まるのが丁度のこなんだ』とか、すぐ妥協宗を持出す。さうして『あの人達にはそれでは通らないんだ』と、すぐ對ブル態度の講釋だ。その方にかけても如何にも俺がまだ熟してゐないかの如く暗示するんだ。不得要領術の達が散々廻つてゐる俺、それ以上は眞赤な嘘つきでない。勤まらない位、立派に妥協屋でありオポチユニストである俺でも、まだその邊は不充分なものゝ見へる。理にも段がある譯だ。處がその劫を經た大古狸でも、ブルの處へ出ると矢ツ張小さくなつて云ひなりになつてゐるから驚く。

十

マネージするヤツの上にまた專務の×といふのがゐる。これはまた手數のかゝつたブルで、社長の×やうに無學文盲慾深一天張の野生ブルなら一層纏まつてゐて可笑らしいんだが、このブルは立派に大學を出て、相當理智の頭を持つてゐる筈なのに、金を溜めるのに氣を取られて、理窟も何もなくなつてゐるんだから厄介だ。どうも金の魅力は恐ろしいもので、七年や八年餘計に教育された處で、慾の前には何の役にも立たないものらし

い。それが矢鱈無性に非道を通すのと違つて、道がに論理を運ぶ頭はあるのだから、無理と極つてゐる仕事にでも、兎も角一ト通りの理窟をつけて尤らしく仕立てゝ差向けるんだから、手先共には全く仕末に行かない代物である。手先の前では強いことを云ってその屁理窟を反復して我を通さうとしてゐるが、腹の中では道がに勝目がないと思つてるから自分に出掛けて行つて相手に打ツ突からうとはしない。手先を往生させて置いて『行つて來い』と來る。手先が行つて負けて來ると『働きのないヤツ』にして了うが、自分に出て行けば屹度負けて來る。社長のは理窟も何もない『行つて來い』だが、事務のは理窟つきの『行つて來い』だ。その理窟も『ト云つて置くのさ』ゝ捌けて出て不理窟を自認し手先にも諒辨さして置いての言付なら、手先のことだ、何とか繕めて御忠義振を見せるのだが、それでは示しが利かないつもりででもあるのか、そんなことはオクビにも出さないで威張つてゐるから面憎くゝなつて、可い加減な處であしらつて歸つて來る。損な男である。この×がそれ程不論理の論理で立派な頭が命で參つて了つてゐる癖に、妙に學校出を入れたがる。何でも學校を出ればいゝものだと思つて學校出の滓を珍しがつて採用してゐる。物質科學の出だけに技術の事は八釜しくも云ふし研究が好きらしいが、頭が小さくて細かくてばかりゐて眼先の仕末だけは出來るが、それを大きく括つて見事に經營して行くなんて氣の利いたことは覺束ない。その方へかけると商業學校出の方が何と云つても上手だ。人を使うんでも仕事を經營するんでも眼の見へるヤツがその方に多い。現に一ツ橋のヤツは金を作つてゐる。赤門のヤツ等は官僚の保護を受ける身過なら偉いか知らぬが、ブルの中へはいつて鮮かな腕を見せてゐるやうなヤツの少ないのは事實だ。『ブルの奉公人見たいなブル』の役目を無事に勤めるヤツはあつて一本立ちで世智辛い民間に金儲けをしてゐるヤツは確かに少ない。賞與を溜めて金を作つたヤツはあつても自分のリスクで金を作つたヤツは少ない。このブルなども型の如く物を怖がつて知ら抜いてゐる事の外には手を出せない。僅かに太ツ腹な社長にくつ附いて、お蔭で身上を殖やしてゐる、極めて安全な人物だ。

どうも技術屋なんてものは物質的にばかりものを考へて、人間などは生き物だと思つてゐないらしい。この男も萬事物本主義で、仕事の本統のコツは人本主義にあることを御存じがない。だから人間を使ふことの下手さ加減、隨つて手下に於ける不評判はお話にならない程だ。社員の待遇案などに不熱心で冷刻なこと驚くばかりで。俺などハタから見てゐると、責めて上ツぺだけでも慎重に考へてゐるかの如く見せかけたら可ささうなも

のだと思うんだが、一向お構ひなしだから、お話にならない。これだから人間を活かして使ふなんて藝當が出來やう筈がない。俺なんどもモウ十餘年といふものつき合つてゐるんだが、×のポケツトマネーで酒を飲んだなんてことは唯の一度もない。俺は人に御馳走になることの嫌いな人間だが、貧乏人の俺が社のために時々部下を犒ふ位なのに、とさう思ふと解らず屋にも程があると思ふ。既に人間を人間と思ふてゐないのだから人格を尊重するとか、誠を人の腹心に置くとかいふ洒落たことに氣の附く筈もない。始終疑はれてゐると思ふから、疑はれさへしなければ役が濟むといふ程度で、可い加減に仕事を押し附けて置くやうになるのも、雇人根性で仕方はあるまい、殺して使ふから死んで働らく。こんな殺活な呼吸は別としても、かう世の中が六つかしくなつて來て、人を使ふことが八釜しくなつてるのに、アヽしてポカンとしてゐて可いのか知らん。人を研究心が足らないなどと云つてゐ〻、當人は大きな隱で手ぬかりをしてゐるんだから笑止だ。

人間を使ふことばかりではない。經理とか整理監理などの總務的な仕事を仕事と思つてゐないから、折角營業で頭を惱ましてゐても、それが皆尻抜けになつて了つてゐる、技術屋なんてものはそんなものなんだらう。

十一

から並べて見ると、ブルの手先にしろ、ブルにしろ、乃至ブロにしろ、碌なものが一つもないことになる。だからと云つてそんならもツと上等な社會が何處にある。窮屈な頭で窮屈な場所に置かれてゐる教師仲間、血の氣のない教役者の社會、兵隊さんの方は知らないが、下らないことに拘つらつて小さくなつて行く役人の世界、どれだつて似たり寄つたりなものだらう。まだ悟りが良くて、氣が利いて、相當人間世界の理屈が解つて融通が利いて、仕事の出來るだけ、ブルの手先の方が或は上等かも知れん。少くとも今日の思想家や新聞屋などよりは餘ツ程上等だ。オダてゝ云ふなら、今日の社會の中堅をなしてゐるのがこの部類だと云つても可いかも知れぬ。だがこゝで、人生に深い洞察を持つてゐるかとか、内部生活が充實してゐるかとかいふ嚇かしを掛けられる段になると、孰れも一様に成つてゐないのは據ろない次第だ。と云つてだ。そんなことを朝から晩まで我鳴つてゐる藝術家だの思想家だの云ふものはそんならどうだ。そんな文字を紙上の玩具にして傑らさうに構へてゐて、その貧弱な空虚な生活にシビレを切らしてゐるんじやないか。云ふことは旨いんだ。だが、それだけのものなんだ。本統の嚇

を持つてゐるかどうか解らない。熱は眼は開いてゐる時だけの熱かも解らない。假りに熱が本統にあつてもその生活はそんならどう辻褄が合はさるんだ。俺は一廉の哲學者で評論家だとされてゐるTと突合つたことがあるが、三度目か四度目にはもう金を貸せだ、俺も貧乏だがヤツ等は猶貧乏だらうと思つて同樣のしまり屋の日から都合して貰つて用立てたんだ。大きな原稿が出來てゐるとかで乾度返すといふ日が來たが、どうせ滿足には返る氣遣ひはないと思つてゐた。だが待つてくれ位の手紙でもよこしさうなものだと思つてゐたら、梨の礫だ。癪に障つたから催促してやつた。せめて友誼を維持する程度にでも返事をくれさうなものだが何の返事もない。手紙のやり取りや時日の約束などは事務屋だけに破格な俺だからスツカリ腹が立つた。二週間の間を置いて今度は嚇かしてやつた。圖々しいもんだ。それでもウンだとも潰れたとも云つて來ない。こんなヤツが大きな顏をして名を賣つてるのが癪に障つたから……全體俺達は相當に仕事をして時には社會政策の上にも多少意義ある仕事をしてゐることもあるのに、俺達の仕事は誰も何とも云つてくれないで、却つて駈け出し文士、面を見ると、木綿絣を寒さうに着てゐる垢だらけの青二才が、十三日間伊豆地方へ旅行するとか、何々の原稿を何十枚書いたとかいふ愚にもつかない日常瑣事が、圖々と報告されて、公人扱を受けてゐるのが馬鹿げてゐると思つてゐる……友達の弟で大學を出て辯護士を始めたから何かやらしてくれといふ青年の皮切商ひに、その證文を送つて談判さして、遮二無二取立ててやつたことがある。Tの氣では俺達を借倒するのを公人感謝税か何かと思つてゐるんだらう、いゝ氣なものだ。こんなヤツは雜誌ではブルをケナして置いて、蔭へ廻つてはブルの懐ろを痛めて生きてゐるやつだ。それで食つてゐるお蔭でブルの攻擊が出來、その攻擊がまたヤンヤと受けるなどは、隨分馬鹿げた世の中だ。だから俺達は大抵の旨い議論も大割引をして讀む氣になる。勞働運動の誰が警視廳から生活費を取つてゐるとか、×大學敎授の誰が××紡績からシコタマ取つたとかいふ事實が、チヤント俺達の方へ調べが上つてゐるんだから、餘ツ程用心して雜誌や宣傳に向はないと物笑ひになる。ブル攻擊もこんなことをするヤツがあるので、ブルの方でも片ツ端から『アイ等はユスリだ』と思つてゐる。なんぼ心血を濺いで書いたものでも、てんで手にも取らない上に、耳の方が先きにこんなことを聞込むものだから、世の中の改造論者なんてものをユスリと見て了ふのは是非もない次第だ。それでも理想は理想だから、俺達はさういふ氣運を蔑視してはゐないが然し餘ツ程シツカリしないと、仕舞には飛んでもないことにな

ちう。その責任はブルとユスリの双方にある譯だ。緩々見物することにしやう。

文士なんてもの丶中にも可い加減なものも多いらしい。ヤツ等は飛道具——活版を抱き込んで、勝手に自家廣告をしてゐる。ブルの廣告には金が要るが、ヤツ等は無代廣告で褒めツこをしながら名士製造を仕合つてゐる。月評なんてもので大抵判つてゐる。實質のプーアなことは大方想像がつくやうな氣がする。面を見ただけで類推するのは可けないが、この間もＴＴ兩氏の祝賀會といふのへ出て見たが、隨分安つぽい表情や容姿をして『からツきしどうも……エヘ、』なんて上半身を前後に搖つて、宿屋の客引宜しくなのがゐた。概して眞劍なことを書いてる割には人間に落附きが乏しいやうな氣がした。何だアレなら俺だつて引けは取らぬ俺達の社會にでもモツトしツかりしたヤツがゐると云ひたい感じがしたのである。會から歸つて、その人達の自選集を見ると二三の人を除いて、片ツ端から輕侮の念を起させられた。多くはキザでナマで、生活感の偉らさうな割に生活力が稀薄だ。第一世間の狹さ、思索の狹さが眼立つて甚しい。Ｔの書いた發見は全くの拵え物だし、Ｈの書いた青年は相も變らぬ下宿屋人種だし、Ｍの扱つた中年者などはナマ若い作者が大氣取で書いた擬似中年者に過ぎない。そこには世間知らずと、人間嫌いと、泣き虫と、怠け者と、すれツからしと、助平がゐるばかりのやうな氣がする。與へられた境遇を下ツ腹に据ゑることも、切開いた運命をシカと踏みしめて行くことも、賑な人間をあしらうことも、困難をつき破ることも、苦痛を堪へ忍ぶことも、大方覺束ないやうな氣がする。さうコダわらずに通つて行き、乘切つて行ける度胸があつて初めて男なんだが、サアつて云ふと泣いて了うから手答がない。驚異だ讃歎だ感激だ達觀だと今様の標語を反複することが人間の深さだと思つてゐる。一向に甘いものだ。何にしても本物にはまだ大分距離がある。或る者は缺乏を享樂し、或る者は過剩を享樂してゐるに過ぎない。ツマリ筆不精が實務家になつて行き、口不調法が藝術家になつて行くだけのもので、大した違ひもなささうに思はれる。

思はず默辯を弄した。こんなことは誰でも云ひさうだからモウ已める。

十二

何だか俺一人偉いやうなことを云つて了つたが、俺達だつて空虚な點に變りはない。飲過ぎか何かで夜深しをした翌日などは全く成つてゐない。緩漫な呼吸が虚脱してゐるやうな内臟

ら厭々出てくるやうな日には、地上の生命を樂むだの、現前の生活を愛するだのといふ洒落た心持は毫もない。飲過ぎでなくたつてこれと大した變りのない日を送つてゐる。ア、時は飛ぶ生命がドン／＼身の內から逃げて行く。こんなことでは仕方がないと思ふ日はいくらもある。然し閑人のやうにその空虛を嘗めて穴を大きくして喜んでるのとは違ふ。小鼻に汗を掻いて働らいてゐると、大抵な空虛は吹き飛んで了う。それで可いとして置く。

歲を取るとどうも安價な肯定主義になつて了つて可けない。禿げかゝると皆この肯定主義の凡人國へと行き着く。その先はモウ死人の國だ。俺も是じや物足らない。だが家を持つて、無產の身を持つて、薄弱な意志と體力を持つて、爰までがヤツトだつた。幸か不幸かだ、所信に邁進して身も家も忘れるといふ程の人間も見當らない日本に生きてゐるお蔭で、吾々の如き凡物でも差して氣恥かしくもなく住んで居られるのは難有い。顧みて情けないと思へば情けないが、お互ひ樣だと思へばお互樣だ。

享樂氣分のアメリカ
避姙同盟のアメリカ

——一、昇降機から見た明月　二、禁酒令の前夜　三、紐育避姙協會——

佐々木指月

昇降機から見た明月

Bは、三月遊び暮して、流石、持ちのよかつたポケツトも、からつぽになつてしまつたものだから、もう、朝の珈琲も呑めないことになつた。それで止むを得ずCセテイの街を歩き出した。

Eは新聞を手にして、その職業紹介欄を見ながら歩いた。そのなかに、エレヴエターボオイ、ワンテツトと云ふ廣告があつた。昇降機の操縱をする男を欲しいと云ふのである。場所はC街の一三五六番で、Pと云ふホテルである。Eはそこへ出かけた。

運河に面した公園に添ふた街で、その近所には、夜る賑かな通りがあつた。だがこれはもう十一月の終りで、北のハドソン灣から吹いてくる風は、山もないオンタリオ州の野を越えて、大湖を渡つてちかづけに、このCセチイに氷のやうな空氣を注ぎ込む。活きとし活けるものはみんな來る寒さを嘆いてゐる。本當に物の嘆いてゐると云ふ感じは、このCセチイの初冬の光景である。

木の梢に、たつた一枚、落ちまいとして、ふるへながらすがりついてゐた葉も、この北風に逢つては、一とたまりもなくまはるくなつて灰色の空にひるがへる。Eはまだ外套さへも着てゐない。縮み上つてそのホテルのなかへ駈け込んだ。

ホテルのなかには、放溫器(レヂエイタア)が、白い蒸氣(スチイム)を吹き上げてゐた。ホールは、エスキモーの極樂のやうに溫かかつた。頬ぺたの赤い女のクラアクがゐた。

女のクラアクは、かれに向つて、三つの質問をした。

一、昇降機運轉手として、市會の鑑札を持つてゐるか？

二、以前働いてゐたところからの紹介狀を持つてゐるか？

三、給金はいくら望んで、一週間に何時間働くか？晝、働くか、夜る働くか？

かれは、これに向つて直ちに三つの返答した。

一、鑑札は持つてゐないのみならず今までに昇降機の運轉をしたことはない。

二、學校の免狀なら持つてゐるが、勞働者としての紹介狀はまだ持つてゐない。

三、食べられて、寢られて、活動寫眞が見られるだけの給金が欲しい。

但し、晝間は働かない、夜るの十二時から朝の八時迄なら働く。

クラアクは笑つた。それではとても駄目だと云つた。然し、チヤムベアボオイとしてなら使つてやらうと云ふ。

かれは二つ返事で承知した。さうして、その晩の十二時から働くことになつた。そこのホテルへ泊つて、そこのホテルでものをたべて、その外に給料として、一日に芝居が一度見られる程のお金を貰へることとなつた。Eはすつかり悅こんだ。

そのホテルは、先づ小さいホテルだつた。五階だての狹い建

築で、メインフロアは全部ホールになつてゐて、そこにクラアクのゐる帳塲があつた。昇降機はたゞ一つで、それが梯の下から、五階の天井まで通つてゐた。二階、三階、四階は客室で、五階目は多くは内の人の室で、Eの室も、そこにあつた。

Eの仕事と云ふのは、極く單純だつた。浴室の掃除をすること。客の使ひをすること。電話の取次ぎをする事。客室へタヲルをくばる事。それから昇降機を、朝の六時から八時迄運轉すること。それから夜るの四時から六時迄、下のカウンタアにゐて居睡りをしてゐることだつた。

然しここに、彼れの最も嫌ひな仕事が一つあつた。それは、客室のチヤンバアパツトと痰壺を掃除することと、よごれものを洗濯屋へ出すことだつた。

さて、彼れは、かう云ふ仕事をあてがはれて、毎晩それを繰り返す身となつた。外套はそこの主婦のお古を頂戴して、左り前のボタンを右前につけ直してそれを着てゐた。彼れにはそれがよく似合つた。さうして帽子は、クラアクの野外帽子を頂戴してそれをかぶつた。女のかぶる帽子だが、そのリボンだけとりかへて、それも彼れにはよく似合つた。Eの云ふところによると彼れ自身は、布哇の土人カナカだと云ふことであるが、どうもさうらしくはなかつた。

ところが、そこに泊つてゐる客と云ふのはまことに不思議な客だつた。大抵は女だつた。客室はいつでもなかば以上あいてゐて、客はみな居つきの客で、新らしい客と云ふのは、多くは夫婦同伴で來て、二三時間のうちに歸つてしまう。男の客がくると、かれ等は、みんなEにチープ即ち心付けなるものを置いて行く。だからEのポケツトは、いつでも銀貨の重みでぶらさがつてゐた。

Eは、うまい穴へ、はひり込んだとばかり、朝は九時から三時頃迄、寢てゐて、それから中食、いや、かれにはそれが朝食をたべて、のこのこと活動寫眞を見に行く。灯がつくと歸つて來て、さうしてかれの今度が即ち中食をたべて、それからカウンタアへ肘をついて尻をつき出して、頰ぺたの赤いクラアクと話しをする。大抵はお客の悪口。新聞の繪を見る。古雜誌の繪をきりぬく。それからあとは客の室を遊びあるいて、そのあげく自分の室へはひつてまた寢る。皆んなが寢る頃になると、黑い目を明く。まるで梟のやうなものだ。かれは純粹に闇に活きる人間となつた。

ある朝のこと、早くかれは梯の下にゐて、梯の下と云つても日本の梯の下のやうに、妙な暗がりが遙かに見えると云ふやうなところではない。そこは所謂地下室だ。光も來れば空氣も來

る。黒ん坊の掃除番の室はそこにある。然も大きな立派な室がある。黒ん坊夫婦はそこに住んでゐて、細君は、上の客の掃除をし、御亭は、下のホールの掃除とそれから大きなファネスへ石炭をくべる役をつとめてゐる。

Eはその低い下にゐて、ファネスへ石炭をくべてゐた。朝の一とくべだけは、彼れがやることになつてゐる。すると、彼れが乗つて卸りて來た昇降機の呼鈴が、けたゝましく鳴る。かれはシャヴルをなげ出して、昇降機のなかへ半身を入れて、あにむいた。

『何んだい？』と、かれは怒鳴つた。

『おゝ！エディー！タヲルを一とつおくれよ。お前はいゝボオイだから！』

いゝボオイと云はれたエディ、即ちEは、もう大きな聲をしなかつた。素直に昇降機のなかへはひつて、鐵の格子をたてゝつて、モータアのハンドルを握つて、一階、二階、三階と上つて行つた。

一階にも誰れもゐなかつた。二階にも誰れもゐなかつた　三階にも誰れもゐなかつた。

朝の六時過ぎだけれども冬のことであつたから、まだ眞夜中もおなし。一階目のホールを通して、一枚硝子の大窓には、向ふ側の街燈が、海の底の光のやうに青くうつてゐた。

二階目には乳色のシエードボールに盛られた街燈が一とつ。明りだけはぼんやりと物にさしてゐた。

三階目もその通り、明りだけは物に、ほのめいてゐた。

かれは。三階目から四階目に上つて來たが、昇降機の鐵の格子の一のなかから見上げるかれの眸には、人の姿は見えなかつた。ゞ明月が一輪、雲翳の、うすものもまとはず、耀いてゐた。

Eは、まばゆさに目を閉じた。昇降機のハンドルを握つてゐた手は動かなかつた。昇降機は、五階の方へと上つてゆく。

『どこへ行くの？エディや！ここにあたいがゐるぢやないか。タヲルを一つおくれつてばよう！』と、今度は下から柔しい女の聲がする。

月の光に魅せられて、さまよつてゐたEの魂は、その聲に呼び返されて、上から下へと下りて來た。ブロンドの髪の毛の下から瑠璃色の目が潤んで、その上に糸のやうな眉毛がかかつてゐる。

『タヲルを、一つ頂戴な！』と、云つた女の唇には、珊瑚か二つ溶けあつて、肩からすべて素肌は桜色の、ランプの灯にかくれて見えない。

『タヲルは、お室にありませんか？』と彼れはきいた。

「タヲルは皆んなよごれたのよ」と、女は、ちよいとほゝ笑んで、「あたい御湯に這入るんだから新らしいのを頂戴ね。」と云つた。

彼れは浴室のわきのクローセツトを明けてタヲルを出して、それから浴室の戸を明けて、琺瑯の白い浴槽に湯を出してやつた。

明月は、湯氣のなかできらめいた。それは丁度、金のいさごが漣に碎けるやうに。

さあ、かれは、この商賣はますますよせないと思つた。

ある日のこと、かれは三階の十九番の室へ、タヲルを取りかへにはひつた。するとその室に、もう一年も泊つてゐるVと云ふ女の片方の目が、まつくろに膨れ上つてゐる。

この女は、極く内氣な上品な女で、少し素人臭いほど深切な女だつた。立派な刺繍のスプレードのかかつてゐる大きな寢臺を持つてゐて、大きな羽根枕には、いつでも緋天鵞絨のペロケーヌがかけてあつた。大きな人形と大きな白薔薇の花の好きな女だつた。

Eはびつくりした。誰れがこの女の目に拳骨を加へたらうと思つた。女はその目をかくさうともしなかつたが、まさかどうしましたかと聞くわけにも行かないから、彼れは知らん顔をして引きさがつた。

さうして彼れは例の赤い頬ぺたに、その理由をきいて見た。赤い頬ぺた――畧してこれを云へば赤つぺたの、彼れに說明したところはかうだつた。

一昨夜、一人のアラスカ成金が、Vの室を訪問した。アラスカ成金と云へば、アラスカへ出稼ぎに行つてゐた砂金取りが、うまく鑛脈か何かを堀り當てて成金になつた、いづれも勞働者あがりの野獸である。

ところがVはあゝ云ふ性質の女だものだから、その野獸に對して頗る深切をつくしてやつた。野獸は莫迦に悅んだ、その悅ぶ樣はホテル中に響き渡つたくらゐだつた。これは少し話しのおまけらしいが、兎に角、野獸はすつかり悅んでしまつた。

さうしていよいよ歸ると云ふ時になつて、野獸はかう云つたさうな。

『お前は、その深切を、俺が行つてしまつたあとでは、すぐほかの訪問者に盡すのであらう。それを思ふと、あゝやきもちがやける。』と云つたさうな。さうして『ばかり!!』ばかりと云ふのはなぐつた音だが、これが拳骨でついたのだから『ぶすり!!』Vは、きやつと云つてそこへ仆れた。野獸はそのまゝ階段を驅け降りて、そとへ出てしまつた。

Jが、Jと云ふのは、寢間のエレヴエタアボオイだが、それと知つて、昇降機で、下のホールまで追ひかけたが、その時には野獸はもう、ストリイトへ出てしまつてゐた。氣の毒なのはVだよ。かの女はあんまり訪問者に深切だから！と、赤つぺたは話を結んだ。

Eはその時、かう思つた。日本では、かう云ふのを甚助と云ふのだと聞いてゐたが、して見るとこれはアメリカの甚助、卽ち、アメ甚なるものだ。いやアメ甚は恐るべきものだ。やつぱり洋の東西を問はず野獸は振るに限るんだなと、大にVに同情を表した。それから彼れはVの室へは、特別にタヲルを餘計くばつた。」

また、或る日のこと、かう云ふことがあつた。

それは、こゝの二階の一番の室(ルーム)に、Mと云ふ、このホテルでの先づ第一流の美人があつた。Mの目には夢見る人の惱みがあつた。その夢は炎えほゝる燐火のやうに淡い綠色をしてゐた。燐火だから日には堪らない。今にも消えてゆきさうである。見てゐるとかの女はいつでも恍惚の國に住んでゐるやうで、こちらの胸がやるせなくなつてくる。髮の毛は朱樹のやうな色をしてゐて、柔かさうな耳たぼと、その鼻の形とはよく調和してゐた。唇の色は、紅薔薇(ばら)が乳(ミルク)のなかから浮かんでくるやう。胸はばつて、肥つてゐて、手の甲には四つの凹(くぼみ)があつて、肌の色は半透明な大理石が、のぼる朝日を包んでゐるやうだつた。

かの女は、Eが知つてるだけのことは何んでも知つてた。かの女は、Eが讀んだだけの小說は何でも讀んでた。のみならず彼の女はEの見ない芝居を見てゐた。彼の女は音樂に通じてゐた。彼の女はフレンチが話せた。Eはあたまをさげちやつた。

かの女は、常に、室(ルーム)にゐる時には、鶯茶に藤の花の縫取りのある日本のカモナを着てゐた。さうして一日しどけなく、長椅子の上にねそべつてゐた。かの女は、横のものを竪にするのにも、ベルを鳴らしてEを呼んだ。それがEの働きの時間中だけでなく、時間外にもEを呼んだ。Eはしまひには、ホテルの雇人だか、かの女の雇人だかわからなくなつて來た。赤つぺたなぞは常にかの女の我儘に對して不平を云つてゐた。然しかの女は決してEにかづけなぞはくれなかつた。また何等の御馳走もしなかつた。

だが、かの女は常にかう云ふ事をしゐた。かの女のところへ訪問者が來ると、必ずEを呼んでビイアを買はせにやつた。ホイスキイを買はせにやつた。煙草や、キアンデイや、或る時にはレストラントへ料理を注文にやつた。さうしてそのたびに、訪問者の手から、かれに心付けを出させた。

『このボオイはいいボオイだから、あなたいくらかおやりなさいよつてば。』と、かの女が訪問者に、その夢の燐火の一瞬を與へると、訪問者のポケツトは、これに對して否か應でも開かれた。

Eはある時、かう思つたことがあつた。あの女が一瞬を訪問者に與へると、大抵一弗の紙幣が彼れの手の上に載る。して見ると、あの一瞬は一弗に價ひするわけだ。一弗はいらないからどうか一度、あの一瞬を欲しいものだと、さう思つた。いや、現金は五十仙でいいから、あと五十仙分あの一瞬の二分の一を貰つても惡くはないとかう思つた。

だが、かの女は、Eには、その一瞬の十分の一をも與へたことは、決してなかつた。Eを見る時のかの女の目は必ず眞直ぐだつた。決して横へ流れなかつた。流れてもそれは商賣用の流れ方とは質に於て違つてゐた。

そこでいよいよ或る日の事だつた。無論時間外だつた。Eが五階の食堂でこれから彼れの晩餐をたべやうとしてゐると、赤つぺたから、家内電話がかかつて來た。それはMが呼んでると云ふことだつた。丁度昇降機が下にあつたので、かれは、廻り廻つた階段を目のまはるほど馳け下りて、Mの室へ行つて見た。

Mの室には、酔つぱらひの男が來てゐて、もう、ろれつもまはらなくなつてゐた。Mはピンクの靴下に包んだ形のいい脛を出して相變らずソフアに寢ころんでゐた。男は、よつぽど下等な奴と見えて、嚙み烟草を、くちやくちや嚙んで、その唾を、痰壺へ、ちゆうちゆう吐いて、痰壺のまはりは烟草の汁で血のやうに赤くよごれてゐた。痰壺のなかには林檎の皮や、蜜柑の皮や、紙屑なぞが押し込んであつて、それがまた、烟草の汁で漬かつてゐた。さうしてその上には牡蠣の剝身の崩れたやうな青白い痰が、ぺろりつと乘つてゐる。一と目見ただけで、Eの胸はもうむかむかとしてゐた。室のなかは一たいに烟草の烟とホイスキイの臭ひで埋つてゐた。Mと向ひ合つて椅子に男はかかつてゐる。鼻のあたまの赤い、目の小さい、金の入れ齒が、まつくろになつてる、そのくせフロツクコートを着た、一と目見るから蟲の好かない奴だつた。

『おい！』と、その男がEをよびかけて、『手を出せ！』と云ふ。

Eは手を出した。

『よし、手を出したな。さあ、これをやるからしつかり握れ！』と、男は、への字口をしながらEの手の平へ何か乘せた。見ると五弗の金貨である。

Eは手を握つた。

『ヘヱ！ありがたいか？』と、さも憎々しげに男は云ふ。
『ありがたう』と、Eは答へた。
すると男の足にはいてた、大きな鮫のあたまのやうな靴の先は、王者のやうな權威を裝つて、そのきたない痰壺を指し示してゐる。
『これを取りかへろ!!』と、男は云つた。
Eの目は輝いた。Eの下唇は嚙みしめられた。Eの胸は動悸のために波うつた。Eのその五弗の金貨を握つた手はぶるぶると顫へながら、高く振りかざられて、金貨の音が、ぴしやりとフロアにしたかと思つた一刹那。
『エデイ！』とMは聲をかけた。『それをお前のポケツトへ入れておしまい！』
Eは、かの女の顔を見た。Eの炎えてるまなざしと、かの女の憐のまなざしは、ぴつたりと出逢つた。憐は、いつしか夢となり、斜めにEの目のなかへ媚びるやうに流れ込んだ。と、思つた時は遲かつた。その目はもう男の方へ移されてゐた。
さやうさ。その時間の短かさは、先づ一吋の四分の一、金廿五仙がところだつた。
總計五弗と廿五仙。Eは振り上げた手の卸し場にこまつて、手を擧げたまんま、ダンスでも踏まなければならなかつた。どうせ、自分は、布哇の土人カナカだから、布哇のフラフラダンスでも踊らうかと彼れは思つた。
彼れは、恭しく御挨拶を捧げて室の外へ出た。

禁酒令の前夜

あれはたしか千九百十八年の五月の一日であつたと思つたが、その日からアメリカ全體は、ドライとなつた。ドライと云ふのは禁酒のことである。尤もその前からも禁酒法を布いた州はいくらもあつた。まだ禁酒法を布かない州でも、その州内のある町では、町として禁酒法を行つてゐたところも少なくなかつた。
カレツヂタウン即ち大學校のある町なぞにはそれが多かつた。凡て女に選擧權を與へた州は、どしどしドライになつて行つた。その頃アメリカには、ドライタウンと云ふのと、オプンタウンと云ふのがあつて、オプンタウンの方は、酒は勿論呑めたし、また所謂、往來の上の淑女も住むことをゆるされてゐた。
殊に紐育なぞは、ワイドオプンタウンと云つて、その方は實に自由自在だつた。ところが今云つたやうにアメリカ全體がプロヒビシヨンを實行して、もう酒は一滴も呑めないと云ふことに

なつてしまつた。

それは丁度、世界大戰中だつたが、ワシントン、デー、シーの上下兩院では、その禁酒法を通過して、大統領ウイルソンが、それに署名して、いよいよいつの幾日からそれを實施すると云ふことになつた。いや上戸黨の怨嗟の聲と云つたら、殆んど聞いてゐられなかつた。伊太利あたりから來た移民のなかには、それを憤慨して、靴の塵を拂つて、本國へ歸つたものさへあつた。南アメリカへ去るものもかなりあつたと、新聞に出てゐた。

この法律を通過した第一の理由と云ふのは、穀物の浪費を防がうと云ふのにあつた。つまり戰時中、歐羅巴へ向つて莫大の穀物を輸出しなければならないアメリカは、醸酒のために年々どのくらゐの穀物を無駄にしてゐるかと云ふことを數へあげて、禁酒をしてその費えを減じ、國家の經濟を幾分整へやうとしたのである。

第二の理由は、國民の風紀及び衞生思想の改善にあつた。アメリカでは、どこの都會、どこの市街にも、角々にサルウンがあつて、大勢の男たちが、そこのカウンタアへ集まつて呑んでゐる。のんだくれてゐる。さうして、ぐてんぐてんになつて外を歩いてゐる。電車へ乘れば、電車のなかを酒つ臭くし、家へ歸れば罪もない妻子を相手に太平樂を並べる。どうも文明國の市民として、さう云ふことをすべきでない。見つともないから以後、呑むことはやめやうではないかと云ふのであつた。

第三の理由は、酒をのむと、からだを惡くする、人種をだんだん劣等にしてしまう。低能兒や、精神病者や、罪人は、どうも酒呑みの子孫に多い。酒は實際國家を亡ぼし、家庭を破るものであるから、あんまり呑むことはもうそろそろよさうではないかと云ふのにあつた。

さうして、この法律の通過の裏面には、二つの大勢力が動いてゐた。一つは基督教で他の一つは女權であつた。アメリカではお寺と女とは大抵の場合には同盟する。アメリカの婦人參政權運動者は今ではもうその運動に成功して、異常なる勢力となつてゐるから、どんな政治家だつて、その力を借りずには何事もなし得ない。坊さんたちはそれを知つてゐたから、とつくにサツフレヂエツトとは握手をして置いたのであるが、その後坊さんと女は、情意投合して色々な問題を持ち出した。禁酒運動などはその重なるものである。亭主がお酒を呑まなくなれば、女房のお小遣は自然多くなる。さうすれば、お寺のお賽錢も從つて澤山上るわけだ。アメリカの坊さんも、なかなか隅へは置けない。ここに於てか政治家たちは、勢ひ敵す可からずと見て、

早速女標の尻に敷かれてしまつた。政治家と、坊さんとの間に妥協が成立してゐたかどうか、それは私は知らない。

さあ、かうなると、第一に反對の氣勢を上げたのは勞働者だつた。何？來年の何月何日から酒が呑めなくなると？おい、一寸待つてくれ！あの海に浮いてる軍艦は、ありや誰が造つたと思ふんだ？この陸を走つてゐ鐵道は、一たい誰が作つたと！ふんだ？俺たちはな、實際、この二本の腕で、海と海とを連結し、陸と陸とを接續さしたのだ。文明の、へつたくれのと云つたつて、それを、マテリアリイに組み立てゝ、證明したのは、ありや誰れがやつたと思ふんだ？何かい、坊さんの說敎の金切り聲がやつたとでも云ふのかい？それともまた、女たちのお白粉の臭ひが、それをやつとでも云ふのかい？さうぢやあるまい？それは、みんな我々勞働者の腕の力が、その偉大なる仕事をやつたのだ。

その勞働者に何かい？晝飯の休みの時間に、一ぱいのビイアも吞ませないと、云ふのかい？疲れて歸つた晩餐の膳に、一ぱいのホイスキーをも吞ませないと云ふのかい？おい、莫迦にするのもいゝ加減にしろ。俺たちはな、かう見えても、戰場に於いても、工場に於ても、本當の主人公なのだ。さあ、禁酒法を實行するなら實行してみろ。ガツデム、サノオブ！どうするか見やがれ！と、勞働者はすつかりと啖呵を切つてしまつた。

それに加勢したのは、酒屋の老爺である。料理屋の主人である。あらゆる夜るの暗い社界の商賣人である。それに百姓たちも馳せ參じた。

百姓たちの禁酒案に反對した内情はかうだつた。大勢の壯丁は戰地へ行つてしまつて、農園はまことに手少なになつて來た。さうして農產物の需用は實にアメリカ開國以來の盛況を呈して來た。百姓たちの收入は平素の比ではない。然し慾に目のないのは百姓だつて同じことで、若しも、この上、醸酒に要する穀物が賣れたならば、もつと穀物の値が上るだらうに、その内でも麥などは、うんといい値になるだらう、さうすれば、もつと儲かるに違ひない。これは禁酒案を今のうちに揉み消してしまう方がいいと云ふのにあつた。

この機を利用した一派の政治家たちは、否禁酒運動を起した。事々にデモクラットの政策に反對してゐたレパブリカンの政治家たちは、多額の運動費をこれらの人々から集めて大騷ぎをはじめた。ことにミルヲオキイ市などでは全市こぞつて否禁酒運動に熱中した。シカゴ市もどちらかと云へば、否禁酒運動に贊成してゐた。

ミルヲオキイ市は、ビーアを醸造するために存在してゐる都

市であつて、市民は殆んど獨逸人の子孫である。そこで彼れ等は、こんな事を云ひ出した。ウイルソン氏を中心としたデモクラットの制定したプロヒビションは、それは、我れ等チユウトン系のアメリカ市民を苦しむる目的を以てなされてゐるものである。然し、我れ等は　我れ等の壯丁を戰場へ送つて、現在、星條旗下に碧血を流して、然も我れ等のフアテルランドと戰ひのうちに相ひ見えてゐるではないか。それを忘れてくれては困る。デモクラットにはアングロサクソン系の市民が多い故に、さう云ふことを我れ等に向つてすると云ふのならば、我れ〲にも腹がある。」と云ふやうなことを云ひ出した。これは、全アメリカに於ける獨逸人系の市民を煽動して、その間に於て自黨の利益を得やうとしたレパブリカンの、苦肉の策であつたとも云へる。

その頃のレパブリカン系の新聞紙には、ドライ、ロオに對する色々な諷刺畫なぞを掲げてゐた。なかで一番、皆んなを笑はせたのは、紐育で發行するある獨逸字の新聞の繪であつた。それは、スタチユーリバアテーのまはりの海がのこらず乾いてゐるところだつた。スタチユーリバアテーと云ふのは、紐育港外にある自由の女神コロンビアの大銅像で、日本の奈良の大佛樣のお嫁さんにしてもいいくらゐの大銅像が、手に自由のトオチをかざして海のなかに築いた石のペデストルの上に立つてゐる。アメリカ中のドライだからたまらない、流石の紐育港の潮も乾いて海は底をあらはしてゐる。若やいでゐたコロンビヤ女神は、これもしなびておばあさんになつてゐる。手に持つてゐたコツプは倒さになつてゐて、そのなかには一滴の酒もない。海の沙の白い上には、魚の骨や、馬の骨があらはれてゐる。そこへ、凱旋兵が咽をかはかして歸つてくるとこの始末、アメリカはすつかりドライになつてゐて呑む可きものは一つもない。『俺の國は變つたなあ！』と、かの兵士は呆れ返つてゐるところであつた。

この外に皮肉なのは『百鬼夜行の繪が畫いてあつて、一番先きのアルコホールと云ふ小さいおばけが、アンクルサムのためにこの角をおさへられてゐる。然しそのあとからは、コカイン、コロロホルム、イサア、モルヒネ、ニコチン、アヘンなぞ云ふ一騎當千のおばけどもが控えてゐて、アンクルサムを冷笑してゐるところである。アルコホールは征伐しても、そのあとからかう云ふものが出て來たらどうするか？と云ふ意味が現はされてあつた。

まだ色々面白いのがあつたが書いてゐるときりがないからこゝではよして置く。とにかく、禁酒黨と、否禁酒黨との爭ひは

日一日とはげしくなつて行つたが、とうとう時日は、その年間のうちに過ぎ去つて、全アメリカは禁酒法有效期にはひつてしまつた。然し、ビイアだけは賣つても差し支へないと云ふことになつた。ビイアは酒のうちへははいらないことになつた。上戸連は、ほつと息をついた。息はついたが、それは先づ息がつけると云ふだけの話で、そのビイアには、醉へるやうなアルコホールは、はひつてはゐなかつた。酒のうちへ入れられないのも無理はない。酒だと思つて呑んだ日には腹の立つやうな氣のぬけたビイアだつた。

尤も、お金のある人たちは、前もつて澤山酒類を買ひ込んで五年や六年、プロヒビションが續いたからとて、呑むには不自由しないやうにちやんと用心してしまつた。

富豪連は、キアツキル山の頂上の上空に大きな飛行船を浮べて、そのなかへバアをこしらへて、そこ迄飛行機で呑みにゆくなぞと云ふことを云ひ出した。上空幾キロメートルかは、もう法律以外のところで、たとへそれはアメリカの空であつても、罪にはならないと云ふことだつた。

また、フロリダ州のパルムビイチと云ふ富豪連のあつまる避寒地では、對岸のバハマ島まで、乘り合ひの飛行機へ乘つて呑みにゆける。バハマ諸島は英領だから、アメリカの法律の及ぶところではない。飛行機は一分間一弗でバハマまで二十分、往復で四十弗、富豪の身になつて見れば、我れ〳〵が四厘もつかうくらゐなものだ。たつた、四十弗でアメリカの法律が蹂躪出來ると思へば痛快ちあないか、なぞと彼れ等は云つてゐる。

それからまた、そんな飛行機さはぎをしないでも、醫者へ行けば、この者はアルコホールを呑まなければ身體に惡いからと云ふので、ちやんと處方を書いてくれる。それをもつて、藥劑師のところへゆけば、ヂンでも、ホイスキイでも、シアンペンでも、ブランデイでも、但しは甘いベネデクテインでもなんでもくれる。だがこれは、べらぼうに高い。さうして澤山はくれない。二三軒の醫者を歩いて、二四枚の處方箋を貰つて、それに對して診察料を拂つて、また藥劑師に、うんと　られた日には、一と罎がいくらと云ふ酒になつてしまう。ずぶ六にまで發展するには、大抵の貯金帳では追ひつかない。

また、どうかすると、文房具屋で賣つてゐる赤いインキのなかには、クラレットのはひつてゐるのもある。然し、うまくクラレットの分にあたればいいが、これは當て物と同じ事で、皆んなが、皆んな當ると云ふわけにはゆかない。文房具屋の店先に立つて、赤いインキ壺の臭ひをかぎわけてゐると、往來の人や、そこの女賣り子に笑はれる。犬にまでひやかされないと

も限らない。

どつちにしたところで、この禁酒令は金持には何でもなくつて、貧乏人には、つらく當つた法律だ。無産階級の怒るのも無理のないところである。

丁度それは、四月卅日の晩だつた。四月卅日と云ふと、もう紐育の春の終りで、翌日からは麥藁帽子の夏がくる。昨日まで解け殘つてゐた雪の華盛頓角園の樹々はもう萌黄色の柔かい葉をつけて、アアクランプの光のなかにそよいでゐる。私は自分のゐた家の避難梯子に腰をかけて、下を通る女と男の腕の組み方を研究しながら、マドロスパイプをくはへてゐた。

すると一團の友人どもが下から聲をかけた。

『おい何をしてゐるんだい？』

『煙草を吸つてる。』

『煙草なんぞを吸つてゐる時ではない。今日は何日だと思ふんだい？』

『今日は四月卅日』

『今夜の零時零分零秒からは、五月一日だと云ふことを知つてるか？』

『知つてる』

『知つてゐるなら早く下りて來い。呑むのは今夜限りだぞ。カモングヴウン、ハリアツプ』と云ふ。

成る程、明日からはプロヒビションだ。當座のお別れに呑んで置かうと、かう考へた私は、帽子を、あたまへのつけて、外へ飛び出した。一群の男女は、もう少々きこしめしてゐた。私たちは、裏通りに當る、サアドストリートのブラツクキヤツト卽ち黒猫と云ふランプの暗いカフエへ這入り込んだ

ここは紐育でのデカダン町である。この町には、三つのデカダンカフエがある。一にレツドリオン。二にグリニツチヴレツヂミル。三にこのブラツクキアツト。いづれ劣らぬデカダンスの濃い空氣がたゞよつてゐて、來る客と云へば其の道のした〻かもの。先づ活動の女優。それから、道樂息子の一群。モデルに畫家。文士に女詩人に金持の御隱居の冷水呑み、それからその邊の花賣り娘。手もつけられない連中ばかりである。だからこれは、地廻りでないと一寸氣のつかない裏横丁にあるのだから、通りすがりの見物人なぞの得て知るところではないのである。紐育に通じてゐる人ならば方角だけは分るかも知れない。あの六街の高架電車が、バワリイに向つて、ブレツカーストリートへ曲らうとするところの、あの鐵橋の下にあるゝす暗い貧民町。日本から御座つた洋行のお客様なぞは、目をつぶつて御通りになるあの穢い町に、かかる地上の樂園はあるのであ

る。

私たちが這入り込んだ時は、かれこれもう八時頃だつたが、なかは既に大入りで、例のテンペごミユージツク、日本の音楽に直して云へば、ブリツキの音楽が、熾んにはじまつてゐて、猛烈なダンスが、そこでもここでもこねくりかへされてゐる。いづれも今夜を世界の終りと觀じた連中ばかりである。

音楽は竪琴（たてごと）にザイロフオン、トライアングルの音にめがまさつて、セロは野獣の呻くやうに、ヴアイオリンは雛鳥のしめられやうに、丁度、シミダンスがはじまつてゐた。

シミダンスと云ふのは、即ち身慄（みぶる）ひダンスであつて、牛鍋の白瀧（しらたき）が慄へるやうに、からだをぶるぶるとふるはせながらやるダンスである、黒猫の酒場（バア）のなかに、丁度、牛鍋のやうに、目にしみる白根の臭ひと、鼻にしみる脂肪の臭ひとをごつたかへして煮へくり返つてゐた。

私たちは、カクテルを注文して、先づ最初は狗のやうに、獅子のやうに、しばらく息を殺して見物した。踊り狂つてゐる男の腕に、松の樹の幹のやうに力瘤がはひつてゐる。女の腕は、燒けた鉛の棒のやうに光ながらくねつてゐる。それがからみ合つて、脂となり火となつて、その頂きにはプラチナとルビイとが、キツスの花を開いてゐる。いや、まはるはまはるは、女の揚げる靴先は、何かの鳥の先のやう。その高い踵（ヒール）は下顎（したあご）か、朱（しゆ）の靴紐がほどけてひらひらするのは舌のやう、甲の金具（かなぐ）は目のやうで、それが、短かいペテコートから泳いで出るところはどうしても白い蛇が口をあいて火を吐いてゐるやうである。シヤンペンをぬく音が、ぼん、ぼんとする。

さあもうよからうと聲をかけたのが、我々の仲間での頭目、アイルランドから來たA君。當年とつて五十四歳の不良おとつあん。十六ばかりの、マアメイドと、あだなのついてた子を抱へて立つた。我れも〳〵も、一と組づゝ立つて大勢のなかへまぎれ込んだ。そのあとは旋るランプと、交はる息。私の相手は鳥の羽根のやうに輕かつた。

何もかも今宵限りだ、明日からはここのボールもしまると云ふ。樽を砕いて雫をなめ、乾盃の袂の末をすゝるまでも、呑んで呑んで呑み明かさうと云ふのだからたまらない。女も男も今はもう、その眼（め）の花は床（ゆか）に落ち、音楽の音にもみれて縺（もつ）れてゐる。時間は夢のやうにたつて行つた。

夜はだんだん更けてくる。もはや十二時五分前になつた。このサアドストリートから、二十丁隔つたところに、マヂソン角園と云ふのがあつて、その角園に聳えてゐるメトロポリタンビルデングの絶頂には、紐育第一の大時計がある。今しも零時

を告ぐる鐘は、その五分前から響きはじめた。初夏の夜の空を傳はつて響いてくる鐘の音は、今、目をとざすバツカスの終りの時を語るやうに、チレン……コン……ボレン……ボレン……コン……チレン……と、何とも云へない、いい音をたてゝ、我れ〳〵をなだめるやうに、なげかすやうに、醉ひしれた鼓膜から、心臟の上に這つてくる。この時計の音を聞いた人々は、音樂もやめ、舞踏もやめて、寂として立ちどまり、互にかたく抱き合つて泣き出さんばかりである。

グラスと云ふグラス、コツプと云ふコツプには、最後の酒がなみなみと注がれた。人々はそれを高くさし上げて、鐘の音の最後の響きを待つてゐる。バツカスの最後の知らせを。

人々は目を閉ぢた。一秒、二秒、鳴る鐘の最後の音は、消えゆくその動波をふるはして、はるかなる空に絶えた。一度にあげた叫び聲。一度に奏でた音樂に、シャンペンの、終りの雫が星となり。ザイロフォン、終りの音が雷となつて、黒猫の舞踏場に、アメリカのバツカス、死んだ。女と男のすゝり泣く聲。自働車の空氣喇叭に割るゝ闇。いつ誰が、何時に家へ歸つたかそんなことを知つてたものは、誰れもなかつた。

紐育避姙協會

私は、アメリカの人種的自殺のことを書く前に、一と通り紐育の貧民窟のことを書かして貰ふ。

一概に貧民窟と云ふと、日本人は直ぐ見くびつてかかるかも知れないが、紐育では先づ自働車の買へない連中を貧民と見てゐる。貧民でも一日八弗、日曜は休んで土曜日は半休で、一週間五拾弗の收入はある。五拾弗ならば日本金の百圓でしよう。して見ると日本の下手な官員様方はみんな、紐育の貧民に相當するわけだ。だからラングトンを殺したと云ても、アメリカに遺憾の意を表さなければならないと云ふやうな遺憾なことが出來する。何と云つても、まだアメリカは、少々喧嘩の相手にはしにくい。富の度が違ふからな。

さて、紐育は鰻のやうに長い都だ。だが、その背筋を二つに裂いて、海に向つて右側がウエストサイド。左側がイイストサイドと云つて、その脊骨に當る通りがフエフスアヴエニユー。あたまがバワリイで、胴のところがマンハツタン。日本に知られてゐるコロンビヤ大學なぞは、先づ尻尾の近邊にある。

ウエストサイドと云ふのは、イイストサイドに較べて、上品なところだと思はれてゐる。したがつてイイストサイドと云へば下品なところとなつてゐる。紐育では、その人の住んでゐる町の名が、その人々の生活を語ることになつてゐる。イイスト

サイドのアヴエニユーエイに住んでるなぞと云へば、誰れも敬意は拂はないが、ウエストサイドのリヴアサイドドライヴに住んでゐると云へば、先づ大金持ちだ。さう云ふ有樣であるから日本から御洋行遊ばすつナ紳士方は、みなウエストサイドいワシントンハイトとか、或はフオト、セントニコラスとか云ふやりな、紐育の尻尾の方に御住ひで、その他のところへは、御御足を御入れにならない。ところが滑にして而して稽なることは、その御住ひの近邊は、みな紐育の勞働者の成り上りが住んでるところで、人を見れば排斥する。況んや日本人を排斥するぐらゐなことになんとも思つてゐない連中だが、洋行の御紳士は自惚れてるから排斥なぞはされた覺えはないと仰せられる。デモクラシイのアメリカにゐて鼻持ちのならないのは、日本の洋行紳士の威張り方である、僅か千圓ばかりの旅費を遣つて來たと思つて、何か大變、偉大になつたつもりでゐる。いや、威張るは威張るは、あの調子で日本へ歸つたら、さだめし日本にゐる人が困ることだらうと思はれた。かうして歸つて來て話して見れば紐育の話も面白いが、向ふにゐる身になつて見れば、何も東京に住んでるのと變りはない。紐育にだつて醬油もあれば味噌もある。澤庵は、食物としては輸入が出來ないから、肥料として商人が輸入して賣つてゐる。その肥料をたべて來た、おくびを日本へ歸つてすると、何かあちらの、デルモニコレストラントのドウデルドウの臭 かなんかと間違つて、日本の方々は一寸面くらう。デルモニコレストラントと云ふのは、紐育で第一流のレストラントだ。ドウデルドウと云ふのは、豚のはら子のまる揚げだ。私は洋行の紳士でないからそんな御馳走はたべたことはないが、名前だけは知つてゐる。デルモニコレストラントで一寸、十人ばかりで晩餐をやると、左様さ、日本の千圓はかかりますな。エヘンと云ふやうなことを洋行歸りの紳士は云ふでしやう。實際、千圓はかかるさうだ、それは本當である。

紐育にしんみりと住まはうと云ふのならば、私はどうしても下町に住みたい。上町の成金紳士の住む區域は眞つぴらだ。下町のうちでも、皆んなが嫌ふイイストサイドには、なかなか面白いところがある。イイストサイドには古い紐育の氣分がまだ殘つてゐるところがある。

セコンドアヴエニユーの高架線に乘つて通ると、イイスト河の青い水が、赤い煉瓦の建物のきれ目きれ目から、ちよいちよいと顏を出す。樹のあるところはまことに少ないが、どうかすると、綠の葉が風にひるがへつて、煉瓦の色と、いいコントラストをなしてゐる。建物は、五階か六階。低くつて三階建てで、貧乏人のおかみさんが、その窓から顏を出してゐる。往來に面

したメインフロアは皆んな見世屋で、二階は事務所や細工場なぞが多く、三階からはアパートメントで、多くは働き人の家族が住んでゐる。高架電車は、ところどころ二重になつてゐるが重に、家並みの三階のあたりを通てゐる。だから、電車のなかから、アパアトメントの窓がのぞける。窓のなかの穢ない家具や寝臺なぞが、どうかすると見える事がある。然し大抵はカアテインのうちにかくれてゐるから、日本の貧乏町で見出すやうなそんな見苦しい有様は滅多に見えない。

尤も、イイストサイドと一口に云ふが、そこにも色々の區域がある。グランドストリイトなぞと云ふところは、殆んど猶太人の町で、見世看板は、皆、猶太の文字で書いてある。往來の人たちは、皆、猶太の言葉で話してゐる、この區域ばかりは英語では用がたりない。こゝは、紐育のうちでの外國である。夜るは丁度東京の銀座通りのやうに露店が出て、あたまへ赤い風呂敷をかぶつた猶太人のおばあさんが、カンテラの煙に鼻をくろくしながら、果物なんぞを賣つてゐる。娘たちは、日本人の娘のやうに鼻のあたまへお白粉を塗つて、何か、一向わからないことを云ひながら歩いてゐる。紐育に隨分澤山な人種もあつまつてゐたが、鼻のあたまへお白粉をつける娘を持つてゐる人種は、先づ猶太人と日本人だけであつたと思ふ。

私は、この町にあつた、ネイボアフツドセヤタアと云ふ芝居小屋へ、よく通つたことがあつた。この芝居小屋の持主は、ミス、アリス、ルイションと云つて、紐育でも有名な女優だつたが、この人は、その姉さんの、キアスリン、ルイションと云ふ人と共に、女優としての生活を、純藝術の立ち場からはじめた。尤も、この姉妹の父君は、紐育の猶太人仲間での金滿家であつて、そしてまた慈善家である。孤兒のなかから藝術的天才を選び出して、藝術家としての生活の一證を與へてやりたいと云ふ目的で、ネイボアフッドセヤタアと云ふのを建てた。

ルイション姉妹は、日本の能に非常な興味を持つてゐて、能の面なぞは澤山あつめて持つてゐる。能の衣裳なぞも、買ひ集めて、自分の室にかけてゐる。

私はその妹さんの方の、柔かい藝と、たるみを持つたいい聲とが好きで、よく、その芝居を拜見に出掛けたものだ。猶太人と云ふと、皆んなが莫迦にしてかかるが、どうしてどうして、藝術にかけても、金儲にかけても、また美人を多く産み出すことにかけても、なかなか他の人種の及ぶところではない。

猶太人の美人とくると、その質の上手なこと、まるでウツドアルカホオルのやうなもので、一度その情愛を味はせられたものは、目がつぶれてしまうと云ふ程である。

それから、イイストサイドで、もう一つ有名なところは、所謂ベルトラインと云つて、イイスト河に添ふた、一帶の通りである。こゝへ來ると、他の紐育とは、商賣のやり方が違つてゐる、十本入の卷煙草を三本買つて三ペンニィ置いて行く客がある。さうかと思ふと、麵麭(ブレッド)を半分買つて、四ペンニィ置いて行く客もある。物價も家賃も安いかはりに人間の直段も安い。いくら腕のある職人でも、この近所に住んでゐたのでは、誰も一人前の給料などは拂つてくれない。だから、力量のあるものは犬ですらこの邊にはぶらつかない。集まつてくるものは、生存の爭ひから掃き出された弱虫と、油虫と、南京虫ばかりである、だが、どうかすると、變り物の哲學者なぞが、こんなところに住んでゐることがある。尤も哲學者なぞは、紐育の物質本位の生存から見れば、やつぱり油虫の一種だらうから、ここは却て彼れ等に取つてのいい隱れ家であるかも知れない。

こゝの名物には、ブレッドラインと云ふのがある。ブレッドラインと云ふのは、飢えてゐる人々に、麵麭をあたへるのであるが、その時に貰ふ人だちが、列を作つて順繰りに一人づゝ貰ふ。その列のことである。誰れでも、紐育へ行つて、一文なしになつて、飢えに迫れば、このブレッドラインのなかの一人にならなければならない。これは紐育ボリスボオドの慈善事業として行はれてゐるのである。

その場の光景を覗いて見れば、一寸かう云ふ有樣である。河に近い街角で、そこには灰色のコンクリートの建物が立つてゐる。河には汐がさしてゐて、水がさかさに流れてゐる。河の對岸には日がさしてゐて、ロングアイランドの監獄がいかめしく光つてゐる。

こちらの岸の建物は、その監獄へ出る船の繫留場になつてゐて、今しも、一團の罪人は黑い鐵の網のある箱馬車に乘せられたまゝ、船で向ふへ送られたところである。船が出てしまうと黑い頑鐵の扉が卸りて、もう河水は見えなくなる。

ブレッドラインはもう始まつてゐる。いづれも、どこかの塵(ごみ)捨場からでも拾つて來たやうな古服を着てゐて、靴の先は、ぱつくりと口を明いて、なかからは齒のやうに、足の爪が飛び出してゐると云つたやうな連中ばかりである。

窓が二つあつて、一つの窓からは、紙に包んだ麵麭をくれ、他の窓からは、珈琲を一ぱいくれる。ラインはだんだん進んで行つて、貰つた連中は、建物のなかにある板のテーブルの上にその珈琲を置き、紙包を明けてそこのベンチに腰を卸して、一當坐の飢を凌ぐのである、

然し、困つたことには、病人でない限り、食べたさんまで逃げ

ると云ふわけにはゆかない。食べた御褒美として、今度は仕事をくれる、その仕事と云ふのは、色々ある、石炭擔ぎ、地下鐵道のトンネルを掘る仕事。あんまり被下ぬ仕事であるが、然しそれをやれば、日給は貰へる。さうして飢えずにすむやうになる。それがいやなら、其の場から向ふ河岸へ行つて、日本ならば柿色の着物であるが、あの國では、赤と白のだんだらの服を着て、あたまを一分に刈り拂はれて、やつぱりその石炭擔ぎをさせられる、さうして一度河を渡ると、もう日給はくれない。そのかはり毎晩お湯に這入れて藥のベットに寝られる。働いてゐる時には、鐵砲を持つた看守が、もう二度と再び飢えないやうに番をしてゐてくれる。私は日本へ歸つてから友人に一分刈りになれと勸められたが、アメリカでは、一分刈りのあたまをしてゐるのは罪人ばかりである。監獄から出て來たばかりの人はみんな一分刈りを帽子でやつとかくしてゐる。

日本から紐育へ行つた、ある文士が、このブレッドラインへ列なつて見た。何も經驗だと思つてやつたことだらうが、いよいよ仕事をあてがはれる段になつて、先生、當惑してしまつた。とても先生の腕力では石炭運びはむづかしかつたので、先生ごまかして逃げやうとするところをつかまつて、危く向ふ河岸へ送られるところだつた。そこで先生、領事館へ電話をかけて領事が出張して漸く事情がわかり、大笑ひになつたと云ふ話しがある。文士の名はお預りにして置く。

さて、そこで、イイストサイドで、もう一つ有名なことは、子供の多いことである。子供と云ふと上品だが、先づ餓鬼と云ふ名によつて呼ばるべき子供たちである。その子供たちがゐるのゐないのつて、日暮れ方など、高架電車の上から往來を見ると東京の道路に敷いてある砂利の數ほどゐる。まつくろに、べつたりとゐる。蜘蛛の子を散らした如くと云ふ形容があるが、そんなことで追ひつくものではない。鮭の子の孵つたやうなありさまである。

だが、一たい、どこから、この子供たちは出て來るのかと云ふことを考へて見なければならない。このあたりの貧民の住む家と云ふのは、皆な小さな間取りのあるアパアトメントになつてゐて、それが一つの建物のなかに少くて十室、多くて三四十の室を持つてゐて、いづれも一寸した小臺所がついてゐる。浴場は一階に一ケ所あるところもあるし、ないところもある。一と室、一と室に浴室のついてゐるうちは、この邊には少ない。

その一と室に一家族は住んでゐる。夫婦に子供に年寄り。子供は、一家族平均三人あるとすると、小さい建物なら二三十人

大きい建物ならば、九十人から百二十人。一ブラックの兩側にさう云ふ建物が十軒づゝ二十軒あるとすると、先づ千五六百人の子供がその區域に住んでゐるわけになる。

夏の日暮れ方なぞには、その子供たちが、殘らず外へ出沸ふのだから、その光景は一寸想像しただけでも、どんなものかわからうと思ふ。たつた一ブラックだけでも驚かれる。ましてそれが、高架電車から見える通りがみなそれだから大變だ。見えない通りも合はせて考へて貰はなければならない。聞いただけでも大抵は目をまはす。見たものはまはした目をまたまはしてもとの通りになつてゐる。これが人間の子かい？と、疑はないものは一人もない。

人間の子にも何んにも、これが皆んな大きくなつて、またこの順で殖えてゆくのだと云ふと、もうそれで議論は絶してゐる。誰しも、避姙と云ふことを、目前に迫つてゐる我れ等の問題として、また我れ等が將に行はんとする一つの新しら道德として、眞面目に研究して見やうと云ふ心を起さないものは先づない。

私は、二三度、この貧乏町を通つたことがあつた。一度はKと云ふ日本からの舊友とこゝを通つた。すると、子供の一人が私たちの毛色の變つてゐるのを見つけて、あとからついて來た。

『チヤイナマン、チヤイナマン、』と云つてついて來た。私はこの子供たちは、私たちを支那人だと思つてゐるなと思つた。Kは、むつとしたと見えてふり返つた。

『カツチツトアウト。』とどなつた。

すると子供は面白半分、こん度は、四五人一緒になつてついて來た。

『チヤイナマン、チヤイナマン、チヤイナマン、チヤ ナマン！』と節をつけて、うたいながらついて來る。

Kは、怒髮冠を衝いてしまつて、彼れ等を追ひかけた。追ひかければ彼れ等は逃げた。やめれば彼れ等はついて來た。今度は、數百人の子供が一齊に大聲をあげてやつてくる。

『チヤイナマン、チヤイナマン、チヤング、シュイ、チョング。』と、支那人の言葉の眞似してゐるのである。

子供たちの騷ぐ聲に、家々は窓をあけて、何事が初まつたかと、見おろしてゐる人の顏が上にもならぶ。

Kも、私も、辟易して、逃げ出した。實際、逃げるより外に道はなかつた。子供たちは鬨の聲を上げて追ひかけて來る。オレンヂの皮が飛んでくる。石炭のかけらが飛んでくる。Kは青くなつてゐた。私はほんとに、ぞつとした。怖ろしいと思つた。私たちは漸くの事でその近くの大通りまで逃げ出した。私はそ

の時、たしかに、一人の原始人としての恐怖を味はせられたのだ。たぜならば、それは理智の上から考へて、何も恐るべき事柄ではないからである。然し、私は、その子供の群を怖れた。

なぜ、この紐育の貧民たちは、かうも澤山の子供を産むだらうと、誰れしも思はないものはない。子供はさづかりものと云ふのは、日本の古い思想である。子供は愛の印紙と云ふのは、アメリカの新らしい言ひ草である。愛の證券印紙は母の手によつて貼（は）られる。これを貼るも貼らないも、それは母親の勝手である。

然し、このイイストサイドの貧乏人は、なぜ、そんなに證券印紙を貼りたがるか？　彼れ等から見れば日本の昔の思想と同じことで、子供は全く一種のさづかりものである。なぜさづかりものであらうか？　それは、かれらが無智だからである。かれらは、一室（ワンルーム）に一家族起臥してゐるからである。かれ等は各自の浴室（バスルーム）を持つてゐないからである。

生活の改善と云ふことは日本でも騒がれてゐるが、彼れ等の間にも問題になつてゐる。各自の寢室（ベッドルーム）を別にすること、一軒のうちには必ず浴室（バスルーム）を備へること、その浴室（バスルーム）には、内より鍵をかけ得るやうにして置くこと。これが生活改善の根本問題であると、彼等仲間の新らしい女房どもは云ひ出してゐる。

避姙問題をかれこれ云ふのは、この生活改善が出來上つたあとのことであ　。日本なぞは、まだ／＼そんなことを考へるのは早すぎる。先づ、一軒のうちに三夫婦も四夫婦も住んでゐる、あの習慣から改ためて行かずばなるまい

貧乏人と云ふものは、元來、樂しみの少ない生活を續けてゐるものであることは、日本とても同じ事であるか、紐育の貧乏人は一層その傾きがある。朝起きて働きに行く。歸つて來て晩餐をたべて、疲れて寢る。日曜はあるにしても、それは一週間に一度のことで、一年三百六十日は、働いて、たべて、寢るだけのことだ。別に旅行をするでもなければ、仕事を休んで保養をするでもない。したくもお金がないからそんな事は出來ない。彼れ等はその單調な生活に殆んど倦きてゐる。

彼等のなかの一人の青年は私にこんなことを云つた。それは歐洲の大戰中で、この青年にこれから　地へ行かうと云ふのであつた。

「どうせ我れ／＼は一度は死ななければならない。働いて、たべて、寢て、何等の變化もなしに死ななければならない。我々の生涯と云ふものは罐詰にされた生涯だ、その罐の蓋の明いたときは即ち我れ／＼の死の時である。殺したいだけ殺せて、食ひたいだけ食つて、巴里に××なからしめることが出來て、こ

んないいことが、この世の中にあるかい。何でもかまはない。我れ〳〵は變化を望んでゐるんだ。それがたとへ重傷の苦みでもかまはない。死はどうせ來るものだ。痛快に殺し、呑み、食ひ、さうして今こそ我れ〳〵の手の力で×××××××してやるんだ。』と、かう云つた。

だがそれは實際紐育の貧民の子が、佛蘭西へ行くときの慾望の一つであつた。のみならず、それは意識的にも無意識的にも、彼れ等がその生涯を通じて持つてゐる破壞的氣分である。

考へて見ると、この、彼れ等の破壞的氣分は、その時こそ外に向つて動いてゐたのであつたが、それ迄は、實は、内に向つて動いてゐたのである。それでは、それはどう内に向つて動いてゐたか？　彼れ等は自己を破壞してゐた。自個の生活を破壞してゐた。酒を呑み、子供を不具者にし、女房を活きながらミイラにし、さうして自分の血をも絞つてゐたのである。

實際、あの往來に、うようよしてゐる子供の群は、あれは彼れ等が夜ごと日ごとに、たゝきつけた、彼れ等自身の血凝りの斑點である。

そこで、紐育避姙協會と云ふものが生れて來た。ミス、マガレツト、サンガアと云ふ女が、この無智なる貧民に對して、避姙と云ふものゝ本當の意味を語り出した。それは現在活きてゐる人間が持つべき一つの崇高なる道德であると云ふことを云ひ出した。さうしてそれは、あの貧民窟に於いては、最早や一つの言論ではなしに、實行せねばならぬものであつた。

アメリカでは、人に避姙劑を教へたものは五百弗以上の罰金に處せられることになつてゐる。マガレツト、サンガアの兄のフランク、サンガアは、その罪を犯して、のべつ幕なしに牢へはひつてゐる。また、マガレツト、サンガアの著した、ファミリイ、リミテーションと云ふ秘密出版物には、如何にして、そのプラクテースをなすべきかと云ふことが書いてある。

だが、これは、たゞ一介の老女學生マガレツト、サンガアがあぐる叫び聲であつて、事實に於ては、アメリカに、もうそんな事ぐらひは、母親が、娘をお嫁にやる時に、ちやんと教へてやつてゐるのである。そんな事に使ふ藥品ならば、ドラグストアの直ぐ入り口に麗々と並べてある。有産、無産を通じて智識階級のものならば、そんなことは、もう騷ぐ時代はとつくに通り過ぎてゐる。その實行はそもそもヤンキイが、大西洋を越えて殖民して來た頃から、ピユリタンの教へとともに、ちやんと持つて來たものである。

たゞ、マガレツト、サンガアは、それを、無智な貧民のなかに普及して彼れ等をして自己破壞の苦痛から救ひ出さうとして

ゐるのだからそこが尊いのである。

かの女は、どうかすると往來に立つてそれを演說してゐる。すると子供を抱えた、大勢の女たちが、熱心にそれを聞いてゐる。

かの女はまた、明き家になつた、敎會堂のなかで、その宣傳をはじめる。子供や、娘や、息子や、大勢の赤ん坊と、さうしてその母親が、耳をそばだてゝ聞いてゐる。

女房は、亭主を怨んでゐる。姉は、弟を憎んでゐる。娘と息子は恐怖してゐる。赤ん坊は、兄とその母親を爭つてゐる。そのなかに立つて、マガレツト、サンガアは、フアミリイ、リミテーシヨンを高潮してゐる。

かの女が說き出すのは、之の貧民窟の背景となつてゐるロングアイランドの監獄である、セントラルイスルプの瘋癲病院である。或はベルヴユーの慈善病院である。或はレノツクスヒルの分娩病院の酸鼻なる有樣である。さうして、彼れ等貧民の現在のミゼラブルなる生活である。さうして最後の鐵案は、曰くフアミリイ、リミテーシヨン。あなた方の家族を制限しろと云ふのである。

私は、マガレツト、サンガアの宣傳の手傳ひをしたのではない。たゞその有樣を話したのである。

私が、日本へ歸る時、私の親友の一人だつた、ロバアト、デ、ブルツスと云ふ、佛蘭西から來た俳優は、私にそのフアミリイ、リミテーシヨンと云ふ小冊子を餞別にくれた。然し私は沈思の末それを紐育へ置いて來た。なぜならば、それは私にも、また日本にも、まだ必要のないものと思つたからである。

目を轉じて、フエフスア、ベニユーの繁榮を見ると、そこには富んだ女の群れが、子供のかはりに、値(ね)の高い犬を連れて、閑散として歩いてゐる。富んだ男はその女の群れをかこんで、毛皮(けがわ)の外套にくるまれながら高々と笑つてゐる。ブロードウエイを見渡せば、コカインの茶に醉うた美人の群れは、打ち興じつゝぞめいてゐる。彼れ等には醒むる時なき歡樂の步道(ペエヴ)の上に。

（完）

競技・勝負事・鬪爭の心理と其人生的意義

鬪爭本能の藝術化、道德化

杉森孝次郎

鬪爭本能が、目下最顯著に發動しつゝある方面は、勞働組合だ。全國の勞働を組合に專領する所によつて、現在の資本家階級を强制的に致死せしめんと鋭意努力してをるのが、例へば英國の組合勞働者及びギルド社會主義者だ。勞働運動の中樞神經は、昨今はすでに單なる利害の打算ではない。感情だ。決死に近い、しかしながら必勝を期しての雪辱戰だ。自己主張戰だ。階級鬪爭が産業不安の內實相だ。近代人の鬪爭本能が、一九一四年の夏に最的解放を求め、一九一八年の秋まで耽溺した記錄が大戰史だ。一九一七年の春、殊に秋に、新代人の鬪爭本能が、階級的壓迫の醜惡な露に挑發され。そこに一渦心を形成し、英にも、米にも、その他國際的社會の處々に、多少の渦心を形成しつゝあるのが、最近勞働運動の光景だ。民族戰の戰ひ果たさるゝを待たずして、階級爭が開始された。そして、その兩者の根柢には、一脉同源の心理的要素がある。鬪爭本能はその一だ。

人類の歷史をしらべると、鬪爭本能は、人間性の一本質的要素だと判斷されるほどに古くして新らしい。そして、個的から次第に衆團的形式に移り進んで來た。一姓同族に屬する人々は相鬪はなくなつて、結束して他姓異族の人々と鬪爭するやうになつた。今では、一國內では、相鬪はない。內亂は殆んど忘れられて來た。民族間、國民間に、鬪爭の衆團形式が達した。ただ、內亂が、階級鬪爭のかたちに於いて、最近新たに準備せられつゝある。

角力、擊劍、柔道、碁、將棋に滿足せずして、カルタ、庭球、野球にも現代の男女は鬪爭本能を發露さす。こゝにさへも、鬪爭形式が、個的から衆團的に進み來たれる證據がある。

現代人は帶刀しない。しかし、現代諸國民の、殊に一流文明國民の軍備を見よ。國庫支出の幾何部が軍備費に屬するかを見よ。闘爭本能は、消滅せずして存在し、しかも、その存在様式が、個的から衆團的になつて來た適例が眼前にあるのだ。組合社會主義は、繰り返していふまでもなく衆團的闘爭形式の一大例だ。

人類は一大社會を形成し、科學と藝術を武器として、自然を相手どつて闘爭する状態が、われらの進路でなくてはならん。民族戰と階級爭をば、早く進脱しなくてはならん。理想我に立脚して現實我と闘爭し、わが信ずる社會理想に憑依して現實の社會と闘爭する。眞善美を擁立して、僞惡醜と闘爭する。公善を競ひ、社會奉仕を競ふ。闘爭本能の活路は、この方向に求められる。

世界の仕事の十分の九は、競爭の結果であつたと、近代の著名なる一心理學者はいふた。ミルは、基督教が、人の品性を柔弱にする惡感化をも持つた事を慨してをる。かれは、力強き品性を推稱した。カーライルは、ペーガニズムに最後の告別を與ふる事を惜んだ。ニーチエは、意思こそ人の本質なれ、戰ひこそ意思の本能なれ、敵あるは敵なきに優り、强敵を持つは、弱敵を持つに優る。戰はざれば、意思はその可能的自己を現實的自己に發達させる機會がない。人は意思に依つて存し、意思は闘ひに依つて伸び、闘ひは社會を强者の舞臺となすと力唱した。人間心理の一機微に觸れた智見の二三例だ。

敵あれば、わが生活が緊張する。敵あれば、味方の同勢を糾合大成する必要上、組織と社會の發達、擴大が結果する。生活の深さ、强さ、幅、大きさが、敵の有無大小によつて或る程度までは決定される。秩序、訓練、節制、組織が、好戰民族や氏族の間に顯著なる發達を見た事は、古今の文野諸民族にその例證が堆い。「社會心理學」の著者マクヅーガル氏は、ボルニオ島民の間、及び一方白人や日本人と、他方印度人や支那人との間に闘爭本能の强弱を見、それと關聯して、道德や文化の優劣を說いてをる。氏の觀察判斷の當否は問題として、闘爭本能が、心理、社會等の研究者にとつて、一大注目事であるべき事は爭はれない。

協力の基礎の上に營まれる闘爭は競技だ。これは奬勵すべきだ。學問、藝術、道德、經濟、政治等の諸文化内容にわたつてだ。協力を犧牲にする競爭は、喧嘩だ。早く進化し、超脱すべきだ。憤怒本能と、嫉妬本能とは、喧嘩をやめて競技を始めるために、教育される必要の最前線に立つ人間性の二部だ。

闘爭本能の危險は、他を破壞するに加へて自己を破壞するに

終はる事だ。自他の本質的成長に終はるかたちの闘爭が、これのみが是認せらるべき闘爭だ。競技がすなは　これだ。創造が闘爭の結果であると同時に目的であるべきだ。所有價、現存價、既生價の爭奪戰は競技でない。その爭奪戰に耽る代はりに　われらはそれだけの時間と精力をば、新價値の獲得、未存價値の創造、未生價の生産に使用すべきだ。ジェームスのいはゆる戰爭の道徳的等價が主張されねばならん。

すべての生物のすべての進歩は、闘爭に依らずして、發明に依る事は、闘爭本能の教育せらるべき餘地と必要を許る。新らしい種族（スピシーズ）の出現は、現存種族の闘爭には因らずして、その變體（ヴァリエーシャン）に因る。闘爭は、それだけでは、最高能率を發揮する場合でさへも、保存だ。生産や、創造ではない。けれども、本質的優等價が、本質的劣等價によつて、一時的たりとも、表面的たりとも、虐壓される現實を經驗して、天地をも碎かん義憤に燃えない人も、民族も、生物も、生存理由と、發達理由が乏しい。

例へば非戰論者は、その非戰論の信念に立つて、戰爭論者と闘爭する力に於いて、戰爭論者以上たる事を要するのだ。闘爭本能を是認する唯一の眞正道は、闘爭本能を非認する唯一の眞正道と同じだ。小闘爭を去つて大闘爭に入るのだ。破壞闘爭を去つて創造闘爭に進むのだ。國際競爭が、武力から經濟力、それから文化力に進む兆候をすでにいくらか示してをる如きも、闘爭本能の一進歩だ。卑劣たる闘爭に機會を拒み、高尚なる闘爭に、あらゆる闘爭本能を集中する事が、闘爭本能理想化の學と術だ。

優越慾の客觀化と競技

寺田精一

一

生れながらに優越慾を有して居る吾々は、身體的又は精神的の或能力を、一定の形式や約束の下に競爭することに、少からぬ感興と熱心とを持つて居る。從つて吾々の社會生活には、この優越慾からの感興や熱心について、多くの興味ある事實が現はれて居る。其の主なものの一つは、特殊な技能を競ふこと自らを目的とする競技である。

而して優越慾は、自己の滿足を中心とするものではあるが、それが何時も對他的關係に於て現はれるものであるから、殆んど常に競技に傍觀者や觀賞者の參加を得て、他より其の優劣を認められることを要求して居る。換言すれば自己の優越を他の

多くの人々に示さうとする要求がある。然るに自己反省と對他批判とをなし得る吾々は、この競技に對する傍觀者であり觀賞者であることに、特殊な感興と熱心とを有し、ことに吾々の社會に見られる競技が、競技者を取り圍んだ規模の大きなものとなる根柢がある。かくて競技者に對する贔負とか應援とか野次といふものが起り、それを利用して營利が企てられたり、廣告が行はれたり、又特殊な思想が鼓舞されたりする。

元來競技者自らは、自らが直接に優劣の試みをなし、直接に優越慾に對しての痛切な經驗をするものであるが、競技の傍觀者や觀賞者は、それが第三者である丈けに、又自己の優越慾を競技者なる媒介によつて客觀化して居る丈けに、競技者自らに比較して、そこに少からぬ餘裕と自由とがある。從つてこの餘裕と自由とを持つた優越慾の客觀化は、競技者自らの競技に對する經驗よりも、競技の傍觀者や觀賞者に、優越慾の内容上の變化と豐さとを、多く與へることが少くない。そこで私は競技の問題に向つて、殊にこの優越慾の客觀化といふ點に、少からぬ興味を感ずるのである。

二

競技に於ける優者が、殆んど常に贔負や保護や仲間を得易いのは何故であらうか。吾々が競技に對して其の優者に組するとことは、自我の中へ優者を包含せしめることであつて、これを反面からいふならば、其の優者は自己の延長であり又代表者たる資格を有するのである。そこで自分の贔負にするものの競技に臨むのは、自らが競技に臨むのと甚だしい徑庭が見られないことになる。のみならず自ら直接に關與するでない丈けに、餘裕や自由のある代りには、不安や憂慮が却つて顯著に働いて、時には其の競技が見て居られないやうな、又居ても立つても居られないやうな心持を味はしめる。而して不安や憂慮は何人もこれを厭ふものであるから、それの少なければ少い程、滿足の得られることはいふまでもない。故に自己の味方とするならば、出來得る丈け優者たる可能性のあるものを選ばうとする。

さうして自己の味方としたものが、然かも多數の人々の前に於て、眞に優者たる實を示すことになると、それが假令無意識的ながらも自己の延長であり代表者であるとされる丈け、人事ならぬ快感が經驗され、「よく勝つて呉れた、どうだ偉いだらう、有り難い有り難い」といつたやうな、競技に對して滿足と誇りとが、競技者を離れて對自己的に痛切なものとして味はれる。

三

のみならず競技の多くは、抽象的なものでなくて具體的に表示されるものである。故に勝敗の批判に複雜な考慮を費す必要がなく、競技の終結より勝敗の決定に至る間に、長い時間を挿入しないから、競技によつて得られた興奮や感激が、急速に直ちに勝敗に對しての感情激動に轉ずることになり、その爲めに競技の享樂に熱狂的な要素を加味し易い。然るにこれに反して、勝敗の決定に複雜な考慮を費さなければならないやうであると、競技の終結から勝敗の決定に至るまでの間に、相當の時間の經過が加はるから、假令競技中には可成りな興奮や感激が味はれて居つても、最後に特殊な弛緩が加はつて、感興の殺がれることが少くない。

　これが競技の形式や約束の餘りに複雜なものをして傍觀者に興味を得せしめ難い所以である。競技が終つてから、暫く考へて居て又は說明を聞いて、「なる程勝つたのだなあ」といふやうでは、一般の傍觀者を興奮せしめ又熱狂せしめることは出來ない。然るに競技が終るや否や「ワア」と叫び得るやうに、勝敗が鮮明に認められ得るものであると、一般の傍觀者は容易に感興を覺えて熱狂する。相撲や野球のやうに、普通に其の勝敗の明瞭に知り得られるものは、所謂通人以外の多數の人々を觀覽者として吸收することが出來、又觀覽者をして熱狂せしめ易いのである。

　尙この場合に、觀覽者の競技者に對する心理にも注意すべきものがある。卽ち一方からいへば、競技者の勝敗の明瞭に認められ得るといふことは、それが贔負のものであると、觀覽者自らが其の勝敗を決した心持ちとなり、他の多くの人々に對して赤裸々に自己の優越慾を滿足せしめ易いこととともなる。從つて勝敗の明瞭に認められ得るやうな競技で、其の上に多數の觀覽者を吸收し得るやうな競技であると、競技者に對しての贔負が出來易い。自分一人が見て居るといふよりは、多數の人々の前で自分が見て居る、さうして「俺がついておるぞ」とか、「俺が勝たしてやる」といつた態度で、競技を享樂したいのである。又これを他からいへば、勝敗の明瞭に認められ得るやうな競技であると、其の刹那の經過が觀覽者の心裡に、刻々の不安と動搖とを味はしめる。然もそれが自己の贔負とする競技者の奮鬪である場合には、自我の發動の如くに思惟される丈け、感激と熱狂とを得易い。そこで自己と反對の側に立つ觀覽者がある時には、その觀覽者に對抗的に興奮して來て、時には競技者を捨て置いて、觀覽者殊に應援者相互が別に熱狂的爭鬪をすら演出することがあるのである。これ等の點から考へると、競技者に對する觀覽者は、決して單純な關係ではない、假令其の關係が

一時的のものであるにしても、又競技者の方では、觀覽者の我が物顏な態度に無關心であり、時に有り難迷惑を感じて居ることはあるにしても。

四

このやうに競技者を自己の延長と見たり代表者と見たくても、吾々は他の狀態に對して同感をなし、自己を他の境地に投じて味ふことの出來るものであるから、競技に對する觀覽者の心理は、何處までも第三者としての立脚地にある場合にも、亦特殊な興味ある事實がある。それも優越慾の客觀化といふ點に關聯して見て、殊にさうである。

競技が一つの爭鬪であつて、それが一つの享樂の對象として取扱はれる時には、一般の享樂の場合と同じやうに、其の享樂を出來る丈け永く續けやうとの暗々裡の希望がある。のみならず享樂は、單純な淺薄な無變化な內容は喜ばれないのが普通であるから、其の享樂を出來得る丈け內容豐かに味いたいとの暗々裡の希望もある。

かくて競技の中でも、其の勝敗が大凡豫想されて、其の豫想が恐らく裏切られまいといふやうな取　に對しては、好奇や僥倖や偶然等に對しての感興の味はれる外に、特別な深い複雜な心理は働かない。固より好奇や僥倖や偶然等は、吾々の日常生活の相當な範圍に、有意義な關係を有し、只それ等のみに感興を追つて居るものもあるが、然も競技其のものから觀るならば寧ろ變則なものといはねばならない。けれども競技觀覽者の一般からいへば、この變則な現はれが、他の條件の附加されることに因つて、競技に感興を添えることも少くない。例へば何時も負けることのないやうなものが、偶然な不注意や慢心や過失等によつて負けることがあると、觀覽者の多くは大に感興を覺える。それには上述の好奇や僥倖や偶然等から得られる感興もあるが、其外に容易に負けない優者の負けたといふ點に感興が湧くのである。他人の成功談に對しては誇張とか自慢とか評し勝ちであるのに、他人の失敗談に對しては興味と快感とを覺え勝ちな吾々は、優者が思ひがけなくも負けると、それが優者であればある程、輕い驚きを伴つた感興を味ふのである。「よく負かして吳れた、よく負かして吳れた」といふ勝者への言葉は、勝者が勝つたといふ其のことよりも、何時も負けないものが負かされたといふことに、滿足があるのである、從つてそれは「誰か負かさないかなあ」と叫んだ人々の自己に對しての喜悅である。

けれども競技其のものとして觀覽者の感興を惹くのは、其の

勝敗が豫想されないやうな場合である。この場合には特別な期待のない丈けに、競技の進行につれて、刹那刹那の興奮と緊張とが經驗される、そこに優越慾滿足に對する危惧と不安とが味はれ、競技そのものに深い興味が感ぜられる。從つてかかる場合の勝敗が、極めて無雜作に單純に瞬間的に終ることになると「何のことだ、馬鹿馬鹿しい」と不平が洩らされる。但し吾々はこの場合に、自らが競技の觀覽者であることを忘れてはならない。即ち自ら關與して居ない競爭であるから、そこに頗る多くの自由と餘裕とがある、その爲めに自らが行ふ競爭には堪えられない苦痛であり、又少しでも早く勝つことを欲するに拘らず、觀覽者としては客觀化された優勝慾の享樂をのみ得やうとするから、競技者の主觀的經驗は度外視して、氣樂な不平を洩らして居ることが出來るのである。ここに嘗は競技を觀る味ひはあるのである、又競技が營利の目的を以てしても行はれ得る根柢が存するのである。

五

上述の客觀化された優勝慾の享樂をのみ得やうとする心理は、時には極めて殘忍性を加味して來ることだある。

元來、優越慾の滿足は、力の意識に對しての滿足であるから、力の意識が明瞭に現はされるもの程、その滿足は鮮明になつて來る。そこで簡單に無雜作に瞬間的に決するやうな勝負は、力の優越と劣敗とを赤裸々には示すけれども、觀覽者の心裡に深刻な力の意識を與へるのは、寧ろ奮鬪に奮鬪を續けられるところに於て見られ易い。即ち優越慾滿足の對象として犧牲となるべきものが、抵抗し奮激すれ する程、優越の印象は深刻なものとなる。その犧牲者が、跪いたり呻いたり、肉を躍らしたり髮を亂したり、齒を喰ひ緊つたり血を流したりすることは、優越の强制された承認である。そこに優越慾滿足の殘忍性が見られる。かの相撲に於て双方が火花を散らし腹に波を打たせて居るのを見て、觀覽者は「どうだ、あの勇壯は」と有頂天になつて、「この一番で今日來た甲斐があつた」と喜ぶ。そこに力の意識に伴ふ勇壯美の味ひがある。而してこのやうに優越慾滿足の對象として犧牲となるものが、苦痛を受けて居るのに向つて、勇壯美の味ひをなし得るのは、要するに奮鬪者が自己でなくて、自由に餘裕を持ち得られる第三者であるからである。これが競技を觀覽物として娛樂化し得る所以である。

　但し吾々は他面に於て、他人の苦痛に對して同情と憐愍とを有して居る。そこで如何に優越慾の客觀化によつて、吾人が競技者を享樂の對象として見ることが出來ても、其の競技者に

はれる苦痛が、吾人の同情や憐愍を惹き起す程度の顯著な場合には、其の競技による感興は頗る薄められることとなる。即ち客觀化された優越慾の滿足や快感が、その犧牲として現はれた競技者の苦痛に對する同情や憐愍に壓せられると、競技其のものに特殊な不快な感を與へることになる。かくて競技者の一方が、餘りに他方を痛烈に打ち負したり、又殘酷な結果に陷れたりすると、優者に對する反感の外に、勝負に伴ふ感興の薄められてしまふ根柢があるのである。これ觀覽者として競技の享樂が、假令觀覽の立脚地からいふも、殘忍の爲めの殘忍を味ふものでもなく、又競技者自らのやうに優越を爭ふことのみに向ふものでもなく、第三者としての自由と餘裕とを有することから矢張りそこに人間性の複雜に働く餘地を留めて居るのである。從つて優越慾滿足の殘忍性は、競技者自ら並に極端に熱狂した觀覽者を除いて、何處までも徹底的に進むものではないのである。

六

吾々には優越慾は極めて强いものであるけれども、人によるとそれを赤裸々に自ら暴露せしめないで又暴露せしめ得ない。保たれることがある。例へば甚だしく負け嫌ひな人や卑怯な臆病な人がそれである。この種の人々は、表面上極めて溫和であつて、何等他人と衝突することもなく、又出來得る丈け他人との競爭を回避しやうとして居る。けれどもそれは何人も持つて居る優越慾を有して居ないのではない。唯彼等は、自己が劣敗の地位に立つのを畏怖して、其の劣敗の羞恥と不快と苦痛とを經驗しないやうに、努めて他人との衝突や競爭に接觸しないやうにして居る。けれどもかかる人々の反面を觀察して、甚だしく勝負事を見ることの好きたものがある。實にこの種の人々は何人も有して居る優越慾を客觀化することに依つてのみ、それを滿足せしめて居るものといふことが出來る。從つて優越慾の客觀化の最も典型的なものである。

即ちこの種の極端な負け嫌ひで卑怯な臆病な人々は、競技に對して、自らは勝負といふことから安全地帶に居て、單純に他人の競技の勝敗を見て樂しむものである。勿論かかる人々も、競技者に特別な贔負をすることがある、けれども自分の贔負にする競技者の勝敗は、何處までも彼等自らの勝敗であつて、第三者たる自己に直接なものではない、即ち自己の延長や代表としての問題でないとする、そこに氣樂な利己的な我が儘な點が含まれて居る。從つて贔負にするものの勝つた時には、大に歡喜の情に溢れるけれども、若しそれが負けた時には、淡い失望

と輕い不快を感ずるに留まつて、「何僕が負けたのでもない」といつたやうな無關心めいた自己慰安を得て居るのである。

七

これと相類して多少其の趣きを異にしたものに、次のやうな場合がある。即ち優越慾は人並に持つて居るのであるが、それを自由に經驗する機會を得ない爲めに、其の客觀化で以て滿足しやうとする場合である。例へば對他的に奮闘しなくても安らかに生活され得る境遇の人や、又其の日其の日の生活にのみ追はれて、自己を保つに汲々たるが如き人や、或は又生活上の利害關係から、打算的に不快を忍びながらも、常に自己を屈して居るやうな人などは、何れも客觀化された優勝慾の滿足で甘んじ、若しくは已むを得ないこととして居るのである。かくて其の日常生活に於て適當に味はれない優越慾が、競技を見て滿足されることとなり、その方面に感興を求め易くなるのである。

而して現代の多くの人々の日常生活を見ると、富の不均一な集中から、對他的に奮闘する必要のない階級者を生じて居り、其の反對に生活の窮迫から、其の日其日の生存に汲々として、自己を保つのみにすら危ぶまれて、他と爭闘する丈けの餘力を有しない階級者の多くを生じて居り、又社會的生活の煩瑣と、生存競爭の激甚よりする他力的依頼とから、優越慾の自由な發現の許されない階級者の多くを生じて居る。從つてかかる種類の人々が、其の日常滿たされない優越慾を滿足せしめる上には、各々其の階級者によつて形式は相違するにせよ、何等かの競技に感興を向けることとなり易いのである。現代に於て、如何にも各種の競技が隆盛に赴いてこれが觀覽者を多く吸收して居るが、其の然らしめる原因の主な一つは、上述の點にこれを認めることが出來るのである。かくて現代人の現はれやうとする力の一面が、解放され又寛和されて居る。

八

生を營んで居るものは、何れも其の生の表現に又發展に、無上の歡喜と滿足とを味つて居る。この生の表現並に發展は、廣い意味の力であり活動である。然も力や活動の最も熱烈に又眞劍に現はされるものの一は、吾々人類に於ては競技を擧げることが出來る。そこで前に述べた極端な負け嫌ひな人や卑怯な臆病な人と、恰も反對な意味に於て、極端に勝つことの好きな人や生活力の旺盛な積極的な人は、自ら進んで特殊な競技や又競技めいたことを行ひ、或は客觀的に競技を見て、そこに優越慾の滿足を味はうとする。而してこれ等が力や活動の享樂を味

ふのであるから、妥協的な、力の加はらない、お座なりな競技であると、甚だしい不快と不滿とを感ずるのである。

即ち如何に勝つことが好きであり、生活力の旺盛な積極的な人であつても、今日の社會狀態に於ては、無遠慮に振舞ふことは出來ない。それかといつて自己の優越慾を競技によつて、極めて平和的に滿足せしめやうとしても、それには相當の形式ゝ約束のある丈けに、少からぬ鍊磨を經なければ、充分な滿足を買ふことが出來ない。從つて現に或競技の方面に於て優者たる成績を示して居るものを、自己の延長としたり代表と考へ、それに技を鬪はしめて得られる優越の幾分を或は大部分を、自分のものとして滿足することは、頗る有利な好都合な途である。殊にそれが多數の觀覽者を前にして行はれるものであると、一層この途が滿足を與へることになるのである。

或は又自ら社會的生活に於て、既に相當の優者たる自認を得て居るものが、限りなく發動する優越慾の滿足を、他の方面に求めんとすることも有り勝ちのことである。それには住宅の華美や骨董の蒐集や猛獸の狩獵等をも擧げることが出來るけれども、力や活動の熱烈な眞劍な現はれが、競技に於て經驗され易き丈けに、競技の享樂に向ふことも少くない。古來英傑の士が好んで猛烈な殘忍な競技を演ぜしめたことなどは、上述の意味に於て面白いものである。或は又戰爭の永く見られなかつた時代に、領主や君主が、力士や武士を雇つて置いて、それ等の競技に熱中したことなども、注意すべきものである。これも亦明かに優越慾の客觀化であつて、競技者の勝敗其のものよりも、それによる觀覽者や雇つた人自らの優越慾の滿足の追求に多くの根柢があるのである。

九

この意味で興味あることは、個人からいつても又社會からいつても、生存努力の最も旺盛である場合に、競技が最も多く享樂されることである。即ち個人の一生に於ては青年期に、社會に於ては隆々と發展しつつある社會に於て、最も多く競技が流行する。尙これを廣く民族や國民について觀るに、其の全盛を極めた頃に樣々な競技が愛好された。例へば古代の羅馬の全盛期はいふまでもなく、現代に於ては亞米利加がそれである。世界を尻目にかけ、何事も世界一を標語として、其の國力の誇示に喜悅と滿足とを有して居るところに、熱狂的な競技愛好が見られることは、前に述べたやうな現代的社會狀態の特徵を最も痛切に有して居る點にも、其の原因を求められやう。けれども其の國民の世界に雄飛せんとする活動や力の一反映たることも、

等閑視されないことである。

我が邦に於て、競技の益々盛んとなりつつあることには、固より體育の奨勵といつたやうな社會政策的の要素もあらう、又大戰爭を機緣として民衆の精神に與へられた特殊の動搖と殺伐と爭鬪慾との轉化といふことも要素となつて居やう、或は又現代人の特徴の一つたる流行を追ふことも亦その要素となつて居やう。けれども國民全體の力や活動の、熱烈にして眞劍なことの影響も、亦確に其の一要素に加へてよからうと思ふ。

但し以上述べて來たやうに、吾々の現代の生活に於て、優越慾　客觀化といふことで、吾々の力が競技を介して解放され寛和されて居るのは爭はれない事實であるが、其の反面に於てこのやうな力の適當な解放や寛和すら、動もすれば不可能になる虞のあることを忘れてはならない。其の主な一つは、優越慾客觀化の娛樂物が、一般民衆の手から離れて、特殊階級者に占められ勝ちなことである。尤もかかる問題は主として生活經濟の關係から、競技を自ら行ふ場合にも見られるけれども、今はそれに觸れないこととした。

闘爭についての考察

文學博士　三宅雪嶺

闘爭は生命を充實しようとする調整態度の一部に屬する。生命について議論多いが、先づ内界と外界とを認め、二者の關係の係れる所に闘爭あるとする。初めて有機物、無機物の分れる頃、無機物を外界とし、漸く進んで或る有機物をも外界とする。細胞の分れるは生命充實の爲めであるけれど、幾多細胞中淘汰の必要を生じ、細胞間に闘爭を見る。細胞其物に優劣が無くても、生命の中核とすべき所より判斷し、細胞を取捨せねばならぬ。而して單に細胞の新陳代謝たるに止る間、特別に闘爭とするを要せず、生物が動物植物に分れ、動物が必ず植物を食ひ、更に肉食動物を生じ、動物を食はねば生存し得ぬと云ふに至り、猛烈なる闘爭の避くべからざる次第となり、肉食動物に於いて自ら生存する爲めに他の動物を食はうとし、食はるべき動物は生存しようとして之を防がずに居れぬ。人類は肉食動物より出でゝ居らぬにしても、食物の種類最も多く、草食もし肉食もし、比較的廣い範圍に生活するに堪へ、それだけ相應に動物を殺して食ふ。尚ほ感情の衝突よりして、他の動物を殺す、

如くに同類を殺すに至る。初めて生物の發生した時、無機物に對抗するのであり、從之に對抗せうとして自ら陣立てを具へるが爲めに紛紜を起し、互に相殺すに至つたが、根本に溯れば無機物に對抗するのが主眼であり、同類相殺すのは其一手段に過ぎぬ。所謂自然界の征服が鬪爭の究極目的である。

人類は他の動物を伴せて自然界とし、同類の生活程度を高めるに努め、植物を刈り取るは勿論、頻りに動物をも殺すに至るが、意識を具ふるを知りては、同じく殺すにも成るべく苦痛の無い方法に於いてしようとする。隨分慘酷なのもないでなければど、次第に慘酷を避けようとする傾向がある。意識無く、有るとして極めて不明瞭なるべき植物に對してさへ、濫りに伐採する事を憚り、無機物にも平心する事になり、無益の破壊を警めたりする。

それで同類間に鬪爭し、戰亂の熄むべくもないのは、矢張り自然界を征服するの陣立ての爲めにする。謂はゞ策戰計劃について評議區々、異議を處分するの餘儀なきに立至るのである。自ら之を認識せずしてさうなつて居る。幾十萬年か自然界の征服に關して評議を凝らし、内輪揉めで喧嘩する事數知れず、遂に兎も角も今日の文明を見るに及んだ。歴史は戰亂の歴史であり、自然界の征服よりも内輪喧嘩が主のやうであつて、それで陸に汽車、海に汽船、空中に飛行機、水中に潛水機を得、大いに活動の自由を得る事になつた。戰亂の爲めに禍害多く、豫め避ける事出來なんだのが、惜しむべき限りのやうであつて、文明の代價の頗る高きを許さねばならぬ。

そこで歴史が果して戰亂の歴史であるか、事實がさうであるのか、戰亂で多くの人が死するけれど、生存する者に比べて何の割合になるか。一軍鏖殺しといふ事あれど、關係民族の上で死者の數が少からう。如何に世界史中慘酷の事が多いにしても、原始時代に比し人口が著るしく增加し、生活程度が著るしく高まり來り、戰亂が此文明を實現するの手段であつたと云へぬでない。今一層知識があつたならば、更に禍害を少くし得たらうが、其處は從來の人間の知惠で如何ともし得ぬ所であらう。高い値段で文明を買つた嫌があり、寧ろ緣日商人に欺かれた程法外の高價であるにしても、全く贋物を引取つたのでなく、唯、今少しく値切り得たらうにと後悔する位の所である。

生物が發生して以來、鬪爭するの天性があり、能く鬪爭に堪へねば消滅を免かれぬ。同類相鬪ふのは淺間敷く見ゆるが、斯く鬪つて自然を征服するの氣力を養ひ、機會を作り得るのである。同類相鬪はずとも、左う行けさうに思ふものゝ、何分にも左う行かず、左うは問屋で卸さぬので仕方ない。今でも鬪爭が

絶えず、近い所で世界戰役が起り、七百萬人戰死し、負傷者が之に幾倍し、淺間敷いとも何とも云ひ樣ないが、世界十六七億の人類の文化程度を高める所以とすれば、是非も無い事とせねばならぬ。何の爲めに大戰役が起つたか、戰費三千八百億圓を平和的に費したなら、何れ程文化に貢獻し得たか知れぬが、殆ど不可解の理由で勇み立ち、殺すか殺されるか二つの一つになるのは、之れで自然を征服するの氣力を鍛え上げ、之を征服するの工夫を練り上げるのである。原因結果は必ずしも眼前に見えず、回り回つて現はれるのが多く、那翁戰役が後の文明に與かる事少いとせぬ如く、最近の世界戰役も將來の文明に與かる所があらう。

現代の鬪爭根性は遠い過去の動物時代から續いて居るが、他の動物と違ひ、智慮を增し、延いて同情を多くし、單に自らの利益のみを考へず、敵の立場を察し、濫りに之を殺すを厭ふ。獅子や虎や、或る動物を食ふだけであつて、其動物について何の考ふる所が無く、食ひさへすれば可いのである。人類も幾らか其跡あるにしても、時代を經過するに伴ひ、濫りに殺さうとせぬ。赤十字の旗ある所に發砲するを憚り、偶々發砲すれば過つてした事と云ひ譯けする。言ひ譯けに過ぎぬのがあるとて、敵の苦痛を深くしようとせぬ所がある。死ぬならば卽死、永く苦しみ悶へるやうにならぬやうにしようとする所がある、未だ見るべき程度に到らぬけれど、其勢を考へる事が出來る。成るべく早く不可抗の勢を示し、事を片付けようとし、唯思ふやうに片付かぬので面倒が起る。

國と國との間に開戰するのは容易に防ぐ事が出來ず、切角案出した國際聯盟も、何程の効能無い形になつて居るが、國內では兵力を以て爭ふのは、他の方法を以つてするやうに變じた所が多い。日本でも昔ならば平氏が權力を得れば、競爭者なる源氏一族を殺さうとし、源氏が權力を得れば、平氏一族を殺さねば已まぬ。明治になつても、西鄉と大久保との爭の如きものがあつたが、今日政友會と憲政會と、如何に爭つたとて一人をも殺さうとせぬ。鬪爭と云へば鬪爭であつて、其鬪爭は少くとも表面に於いて言論を以つてする。議會の設けは源平をして劍無しに爭はしむるが爲めと云つて可い。一般に立憲政治の普及するのも之と事情を同じくする。議會ある方、黨派の爭ひが穩かになる。もとはと云へば同情心の廣まつたのに由る。同情心が增したのでなければ、永い經驗で無益な殺生を避けるの有利なるを知つたのである。考へて見れば自ら捷つて祝賀するだけ、他の一面に苦しんで居る者があり、其苦しみ方も察し得ぬでない。猫共でも熟々無益の殺生を後悔する事がある。世が進むと

共に敵の立場を察し、同情を禁じ得ないやうになる。而して尚ほ闘爭して已まぬのは、闘爭の天性を具へて居るが爲めであつて、動ゝすれば動物時代ゝ同樣に發露しようとする。併し知識が進み、敵側の事を知るだけ、人を殺す時自ら殺される場合を察し、慘酷にするに忍びぬやうになる。敵を愛すとの語は決して空語でなく、人に幾分か其分子があり、世の進むと共に强くなる譯である。今日まで著るしくないだけて、幾らか共進みつゝあるを見る。

闘爭は避ける事が出來ぬとて、努めて平穩なる形に於いてしようとし、闘爭であつて闘爭でないやうになる。友誼的競爭(friendly competition)の如き、之を示す。競爭は敵意を挾むべきもののやうであつて、敵意を挾まぬ友情を以つてしようと云ふのである。世界の闘爭の向ふ所は漸次此方針を指すべきものとする。闘爭が悉く斯くなるには尚ほ幾百千年を經ねばならないが、少しづゝさうならうとする。本來敵とするのに永い連鎖の一部であつて、味方と同樣の働をする事がある。細胞が幾つにも分れ、各ゝ自己を形作るのは、精神的に觀て小我であり、合せて大我ゝなり、斯かるものを合せて超大我となる。有機物は無機物に對抗して起つたけれど、其對抗するのは自然界の發達であり、自然界の征服と云ふのも實は謬つて居り、征服でなく活用であらねばならぬ。敵と認め之と闘ふのは、斯く闘ふのに全力を注ぎ得るが爲めであつて、絕對に兩々相容れぬものでなく、寧ろ彼が我が犧牲となるのであるか、我が彼の犧牲となるのであるか、何れにしてもより大いなる目的の爲めにする所がある。產婦が病氣に罹り、母を活かすか胎兒を活かすかと云ふが問題になる事ゝある。一方が生きれば一方が死に、形に於いて敵となり、實に於いて味方である。足を切らねば生命に懸かると云ふので、之を切るのもさうである。切られる足は敵のやうであつて左うでない。左りとて之を切らずに居れぬ。闘爭を押詰むればさう云ふ所がある。闘爭が悉く友誼的競爭となるまでに多くの年代を經ねばならぬとし、漸次斯くなるべきものと定め、其方針に於いて臨機に事を處すべきである。

心理學上より見たる 爭闘と將來の文化

上野陽一

この頃、家の子供が學校から遠足に行つて、ある工兵隊を見

學して闘つて來た。そこでは、地雷や水雷の爆發など、人類がありとあらゆる知識を搾つて、その闘爭本能の活動に際して優者たるべく工夫した、樣々の殺人裝置が實演せられた。そして平生から、親切に、おとなしく、眞面目にと、うるさく、しつこく訓へられて來た小國民は、戰爭の手段が如何に慘虐なものであるかといふことに、驚嘆の眼を見はつた、大隊長は殺人術の實演の後に立つて一場の訓話を試みた。子供の報告するところによると、大隊長は「私共はかうやつて毎日敵を殺す方法ばかり研究してゐます。あなた方はよく勉強してえらい人にならなければなりません」といつたさうである。尋常五年生の報告であるから、眞僞の程はわからないが、軍人としていひさうなことだと思つた。

その大隊長のいつたことの前半と後半とには何等の連絡もないのである。若しその間に有機的の連絡をつけて首尾一貫したものにしようと思つたならば「私共は國家のために殺人術を研究をしてゐる、貴方も大きくなつたら、我々の志をついで大に殺人術を研究して下さい」といふか、若しくは「私共は目下已むを得ずかうやつて殺人術を研究してゐるが、これは人類の理想ではない、あなた方は殺人術研究の必要がなくなるやうに世の中のために働いて貰ひたい」とか何とかいはなければ、いふことが少しも徹底してゐないではないか。併しそのいふことが徹底してゐないところに、軍人としての立場の苦しいところがあり、そして人類進化の大波にゆられながら、どこの島に辿りつくことやら、見當もつかずに、ヨロ／＼としてゐる思想的の動搖不安定の有樣が看取せられるのである。

一　本能としての爭闘

爭闘は人類の有する生得的傾向の中で最も根強いものゝ一つである。自己の利益を擁護せんがために、相手方を排除する必要の起つたとき、そこに天性としての爭闘本能が發露される。殊にそれが食慾又は性慾に關して起つた場合には、著しくその強烈さを加へるやうである。爭闘は一見して極めて野性を帶びた蠻的のものゝやうに思はれるけれども、この傾向あるがために人類は互に優者たらんとして筋力を養ひ、武器を工夫し、その結果として肉體の弱い知惠のないものは敗北して、優者のみ殘存し、不知不識の中に、優生學を實地に施して今日の偉大なる文明を産み出すに至つたのである。

今日でこそ個人が互に自己の利益のために肉體的に他と爭ふことは、紳士にあるまじきことゝせられてゐるけれども、それは最近に發達した社會道德の一つであつて、以前は個人を評價

する標準が主として體力の程度、而ち他と力闘した場合の勝味如何に存してゐた。力のある強い奴が人としてえらいのであつたから、昔の酋長や君主の起りは皆こゝに存してゐた。丁度闘技館における如く、爭闘者として強いものが王者の地位を占めるのであつた。

之を子供の發達について考へてみるに、子供の生活に於ても、爭闘は最も早く現れる本能の一つである。數ある本能の中でも最も原始的なるものといつてもよからう。赤ん坊は抱かれてゐると、自由に運動が出來ないから泣き出す、手足をもがく、顔が赤くなる、皆爭闘の態度である。少年期においては、特に男の兒が喧嘩を好むことも、よく人の知るところである。大人は子供の喧嘩を以て一種の惡徳と考へてゐるけれども、子供にとつては、天性の自由なる發露であつて、叱られる位でやめるものではない。

大人になると、子供ほど頻繁に喧嘩はしないけれども、昔侠客の中には殆ど喧嘩を商賣のやうにしてゐたものもゐたし、又その勇ましい喧嘩の仕ぶりが一部社會の憧憬の的となつてゐたことは、め組の喧嘩などが、芝居で、もてはやされてゐることによつて明らかであらう。併しながら世の中が次第に進むに従つて、個人間の爭闘に現るゝ武勇を嘆美する氣風は次第になくなり、體力に訴へて喧嘩することは、一般に不作法なる惡徳と見なされるやうになつて來た。

二　個人的爭闘と團體的爭闘

然らばそれ等の爭闘なり喧嘩なりは、既に今日の社會に在つては、一つの惡徳として全然之を禁止してしまふべきものであらうか。否々決してさうではない、思ふに喧嘩そのものは、今日の社會に於ては不必要であり、又當然なくすべきものであらうが、爭闘の際に働くところの爭闘的の精神は人間の男らしさを維持する上に必要なるものである。マクヂウガルもいつてゐるやうに、爭闘本能は社會組織を進化せしめる上に、何者にも劣らぬ働きをなしてゐる。又現今に於いては、集合的の情緒及び動作の實證を大規模に發生せしめる上に、大規模の働きをなしてゐるのである。

果して然りとすれば、爭闘本能は單に個體の維持を目的とする利己的のものに過ぎぬとして、一概に捨て去ることは出來ない。爭闘なる本能に相當するところの情緒は即ち憤怒であるが、憤怒は昔から戒むべきことゝされてゐる。キリスト教も憤るなかれと教へ、佛教も怒を以て煩惱の中に數へてゐる。併しながらこれは個人關係の憤怒についていふことであつて、個人同志

の憤怒は、宗教も道徳も之を抑へてゐるが、同じ憤怒でも、團體のための憤怒、即ち公憤とか義憤とかいふものになると、却つて美徳の中に數へられる。國のために爭鬪する戰爭において勇者たり、殊勳者たることが古來至上の道徳として奬勵せられ、勇氣、決斷、猛進、果敢、剛毅といふやうな軍事的の道徳が人心を支配してゐたのを見ても、團體のためであるならば、個人の場合に於て許されない爭鬪や憤怒でも、如何に當然の美徳とし、認められて來たかゞわかる。又現に今日隆盛を來たしてゐる國家は皆この團體的爭鬪本能の强かつたもののみであつて、支那や印度の如く、あまり早く開けた爲に、この本能のあまり强くなかつたと推察せられる國家は、却つて强國の位置を占めて居らぬのである。要するに個人的爭鬪本能が何等の制限も受けずに働いてゐた未開人の時代にあつては、弱きものは次第に淘汰され、次に個人的爭鬪を不德として否認するまでは個人道徳が進むと共に、一方、團體的爭鬪が美徳として奬勵されるやうになると、爭鬪力の弱い國家は次第に弱者として退けられ、結局今日に於ては、團體的爭鬪力の强い個人によつて組織されてゐる國家のみが勢力を得るやうになつた。

三　爭鬪本能の純化

然るに世界は更に一轉化をなさんとしつゝある。國のため君のために一身を挺して戰ふことは、至上の道徳として、小學校時代から柔かい頭腦に刻み込まれて、そこには何等の疑問も殘さぬ自明の眞理として受取るべく强ひられてゐた。そしてすべての教育が我々の好戰性を挑發すべく計畫されてゐた。そこにもつて來てアメリカが正義人道といふ旗風をふりかざして來ると、忽然として夢から醒めたものゝ如くに、日本は決して軍國主義ではござらぬ、好戰國民などゝは以ての外である、日本も決して好んで戰ふのでもないといつて、頻りに辯解するやうになつて來た。我々が受けた小學教育を回想して見ると、實に世の中も變つたと思はざるを得ない。即ち世界の大勢は團體的爭鬪本能をも否定せんとするに傾きつゝあるのである。この調子で進んで行くと、今迄小學生の羨望の的であつた、サーベルや胸間の勳章などは、勳功の記號ではなくして、犧牲の象徴として見なされる時代が來ないとも限らぬ。さうなると、きまりが惡くて勳章など下げて歩かれぬかも知れぬ。

併しながら人間は果して個人的爭鬪を否定した上に、更に團體的爭鬪をも否定し去ることが出來るであらうか。怒るなかれ爭ふなかれといふことを訓へ始めてから、幾百、幾千の歳月が經過してゐるにも拘らず、今だに電車の中や、諸處の改札口では

互に相爭ひ、怒り、罵つてゐるのである。その位に根強いところの天性である爭闘が、正義人道といふやうな理想をふりかざしただけで、簡單に影をひそめてしまはうとは思はれない。と同時に人間は不斷に理想を追うて走るものである以上、單に、「天性だから」といふ理由で、爭闘の野性をあるがまゝに放置しおくてことも出來まい。こゝにおいてか、闘爭本能の純化といふことが必要になつて來る。

本能は力であると同時に目的である。力は消失せしめる譯にはゆかぬが、目的は變更せしめることが出來る。爭闘の性情を一つの力として見れば、他の如何なる力を加ふるとも之をして無に歸せしめることは出來ぬ。若し強ひて之を無くしようとすれば、空氣を壓搾するやうに、之を壓迫することは出來るかも知れぬが、何かの機會に大なる爆發をするか、壓迫が久しきに亘れば、精神病といふやうな形となつて現れて來ることは、明らかである。そこで力としての爭闘を無くすることは、絶對に思ひ止まらねばならぬが、その目的とするところをかへて、その力を他に流用せしめ、その天性をして異なつた方向に働かしめることは出來る。これが即ち本能の純化である。

古來爭闘の純化はいろ〳〵の方面に行はれたが、最も著しい例は宗教の上に現れてゐる。例へば救世軍の如き、軍隊の組織に象り、世俗の害惡を敵として爭闘するといふ心意氣は、全く百萬の敵を引受けた戰士の概がある。彼等は天性としての爭闘本能を、他人を害し、他國を亡ぼすために働かせずに、却つて世を救ひ、民を濟ふために働かせてゐるのである。哲學者も、科學者もこの意味において、人類の文化生活を向上せしめるための闘士である。かくして人類の爭闘本能は、その本來の目的を否定すると共に、他の方向に向つてその翼を延ばさんとしつゝあるのである。

四　爭闘の文化より愛の文化へ

顧みれば古來の諸國興隆の史跡は、要するに爭闘の文化史であつた。諸般の制度も軍國主義を中心として發達し、學問も武器の製作に促されて發達したかの觀があつた。藝術も、宗教も、教育も、無論可なりの發達はしたけれども、軍事から見ればすべて副貳的のもので、殊に教育の如きは、全く軍事のための犧牲となり、好戰性の挑發、爭闘に堪ふる筋力の養成、爭闘に必要なる智謀膽力の涵養といふことに主力が注がれ、人としての教養の如きは少しも顧みられなかつた。何といつても今迄の歴史は戰爭の歴史であるといつても濫言はあるまい。

曾て個人的爭闘を否定した我等は、今又團體的の爭闘までも

否定し去つて、さて何地に行かんとするのであるか。自己の安寧と興隆と繁榮とを計るために、之が妨害となるべきものを亡ぼすことを目的とする爭闘の天性を否定し、之を純化せしめてその力を他の方向に流通せしめんとするには、どうしても在來の小さい團體觀を超絶し、國家間の爭闘を不要ならしむるまでに、その理想を廓大して行かなければならぬ。元來、他と爭ふのは自己を愛するためであり、他の團體と爭ふのは自己の團體を愛するためであるから、今一歩を進めて全人類を愛することが出來たならば、爭闘の文化は、一轉して愛の文化とならなくてはならぬ。これは決して一片の空想ではなく、過去の道程を顧みて、將來必ず愛の世界の實現せんことを推し得らるゝのである。例へば國と國とは互に干戈を交へてゐても、個人同志は愛によりて結びつけられてゐることが少くないのであるから、將來は國家といふやうな團體を單位として愛の結合が出來なければならぬ。否、世界の大勢は、そのことが可能であると不可能であるとに關せず、その方向に向つて進みつゝあることは確かである。

之を教育の實際について考へて見ても、將來の文明の趨向が窺はれはしないかと思ふ。昔の教育は武勇一點張りで、「膂力人に優れ」とか、「一騎當千」とかいふことが理想の目標になつてゐたが、今日ではさういふことよりも、慈悲、同情、公共心、知能といふことが主たる德目になつて來た。喧嘩強い人間は必ず教育の目的でない、却つて人として同情あり、知能の高いものが貴ばれるやうになつて來た。即ち「勇の教育」より「愛の教育」へと進みつゝあることは明らかである。

體育からいつても、昔は爭闘力の強い人間を作ることが目的であつた。武術に長けた、腕力の強い人を作るのが、一にも二にもその目的とするところであつた。この主武副文主義の教育はその後一轉して文武併立主義となつたが、今日の教育は全く主文の教育となり、武育を施しても、武術そのものを目的とするやうなことはなくなり、體育の一つの方便として用ひられるやうになつた。即ち今日文明社會に生活するものは、護身の目的を以て、柔道や擊劍を習つたり、武器を携へたりする必要は少しもない。隨つて右にいつたやうな意味で、身體を教養する必要は更にない。昔、各自が準備してゐた、武術や武器は軍隊又は巡査といふ特殊の階級があつて、我々を代表して柔道擊劍を學び、我々の代理として殺人器を携へてゐるのである。その軍隊でさへ制限すべく要求され、その巡査のサーベルでさへ、時代遲れのものとして撤廢を迫れてゐる世の中である。仁王樣のやうな筋骨隆々たる體格の所有者は、顯官の護衛としてはとに

かく、一般の人としては尊ばれなくなり、却つて喧嘩して負けさうであるところの、觀音樣のやうな容貌と體格の所有者が文明人として喜ばれるやうになつて來た。

こゝに於てか少しく、爭闘と愛とについて生物學的に若しくは心理學的に考察して見る必要がある。

五　男性文明と女性文明

爭闘は自己並びに自己の屬する團體（家族又は部落又は國家）の利益のために、敵を亡すことを目的としてゐるものであるから、これは主として男性に發達した本能であると考へることが出來る。男子は女子に比して、筋肉も骨格も優れてゐるのは、男子が自己の性的對手たる女子を保護するために、體力を働かして爭闘に從事し、女子はその保護の下に生殖に從事してゐたことを裏書するものである。太古男子は自己の性的對手としての女子は認めて居つたけれども、性交によつて女子に生れたところの子孫を自己の所産として認めることは出來なかつたと推すべき理由があるからして、男子は主として女子を保護するため、並に食物を爭奪するために、他の男子と爭闘することを以て主なる仕事としてゐたのである。隨つて男子の間には、軍事的の諸徳が發達し、武勇が尊ばれるやうになり、女子は自己の保護者として役に立つ男子を好み、これに頼るやうになつたから、その要求に應ずる男子が輩出するやうになつた。今日體重に於てゝ、身長においても、肺活量においても、その他種々の點において、肉體上男子が女子に優越してゐるのは、男子が爭闘を專務としてゐたために、かゝる異常なる發達を來たすに至つたのである。

然るに女子の方は、主として男子の保護の下に生活してゐたのであるから、男子のやうに筋肉を勞役する必要がなかつた。隨つて筋肉の割合に脂肪が多く、動くことも男子のやうに輕快には出來ず、肉體的にはすべての點において男子に劣つてゐた。その代り女子には女子特有の仕事があつた、それは産兒と育兒とであつた。女子は自ら産むのであるから、親といふ意識が早くから成立してゐたけれども、男子の方は性交と出産との間に因果の關係の存することを知らず、久しく親の意識に發達しなかつた。隨つて女子は本能的に子供を愛する強烈なる傾向をもつて居たに反して、男子には久しくその本能を缺いてゐたと考ふべき理由がある。動物の生活を見ても、主として愛兒の本能をもつてゐるのは、女性だけである。故に産兒を養護する本能のことを一名母の本能ともいふのである。故にこの時代はすべてが母系を辿る制度であつて、財産も母から子へと傳へら

れ、男子は常にあちこちと浮浪して歩いて、行く先々で出會ふ女と一時的の夫婦關係を結んでは又放浪して歩いた。女子は子を産むといふ仕事をもつてゐるために、男のやうに放浪することなく、比較的定住する傾きをもつてゐたに相違ない。その結果、女は財産を作り、母系的に之を子孫に傳へた。

かくの如く、女子は一個處に定住して、育兒に從事する一方次第に性交と產兒との關係を了解し、男子も亦その關係を知るやうになると、自分も亦女と同樣に、子供に對する權利を主張せんとする欲望を生じ、女子が蒙るところの出產の苦みを、已れも共に味はふことによつて、親たるの象徵と考へ、出產の際は自分も寢床にあつて苦む眞似をした。この時代から漸く男子も女子の傍にゐつくやうになり、幾分か爭鬪野性を減じて、女子の仕事を手傳ひ、子供を愛するやうになつた。これが卽ち爭鬪の男子が、幾分か愛の女子に近づき始めた第一步である。けれども大體に於て、男子の仕事と女子の仕事とは、はつきり分れて居り、男子は筋肉を勞して外敵を防ぐ軍事的行動を專務とし、女子は生殖と育兒とを引受け、爭鬪と愛とは兩性を區別する著しい特色の一つとなつてゐた。

かう考へて來ると、爭鬪の本能を中心として發達した文化は男性文化であり、愛の本能から萌え出た文化は女性文化であるといふことがいへる。爭鬪は個人的のものから團體的のものに進み、前者まづ否定せられ、後者亦否定せられんとするに當り、爭鬪の力は他の方向に向けられ、愛を目標として大勢が動きつゝある今日、世界の文化は將に女性化しつゝあるといつても差支ないと思ふ。

從來男性の特色であつたところの爭鬪的の野性は次第に壓抑せられ純化せられて、元のまゝの爭鬪性は次第に弱きを加へつつある一方、正義人道全人類愛といふやうな女性的道德が次第に尊ばれて、武勇の如きはあまり重きをおかれなくなつてしまつた。

あらゆる愛他的の道德は、子に對する親の愛から出立してゐるとは、多くの心理學者の主張するところである。然るにその母の本能なるものに、元々女子特有のものであつて、男子は今日の如く子を愛するやうになつたのは、全くその天性が變化して女性に近づいたために外ならぬ。この女性化傾向はその後も次第に勢を增して來て、今日では地球の表面からあらゆる武器を奪ひ去つて、永久平和の樂園を來らしめねば已まない勢を示してゐる。近世の文化は要するに女性文化である。

男子の肉體美の理想が筋骨隆々たる仁王型より優形の觀音型に移らんとしつゝあることも亦、近世文化の赴くところを暗示

するものではあるまいか。

又産業能率に關する近頃の心理學的研究の結果もこの點について吾人に訓ふるところが少くない。卽ち實驗の結果によれば男子は女子よりも力量において三〇%乃至四五%も優つて居るが、男子はその優つた力を一時的に急激に使用することにおいて得意であり、女子は之に反して、中等度の力をもつて、長く仕事をつゞけて行くことにその長所をもつてゐる。換言すれば男子は大なる力を一時に出だし、女子は輕度の力を永く用ふることに、その特徴を有してゐる。然るに近世文明の實際の狀態を見ると、一時に極大の力を出すやうな仕事は、次第に機械力によるやうになり、人手に依賴する仕事は次第に女性に特有なる持續的の輕い仕事だけに限られるやうになりつゝある。産業能率の性的差異といふことは、大問題であるが女子が次第に工場に侵入しつゝあるといふこと、及び文明的設備における仕事が益々女性化した結果、女子でも間に合ふやうになりつゝあること、時には却つて女子の方を適當とすることが多いことは、近世文明の女性化を物語るものであるといつてよからう。かくて女子にとつて男子特有の性質として必要缺くべからざるものであつた色々の特徴は、次第に不要に歸せられんとしつゝあるのである。

から考へて來ると、今日各國が尙思ひ切れずにゐる軍備がこの傾向に逆つてゐるものである限り、軍人は小學生に對して、不徹底なる訓話をつゞけていくの外はあるまい。(五月十六日)

生活としての遊戲

長谷川如是閑

一

子供が産れて、やつと自分で運動の自由を得ると、直ちに這ふことの稽古を初める。それから數ケ月經つと今度は步行の稽古をする。それ等が上手に出來た時には、子供は精一杯の歡聲を擧げる。これが運動競技の本質的のものであることは、心理學者等の說明する所である。卽ち運動競技は、人間の社會的生活に於ける意志的運動の豫習であるといふことになつてゐる。

然も此の場合に、子供は、殆んど皆同一の樣式でその這ふことをなり、步むことなどの稽古を初める。何かの拍子で、橫に步く稽古をし出して、とう〳〵橫步みが上手になつたといふやうな子供はつひぞ見受けない。彼等がさういふ風に一定の樣式を本能的に追うて行くところの、行爲の社會的單一性といふもの

が、運動競技には必然のことになつてゐる。たゞ運動すれば好い、競爭すれば好いといふのなら、めい〳〵いろ〳〵な方法を自分で工夫するか、又は二三人が勝手に工夫するかして、別々の遊びをやることになり相なものだが、實際は決してさうでなく、運動競技の方法といふものは、殆んど民族的に決定されてゐて、それが何百年は愚か、何千年でも續いて、今日の文明國の國技なるものを作つてゐる。日本の相撲などは、野見宿禰當時からのことだが、それは野見宿禰の時代の發明ではない、もつと前の神代からのことだらうから、矢張何千年も續いてゐるに違ひない。樣式は多少進化するが、西洋の球を弄ぶ色々の遊戯だつて、或は原始的のまゝ、或は改良されて、何百年でも續いてゐる。かういふ傳統的性質が遊戯には必然のことになつてゐる。そこから觀ると、——即ちそれは遊戯を社會的に觀ることであるが——遊戯の名で總括されてゐる運動競技は、社會心理的結合としての集團的行爲を意味してゐる。換言すれば、それは、宗教上の儀式や、社會的迷信や、風俗習慣やと同じ種類の社會的意識の現れである行爲に外ならない。

　で運動競技は、何處の國でも民族的祭事に關係して行はれてゐるのであつて、希臘のオリンピアの競技の如きは、其標本的のものであるが、さういふ性質から、遊戯は一方で社會的に必要な意志的運動であるに拘らず、他方では、その時代の社會に必要でない生活樣式の形式を保存させてゐる。子供の步るく稽古は、その時代に必要な遊戯だが、今日の大人が一般に行つてゐる遊戯は、それ〳〵發生的には『社會的必要』を有つたものであるに拘らず、時代と沒交渉な運動樣式を採つてゐないものはない。

　例へば、相撲は、原始人の戰鬪法だつたに相違ないから、原始人間に於ては相撲といふ遊戯は、時代の社會生活に必要な意志的運動の豫習だつたに相違ないが、今日の相撲は全くさういふ實用を離れて繁昌してゐるのである。今日歐羅巴や東洋の例のオリンピック競技で行はれる種々なる競技のうちに、ジヤブリンとかディスカスとかハンマアとか鐵彈とか、原始的時代の武器の投げ競らがあるのもその理由である。

　かく時代と沒交渉の生活樣式を學ぶといふ點に、運動競技の生活轉換（ディヴァーション）としての價値がとあるのである。即ち運動が、實用に近いときには、意志的生活過程の豫習としての價値は多いが、生活轉換としての價値は鮮ない。而かも、生活轉換は、生活樣式の單調を破つて、その活力の消耗を回復するに絕對必要の動作なのであつて、活働くには、夜寢ることが絕對必要であると同じなのである。從つて遊戯は此の生活轉換の性質がなかつた

ら、それは一般の勞働と同じ必要的行爲となつて、忽ちその遊戲としての價値が失はれるのである。生理的必要にばかり執着した體操などが、學生に嫌はれる理由はそこにある。生理的に云つても遊戲は、生理過程の律動として絕對必要であるが、社會的に云つても、生活の單調から生ずる意識の衰退を回復することは、同時に、集團生活の意識を强めることで、社會的結帶を强くする道である。人々は、事務の協同によつてよりも、遊戲の協同によつて、より親密になるのはこの譯である。

二

右に云つた遊戲の本質から、所謂運動競技には、三つの性質が具備されてゐることを觀る。卽ち(一)傳統的性質(二)生理的及び心理的性質(三)實用的性質である。

第一の傳統的性質といふ言葉は面白くないが、社會生活の模倣性(橫に)と遺傳性(縱に)とから來た運動樣式の社會化を假りにさう云つて置くのである。此の運動の年中行事的性質が確立しないと、社會的に有意義な運動競技といはれないのであるが、それには歷史的起源が必要になつて來る。然し、そこに矛盾が起るのは、歷史的起原を持つた競技は、大抵古代野蠻の生活樣式に關聯してゐるので、文明の進むと共に、反社會的性質を帶びることになる。例へば、青森地方で行はれる『紲武多』といふ年中行事の如きは、村同士が、戰鬪の眞似をするのであるが、眞似といつても、眞劍な氣分で竹槍や拔刀を持ち出して、往々死傷者を生ずるので、官憲の禁止によつて年々衰退して行く外はない。それは野蠻時代の生活樣式から發生した遊戲の今日に殘存する極端の例だが、然し歷史的競技には、大抵さういふ風の野蠻が殘留してゐないものはない。相撲などは、始めは投げ殺すことも勝手であつたのが、その反社會性は結局四十八手とか稱して、さういふ危險な方法を排除した樣式を定めることによつて緩和されたのである。擊劍に、面や胴や小手等の道具を用ゐ且つ道具外れを忌むといふやうになつたのも、さうして保存を計るのである。西洋中世のトーナメントのやうに、眞劍でなくては興味のないやうな競技は、眞劍の反社會性が意識されると共に廢止されざるを得ないのであるが、大抵の遊戲は、多少改良すれば、その野蠻性を取除くことが出來るから、さうして保存されるのである。

然かもあらゆる遊戲は、相撲や擊劍と同じく、今日既に實際的には用ゐられてゐない鬪爭の方法を根據としてゐるのである。然かもそれが原始的であればあるほど、社會的に遊戲的狂熱を喚起することになつてゐる。裸體の人間が、投げ合つたり

(日本)毆り合つたり(西洋)することが、鬪技として、時に全國民の熱狂を惹起すやうなことになるといふのは、文明の今日に於ては考ふべからざることだが、日本にも西洋にもそれが今に普通のことで、今後も永くさうであり相なのは、不思議といへば不思議である。然しそれは一般の社會的儀式の保存と同じ心理で説明する外はない。接吻とか握手とかいふ無意義の觸れ合ひが、さも〳〵大切なことのやうに、西洋人に守られてゐて、それを拒絶したり濫用したりすると大問題が起るなどゝいふことも、考ふべからざる社會的氣質の一つであるが、遊戯も亦さういふ性質　帶ぶるに至らないと、全くの民族的遊戯といはれないのである。日本の相撲、英國のクリツケツト、西班牙の鬪牛等は、その顯著なものである。

然し、こゝに遊戯の進化の上に重大な影響を與へてゐるのは現代文明の生活様式である。即ち近代の物質的生活の進化は、科學の發達となり、産業生活の革命となり、交通の自由となり、民族の混交となり、その結果は、民族的生活の根柢を物質的及び精神的に動搖せしめることゝなつた。それは即ち民族的傳統の歴史的價値が減退したことであつた。

傳統的價値が減退するといふことは、民族が自己の傳統に對して批判的態度を採ることである。即ち歴史的傳説に對して科學的檢討を加へて、日本の神話は南洋土人の信仰と同一であるといふやうなことを言ひ出すのであるが、其科學的正確の度合如何に拘らず、そんなことを言ひ出すやうになると、一切の民族的なるものに對して——言ひ換へると古代的なものに對して——近代的意識によつて考察することになる。裸體の男が二人で揉み合ふことを無批判に面白ろがつた心狀から一轉して、何故そんなことが面白ろいのだらうといふやうなことを考ふるに至る、考へた結果、近代心でもそれが面白ろいといふことになれば、それは依然時代の遊戯として繁昌するのであるが、さうでないと次第に興味を失つて、その遊戯は衰退するのである。かう云つたとて、例へば相撲の盛衰が、各人のさういふ考察によつて定まるといふ意味ではないので、時代が次第に裸男の揉み合ひに興味を失つたのは——もう失つたとすれば——それは時代の生活意識が、相撲に對する傳統的信仰を失つて、それを現代の生活意識から判斷するに至つた爲であるといふのである。言ひ換へると、それは相撲に對する信仰が、相撲に對する科學に取つて代はれた結果なのである。

然し實際に於て、傳統は、必らず各時代の科學の檢討をうけたのであつて、敢て今日に限つて批判されてゐるといふ譯ではない。人間は土壤から發生したといふ傳統が信じられてゐたと

すれば、それはその時代の科學が、それを肯定してゐたともいへるし、肯定しないまでも、全然否定してしまう力がなかつたともいへるのである。從つて相撲に對する遊戲の價値も、時代々々の科學がそれ〲の解釋に從つて、それを理解して、それに價値を附して來たに違ひない。今日でも相撲が相當の人達に觀賞されてゐるのは、その人達の科學が、相撲の傳統と共同して相撲の價値を構成させてゐるからである。力士の體質、重量、力量、技術、心理其他々、機會の生滅、空間の變化等が結び付いて複雜な運動の過程が進行して行くのを、いろ〲と研究してゐる所謂相撲通なる人々は、相撲を、科學的意義に於て決して無意義とは思つてゐないのである。これが相撲の保存に有力な動機を爲すものであることは疑ひない。然かもそれは矢張り傳統的性質の喪失には違ひない。

即ち近代的傾向たる傳統的精神の減退と共に、遊技は、次第にその傳統的價値を失つて、他のもつと理性的の意義に於て保存されるのである。然し右にいつた科學的精神は、そのことだけでは遊戲の性質を爲さない。それが遊戲たるには第二の生理的及び心理的要素を備へなければならぬ。

三

第二の生理的及心理的要素は、前云つた生活轉換の外に更に目的を持つた積極的の條件がある。それは本能的衝動の滿足である。本能にも色々あるが、人は其社會生活に於て個人的乃至社會的の本能を働かす事なしに生活の意義を感ずる事は出來ない。而も與へられた色々の本能を常に充分に發揮し得る生活は實際にはない。即ち平和な生活が續けば、戰鬪的の本能を働かせる餘地は少く、戰鬪の生活が續けば平和的の本能が働かない。而も本能は生活系統の必然の法則であるから、或る本能が壓へられてゐるといふ事は、堪え得られるものではない。でそれは生活の實用的な方面以外へ發展して來る。とそれが遊戲になる。だからそれは廣い意味の生活轉換とも見られるのである。例へば日本の戰國時代に殺伐の生活が續くために、敵對感情と粗暴な動作とが生活を支配することになる。そこでそれと正反對の平和的本能が抑壓されてゐるので、その本能は封建時代の極端に平和的な禮儀となつて現れて來る。茶の湯の如きものがそれである。心理學者などが意志制壓の遊戲と稱するものは、此の種の遊戲に外ならない。之に對して意志制壓が強く行はれてゐる秩序的な社會に於ては、意志的の遊戲が起る。征服慾や所有慾の滿足を遊戲に求める。詰り實際生活に於て發展させられない本能を、遊戲に於て滿足せしめるのである。

此意味で遊戯は生活の餘剩的延長であるといふ説も成り立つのである。然し實はそれは餘り物ではなく、同じ價値をもつた生活過程なのである。詰り實用生活を生活するのも、遊戯的生活を生活をするのも生活の意味に於て輕重はない。その事は子供の生活に於て容易に了解される。子供が大人の生活を遊戯で摸倣してゐるのは、子供の生活の剩餘ではないので、それが子供の生活其のものなのである。大人が相撲や擊劍で勝負を爭ふのは、實用の生活で本能を滿足させるのと、同じ價値をもつた本能の滿足なのである。

其意味で遊戯的生活は、實用の生活と同價値で生活されてゐるばかりではなく、寧ろ實用生活の不完成な樣式を、遊戯に於てはもつと社會的に醇化して、一層合理的の樣式を造り出すのである。例へば眞劍の斬り合は實用的であるだけ生活理想と一致した樣式を採らない。然るにそれを遊戯として行ふ時には、實際の不合理を排除して、そこに頗る合理的の法則を造つて、所謂擊劍といふ複雜な禮儀と技術との一致を造り出したのである。これは生活の道德化であつて、今日の實用生活では未だ充分に行はれてゐないものであるが、遊戯の生活に於ては頗る發達して居る。之が英吉利などで、スポーツマンシップがゼントルマンシップの理想的の現はれと云はれてゐる所以である。實際生活でもそこまで行くのが理想であつて、決鬪などに法則があり、戰爭に戰時公法があるのも其意味である。

四

尚ほ遊戯の心理的意義として重大なことは、それが生活の現在の必要に規定されないで、直ちに本能の要求に應ずる發動である點である。人間の社會的生活に於ては、個人的乃至社會的の一時的必要が、個人の行動を强制することが甚だ多い。所謂生活の自由なるものは、これが爲めに大部分奪はれて、人々は刻々の必要に追はれて行動しなければならないことになつてゐる。これは一方に於て已むを得ない社會的必要であるが、他方に於て、それが爲めに、本質的個人に備つてゐる本能の圓滿にして自由な發動を阻害することが鮮くない。で人間は、此障害の爲めに自分に在る潜勢力を殺してしまはないが爲めに、實用の生活以外に遊戯的生活を營むに至るのである。子供の生活はかういふ本能的生活が大部分を占めてゐるので、生活それ自身が殆んど遊戯であるが、子供に對する學校の教育は、――その理想的のものは、遊戯的性質を失はない筈であるが――事實に於て、子供の本能的の作用を妨げる方法が採られてゐるので、子供は、學校教育以外に於て、自由にその本能を發揮して、種々の

遊戯的動作を行つたり、いろ〳〵のものを作つたり壞はしたり自己の生活創造の實習をやつてゐるのである。だから生活の意義の上からは、學校以外の子供の遊戯的生活の方が、子供にとつて重大なのである。從つて彼等は、學校に於けるよりも、その遊戯に於て眞劍なのである。彼等は、彼等の教育者達よりもより明敏に、自分達に大切な生活を生活することを心得てゐる。

同じことは、大人の遊戯に於ても見られるのである。それは今日の社會組織の缺陷にも因るのであるが、人間の生活が、その意志的方向と一致しないことは、今日ほど甚しいことはあるまい。中世には、武士は武士で、その生活意志と何分か一致した生活を本位とすることが出來、工匠は工匠で、その創作的衝動を何程か滿足させる生活をしてゐたのである。然るに近代に及んで、生活の憧憬を離れた、所有衝動の競爭狀態が、一般社會過程の動力と爲り、社會組織も亦それに應じて構成されることになつて、生活の本質的なものは大抵充分に働かせることの出來ないやうな樣式を採ることになつてしまつた。そこで最も訝しなことは、社會的生活を生活することは人間に取つてあまり望ましいことでも、高等な生活でもなく、寧ろこれは下等な淺ましい生活であるといふやうな思想が一般を支配する結果となつた。(殊に英國などで)それは其筈である。社會的必要の生活といへば、物を賣つて金を儲けるとか、人を欺瞞して掠奪するとか、人の創造力を、自己の所得の爲に利用するとか、何れにしても自分の生活本能を正常に働かせずに、たゞ所有者となる爲めに努力するやうな、極めて限られた、生活の意義に乏しい生活をすることになつてしまつたからである。

實用の生活がこんな風になつてしまつてゐるから、人間は、その生活本來の力を、今日の實用の生活に於て、充分に發揮する道を持たないのである。從つて、出來るだけ此實用の生活を離れて、その本能の本來の方向を取つた生活を生活しなければならないことになる。それは即ち遊戯の生活である。今日の人間は、遊戯に於て始めて、自分自身の生活を生活してゐるのであつて、そこで始めて彼等は、肉體的にも精神的にも暢然たる自由の展開を試み得るのである。誰れやらが「遊戯が始めて人間の眞の生活である」といふやうなことを云つたのは、此の理由からは正しい見解である。

然し無論、遊戯がさういふ本質的性質を備うる爲めには、何處までも、その社會的性質を失つてはならないのである。で純個人的な衝動も、その效果が社會的である時には、それは、生活の意義を失はないのであるが、社會的效果を持たない、又はそれに反する個人的遊戯は、社會生活に於て成り立たないこと

はいふまでもない。詩人が詩を作るのは個人的ではあるが、その詩の社會的效果を觀る時には、それは純個人的に始終するものではない、從つて、それは立派な遊戲的自由を持つ行爲であるといへる。然し怠け者が無暗と玉突きをして廻るといふやうなことは、遊戲的な自由のやうではあるが、それは生活の衝動の充實ではなく、寧ろ生活の衝動に乏しいものが、その爲めに遊戲的形式の生活しか生活することの出來ない結果に過ぎないのである。然し、實用の生活が、より能く各人の本能と一致する社會組織の下では、各人は、何ほどか、生活形式を遊戲化するのであつて、それだけ實用の生活が右の詩人の生活に近いて行く筈である。「勞働の藝術化」といふやうなことを說くものゝあるものは、その意味である。

然し、勞働（實用の生活）が全然遊戲化するといふことは、社會的必要と各人の本能による衝動とが全然一致しない限り、有り得べからざることである。日本に何萬噸の石炭が要るといふ時に、各人が本能的に何萬噸の石炭を堀るだけの勞働を採る氣になれば好いが、さうは行かない。實用の生活は、何處まで行つても、全然遊戲的になることはない、それだけ如何なる時代に於ても、遊戲が生活の必然の半面を形作ることになるのである。

五

そこで造化精妙ともいふべき關係が、實用の生活と遊戲生活との間に成立してゐるのである。それは、人々が今日の社會で——恐らく如何なる社會でも——實用の生活を强制的と感じてそれに對して出來るならば回避しやうといふ態度を採つてゐるに拘らず、その同じ行爲が、遊戲として、本能の歡喜を以て取扱はれてゐるのである。例へば土方が土工をやるのは實用の强制的行爲で、土方自身には遊戲的生活ではないが、子供は、それを眞似て遊戲として喜んで土を掘つてゐるのである。これが卽ち前に揭げた遊戲の實用的性質を示してゐるのである。

子供が遊戲として土を掘るのは、實用の生活に於て、土を掘る生活が存在するからであつて、子供の土工は、その豫習の意義があるのである。卽ち、彼等は、人類の生活を生活する爲めに、その生活形式を本能的に喜んで採るところの素質を持つてゐるのである。狩獵生活をしてゐる野蠻の子供は、小い弓を弄び小いブーメラングを弄ぶのである。誰れかのいつた通り「人間は本來勞働的生物である」といふのは事實であつて、さうしてそれが生活の組織とぴつたりと合ふ時には、遊戲氣分でその勞働を生活することを得るのである。中世紀の西洋や日本の

工匠の生活がそれであつたのである。さういふ生活から、傳說にある左甚五郎のやうな名人も出る譯なのである。尤も今日の複雜な社會組織では、さういふことが生活の全般に亘つて實現されるといふことは空想に過ぎないが、それでも、如何なる勞働も、勞働する當の人の意志的運動としての自由を完全に享受せしめれば、その勞働苦を極度まで減ぜしめることが出來るといふことを疑ふ譯には行かないのである。

今日の社會では、右のやうな理想狀態に尙ほ遙か遠いことはいふまでもないのであるが、かゝる現狀の下では、强制の生活に對して出來得る限り生活轉換(ディヴァーション)の意義に於ける遊戲について考慮しなければならないのである。卽ち强制的生活に從事する人ほど、その意味の遊戲を與へられる權利を持つ。而かも、その爲めには、その人々の生活條件が、今日の實際から遙か遠つた樣式とならなければ、到底それはいふべくして行ふべからさることである。國民の多數――中產者、勞働者――の今日の生活條件は、全くさういふ必要の遊戲的生活に入る可能性を持つてゐない。又社會にも、彼等にさういふ生活を十分に味はさる機關も設備もない。彼等が次第に、生活の强制のみを感じて、生活の自由を全く感じないやうになるのは當り前のことである。而して、此の事は多數人類をして生活の無意義を感ぜしめることで、その結果、彼等がその本質的衝動を何う始末するかといふことが、今日の思想上、社會上の問題となつてゐる譯である。

要するに、遊戲の生活は、その傳統的意義に於ても、生理的乃至心理的意義に於ても、又實用的意義に於ても、我々の社會的生活の根柢的條件を爲すものであつて、今日の政治と教育と社會組織とが、如何に此の遊戲の生活と關聯するかを考ふる時には、尙は一層複雜な問題が存するのであるが、私はこゝでは、たゞその一般的性質を概說して、その重大さを示したに過ぎない。

詞華

生れるまで

河井酔茗

私は居る、
私は此處(こゝ)に居る、
私はたしかに此處(こゝ)に居る。
私は思ふやうに動けないけれど、
私の魂は自由だ。
私はたゞ見ゆるものを見てゐる。
私はたゞ聞えるものを聞いてゐる。
私は睡つてゐた。
睡つてゐた間は、
私の世界にはたゞ光があつた。

光は私を眼覚ました。
私は最初に太陽を見た。
太陽の光が、
陰影(かげ)と日向(ひなた)にわかれてきた。
私はまだ混沌と睡つてゐる時があるけれど、
眼覚めてゐる時に、
私は何を見るだらう。
私は何を聞くだらう。

＊

母よ、母よ。

私は光から來たのですけれど
もうあなたを母と呼んでいゝでせう。
あなたは傍に居る人たちからみると
賢いやうです。
賢いためにあなたは苦勞をするのですか。
母よ、母よ。
あなたは又もと／＼美しい人のやうです。
美しいためにあなたは惱みが多いのですか。
父よ、父よ。
私はあなたから離れてゐるやうに思ふけれど、
私とあなたとは同じかも知れません。
だから母のすることが
私によく分るのでせうか。
母よ、
あなたは、
山を越えて來ました。
子供心に何も知らず、
美しいが故に、
娘分で娶られてきたあなたは、
お人形さんのやうに、
箪笥の前に座つてゐました。
市外に出てみなければ
はてしのない菜の花の上に浮ぶ山脈は見えないけれど、
あなたは何んなに里をなつかしがつたでせう。
一月も二月も里歸りしてゐると
父が自身で迎へに行つて、
あなたを引張つて歸りました。
麻裏を穿いて低い峠を越えたり
出來たばかりの人力車に乗つたりして――。
でも、いつとなくあなたは、
「御寮人さん」と呼ばれて返辭をするやうになりました。

あなたは人生に新しい根を下しました。
あなたの愛は生きました。
あなたの悩みも生きました。

嫁を仕込む、仕込むといふおばあさん(あなたには姑)は、
あなたになりものを仕込みました。
おばあさんの三味線、
あなたの琴、
私は感心して合奏をきゝました。
舊い心と、新しい心と、
わかれさうになると、
おばあさんはあなたを睨みました。
琴爪をはめかへ、
琴柱を立てかへ、
氣をかへて又彈き出す一曲。
器用なあなたに
ともすれば駈け拔けられさうになると、
おばあさんは合奏の手を止めて、
「一人でおひき」
かういふことが毎晩毎晩つゞいてゐます。
私はたいくつして、
琴の絃の上を走つて見たいと思ひました。
おもしろい音が出さうですから——。
おとなしいあなたは、
かうして、あたら春の宵を、
父と語り合ふ樂しい時間を奪はれてゐました。

何ういふ機會か。
私がひどい音に驚いた時には、
藥土瓶が柱に當つて微塵に碎け
父は恐ろしい形相をして突立ち
おばあさんは憎らしげに唇をゆがめ
暗いつりランプの下に
三個の人かげがもつれて

湯氣と、藥の匂ひと、灰の烟りとが惑亂してゐました。
僅か三人の人だけでも
集るとこんなにも危なかしいものでせうか。
うつむいて陶器のかけらを拾ひながら
涙ぐんでゐるあなたを、
私は、はがゆく思ひました。
凡てを碎け。
ランプも碎けて、
凡てが火の海に燃上ればよいにと思ひました。
あなたは靜に父を抱くやうにして
寢室の方へ連れてゆきました。

私が來るまでには、
何うして子供ができないと、おばあさんはいぢめました。
私が來てみると、
嘘にもせよ、
もし女だつたら生れるとすぐ他にくれてやると云つてゐます。

安心なさい！
私は男です。
私がおばあさんの前に、はつきりと現れるやうになると、
おばあさんのやうな人間を碎いてしまつて、
魂をよくなるやうにしてあげます。

母よ、母よ。
女から男の生れることをお信じなさい。
そして其白い手を私の上に載せて下さい
母よ。

あなたは何ものかに一筋の信念を持たうとしてゐます。
おばあさんは、
佛壇の前、夜のおつとめがすむと、
ぱた／＼と燈明を消して、
直ぐお扉を閉めてしまひます。
若いあなたが佛壇の前で、

燈明を消す前に、
何をじつと凝視てゐるのです。
鶴の嘴の上にまたゝいてゐる蠟燭の火の炎ですか、
左右に對してゐる輪燈の燈火ですか、
何かの暗示を受けやうとして、
あなたは小さな殿堂の前に額づいてゐるのでせう。

毎朝のやうに來る花賣から、
佛壇のお花を買ふあなたは、
神道の神に捧げる榊を求めました。
神棚をきれいに淨め、
八百萬の神の大前に、
あなたは花やかにはれ／＼とした氣持で、
健かさを祈りました。
黒住敎のお婆さんは、
「昔の貞女烈婦は、
日輪ふところに入ると夢みて
英雄豪傑を生んだ。
あなたも毎朝きつと日の出を拜みなさい」と敎へました。
日の出を拜むには家が深い。
けれどもあなたは、思ひ出した時に、
朝の日が高く昇つてからでも、
おひるからでも、
太陽を仰いで呼吸をしました。
私も背伸して深い呼吸をしました。

神妙に縫物をしてゐるのがあなたの仕事のやうですけれど、
おばあさんが傍にゐない時、
あなたは縁側の端に出て、
大きな四角の手水鉢に銅の干杓で水をかけたり、
きれいな飛石の上を素足で傳つて、
石の上にこぼれてゐる枯松葉を拾つたり、
香の高い眞白な橙の花の落たのを嗅いでみたり、
棕櫚の木をゆさぶつて、ばさ／＼と音を聞いたり、

春日燈籠の火ぶくろの鯉を改めてみたり、
蛇の棲んでゐるといふ太い松の幹をたゝいてみたり、
寂しい人の、
寂しくない姿を、
私だけが見ることがありました。

母よ、
「いゝお嫁さんだ」と近所の人たちは、あなたをほめてゐます。
「これは家の嫁です」と
新しい道具でも出來たやうに、
人に紹介するのも
人中に出すのも、
いつでもおばあさんの役です。
まだ一度も父の口から
「これは私の妻です」と、人に云つたことはありますまい。
あなたは世間で「家の嫁」
「父の妻」はないしやうのやうです。

二人で話すことすら咎められ、
二人でいつしよに外へ行くやうなことがあつたら、
大黒柱が折れるやうな騒ぎが起るでせう。

母よ。
あなたは手紙を書くのに何故隠れて書くのでせう。
手紙といへば悪いことゝ思ふおばあさんを、
恐れるからでせう。
二行書いてはやめ、
三行書いてはやめ、
あなたの手紙はいつ書き上るのです。
あなたは字の数は知らないけれど、
思ふことは假名でゝも、
早く書けたら荷が下りるでせうに——。
母よ、
あなたの書きさしの手紙を私は知つてゐます。
これから書かうとすることも私には讀めます。

あなたはたゞ
お腹の子供は無事だと云つてやるだけでせう。
無事ですとも！
何も隠れ忍んで書くに及びません。
手紙を出すにも及びません、

母よ、母よ。
あなたはみじまひ室に入つても、
早く出るやうになりました、
きれいな顔をして——。
あなたは髪を撫でつけるのも、
白粉をつけるのも、
臙脂をさすのも、
鐵漿で歯を染るのも、
いつのまにか手早くすることを覺えました。
みじまひ室には、
デスクのやうな大きい鏡臺が二つ並んでゐます。

一つはあなた。
一つはおばあさん。
鏡臺の上には、
柄のついた、
裏に南天や鵲や鶴や龜や、
ごた／＼と彫刻した丸鏡がいつでも立てゝあります。
おばあさんが合せ鏡をしてゐる、
をかしな氣の毒なやうな頭髪。
あなたが合せ鏡をしてゐる、
つや／＼しい黒髪。
あなたの鏡は日に一度、
蓋があくだけ。
おばあさんの鏡は日に二三度
蓋があきます。
幾度見ても映らない魂と、
一度見ても映る魂と、
小さなみじまひ室にも、

女の魂がこもつてゐます。
母よ、
あなたは高い壁で笑はないが、
いつでも笑つてゐます。
來る人も、來る人も、
女といふ女が、
皆高い壁を出して、
あけつぱなしに笑ふ。
女は笑はなければ、
ものが云へないやうにみえます。
あなたはふだんに笑つてゐます。
あなたの眉が昂つたり、
あなたの脣がゆがんだりしたのを
私は見たことがない。
母よ、母よ。

あなたは仰向いて 人を視る時にも、
決して白い眼をして怖ぢないのに、
何故、獨で居るとき、
うつむいてゐることが多いのでせう。
家の中が、
ひろ〴〵としすぎるからでせうか。
いくつも、いくつも、
柱の數ばかり。
いく室も、いく室も、
人のゐない室ばかり。
いく枚も、いく枚も、
誰もあけない襖ばかり。
いつも、いつも、
墨繪の龍の掛物ばかり。
いつも、いつも、
鼠色の壁ばかり。
いつも、いつも、

葉のひろい葉蘭ばかり。
いつも、いつも、
つくねんとした石ばかり。
あなたには見るものがない、
動いてゐるものが見えない、
見えないけれど、
私だけが動いてゐます。

母よ、
あなたは人なつかしくなると、
門に立つ物もらひにまで同情します。
穴があいたり、
片ちんばになつたり、
あつても役にたゝない足袋を五六足、
子供を連れた女の物もらひに、
そつと裏口からやりました。
五六十年も前の、
小紋のきれはし、
羽二重の屑
二三寸のきれでも
葛籠に入れて大事にしまつてあるおばさんは、
あなたの無益な施しをどんなに怒つたでせう。

母よ、
あなたはいつでも人なつつこいのでせう。
京から來た旅商人、
誂への染物に奥の室まで入つて、
緩くりした長ばなし。
あなたはたいくつしないが、
おばあさんはいら〳〵と逐ひ返さぬばかり。

母よ、あなたの、
人なれても、
人ずれない氣質は、

あなたを知つてゐる凡ての人が愛してゐます。
早く表へ出して、
多くの人にも接するやうになさいと彼等はすゝめます。
商家へ嫁入つてきたあなたは、
いつか然うなるでせう。
自分がついて行かないと
一歩も外へ出さないおばあさんは、
永遠につき添ふことは出來ないでせう。
あなたが世間と面(かほ)を合せて、
思ふやうにふるまふことのできる時が來たら、
あなたの苦勞は又大きくなるでせう。
あなたは又試されるでせう。
そのたのもしい用意を、
あなたが持つてゐるとは誰も知りません。
母よ、母よ。
あなたは出るところへは出るといふ自信があります。
やれることはやるといふ強さもあります。
けれども今はただ、
おばあさんといふ暴力に抑へられてゐます。
おばあさんの背景に抑へられてゐます。
たえずみなぎり出さうとするあなたの所有を、
あなたは今、私に與へやうとしてゐます。

私、何でも與へてもらひたい。
何故(なぜ)あなたは私に青い魚を與へないのでせう。
鰯はあぶらこいから毒、
鰶(こうしろ)は人燒く匂ひがするから毒、
鰹は人を醉はすから毒、
鰤は大きいから毒、
鮪の肉は赤いから毒、
蟹の形は奇怪だから毒、
背のあをい魚はみんな毒。
と云つて鯛や、魴鮄(はうばう)や、絲撚鯛(いとより)や、蒲鉾ばかり食てゐると、

無邪氣になりすぎます。
果實(くだもの)もまた毒だといふ――生(なま)だから。
私はあの琥珀のやうな杏や枇杷、
紫水晶のやうな葡萄、
珊瑚のやうなゆすらうめ、
暖かさうな色の蜜柑、
山法師のやうな柿、
紅の雫したゝる西瓜、
涼しさうな[illegible]、
私は見たゞけでも好もしいから、
なほその味ひは感じたい。
毒と毒でないものが、
何うしてあなた方に分るでせう。
私には毒になるものもあるでせう。
毒が恐いなら私はこのまゝ引返してしまひます。
私は毒の渦巻の中へでも、
飛びこんで行かうと思つてゐるのに、

おばあさんのまちがつた躾(しつけ)、
あなたは何故まちがひを守るのでせう。
母よ、母よ、
あなたは、それでも時々おばあさんから離れて、
世間を見てゐる時があります。
煤(すゝ)と紅(べに)がらで塗つた細い格子の間から、
通りを見ると、
いつでも眼に入る向ふの鍛冶屋さん。

　男持つなら鍛冶屋さんを持ちやれ
　足で飯(まゝ)たく手でかねのばす。

トツチン、カツチン、トツチン、カツチン。
人通りの淋しい町に、
槌の音と、うたと、
單調な勞働のリズム。
弟子のふりあげる重い槌、

親方の打つ小さな合槌、
霰のやうな火花が飛ぶ、
鐵が柔くなつて、
のびる、まがる、きれる、
鐵と、火と、鞴を對手の鍛冶屋さん。
鍛冶屋さんのたのしみは、
年に一度の宇治の縣祭(あがたまつり)。
一郷擧つて一穂の燈火もつけない、
まつくらな夜のお祭、
鍛冶屋さんはまつくらなお祭を見て歸ると、
手を懷ろに、ぼんやりと、
何處かにまた珍らしい世界がありさうだと町を眺めてゐる。
翌日はもういつもの通りトツチン、カツチン。
鐵と、火と、鞴と、槌との外に、
世界がありさうな顏もしてゐない。
鍛冶屋さんの隣りは樫木屋さん。

五人の人たちが、
朝から晩まで手を休めずに、
天秤棒を削る、
車の梶棒を削る、
車の矢を削る、
鍬の柄を削る、
鋤の柄を削る、
鶴嘴の柄を削る、
默つて削る。
鍛冶屋さんのやうに唄もない、
ひゞきもない、
手を動かしてゐるだけで、
健康に日が暮れてゆく樫木屋さん。
一生を歩きづめに歩いてゐるやう、
歩く外には何も見ないで――。
鍛冶屋さんや樫木屋さんに並んで

酒屋、油屋、金物屋、
棕櫚の繩なふ家、
朝から淨瑠璃を教へる家、
渋紙を張る家、
米つく家、
物染る家、
家と家とは厚い壁に仕切られて
大きい住居に少い人。
女は奥に
男は外に、
起きたら「おはやう」
暮れたら「おしまひ」
挨拶とつきあひは世間の義理、
かげ口と、そねみは奥の室の仕事。
世間ばなしは
米の値段と、
質金の流行と、
官軍と賊軍と、
士族と平民と、
藝妓と官員と、
何事が起つても噂から噂へ。
町内のお祝ひと、
お悔みだけが事實。

牛がのそり、のそりと土車を曳いて行く。
土は赤土、
煉瓦工場へ運ぶのでせう。
土のかたまりが白い街道へ落る、
その上を土の車が曳いて行く。
袖手(ふところで)して歩いてゐる人は牛よりものろい。
物を考へたことのない、
間(ま)の延びた顔。
どんよりとした細い眼は何も視てゐない。
ぶらり、ぶらり、

用もなく生きてゐる人が多い。
たま〳〵目的がありさうなのは旅の道者(だうしや)
五人づれ、十人づれ、
菅笠に草鞋脚絆、
赤い毛布に青い毛布、
行く先はきまつて高野山、
鍛冶屋の多い街で
よく切れる刃物が買ひたい。
傳説の舊い都會で、
物云ふ蘇鐵を見たい。
まだ知らぬ世界へ足を向けて、
泥に、埃に汚れて、
苦勞らしく、勤めらしく旅する道者を、
知つてゐる世界より外へは、
出まい、出まいとしてゐる町の人たちが、ぼんやり眺めてゐます

夏になると、
古い破傘や古い釘を、
きれいな金魚と換へてゆく金魚賣。
水饅賣、かまぼこ賣、
市中で一等廣い大通りを、
五分も十分も人通りが絶えて、
乾いた路の白さ。
きら〳〵と眼がまふやうな日光。
長い長い夏がゆるんでも、
なか〳〵冬は來ない。
露が少いので秋が見えない。
木の葉はなか〳〵落ちない。
橙や蜜柑は黄いろくなりかけてまた休む。
はら〳〵と時雨がこぼれてきても、
去年の枝炭賣が顏を出しても、
寒さはゆつくり、ゆつくり、
遠い路から來るやうにして、
近よつてきます。

もう霰さへ降りさうな日の灯し頃、
軒さきをすれ〳〵に、
牡蠣賣(かきうり)が凍りさうな聲で、
寒さを呼んで行きます。

母よ、母よ。
あなたが外(そと)を眺めてゐる時にも、
あなたが家(うち)で自分を見てゐる間にも、
時候の移り變りはゆつくりと運んでゆきました。
いつ花が咲くやらと思つてゐても、
いつのまにやら、
花は咲いてしまひました。
緩漫(ゆつくり)してゐるやうにみえても、
時は一刻一刻すゝんでゆきました。

母よ、母よ。
私は時の一刻一刻毎に、
外に出る力が滿ちてきます。
私はもう何うしても睡つてゐられない。
私はすぐにも出て行きたいやうです。

母よ、
あなたも然う感じますか。
それで、そんなに氣忙しく用意をするのですか。
私の身體(からだ)に着るもの、
身體にまくもの、かぶるもの、
そんなものゝ用意よりは、
私にもつと廣い場所を用意して下さい。
私はこんな暗い、そして狭い家にはゐません。
私は地の涯より地の涯まで歩きます。
私の手は空にまでとゞきます。
私の聲は海の聲よりも潤いと思ひます。
私は此のまゝでよいのです。
このまゝの私を、
人間の中へ手放して下さい。

私はあらゆる人間の生きてゆくすがたを見たい。
何んな人にも、こんな人にも訝つてみたい。

母よ、母よ、
心配はいりません。
私も正しい人間の形をしてゐるやうですから——。
あなたの手から、
誰の手になりと渡して下さい。
私はあなたの手から、
あらゆる人の手に渡るでせう。
誰の手に渡つても
「しつかり持つてゆけよ」と、
もらつたか、あづかつたかしてゐる、
私の魂を、
生命の魂を、
大切にしてゆくだけです。

母よ。
私といふものが人間の世界に出たら、
世界はどれだけふさがるでせう。
無かつたものが現れるのです。
それだけふさがるのです、
用意をして下さい。

母よ。
今、私はあるだけの呼吸をして、
あるだけの力で
私の世界が移つてゆきます。
動いてゆきます。
母よ、母よ。
悩みたまふな。
魂は立派に二つに別れてゐます。

母よ、母よ。
苦みたまふな。
身體は安らかに二つに別れてゆきます。

傍らの人たちよ。
心をしづめて、
燈火を新しくなさい。
室をひろくなさい。
きれいな水をあたゝめなさい。
空には無數の星、
皆地に向つて輝いてゐます。

人の生れる汐時を知つて、
片襷で駈けつけたお産婆さん。
暖かさうな大きいお産婆さんの手に、
私のからだは輕すぎるやうです。
けれどもあなたは、
大磐石の落ちてくるのを待受けるやうに、
力んでゐます。
私はあなたを信じます。

私は何も彼も分つてゐるのです。
母にも、
父にも、
まはりの人たちにも、
世間の人たちにも、
私の言ひたいことを言ひ、
私のしたい仕事をしてみせませう。
私はこれからすぐにも初めやうと思ひます。

＊

私は生れた！
お産婆さんの手に抱きあげられた時。
生れるまで思つてゐたことをすつかり忘れて、
私はたゞ一聲高く産聲を擧げた。


T. 15
ZEPY
Moorehead & Jardine Co.

時論

法學博士 吉野作造

改良か破壞か

今でも葬式は大抵寺の坊主に頼む。結婚は三々九度の手數を面倒がつて日比谷大神宮などでやるのが近頃の流行のやうだ。人生の大事を嚴肅な儀式で始末するのは適當の事であるが、唯此嚴肅といふ意味が手續きを面倒臭くする事によつてのみ完了せらるゝと云ふ風になつては困る。式を司る人には成る程偉い人もあらう。けれども近頃葬式や結婚式に列席して見ると、商賣丈けに面倒な手續きを勿體振つて取捗んで行く態度には感心するが、然し彼等は果して我々の所謂人生の大事を取扱つて呉れる丈けの立派な人格を備へて居るや否やを顧る時に、甚だ馬鹿馬鹿しく感ぜざるを得ない。神佛の祭壇の前では如何にも勿體振つて居るが、一度び衣冠僧服を脫けば何をやつて居るか分らない。斯ういふ連中に人生の大事を托していゝものか何うか。とは云ふものゝ、世界普通の慣習から云へば、坊主に讀經して貰はねば死者の始末が濟かないやうな譯になつて居るし、神前に神主の取持ちが無ければ本當の夫婦にはなれないやうな事になつて居るから、馬鹿馬鹿しいと知りつゝ、誰しも坊主と神主の厄介になる。習慣だから厄介になるが、心から我々の大事を是等の人に頼むといふ考は無い。斯くして嚴肅たるべき人生の大事は、甚だ不眞面目に取扱はれて行く。誰に罪があると云ふ譯ではないが、結構の狀態とは云へない。

之と同じやうな事は今日の政界についても云へる。今日の政治組織では代議士を選んで國政の監督に方らしむる事になつて居る。而して今の代議士は眞に國利民福の擁護者ではなくして、衆議院の門を潜つて迷兒にならずに自分の下宿に着き得るといふ程度の一通りの道案内を知つて居るといふ丈けで、其外に何等積極的の經綸を有たないのが多い。考へて見ればこんな連中に一國の運命を托するのは、馬鹿馬鹿しいと云ふよりも、寧ろ危險千萬の話であるが、それでも從來のしきたりだからと云ふので、國民はやはり總選擧などにはかなり熱狂する。熱狂するか

らとて之を眞面目に考へて居ないのは、生臭さ坊主と知りつゝ大事な親の葬ひを坊主に頼むやうなものである。斯う云つた例は數へ立てれば外に幾らもある。要するに今日は社會のしきたりが其本來の意義を離れて一片の形式となつた時代である。而して多數の國民が其無意義なるに氣付いて、之を馬鹿馬鹿しく感じ、共に眞面目な問題を不眞面目に取扱ふやうになつて居る時代である。之れ丈けで進んでも、社會の蒙る見えざる禍の頗る大なるものあるが、更に民衆の不信反感の念がだん／＼昂じて來ると、世間は之より物騷になる。蓋し有爲の國民はかゝる弛れ切つた狀態に何時までも甘んずる事が出來ないからである。斯く民心の不信反感が昂ずると、一轉して改善の機運が熟し、淸新の氣を振ひ興して、眞面目な問題は眞面目相當に取扱ひ、人生の大事は大事として相當有意義なものたらしめようといふ考になる。其結果遂に局面の轉換、面目の一新が起るのであるが、唯之れが何ういふ風にして表はれるかと、愼重に觀察すべき大事な問題である。

今まで此種の問題が解決された外國の例を見ると、一つは墮落した階級の中から一人の偉人が起つて傳來のしきたりに魂を吹き込んで、改善の實を擧げたのがある。政界に於ける其最も適當な例を擧げるなら、十九世紀當初の英吉利のピットが之れであらう。民衆の信望を失つた政治家の中から彼が如き淸廉高潔の士が出て内から改善の實を擧げた。彼が淸廉の氣分を作興した事によつて、爾後の英國の政界にはグラッドストンのやうな不世出な英雄をも生んだのである。かゝる進化は何うしても内部から生命の芽が吹き出るのでなければ出來ない。若し内部から斯ういふ新芽が生え出て來るのでないと、何うしても第二の方法として局面轉換が外部の力によつて強制されなければならない。政界の腐敗ます／＼甚だしく、遂に一人の起つて内部から之が廓淸を圖るものがないと、遂に外部の力が働いて舊い一切を掃蕩する順序になる。露西亞の革命の如きは現に我々の眼の前に展開された好適例であらう。前の手段で來るか後の手段で來るか、何れにしても晩かれ早かれ革新の要求は實現される。而して單純の議論としては、甲の方法によるのが善いか乙の方法によるのが善いか、之れには大いに議論があらう。然し何方が善いと定つたからとて、世の中の事は其通りに行はれるものではない。舊弊を一掃する方が善いと云ふ議論が成立つても、實際の革新は進化的改善の途を取る事もあらうし、又急激な變化がいけないと云ふ事に議論が定つても、現に其地位に居る者の頑迷改むる所を知らざれば、遂に破壞的運動の跋扈を誘致しないとも限らない。故に利害得失の比較の外、一つの客觀的事實と

して日本のやうな國は何れの途を執るに近いかは、亦愼重に考究すべき問題だ。

此點は尙ほ之れからの發展を審に觀た上で答案を與へなければならないが、只疑のない點は漸進的の途を執るべく我々の先輩は餘りに頑迷であり、又急激な手段で最後の成功を收めるべく國民の精神的準備は餘りに低劣だと云ふ事である。今日の儘では何の途を執つても、我々の前途は多難だ。一方に於ては盛んに民衆を訓練し、他方に於ては嚴に上流階級の迷妄を醒し、何方の途を執つて局面を轉換しても、國家全體として大した不都合の無いやうにして置く事が、最も肝要な事と云はなければならない。

勞働運動の二傾向の分立

昨年の秋以來、勞働運動は勞働者階級の運動としての面目が段々はつきり固まりつゝあつたやうだ。我國の勞働運動は其歷史的起源から云へば、資本家の作つたものに初まると云つていゝ。少くとも所謂知識階級の非常な熱心の下に發達した事は爭ひ無い。友愛會が澁澤子爵、添田、桑田兩博士の庇護の下に發達した歷史は明かに之を證明する。之を以つて友愛會創立の歷史を不純なものと云ふのは酷に失する。是等の人々によつて點火せられたる勞働運動は漸々發達して、總ては資本家階級と提携すべからざる事に氣附き之と絕緣し、所謂知識階級の指導の下に着々發達するといふ事になつた。斯くして勞働者階級の見識は段々に高められ、遂に勞働運動は勞働階級獨自の運動として結局他の指導に依るべからざるものとする見識が彼等の間に起つて來た。中には知識階級を進んで排斥せんとするの態度に出でた者もある。然らざるも一々其指揮を仰がないといふ所に立場を定めた。斯ういふ形勢を馴致するについて、所謂社會主義者の勸說が與つて力ある事は云ふまでもない。ブールジョアジー階級は此形勢を觀て大いに憂ふべしとした。けれども他方には勞働運動の當然の進步として之を喜んだ者もある。勞働運動の主義について人々の觀る所の兩極端に分るる端緒は段々之れから開けて行く。斯くして去年の秋以來勞働運動は勞働者自身のみの運動たらざるべからずといふ見識で大いに猛進した。之が爲めに所謂知識階級なるものは、どん／＼篩ひ落されて行つた。然し結局に於いて勞働運動は完全に勞働者自身のみの運動になつたかと云へば、然うでない。單り勞働運動の黑幕に居る

知識階級が段々不純の異分子を淘汰して其範圍を縮少して行つたのである。それでも斯ういふ經路を取つて進んで行く結果、有難迷惑なディレッタントは勞働運動界から殆ど一掃された。或る意味に於いて之れ亦進歩の一兆候であるが、併し後に殘つた指導者連中は全然其立場を一にするものかと云へば、必ずしも然うでない。之には明白に二つの人生觀の對立があつた。二つの主義方策の對立があつた。今年の春位まで此兩派は共同の敵と鬪ふ爲めに提携して居つたが、一度び自家の天下になつて見ると、其根本的立場の相違が何うしても實際の運動の上に表はれざるを得ない。斯くして今日の勞働運動が當然至らねばならぬ處に昨今漸く進みつゝありと思はれる。即ち勞働運動を此上進めて行くに積極的な建設の綱領を主として進むか、或は差當り消極的な破壞手段で進むか。此二つの考の分立が昨今漸く表はれ初めたのである。近き將來に於いて此對立は必ずや何かの形で顯はれ、更に一段と勞働運動界を賑すに相違ない。此等の形勢より推して、予は我國の勞働運動は大體に於いて順當な發達を遂げつゝあると考へて居る。

陸軍下士制度改善の必要

、軍備縮少問題は世論未だ十分に其講究の必要に目醒めないやいだけれども、何れ早晩矢釜しい問題になるに相違ない。海軍の方面は近く外國から縮少協定の提議に接するだらうし、陸軍の方は自發的に制限すべしと云ふ論が國內から段々興つて來るに違ひない。さうなると縮少と伴つて內部の充實改善といふ問題も一層眞面目に考究されねばならぬ事になる。斯ういふ考から予輩は最近軍界の新人に向つていろ／＼改革の意見を徵して居る。其中有益なりと思はるゝものを時々本誌を借りて紹介しようと思ふ。

次ぎの一篇は十七年間隊付き士官として勤務せる某豫備將校の陸軍下士制度の現況に關する批判である。

論者は第一に良兵を得るには良士官よりも寧ろ良下士に俟たなければならないと云ふて、下士教育の必要を說いて居る。今日歩兵中隊には曹長を入れて下士十名を定員とするが、現在は七人平均になつて居り、其足らざる所に兵卒中の優秀者たる伍

長勤務、上等兵を以つて補つて居る。初めから下士の定員の充たされて居る聯隊は甚だ少いとの事である。

下士は二六時中兵卒と寢食を共にする者であるから、其一擧一動の兵卒に對する影響は深く且つ大なるものがある。從つて下士の良否は隊全體の成績の上に大いなる關係があるが、昨今の下士の狀態を見ると如何にも其實力が劣つて來た。無論なか〳〵優秀な者も無いではないが、全體として考へて見ると、三割以上の實力の遞減といふのが專門家の間の定論のやうだ。之は何ういふ處から來るのであらうか。

先づ下士採用の方法を見るに、年々入り來る義務兵より其志願者を選ぶ。之を選ぶのも次いで之を養成するのも共に中隊長の責任となつて居る。學課の一部を聯隊で纏めて敎へて居る所もあるが、全責任は中隊長に在ると云つてゐる。然るに下士を出願する者は兵卒の中成績の優良な者かと云ふと、さうではない。大抵中位の者である。上の部の志願者が無い爲めに中以下のものでも採用せなければならない場合もある。そして近年の傾向を觀ると、志願者は段々上の部の者が減じて、下の部の者が增加する傾向がある。此點が餘程考へものでないかと考へる。

日露戰爭當時には敎導團出身の下士が可也多かつた。士官學校を出た許りの將校が甘じて其敎へを受けた程技倆優秀の者が多かつた。敎導團を廢めてから下士志願者の程度が下つた。經過は如何にも漸進的であるが、今日に於いてはもはや如何とも致し方が無い。而かも上長官は中隊長を責めて云ふ、良下士を得るは頭等の責任である、手腕のある中隊長は必ずや良下士を作り得る筈であると。けれども優秀なる者は下士に志願して來ないのだから致し方が無い。近來は下士優遇の途も講ぜられ、成績によつては大尉級まで進めてやるといふ事になつたが、併し兵卒の間には、何を苦んで下士などになるものかといふ考が强いやうだ。一體優遇はしたと云つても大尉以上になれぬといふ制限は何の必要があるか。昔の制度にはそんな制限は無かつた。下士から陸軍大將になつた名將軍もある。それが大尉以上になれないと云ふ事になつては奮發心も起らない。從つて優秀な者の之に赴かないのも無理は無い。之は士官學校丈けの將校は大佐まで、大學校を出た者にして始めて將官になれるといふ內規(?)と共に、甚だ人間の志氣を阻喪せしめる制度だ。それでも獨逸のやうに下士は下士として相當滿足の生活を送り得るやうに、待遇其他が完全して居るならいゝ。日本の今の制度の儘では少しく人間らしい生活をしたいと考へて居る程の者は、迚も馬鹿馬鹿しくて下士などになつて居れないのである。

斯く下士の力量が低下した結果として、今では青年將校が昔下士のやつた仕事を代つてやつて居る。之を觀て或る檢閲官が今の士官は士官振らなくなつたと云つて喜んださうだが、豈圖らんや、之れ下士の能力低下の結果である。士官には士官としての爲すべき多くの仕事がある。之に下士の仕事を爲せるのでは不經濟の話だ。そこで今後軍隊の精鋭を冀ふなら、殊に或は之を縮少し、或は義務年限を短縮しようと云ふなら、何うしても下士制度に大改善を加へて軍隊の內容を能くしなければならない。下士の數は將校に比し三倍の多數である。之が選擇と教養とを圖るは何よりの急務であるまいか。昔は教導團といふ下士養成の學校があつたが、寺內陸軍大臣の時に之を廢した。經費の都合といふ事になつて居る。無論教導團丈けでは全國への下士を供給する事は出來なかつた。けれども之を廢めてから後の結果は覿面である。そこで昨今隊付き士官の輿論は、各師管毎に下士學校を置けとか、又は旅團か聯隊に簡單な下士養成機關を設備せよとか云ふ。少くとも師團増設よりも下士教育機關を作る方が焦眉の急だと云ふ事に議論は一定して居る。

之を要するに聯隊に於ける良下士は屢々替る聯隊長よりも兵卒に向つて偉大なる感化力を有する者である。此處に優良なる人才を配置する事が軍隊の能率を發揮するために最も必要である。其爲めには彼等の生活を保障し、安心して其職務に獻身し得る爲めに、もつと待遇法を改善しなければいけない。更に此處に人才を集める爲には進級制限を撤廢し、前途に希望を有たしめなければいけない。下士なる名稱も適當であるか何うか考へて見る必要はあらう。更に下士養成の學校を設立して、是れ等の品性と技倆とを磨く爲めに餘裕ある機會を作つてやる事が必要と思ふ。それ丈けの手段を講ずれば、初めて兵役年限の短縮問題も軍備制限の問題も具體的に考究する基礎が出來る。今の儘では二年が三年やつても兵の訓練が出來上らない。二師團が三師團に成つても能率の發揮に遺憾がある。先決問題は兵の素質を優良ならしむるに在り、此目的を達する爲めに第一の手段として下士制度の改善の如く急要なるものはない。

論者の意見は之に盡きる。予輩は門外漢だから其當否について判斷する事は出來ないが、只之によつて今日の軍隊に存する一つの大なる缺陷を暗示せられたやうな氣がする。細目の點は何うでもいゝ、其大眼目について國民の輿論の此方面に於ける發動が願はしい。



愚弄

正宗白鳥

栗山は平生はハッキリした印象が腦裡に留つてゐない自分の顏を、今日は床屋の大きな鏡でしげ〳〵見入つた。

成程よく肥つてゐる。鼻はさう低い方ではないが、顎が短かいので男性的威力を缺いでゐる。目は尋常だが、眉尻は下つてゐて眉間が窄過ぎてゐる。「お前のはぺらぼう眉だから、眉毛の下を剃上げるやうにしなければならん」と、幼い頃に母親の云つてゐたことが思出される。……人に馬鹿にされさうな顏、怒つても怒りを表に現はし得ない顏、彼れは鏡に映る自分の顏を見れば見るほど、こんな顏を持つてゐることが、人間の幸福であらうとは感ぜられなかつた。

「女房に滿足な衣服の一枚も買つて着せないで、紳士面をしてゐるんだから可笑しい」などと、妻のつや子に罵吐かれることもたび〳〵あるが、この顏が紳士面なのかと、彼れは情無く感じた。

先つきも勤め先から歸り途に、電車で醉つ拂つた二人の勞働者と差向ひになつたのであつたが、その一人が、突如として資本家攻撃をはじめだした。「おれつちが働いて

やらなけりや、おめへ達がいくら威張つてゐたつて、日本國は立ち行かねえんだぞ」と、車中の客を睨め廻しなどしてゐた。栗山はニヤ〳〵笑ひながら聞いてゐたが、すると、醉漢の目は何時の間にか彼れの方へのみ据ゑられだした。

「何でい。シヤツポを被つてステツキを突いて、いやに懐中を膨ませやがつて。……おつかあにいゝ衣服を着せて、一緒に活動でも芝居でも見に行つて、それで世の中はお目度たいで、ノンベンタラリと暮らしてるんだらう。見ろやい。おれつちが朝から晩まで力つかぎり働いてやるお蔭で、おめへ達は月給だか賞與だかタツプリ貰つていゝ氣になつてゐられるんぢやねえか」

醉漢はそんなことを云ひながら、腰を浮かせて泳ぐやうな手付をして、栗山の鼻つ先へ酒臭い息を吹付けた。栗山は目を伏せて口を噤んでゐた。

「文句があるんなら云つて見ろよ。どいつもこいつも紳士面をして收まりかへつてるから笑はせらあ」

誰れも取合ふ者はなかつた。栗山は自分一人が矢面に立つてゐるのが堪へられなくなつて、二つ手前の停留場で電車を下りたのであつた。

おれが紳士面をしてゐる資本家であると思はれてゐるのも可笑しいが、おれの人相に無智の醉つ拂ひにも侮られるやうなところがあるのも確かだと、栗山は鏡を見詰めながら歎じてゐた。

しかし髮を刈つて髯を剃つて顏を洗ふと、頭が輕くなつて、一日の勤務の疲れが拭はれたやうに取られた。彼れは自分の家の近くまで歸つて來てゐながら、ふと思ひついて、少し廻り途して、知人の吉塚の家へ立寄ることにした。そこの息子の松造は、栗山が身元保證をして、馬喰町のある太物屋へ奉公してゐたのであつたが、この頃主人の機嫌を害ねて解雇されてゐた。どういふ事情でしくじつたのかと、その詳しい譯を栗山は知りたくつて、今日訪問する氣になつ

たのであつたが、その用事以外に、むしろその用事にかこつけて彼れの足を吉塚の家へ向けさせるものがあつた。

「姉さん御覧よ。そら命中したらう。だから人を馬鹿にするものぢやないよ。……姉さんの目にだつて、狙つたら乾度中てゝ見せら」

「お止しよ、危いぢやないの。……あなたは向う見ずだから、そんな者をいぢつてちやいけない。今に人に怪我をさせて、取返しのつかないことが出來るかも知れないわ」

「世の中が物騒だから、我々は銘々に護身用の武器を持つてゐなきやいけないよ。僕はこの頃非常に感じてるんだ」

「何だね、そんな玩具見たいなものが。そんな弓なんかゞ護身用にも何にもなるものかね」

「だつて、姉さんは怖がつてる癖に。……どんな武器だつて、持ち手の腕前によりけりさ。こんな玩具みたいな弓だつて、腕次第で人間の一人や二人は殺すことが出來るんだからね。……僕が羽目板や庭の木を的つて稽古してゐると、姉さんは思つてるだらうが、さうぢやないよ。高い聲ぢや云はれないが、僕は人間の咽首を的つて矢を向けてるつもりなんだからね。意氣込みが違ふさ。あの櫟樹の瘤のところなんぞは、一心で狙つてると、ある人の咽佛そつくりに見えるから妙だ」

「松ちやんは戯談にも、なぜそんな恐ろしいことを云ふの。今のうちに庭のお掃除をして水でも撒いてお置きよ。」

栗山は格子戸の外に立つて、姉弟のこんな話を耳に入れてゐた。そして、両親のゐないらしいのを却つて喜んで入つて行つた。彼れを見た松造は極りの悪さうな顔をした。結婚後一年ばかりして不縁になつて、二三ケ月前から此家へ戻つて來てゐる姉のおきくも、栗山の顔を見ると、極りの悪さうな顔をした。

「原町にお祝ひがあつて、父も母も一緒にまゐりました。二人で一緒に出掛けることは滅多に御座いませんのですけど」

とおきくは挨拶のかはりに云つて、座を外した。

栗山は紅い葉の茂つてゐる楓や、散りかゝつてゐる躑躅で彩取られてゐる小庭を前に、緣側近く坐つて、松造を相手にして何かと話を進めた。はじめは極りを惡がつてゐた松造も、次第に馴々しい口を利きだした。

「親父橋の側にゐた妾が店へ入り込んで來てからいけないんです。半年くらゐは猫をかぶつて大人しくしてゐましたが、この頃は亂暴になつて仕末が惡いんです。ヒステリーが酷いんですね。口ばかりならまだ我慢してゐられますが、この頃は腕力を揮ひますよ。先日私を打ちかけたから、私はあの女の手を掴んで捻上げてやりました。主人になら止むを得ませんが、女なんぞに毆られちや男として一生の恥ですからね。主人は女にまかれてゐるから氣がつかないのか知れませんが、あの女はいろんなタチの惡いことをしちや金を溜めてゐるんです。だから、店の者は不味い物を食はせられてコキ使はれて儲けた金を、あんな女に捲上げられるんぢや働き甲斐がないと、みんな蔭ぢや云つてゐますよ。以前は店の氣風が堅かつたさうですが、この頃は全く駄目です」

主人が朝寢をしたり、妾に誘はれて芝居見物に行つたり、湯治に行つたりすることなどを數へ上げて、松造が大人びた義憤を洩らすのを、栗山は笑ひ〳〵聞いてゐたが、

「しかし、店の氣風が堅くつても軟くつても、そんなことは關はないぢやないか。君は商賣上の知識をあの店で取つて來さへすればいゝんだから」

「さうは行きません。働いても認めてくれんやうな家ぢや働き甲斐がないですからね。それに私はどんな學問でもいゝ、專門の學校へ入つて見たくなりました。詰らない人間に差圖されて、アクセク働くのはいやになりましたからね」

「それぢや、今まで君があの店で覺えたことが無駄になるぢやないか。どんな學問をしたつて、若いうちは人にこき使

はれるものだよ」

栗山は自分の身を顧みて、感慨を籠めてさう云つた。ふと楓樹の幹にある瘤が目についたので、あれが松造の謂ふ人間の喉首かと可笑しく思つてゐたが、そこへ、おきくが茶を運んで來たので、彼れの心は動揺した。おきくは髪を直して顔をつくろつてゐた。

「お家も御賑かになりましたね」栗山は笑顔で云つて「まあ、お話なさい」と、おきくを引留めた。

「毎日今時分お歸りなさるんで御座いますか」とか「お忙しいんで御座いませう」とか、おきくはその場塞ぎの口を利いてゐたが、次第に打解けた態度を見せて、

「私、松造にさう申してゐますのですが、働きが激しくつても、ちつとは居づらい譯があつても、自分で働いて毎日の御飯を頂いてるのが、人間は何よりも結構なことなんぢや御座いますまいか」と、さう思込んでゐるやうに云つた。

「さうですね。松ちやんはもう二三年辛抱してゐればよかつたんですね」と、栗山は相槌を打つた。

「だつて先方で出て行けつて云ふんだから仕方がないさ。謝るべき理由がないのに、頭を下げて謝るのはいやだからね」と、松造は姉に向つてツケ〳〵と云つた。

おきくはその相手にはならないで、

「私にでも勤まるやうな職業があつたら、私どんなことでもして見ようと思つてるのですけど、御座いませんでせうか。學問でも藝事でも、何事でもよろしいから、それで口過ぎの出來るやうなことをみつしり覺込んで置かなかつたのが、一生のあやまりだつたと思はれてなりませんわ」

「そんな老人染みたことを云はないでも、あなたの一生はこれからぢやありませんか。今からでも習はうと思へば何で

も習はれますよ。……しかし、女の腕ぢや尚更だらうが、男だつて、無財産の者が自分の腕一つで生活費を稼出すのは容易ぢやありませんね。僕のやう頑丈な人間でも、面白くもない仕事を一日勤めて來ると隨分疲れますよ。せめて一月か二月、何もしないでノラリクラリ遊んでゐられたらいゝと始終思つてゐますね。さう思つても、無財産な上に、僕には先きにいゝ職業が見つかりさうでないから、自分の方から進んで辭職する氣にはなれないんでね。先方から免職させてくれゝばいゝ。さうなれば自然に何もしないで遊んでゐられるんだがと、この頃は心からさう思ふことがありますよ」

「あなたがそんなことをお考へになるんですかね。栗山さんは一つ所によく辛抱してゐらつしやるから感心だつて、父がよくお噂してゐますのですよ」

「私もさうでしたね。あんな店は自分で止したいと思つても、お父さんが許してくれないから、いつそ店の方から追出してくれゝばいゝと思つてゐました。だから喜んで追出されて來たのです」

「お調子に乘つていゝ加減なことを云ふものぢやないよ。先つきもお店の方をさんざん怨んでたくせに」

「そりや、出たのは喜んでゐたつても、僕にケチをつけた彼家の奴を憎んでるのも本當さ。何時か仕返へしをしてやらうと思つてるさ。……姉さんだつてさうだらう」

おきくは答へないで顔を曇らせた。

「さうだらうね。止したいと思つてゐても、先方から止されちやいやなものだらうね」と、栗山は同感したやうに云つて、「君も今度はもつといゝ店へ入つて一心に働いて大に腕を見せてやるさ。それが何よりもいゝ復讐になるだらう」

「そんな復讐はまどろかしいですね」

「だつてあなたの復讐はもつと幼稚ぢやないの？」

おきくは栗山の方へ目を轉じて、松造が手製の矢で樹木を憎い奴に見立てゝ射てゐることを眞面目に話した。

「そんな復讐で胸が晴れゝば罪がなくていゝさ。こいつ忌々しいと思つても、直接に人間に向つて暴力は揮へないからね」栗山は戸外で立聞きしたことを思ひ出しながら、「君は弓が上手なのかい。一つやつて見せたまへ」

「まだ駄目です、本當に稽古したことはないのですから」

「さう尻込みしないでやつて見せたまへ。遊び事ぢやない。生きた人間の喉を狙つてるのだと思つたら意氣込みが違ふだらう」

栗山は立聞きした松造の言葉を眞似て、ひとりで可笑がりながら煽てたが、すると松造はふと煽てに乘つて、次の室へ拋出してあつた古い半弓を持つて來て、手製の矢をつがへて、緊張した顏して腕に力を籠めて、楓樹の瘤に向つて尖つた目を見据ゑた。彼れが射放すまでに、おきくの目も不斷の柔和な色を失つて嶮しくなつた。

栗山も「あの瘤が人間の喉首か」と、はじめは可笑しく思つてゐるうちに、ふと、それが自分の知人――上役とか友とか、あるひは電車で會つた勞働者――の喉首のやうに思はれだした。

靜かな薄暮の空氣に枝を伸ばし葉を浮べてゐる楓樹の瘤が、血の氣の通へてゐる生物の喉佛のやうに、三人の目に映つてゐた。

やがて松造の手を放れた矢は、瘤の眞中に小氣味よく貫通つた。おきくはホツと輕く息を吐いた。栗山は血のこぼれてゐるやうな瘤を見ながらニヤリと笑つた。

「うまく中つても、矢の先きが弱いから、下へ落つちやつて滅多に突立たんのです」と松造は得意げに云つたが、少

しの間他の二人は何とも云はなかつた。

「石にも立つといふ譯だね」と、やがて栗山は云つて、「しかし、君の旦那殿もこのくらゐなところで止めとくんだね」と、戒めて、ふと松造の所行に恐怖を感じだした。

「庭の木に傷をつけたらお父さんに叱られますよ」と、おきくも非難した。

松造が矢を拔きに下りた間に、栗山はおきくに向つて、「この頃は滅多に外へお出掛けにならないんですか」と訊ねると、

「さうでも御座いませんわ。家にゐますと、兩親から何かにつけて煩いことを云はれて仕樣がありませんから、用事をこしらへては成べく外へ出るやうにしてゐますのです。でも、さうたび〳〵出掛ける譯にはまゐりませんわ。私にでも勤まる仕事があつて毎日出掛けたらいゝと思つてゐるのですけど駄目でせうか知ら」と、おきくは熱心に求めた。

「そのうち誰れかに問合せて、いゝ職業の口があつたらお知らせしませう」栗山は自信のない安受合ひをして、それよりも、おきくの離緣になつた詳しい譯を當人の口から話させようと、それに興味を寄せて、「あなたも隨分苦勞なすつたんでせう」などゝ、同情的な口吻で誘ひをかけたが、

「父でも母でも私のためにいろ〳〵心配してくれますけれど、私の氣持は私以外の誰れにも分りやしませんわ。だから、身內の者にでも何方にでも一切お話しないことに決めて居りますの。常識に富んだ世間馴れた方よりも、却つて松造の方が私の氣持をよく呑込でゐるやうに思はれますわ」とキツパリ云つて、おきくは相手の誘ひに乘らなかつた。

「それはさうかも知れませんね。どこの家庭だつて外部から想像してゐるやうなものぢやないでせうから」

「奧樣にも暫くお目に掛りませんが、どうしてゐらつしやいます?」

「僕の家庭は相變らずですね」栗山は氣無性な返事をした。自分を待つてゐる夕暮の自分の家庭の様がふと栗山の目に浮んだ。

「お變りのないのは何よりで御座いますのね」

「えゝ」

ここで二人の話はゆるんで、互ひに他所々々しくなつた。栗山は暇を告げようとしながら躊躇してゐたが、先つき庭へ下りたきり、何處へ行つたのか、暫く姿を見せなかつた松造は、荒々しい足取りして庭から入つて來て、

「姉さん、今鰻屋の角で西川さんに會つたよ。酒を飲んだやうな顔してたよ。向うぢや氣がつかなかつたやうだつたけど、いづれ僕の家へ來るんだらうと思つたから、僕の方で先まはりして顔を見せたのだ。さうすると、果して、これから君の家を訪問するといふから、今はお父さんもお母さんもゐないし、姉さんは風邪を引いて寢てゐると云つて、うまく追歸してやつたよ」と、手柄顔に云つた。

「西川さん、何か御用があつたのか知ら」

「それはどうだか知らんが、僕なんかゞ家へ歸つて來てる譯を聞きたがつてるんだと思ふといやだからね」

「西川さんて誰れです？」と栗山が訊ねると、

「畫家ですよ。始終寫生帖を持つて人の顔なんか書いてゐるんだけど、あんまり上手ぢやありませんね。あなたなんか直ぐに書かれますよ。文展へ裸體畫を出す筈で、女のいゝモデルを搜してるんですつて」

「聞いたことのない畫家だね。僕なんぞは繪に趣味がないから分らないが、どういふつもりで女が裸體のモデルになつたりするんだらう？」

「僅かなお金のために裸體になる女もあるんですかね。」

おきくは二三年前に西川に肖像を描かれかけたことなどを話してゐたが、最早話のお相手をしてゐるのも大儀さうにしてゐるのが、栗山の目にも留つたので、彼れは重つたい腰を持上げて暇を告げた。飽氣なかつたが、ちよつとした氣晴らしはしたつもりで、家へ歸つて行つた。

夕餐の仕度をしたちやぶ臺が茶の間に出し放しになつてゐて、つや子の姿は見えなかつた。待ちかねて風呂へでも行つたのであらうと思つて、栗山は空腹を煙草でまぎらせて待つてゐたが、餘程立つてから歸つて來たつや子の顔は、風呂で磨きをかけたゝめに美しくなつてゐながら、目付が不斷よりもいかつくなつてゐた。

「今日は頭がうるさくつて仕樣がなかつたから散髮をして、少し散歩もして來たから遲くなつた」と、言譯らしい口を利いたが、つや子は

「隱したつて駄目ですよ。餘計なところへ道寄りなんかして、あなたが何處へ寄つてどんな御喋舌りをしたか、私はちやんと知つてるんですからね」

「へえ。ぢや、風呂ででも吉塚の出戻りさんに會つたのかい」と云つて、栗山はドキマギして、免れがたいつや子の發言を待つてゐたが、

「私、今日は錢湯まで行つたのだから、おきくさんなんかに會ふ氣遣ひはないの」と云つて、つや子は案外にも靜かな口ぶりで、「あなたも詰らない懸り合ひをつけられますよ。早く行つて見てゐらつしやい。おきくさんは家を飛出したんですつて。あなたが何か云つて唆かしたんぢやないの」

「馬鹿云つちやいけない。……おれをかつぐんだらう。つい先つきまで家にゐて平氣な顔してたものが、急にゐなくな

るつてことがあるもんぢやない」

「無駄な口を利いてる暇に、御自分でよく見てゐらつしやい」

「行つて見るにしてもまあ飯でも濟ましてからのことさ。全體お前は誰れに聞いたのだい」

「松ちやんに會つたの。あの人はいろんなことを喋舌つてましたよ。あなたがうまいことを云つて吃かしたのを、松ちやんも勘付いてるらしいの。出戻りの弱味につけ込んで、あなたが氣をひくやうなことを云つたのに違ひないんですよ」

「全然そんなことを云つた覺えはないよ」

栗山は昂奮してさう云つて、おきくに向つて自分が話したことを一々記憶から思浮べるやうに努めた。すると、あるひは彼女の心に悪い感動を與へさうなことを知らず〳〵云つたのぢやないかと疑はれないでもなかつた。

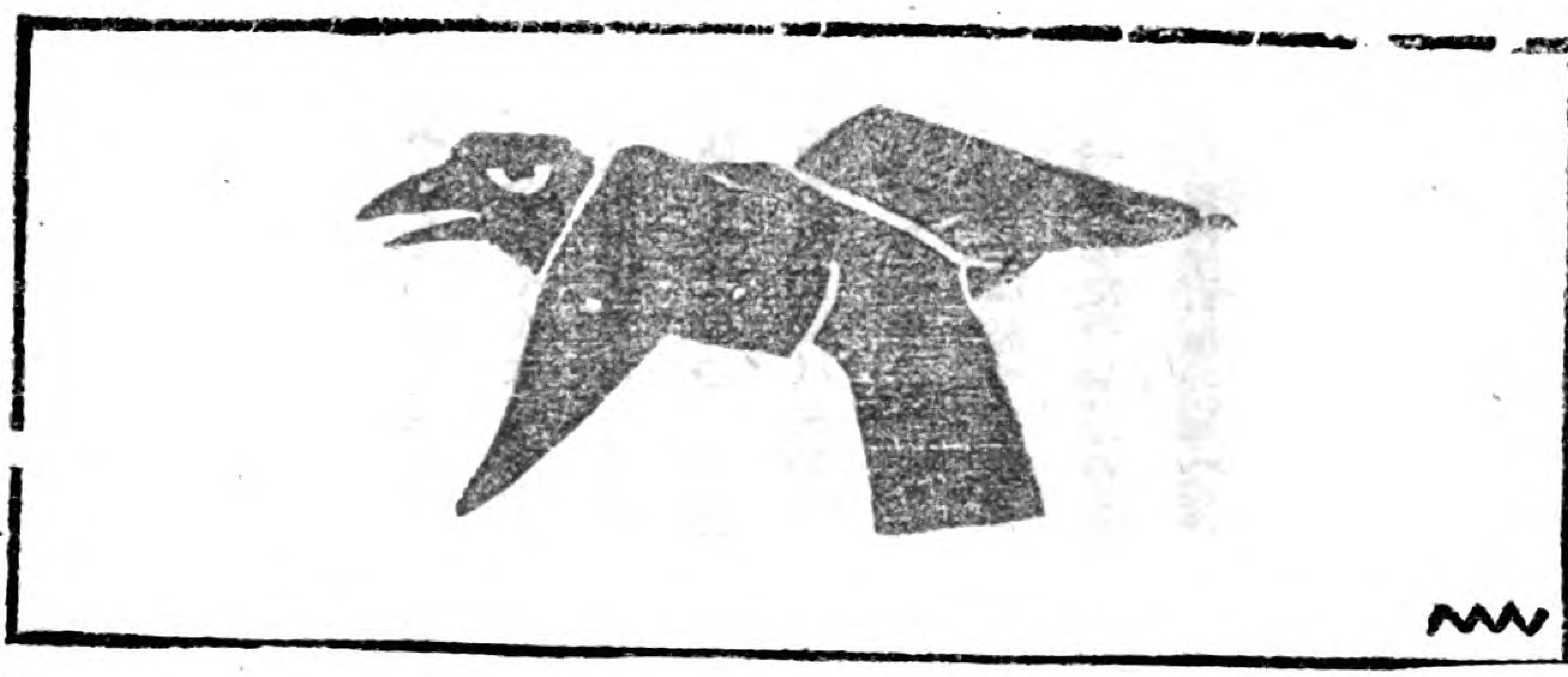
「あなたは以前からおきくさんを好いてたのね。いくら白ばくれてゐたつて、私にはあなたの心がちやんと讀めますよ」

「何を馬鹿な」

栗山は怒つて見せたが、不安心で堪らなくなつたので、食事をする前に、急いで樣子を見て來ることにした。

「あなたの智慧のえらさが分るかも知れないわ」と冷笑して云つたつや子の方を見返りもしないで出掛けた。

再び吉塚の家へ事をありげに慌たゞしく入つて行つた栗山は、湯上りの艶々した顔したおきくが玄關に現はれたのに驚いて、顔を紅らめて、暫く言葉が口から出なかつた。



崩れかゝる街

小川未明

都會の工場から工場を渡つて歩いた、この年若い技師が、はじめてN市へ入つて來た時に、彼は港のある街に着いた。そしてやがてまた其の驛を離れる夜汽車に乘つてゐました。

彼は、黒い洋服を着て、其の小さな體を窓の際に寄せて、ぼんやりと窓の外に閃めく幾つかの港に點る燈火を見詰めてゐました。海の面は、その遠くの方がよく分らない程に霞んでゐました。それは、彼の心持も肉體も既に幾時間の旅で疲れてぐつたりしてゐるのとふさはしい光景でもありました。

その港の町を彼は曾て知らなかつたのです。きつと其處には面白いものがあるにちがひない。華かな火の下に彩られる酒や、また好い聲で唄をうたふ女や、其の他珍らしいものや、奇怪なものや、曾て頭の中で想像することも出來なかつたやうな人間の罪惡といふやうなものも、其の折り重なつてゐる狹い巷の蔭に發見されるにちがひな

いと彼は、これを一つのはつきりとした的として考へるのでなしに、夢の裡で空想するやうな程度で思つてゐました。

そのうちにも汽車は刻々に喘いで海岸を傳つて、其の町を遠ざかつて行きました。次第に町の火は小さくなつて、しまひにはほゝづき程になつて、其れもいつしか乳色の靄の中に吸ひ込まれるやうに消えてしまつたのです。この時、彼は、やゝはつきりと海の面には淡い靄がかゝつてゐたのだといふことを意識しました。

汽車の中では、あちこちに人が體を曲げて居眠りをつゞけてゐました。波の音は、靄の底から囁くやうに湧き起つて、その人達の眠を助けてゐます。

この時、海の上がたゞ一處際立つて色づいたかと思ふと、忽ち其處が眞赤に破れて、團欒の窓が開いたやうに、月が音なく上るのでした。彼は、過去の記憶の中にも、このやうな氣味惡く感ずる月の色を思ひ出すことが出來ませんでした。それ程、色がどす黒く、鈍い銅の赤く焼け爛れたやうな感じを重々しく持たせるのでした。

月は、のろ〳〵と空に上つて行きましたけれど、別に其れを氣にとめて、汽車の窓から頭を出して眺めてゐるやうな人をも見なかつたのです。

技師は、これは何かの惡い前兆ではないか。これから自分がN市に入つてK工場に雇はれるのであるが、北陸でこの身に何か禍ひの起る兆でないか。そして、この月の光りが他の人々の眼の中にあまり止らずに、獨り自分に丈け氣味惡く思はれるのは、それがためではないかとも思つたのであります

其夜、遅く汽車はN市に入りました。その後、そんなに日數のたゝぬうちに技師の小さな體はK自働車會社の社長室に現はれたのです。

この時、この年若い男の姿をすつかり見ることが出來ました。彼は産れた時からの不具者であるか、それとも何處か

の工場で負傷をしたものか跛であつたのです。

社長といふのは、背の高い、色の白い、そして頭髪が薄く、鼻眼鏡をかけてゐました。應接室は、どちらかといへば質素で飾りといふものが少なかつた。廣くもなく落付いた室でありました。堅牢な入口の扉を閉めて、テーブルに對ひ合つて腰をかけた時、技師は何といふ靜かな場處であらうと思つた位でした。そして、彼は、どこか遠いさびしい曾て旅行をした村のことなどを其の刹那に思ひ浮べた程でありました。

其の室には、誰が描いたものか知らないが綿を摘んでゐる田舍女の油繪が額になつて壁にかゝつてゐました。その繪に技師が眼を向けた時は、全く田舍に來てゐるやうな心地がしてゐたのです。もし、時々工場に起る鐵槌の響きが彼の耳に聞えなかつたならば、彼は何うしても都會にゐるといふことを、感ずることは出來なかつたのです。

鼻の上で柔かな白い肉をつまんだやうに挾んだ金縁の鼻眼鏡をかけた社長は、太いパイプに煙草を詰めて其れにマッチで火をつけた。やがて強烈な香りは室の裡にいつぱいに漲つた。それを考へ顏をしながら小さな口に喰はへて、青い煙を出しながら社長はすぱ〳〵とつゞけさまに吸つてから、口を開いた。

「よく富豪の心理を捕へて、新式の型を構造してもらひたい」

極めて簡單に、社長は注意を與へたのであります。

技師は、獨りとなつた時に、これから自分の設計によつて製造される自動車について考へました。

「富豪の心理を捕へて」と、言つた社長の言葉は簡短ではあるが、よく急所を突いてゐました。畢竟其れがこれから考案される自動車にとつて第一の問題であつたからです。

技師は自分の宿に歸つてから室の裡に閉ぢ籠つて、自身が富豪になつた氣持でいろ〳〵に考へたのであります。

大きな商店の前に、また役所の前に、或は會社の門前に止つた時に、自分の乘つてゐる自動車が他の自動車に較べて見すぼらしくあつてはならない。堂々とした形を備へて、一際輝いて見えなければならない。ちやうど海上を航する軍艦のやうに、帆前や、汽船などが怖れ戰いて顏色を失ふやうなものでなくてはならない、富豪といふものは、それでなければ決して滿足するものでないからと彼は室内を歩きながら思ひました。

そして、其ればかりではいけない。ある威嚴を有することが必要だ。兎に角、其處此處を歩いてゐる群集とは階級が異なることだ。多額の税金を政府に收めてゐるのだ。政府は其の金で軍艦を造り、また師團を増すことが出來る。國防は大半自分等の階級が負擔をしてゐる。威張つて通つてもいゝ譯けだ。何も誰に對しても憚かる必要を感じない。特權階級の存在することゝ、其の無意義でないことを示すためには、無言の威嚴を有することがまた自動車の型に於ても必要だ。其ればかりではない。自分等は高價の通行税を收めてゐる。歩いてゐる人間の其れは幾百倍であるか知れない。國家は自分等の通行を保護する義務がある。また自分達は、行通規則に反かない限りは、縱横に自動車を乘り廻はす自由を有してゐる。眼前にうるさく、氣永に、且つ鈍感に歩いてゐる群集を脅かして、道を拂ふことは許されてゐる權内にあることだ。

技師は、かういふ風に考へて、室の裡を歩き廻はつてゐましたが、しまひには考へに疲れて、また跛の足をあまり運んだことに疲れて、どつかりと長椅子の上に體を投げかけました。そして眼を閉つて、ぢつとしてゐますと、空想するともなく、さま〴〵な異常な光景が眼前にちらついて見えるのでした。

街の中を大きな軍艦のやうな自動車が疾走します。人々は怖れ戰いて隱れ場や逃げ道を失つてまご〳〵してゐます。すると、自動車は、鯨が水を吹くやうな勢いで、音響を出します。忽ち旋風が起つて、人間共か木の葉の散るやうに空

間に舞ひ立つてしまふのです。

技師は、眼を開けてけら〳〵と聲を立て、自分の空想のあまりに突飛なのに笑ひこけました。しかし彼はこれに類したやうな紛雜をゴヤであつたか、またベツクリンであつたかに見たやうな氣がしたのです。

「まさか軍艦でもあるまい。タンク共の儀を運轉することも出來まい。しかし、とにかくそんなものだ」と、年若い技師は思ひました。

城廓のやうに聳え立つた、頭の廣がつた車臺と狼の吼えるやうな聲音を備へる自動車を技師は造りました。それはぴか〳〵と黑塗りが日に照されて顏の映るやうに光つたのです。

これを見た時、背の高い色白の鼻眼鏡をかけた社長は、なんといふ儼かめしく背の高い自動車であらうかとびつくりしました。そして、子供の時分によく夏の夜に燈火を目かけて林の中から飛び込んで來たかぶと蟲を連想しました。あの時、後年に自分が自動車工場の社長になつて、この蟲の翼のやうにぴか〳〵と光る車臺を造るなどとは考へなかつたことを思ひました。其れにしてもこの偉大な物體が街中を疾驅する姿を想像すると、きつと金持にはこの自動車が氣に入ると思つて、社長はうなづいてゐました。

其の日から後は、この廢物のやうな車が沙塵を揚げて街の中を疾走する姿が其處此處にだん〳〵と數多く見られるに至つたのです。公園の低い雜木林は風に吹かれて、ある日の午後の空に白い裏を返して戰いてゐました。其の時、この自動車の中には水色の輕快な服裝をした若い女が、シルクハツトを被つた鶴の頸のやうに長い頸の紳士と並び合つて腰をかけてゐました。廢物は曲り角に來ると一聲吼えて彼方に白い埃を立て行つてしまひました。

市街の中は、この自動車が出來たゝめに急に騷がしくなりました。空氣の汚れた狹い室の中で、終日青い顏をしてテ

ーブルに對つて事務に忙しい、安月給で縛られてゐる男などが時々びつくりして其の顔を擧げて眼を圓くして、

「あれは何だい。この頃は、膽を潰すやうな笛を自動車が鳴らすぢやないか」と、一日滅多に並んでゐても話をしたことのない同僚に顔を向けて言ふのでありました。

「ほんたうに、びつくりさせられるよ」と、相手の男も下を向いたまゝ意氣地なく言ひました。曾て、この男は、頭を高く上げてあたりを見廻はしながら道を歩くといふことはないのでした。退ける時間が來て解放されても、この男はやはり晝間役所で事務をとつてゐた時のやうに下を向いて道を歩いて家に歸つたのです。

かうして、自動車の狼の吼えるやうな警笛の音は、街上を歩いてゐる人間を蜘蛛の子を散らすやうに追ひ立てたばかりでなしに、町裏のある建物の一室に仕事をしてゐる人間まで、眼を圓くする程、びつくりさせたのであります。

自動車に乗つてゐる人間は、城郭のやうな儼かめしい車臺の上に身を置くことによつて、また狼の吼えるやうな警笛を鳴らすことによつて、特別に自分等の幸福が増大したとも、愉快になつたとも感じなかつたばかりでなく、こんなことは當然なことだといふ位にしか考へてゐなかつたから。

ある日、ある富豪の乗つてゐる自動車が街で五つばかりの子供を轢き殺した時、子供の親が其の富豪に面會して短刀を突付けて、

「汝の全財産を渡すか、其れとも汝の命を渡すか。金錢で換へ難い子供の生命を汝は奪つたのだから、何方を選ぶか」と、怒鳴つたことが、新聞の記事となつて、傳つた時に、彼等が等しくびつくりしたのは無理のないことです。

これまでにも、子供や、老人が自動車に轢かれたことはないではなかつたが、あの狼の吼えるやうな自動車が街の中を疾走するやうになつてから、自動車の頻々として人を轢くことが漸く皆んなの注意を惹くやうになり始めたさうで

す。

「自動車また子供を轢く」と、新聞は書き立てました。

晴れてはゐたが風のある黄昏に迫つた頃でした。空には鱗形の雲が東へ飛んでゐました。そして、日の光りは建物の上に、尖つた塔の上に何んとなく傷んでゐました。落付きのない日には、何んとなく人の心も激昂し易いものです。眼の中に入つた埃を氣にしながら人々は前屈みになつて路を歩いてゐました。其時、後からも、前からも狼の吼え聲を立て自動車が疾走して來ました。そして、歩いてゐる人間ばかりでなしに、街全體を埃の裡に渦卷いて去つて行くのでありました。

「俺達は、彼奴等に埃を吸はされなければならない理由があるのか？」と、叫んで、血走つた眼で、黒塗のぴか〳〵とした、儼かめしい自動車を頭髪を伸ばした男が見送つてゐたかと思ふと、彼は、忽ち懐中からピストルを取り出して、自動車を目がけて亂射しました。

其れから男は、四ツ角に走つて行つて、來る自動車、來る自動車を目がけてピストルを亂射したのです。

この騒ぎで一時、往來を通る自動車は止つてしまひました。其の男は早速捕まつて連れて行かれたが、後で、其の男は「自動車狂」といふ一種の文明が産んだ狂人であつたといふことが分りました。

しかしこのことがあつてから、自動車に乘つてゐる者は、何時、思はぬ處で狙撃されるかとびく〳〵しました。そして、乘物に乘るのにも命がけだといふことをつく〴〵と感じました。何も自動車に乘つて、狼の吼え聲を立てたからとて自分等の幸福をも、愉快をも増すものでなく、却つて禍ひを招くばかりだと知つた時に、氣の弱い金持や、また若い女などは、やはり馬車に乘つた方が安全だと思ふやうになりました。

「自動車が出來てから、世界の社會主義者が頓に增加す」と、ある日の新聞は報道をしてゐたのでありました。

この記事を見たり、また、富豪等が馬車を希望するといふ噂を聞いた時に、自動車工場の社長は眉を顰め、その上品な頭を傾けずにはゐられませんでした。そして、彼の技師を呼ばずにはゐられませんでした。

ある時、技師は跛を引きながら、いつかの如く、靜かな應接室に、社長とたゞ二人ぎりでテーブルを間にして對ひ合つてゐたのであります。壁には、誰が描いたか知らないが、綿を摘んでゐる女の油繪がこの前に見た時と同じやうに、同じ場所にかゝつてゐました。技師は、其の油繪の上にしばらく瞳を止めてゐましたが、鼻眼鏡をかけた社長が物を言ひはじめた時に、其の瞳を社長の色白の顏の上に落したのです。鼻の上の柔かな肉が眼鏡のばねで狹まれてゐるせいもあるが、今日は其處に餘程多くの小皺が寄つてゐるので、何か不快なことでもあつて、其れで自分は小言を聞くのでないかと、敏捷な小男の技師は心に思ひました。

社長は、どうもこの頃になつて、自動車の受けが惡い。一つは運轉手の未熟なために人を轢くのが、其の罪を自動車が負つてゐる。もう一つには、自動車の有用を知らずに、徒らに階級的の反感を以て目されてゐる不當なことなどを話つてから、

「この會社で造る自動車は、あまり形が威嚇的だといふ評判である。其れに、警笛の音が歩いてゐる人間を叱咤するやうに聞えるといふ話だ。私も壯儼には出來てゐるが、いくらか美的な點が缺けてはゐぬかと思つてゐたのだ」と、社長は言つて、例の太いパイプで煙草を吸ひながら話をつゞけました。

「今度は自動車を美術的に、音樂的に造つてもらひたい。美的といふことはごまかしになるもんだからね」と、社長は言ひました。

技師はやがて其處を辭して、自分の室に歸りました。いつかは、富豪の心理を捕へるために苦心をしたが、其れが無産者の反感を買ふことに氣が付かなかつた。今度は、民衆の感情を和らげるための美術化、音樂化か。成程いろ〳〵に變れば、變るものだ。しかし、其れによつて轢死者の數や、負傷者の數が決して減ずるとは考へられない。却つて、結果はよくないにきまつてゐる。其れも一つの實驗であるから、社長の言つたやうに、自動車の改造について考へて見ようと技師は、室の裡をあちこち歩きながら思ひました。

技師は安樂椅子の上に體を投げかけて、兩手を頭のうしろに組んでどんな形が皆んなに快感を與へる美術的かと思ひました。あまり華かであつてはいけない。また贅澤な裝飾をしてはいけない。最も瀟洒で、輕快な感じを與へるものでなければならない。

「瀟洒で輕快な感じを與へるものは、いつたい何か？」と、そんなやうなものをいろ〳〵今迄發明された機械についてまた生物について考へてゐますうちに、彼は、ヨットの型を思ひ浮べました。次で滑らかな流れを逆る鮎の姿をそれに連想して思ひ浮べました。

青い、青い海の上を赤く塗つたヨットが輕快に走る感じはどんなであらう。彼は、其れをしばらく夢想すると、自動車の型は其れに限ると膝を叩いて思つたのです。

「そんなら警笛の音は、どんな風に音樂的にするか？」と、技師は思ひました。

自動車が雜路の巷を疾走して人を轢き殺すといふ事實は、どんな風に形を改めても取消すことは出來ない。たゞごまかすのだ。彼はさう思ふと、いかに美的といふことが時に實相をごまかす怖しい麻睡藥であるかを思はずにはゐられなかつたのです。

彼は、ごまかすには、どうしても厭世的にならない程度の哀愁が其の音響の裡に含まれなければならぬと思ひました。しかも其れは最も自然に近い可憐な情を催させるものでなければならない。

「そんなものが果して、この世の中に存在するだらうか？」

彼は、蜩の鳴聲や、蟬の鳴聲や、また諸鳥の啼聲や、犬や、猫や、牛や、馬の啼聲などを考へましたが、つひにこれはと思ふ音色を思ひ浮べることが出來ませんでした。

「形は鮎がいゝ！　何か其れにふさはしい音色はないものだらうか？」

年若い、怜悧な小男の技師は思ひ惱んでゐますうちに、ふと頭の中に河鹿の鳴音を思ひ浮べたのです。

「これは妙だ！」と、彼は、思はず躍り上つて叫びました。

其れから日ならずして、街頭を赤黒く塗つた魚型の極めて瀟洒な、輕快な形をした自動車が河鹿の鳴くやうな音色を立て疾走したのであります。

其の自動車が人混みの裡を走つてゐるのは、ちやうど魚が黑い波をかけて行くやうに謙讓な趣きがありました。そして、其の河鹿の鳴くやうな音色は、もつと近づいて、其のさゝやかな音色がもし一つ一つ個性のある形となつて飛び出るものなら、其の頭を撫てやりたいやうにも一種の親しみが感じられたのであります。

群集の中には、あんなやさしい音色を出す自動車なら、轢れても傷が付かないだらう位に思つた者もある程でした。

しかし、かうした輕快な形となつてから、自動車の速力が自然と前の儼かめしいものよりは加はつたこと、そして、これがために却つて多くの人間が轢き殺されるであらうと知るものは、技師ばかりでした。

世間は、かうなつてから、あまり自動車に對して今迄のやうに、嫌惡する者がないのを見た時、技師は不思議なもの

だと頭を傾げたのです。

ある日、この瀟洒な姿をした赤黒い色の自動車が、四ツ角で老人を轢き殺しました。その時ははじめて、人々は、其の太い車の輪を見て、成程こんな怖しいものに轢かれたら、柔かな人間の體は二つに切斷されるにちがひないと眼の醒めたやうに、怪物の姿に見入つたのでした。

死骸は、直に片附けられて、血の流れた上へは石灰が振りかけられました。そして、次の瞬間には、人々は先刻其處にどんなことがあつたといふことも知らずに、其の上を押し合ひ、笑つたり、しやべつたりして歩いてゐました。

また、これと同じ型の自動車は、淡く靄の立ち籠めた夕空に、ぼんやり出た月の下を可憐な音色を立て、先刻あちらの四ツ角で自分と同じ型の自動車が人を殺したといふことを知らぬ顔に走つてゐました。

大人も、子供等も、其の自動車を見て、今迄のやうに憎惡を感じなかつたばかりでなく、しばらくなつかしいものでも見送るやうに佇んでゐる者もありました。

こゝに、街の往來に面して一軒のカッフエーがありました。ちやうど其時、其處で赤いネクタイをして鳥籠の撞木のやうに痩せた音樂家が二三人でテーブルに向つてビールを飲んでゐましたが、其の中の一番背の高い頭髪のちゞれたのがコップを下に置くと、

「勞働者を慰藉するために、自動車の笛の音を何んとか音樂的にする工夫はないものかと考へてゐるんだが、どんなものだらうか」と、他の者に向つて言ひました。

「さうだね、それよりか車の運轉でベトウベンでもショパンでも唄ふやうになつたら、どんなに素的だらうね」

彼等は、眞面目くさつてこんなやうな話をして、時の經つのを知らなかつた。

ある日、技師は長椅子に身を凭せて、窓の一處を見てぼんやりと考へてゐました。すると思ひ出すともなく、綿を摘んでゐる質朴な女の姿が眼の前にあり〳〵と浮んだのです。青々として遠くまで晴れ渡つた地平線には白い雲が翔つてゐました。そして、日の光りは廣い、廣い圃の上に漲ぎつてゐました。其れは社長の應接室の壁にかゝつてゐる油繪であつて、彼は、いま其の繪の印象をさながら見るが如くに思ひ出してゐるのでありました。

「カリホルニヤへ行けば、あんな女の姿が見られるのだ。もうこの國の仕事にも飽きてしまつた。失敗のないうちに出かけようか」と、技師は、氣樂な流浪者の旅の光景を夢想し一獨言を洩らしてゐたのであります。

幾許もなくして、無政府主義者が、爆彈をこの自動車工場に投げ付けた時は、天地も裂けるやうな音響と共に黄色な煙が上つて幾十臺の自動車が粉碎されたのでした。そして、この街の一角が崩れ落ちたかと人々を恐怖せしめた。其時は、あの跛の技師は其處を立つてしまつた後でありました。

――一九二一、五作――



芋掘藤五郎　その他

室生犀星

一、芋堀藤五郎

一

むかし芋掘藤五郎といふ百姓が、城外の小立野のあたりに住んでゐた。もとより家貧しかつたが正直一圖だつた。ある日のこと、いつものやうに田圃から泥芋を掘つてきて、この噴井戸で洗つてゐると、ふしぎに燦然とした金屬らしい光を水中に見いだした。堀抜きの清水をたたへた美しい小砂利のあひまに、ややうす濁りはしてゐたけれど、それは疑ひもない幾粒かの砂金の耀きであつた。うららかな朝日が水玉をつくつて投影した白砂の底が、寂然として音すらなかつた。藤五郎は、それを拾ひあげた。それからといふものは、もう芋堀りなぞしなくともいい身分になつたが、正直な藤五郎はその幾粒かの砂金を佛壇の奥深くしまひこんで、自分はやはり一生芋掘りをして暮らしてゐた。

併し藤五郎がその砂金をひらひあげてから、誰いふとなく、實際は砂金があつたのではなく、それは美しい比類のない良い清水と朝日との光のかげんで、赤貧な藤五郎の目が逆上せて、さういふ砂金になつて見へたのにちがひない。その證據にはやはり藤五郎はそのさきの日のやうに芋堀りをやつてゐるではないかと村人は嘲笑つてゐた。それゆゑ藤五郎はなほ佛壇の奥に收ひこんだ砂金を人人の前で見せようとしなかつた。かれは畑からかへると此の靜かな金屬の光をながめては、なほ身を粉にして朝はやくから働いてゐた。

史實は單にそれより外にはない。實際、さういふ芋掘藤五郎といふ百姓がゐたかどうかさへも確かではない。また小立野あたりで砂金が出よう筈もなく、出たとすれば、そのあとから發見されたにちがひないからである。ただ、今もこの美しい清水と白砂の底を見つめてゐると、さういふ昔の話が生きてきて、砂金の一粒や二粒くらゐは砂底に雜つてゐさうに思はれるではないか。

四五十人の遠足隊をひきいた小學校の先生が、かう言つて同じい生徒らのくろぐろとした頭が、そろつて此の柵(さく)をめぐつて掘拔きを取り卷いてゐるのを見渡した。

柵のそとには「金城靈澤」といふ淨札が立てられてあり、淨札はもう腐り込んで木苔が青々と蒸してゐた。

凉亭(ちん)風な作りの掘拔きの内部は、すつかり平石(ひらいし)で疊みこんで、おなじく古い小砂利を敷きつめた水底から、滾々として音もなく寂やかな清水が、底からむくれ上つてすこしばかりの波紋を水面にうかべるくらゐだつた。凉亭のそらは繪天井になつて、一頭の蛟龍が眞紅の舌端を吐きながら、その色彩が剝落されながらも今にも昇天するやうな勇ましい筆致で描かれてあつた。むかしからその掘拔きに龍が潛んでゐるといはれてゐるのも、みな繪天井が投影するために過ぎない。さう若い先生が言ひ添えた。さういへば天井一面の蛟龍を封じ込めたやうな金網張りが、年古く金糸が錆び込んで

ボロボロくずれさうに見えた。それが又古めかしいだけ深い由緒ある傳説を考へさせた。

生徒らは、靜まりきつて、この掘拔きの美しい清水がうららかに射し込んだ午前の縞模樣ある朝日に、ときには砂金のやうな光をたたへるのと、ぼんやりした遠足のつかれとを交る交るにかんじながら、しばらくは咳をも立てなかつた。なほよく見るなれば、この靈澤なる水底には、こまかい、ぼうふらのやうな一杯の水蟲が、蚊のやうに湧き立つては、水面を目がけて底の方から登つたり下りたりしてゐたいである。おそらく澄々とした春日(しゆんじつ)のあかりをして見てさへもこれらの微細な水むしはかれらの目にうつつて來なかつたであらう。

「それゆゑ……。」

先生は、やや高い謹嚴な聲をあげて、この清水のやうな美しい心をもたなければならないといふ意味を、その柵の古ぼけた材木を杖のさきで叩きながら述(い)つて聞かせた。

生徒らは目の前の美しい爽々した光景と、先生の説明と、それにれいのぼんやりした遠足の疲勞とがぴつたりしてゐたので、みんなは感動してきいてゐた。なかには、この清水は飲めるかといふものさへゐたが、先生は、すぐ飲めると即座にこたへた。いたづらな生徒の一人が隙をうかがつて投げた小石が、底に沈んでゆくと例の微細な水むしは一切に姿をかくした。うつすりと、曇り日のやうな濁りがしたけれど、もう退屈さうに柵をはなれた先生の目にははいらなかつた。

赤松と山苔と石橋と、奇石を雜へた游々たる曲水との兼六公園には、この小學校の生徒らの一隊のほかは、ほとんど人影らしいものがなかつた。樹の間がくれの茶店の障子がしいんとした若葉の間に白々しくながめられるばかりだつた。

「先生、あれは何です。」

樹の間に白い花を着けたのを珍らしさうに問ひかけた。

「あれはコブシといふ花だ。山などによくある花だ。」

その花は、いたるところの楓の樹などにまぢつて、白く優しげに既う散りかけてゐた。

二

「なぜかういふ高臺の公園に自由に水が引けたかと云ふことに面白い話がある。」

先生は、芝草の上に腰をおろして、輪になつた生徒らをやや高みあるところからかへり見た。

むかし百萬石のお庭園であつたころ、此處が城下の高臺であつたために、自由に水を引くことができない。水がないとすると、お庭園にはならない。――そこにある霞が池も、それから下の翠り瀧も、まだなかつたころである。

前田の殿様は、城下の石工や庭作り、それから城内を通じて誰か水を引くものがないかといふ達しを出したけれど、町の眞川で、ひどい高臺になつてゐるお庭へは、大きな池や自由な瀑布などを引くことは思ひもよらなかつた。それゆゑ、誰一人としてその役目を負ふものがなかつた。ここに石工頭の何とかいふ男が（先生はその名前を忘れたがと、ちよいと鼻白んだ。）その水を引くことを申出た。たびたび申出たものは、水源地とお庭との距離を計るだけで、もううんざりして止めた。

そのころ前田の殿様は、庭に水を引くことで、まるで一日そればかりを言ひつづけて、庭師を困らしてゐた。太平つづきの百萬石は徒らな贅をつくすばかりでなく、あらゆる道樂の最後のものであるといはれた庭いぢりが始まつたの

だつた。そのため、庭師は八方から呼びあつめられたが、水の一件で、すぐお叱りを受けた。

その困難な水を引くことを引受けた石工頭は、まづ此の高臺つゞきの小立野から、ずつと二里さきの犀川の辰巳から水を引く用意を仕出した。それは、低い犀川から高みへ引くのだから、誰あつて此の工事の容想的であることを罵らないものがなかつた。が、かれは幾度もお庭職から注意と咎めとを受けたに關はらず最後まで聞かなかつた。

「それがお前の首にかかはつてゐることを知つてゐるか。」

さうお庭職が言ひ出した。石工頭は、そのとき微笑つて、

「それは承知の上のことです。いまにお城に水の音がきこえるから。」

やはり聞かなかつた。

小立野臺の道路がずつと辰巳の方に向つて毎日數百の人夫が工事に着きはじめた。石工頭は、その間にまだつてさいはいを振つてゐたが、人夫までが、その仕事の不可能なことを嗤つてゐた。

が辰巳近くすつかり工事が終へると、ふしぎに埋めた土管のなかから水聲がした。それは恰度いまのアプト式の軌道のやうに、高處から低みへ引き、その餘つた水勢を更らに高みへ盛り返すやうな遣り方であつたのである、

お庭園のうちへは、戸室石や手取川の上流の奇石などが搬ばれ、一つの瀧と、二つの池と、さうして際涯をめぐらした曲水のながれまでが出來たのである。その水音が城内へきこえたころに、もう、城内では或るふしぎな評定が起つてゐた。

それは、さきに尾山城を築いた設計者が、たんに石垣の棄石一つを除けば、立ちどころにお濠の石垣がくづれるといふ風評のために、人知れずこれを入牢させてしまつた。さうして何時の間にか打首になつた。それと同じいやうに石工頭

が殆ど工事を終へたところに、ちよいと呼出されると、もう牢舍住みになつたのである。

小心で代々卑劣な前田は、高臺へ水を引いたくらゐの智謀のあるものは、この城下に置くことが危險であるといふ單なる理由から入牢させたのである。

石工頭は、いつ取調べられるといふこともなく、毎日牢舍のなかにゐた。が、ふしぎなことは、かれは牢舍のなかにゐても、自分が何のために押込められてゐるかと云ふことを一切口へ出さなかつた。かれの行衞を問ひ合しても誰一人として石工仲間のものは知らなかつたのである。あるものは城内から宿下りがないともいひ、あるものは、そのころ噂の高い天狗がついたともいひ、あるものは旅をして彼のやうなものを見かけたといふものさへゐた。

さういふ噂の立つてゐるころは、石工頭は牢内である晩、吐血して果てた。誰がしたといふこともない毒殺が、秘そりと行はれた。その死體すらしまひに行衞がわからなかつたのである。

「その石工頭もそれほど利巧な男だけに、役人から不思議な呼出しを受けて出たときに、もう後方に不淨役人が左右に取繩を持つて控えてゐたことを感づいて變な微笑をして、自分から進んで繩を受けたさうである。そのときはもう殺されることを知つてゐたのだ。」

生徒らは、みな一心に口を開けたまま、この不思議な物語にききとれてゐた。かれらの腰かけたすぐ前に曲水がながれてゐた。それから霞が池も見えた。蓬萊島があつて、古くからある這ひ松が、水の上を傘形の枝を伸ばして、毛立つてゆくささなみに、こまかい針葉の濃緑を映してゐた。

そのときお城の方から午砲が鳴つた。生徒らは思はずいつさいに聲をあげた。

「食事。」

さう先生がいふと、みんな口々に嬉しさうに、さつきからの話を忘れてしまつて、背中にかついだ白木綿の袋のなかから、辨當を取出した。先生はまだ何か話したさうだつたけれど、生徒の方で聞く樣子とてもなかつた。先生はちよいと淋しさうな顏をしたが、間もなく腰の辨當をとり出した。

「みんな輪になつて食べるんだ。」

先生は、辨當をひろげると、それを合圖に生徒らも食べはじめた。箸のない生徒は、近くの楓の小枝をぴしぴし折つた。先生は、見ぬ振りをしてゐた。

二、淺尾

一

大槻傳藏の思ひものであつた御殿女中の淺尾は、永い間の入牢で憔悴れてゐたが、その束ね髮にした姿はなほ婀娜として匂ひ艶やかだつた。うす暗い土牢のなかで、蒼白い肢體の露はな部分は、にぶいながらも肌理そのままの柔らかい光をふくんでゐた。

大逆の傳藏と同腹だつた彼女は、嚴重な達しによつて錢一枚あたへられてゐなかつた。いつも薄暗い崖から沁み出る清水が、石格子の崩れた踏 に溜つてゐる傍へ行つて、すこしばかりの身だしなみをしたりして、牢番に手古摺らせる

やうなことがなかつた。却つて牢番は、ひまなとき、この澄んで研ぎをかけたやうな淺尾と、永い日のうちに幾度も世間話をすることなどがあつた。

傳藏が極刑を言ひわたされたときも、牢番はこれを淺尾に告げなかつた。それが彼女にあたへる感動の大きいだけ、なほ、言はうとしなかつた。けれども淺尾はもう傳藏がこの世にないものだといふことを知つてゐた。世間では淺尾のことを鬼神のやうに言つてゐたが、牢番三五郎にとつては、ほとんど生れて初めて見る優婉な女であつた。かれは何時も牢屋の前の三尺席の上で、暗い土牢のなかを覗き込んでは、なぜあゝいふ大それた逆臣に身をまかしたものであるかと云ふことを考へ込んでゐた。が、口へ出して言つたことがなかつた。それ 言ふにはあまりに女らしかつたからである。

淺尾も何時の間にか、三五郎が自分に好意を持つてゐることを知つてゐた。それは彼女が永い間の御殿女中をしてゐたうち、下は二俵取りから、上は萬石以上の、たとへば本多や長や横山などに至るまで、その目つきなり物の言ひ振りなどから受ける感じによつて、自分が好意をもたれてゐるかゐないかとか云ふことを、能く讀みわけることに慣れてゐたからである。けれども三五郎はそれらしいことを一切口にしなかつた。たゞ、毎日の食事や水や、洗面などに細かな注意をしてゐることが、他の番人と交替するときに判然と區別することが出來た。いつも何よりも洗面の用意を三五郎に限つてしてくれるのが嬉しかつた。土牢のなかでは、よく地蜘蛛などが顔を這つたりして氣もちがわるかつた。淺尾はそれが毎朝つめたい水を豐富につかつてゆつくり洗面して爽々しい氣もちになることができた。他の番人は滅多にさういふ細かな用事はしてくれなかつた。

いづれ縛り首か磔刑かに決定つてゐる淺尾は、ふしぎに此頃になつて一日でも遲延してくれればよいと考へるやうに

なつてゐた。さういふ極刑をされるくらゐなら、眠つてゐるうちに遣つてくれればよいとまで考へ込んだ彼女は、石格子の隙間から、若葉どきのかぐはしい風と樹とを覗き見ながら一日づつを送つてゐた。

牢舍の詰所のまはりや、物寂しい崖ツ腹に咲いてゐる山躑躅が、日に濃く花を着けはじめた。カラリと晴れあがるとじくじく濕つてゐる牢舍内も、いくらか日光の乾きがゆき亘つて、氣さへはればれした。三五郎は鮎網を編みながらときをり淺尾の方をふりかへつて話しかけた。

「何か用事がないかの。」

もとは百姓だつた三五郎は、さういふと、凄艶な淺尾を石格子の間から眺めた。

「いゝえ。」

淺尾は、それだけいふと、靜かにほほゑんで見せた。淺尾自身でも、さうするのが當り前の好意のやうに思はれた。

「もう日南は暑いくらゐぢや。そこは涼しからうがの。」

淺尾は、無關心で言つた三五郎をいくらか皮肉に唇のさきで微笑つた。

「夏なれば涼しからうが、かう浸り濕つては……。」

三五郎は、その言葉を正直にききながした。

「からだの爲めにわるいだらうが、かうなつては俺がどうしようもないから。」

淺尾は、さう言ふ三五郎の日燒した太い眉根と、一圖な厚い唇とを見つめて、心から浮んだやうに微笑んだ。

「もうなれてしまひましたから、そなたの心配したほどでもない。」

「さうかい。それなればいいが……。」

三五郎は、どうかすると、そばへも近づけないやうな艶消ししたやうな美しい淺尾の顔をながめた。淺尾は淺尾で、その悪戯さうな三五郎の考へを考へさぐつて、また、しづかに微笑んでみせた

交替のときなど、特別に三五郎は強い目つきで石格子のなかを眺め込んだ。淺尾の方でも、へいぜいは何とも思はなかつたことまで、その交替の時には思ひ出された。かはりの者に知れないやうに嫣然として、それを三五郎の寂しさうな目のなかへ滲ませた。三五郎の目はそれを一杯に吸ひ込むやうに大きくなつてゐた。さうした一晝夜が過ぎると、三五郎は毎朝洗面の準備をしたり田合團子を格子口からこつそりと入れたりした。かれらは黙り合つて、朝になると生々してゐた。

間もなく或る日城内から下検分の役人が、草鞋や脚絆で身を固めて、どやどやと詰所へあがつてきた。それが半合の方から描くやうに見られた。

三五郎の顔はみるからに苛さめた。淺尾もすぐ顔いろを變へたが、さすがに落ち着いて格子を離れて奥の方へ行つた。

「今の検分役人を見られたか。」

三五郎は、ふりかへつて格子の内をながめた。奥の方で低い答へがあつた。

「いいえ、何んにも見ませんでした。」

三五郎は、しまつた、言ふんぢやなかつたと思つたが遅かつた。

「その下検分があるとお處置が間もなくあるんでございますか。」

さういふ淺尾の聲はしづかに落ちついてゐた。

「一般にさう言はれてゐるんぢやが、もつと遅れることもある。」

三五郎は、ひとりで聲が顫へた。下検分があれば長くて三日間だ。さう思ふと、かれに餘り饒舌らないで、そとを向いた。

検分役人は、淺尾の健康などを調べて、何んにも話さないで歸つた。三五郎があとから恐る恐る聞くと、兩三日中にお處置があるから取逃がさないやうとのことだつた。

その翌日は二人は默つてくらした。淺尾はたつた一日でげつそりやつれた。やつれると猶美しさが鋭どくなつた。三五郎は最う何もいはなかつた。默つて土牢のなかの仄白い顔をながめるばかりだつた。が、淺尾はそれに答へて微笑もうとしなかつた。沈んだ瞳のなかに恐怖がちらちら影をおとしながら、その内心のみだれを現はしてゐた。心では疾くに覺悟してゐたことぞつたが、一日づゝ、目の前に迫つてくるやうな死が、まざまざと淺尾の胸のうちに沈んで行つた。

三五郎も元氣がなかつた。何か言ひたさうにしては、交替の時刻まで默つてくらしたのである。

「何かほしいものがあれば今夜村から取つてきて上げよう。何かかう食べたいやうなものでも。」

交替の隙を覗つて三五郎は、石格子の間から低いが情熱のこもつた聲音で囁いた。淺尾も、石格子まで出たが

「いいえ。何もほしくはございません。ほんとに何もいらないのです。」

と、いくらか甘えるやうに頭をふつて見せた。が、聲が落ちて、だるい物憂い調子だつた。三五郎はそのとき既う淺尾が自分のお處刑が近づいたことを感じてゐるにちがひないと直覺的にさう考へた。

「さうか何なと言つて呉れるといいがの。今夜行かないとすると、こんど村へ行くのが二日待たないと駄目ぢや。」

三五郎は一生懸命に何かほしいものをと言つたが、淺尾は寂しさうにそいつ纖い頸すぢを振つた。

「ほんとに何もいりません。」

三五郎は、石格子を離れようとした。そのとき淺居はやつと出たやうな低い聲で、

「田舍團子でも。」

さう言つてしつとりと微笑んで見せた。三五郎はうなづいて詰所の方へ行つた。

二

城下から四里離れた鶴來(つるぎ)町から、北へ一里ばかり山奥に、蝮谷と通稱されてゐる陰草の多い幽谷があつた。蛇や蝮などが年々に殖えて、その谷間に誰も足を入れるものすらなかつた。城下町の古い藥種店に出入する蛇つかひの小者は、たいがい、そこの谷間で蝮や青い蛇類をあさつて、町へ持つて行つたりしたのだ。

そのころ青といふ鎌首をあげる街道蛇を百疋、城内から屆(とど)けるやうにとの達しが、蛇つかひの小者で、へいぜいは藥草堀の仁右衞門の家にとどいた。村役人のいふのには、たいがい長さは三尺ぐらゐで、生きのいいのをと云ふことだつた。

「いつたい何につかはれるのでございますか。百疋といへば大そうな數でございますが……。」

さう尋ねても、村役人自身も知らなかつた。仁右衞門は、鰻尾籠(うなぎびく)の大きなやつを擔いで登山した。

蝮谷はいちめんの繁りのうちに、まだ若葉のいろが冴え冴えして、老鶯がところどころ樹がくれに啼いてゐた。北側より南側の谷あひに、長いものがみな日光のなかにぞろぞろしてゐた。ただ、殖えるばかりの生きものに、樹の上にも、這ひ松の頂にもゐた。仁右衞門は、一挺の鎌と充分な足ごしらへをしてゐるだけで、あとは何も用意してゐなかつ

た。

「青よ。ご用があるんだ。青や。」

かれは寂しいひとり言をいふと、いきなり蛇の尻尾をおさへると、左廻しに、その三角な頭を尾籠の大口から投げ込んだ。おさへる瞬間に手元に曲げられる鎌首よりは、左廻しでからだの曲がりを利かぬやうにするのが速かつた。かれのさういふ早業は、みみずをおさへると同じだつた。ほとんど、尾籠の重みが川鱒十本にもくらべられるやうになる、こちらの谷の頂の朝日が、すこしづつ谷間の底へ移つて行つた。そこは、じくじく沼で、底が深くて足が入らなかつた。そのまはりの草は、低いやつがみた横倒しになつて、長いものの這ふたあとを示してゐた。

その長い間にただ一度、蝮に歯向ひされたが、まだ歯のたたないうち、腰の鎌はすぐその首をはねた。ハネたと思つたやつが、いつもなら手拭か縄の端を身がはりに嚙ませてをいて遣つつけるのだつたが、それも面倒だつたので、何も咥へさせないでその首をハネた。が、その鎌首がしつかり仁右衛門の草鞋と革足袋に食ひついた。けれども、表面だけでなかの素足には歯がしらさへ劈れてゐなかつた。

「お前はいつもそれを遣るので命がないのだ。」

仁右衛門は微笑ひながら、鎌の背中で、その細首を叩いた。棗のやうなやつが、ころがつてどくだみの繁りにかれくた。尾籠のなかは靜まつてゐた。鰻などと同じい音を立てない柔らかい生きものから、青くさい臭氣が發してゐた。

「まるで犬一疋の重さだ。」

背負つて下山したのは、かれこれ午すぎで、村では、一ト月遅れの粽餅を搗いてゐる音が、柿や李の若葉越しに古い家からきこえてゐた。

「おぢさん何を捕つてきたんぢや。」

道ばたの地藏をとりかこんで遊んでゐた子供が、いつさいに埃を上げて仁右衞門を取りかこんだ。

「鰻ぢや。」

「うそだ。きいきいおぢさん。」

仁右衞門はいつも子供さへみれば、山猿の眞似聲をした。それゆゑ子供はみなきいきいおぢさんだと言つてゐた。

「いんにや山鰻ぢや。」

子供らは編み目竹を漏れる日かげを透して、長いやつがとぐろを卷いてゐるのを覗き込んだ。

「これ、何にするのぢや。」

「何にするのかわしは知らん、城内からお達しぢやから捕つてきたのぢや。」

子供らは、しばらくすると、珍らしくもない山鰻のことを忘れてしまつて、山猿の眞似聲をせびつた。仁右衞門は微笑ひながら、子供らの言ひなり放題になつて、きいきい……と猿の眞似聲を立てた。それは本物に近かつた。村の湯屋でも仁右衞門が入浴つて居れば、きまつて哀切な山猿の聲が朦朧たる湯氣の奥からきこえた。子供らに、もう一度やれと言つてきかなかつた。

その翌日、仁右衞門は城内へとどけた。検分がすむと、同じ村の出身である三五郎をたづねた。詰所で逢つた二人は、村のことなどを話してゐたが、つい話が百足や蛇のことに進んだ。三五郎は、そのとき總身に冷汗と惡寒とを感じた。

「わしの思ふにはの、大槻騷動のそら淺尾がまだ生き殘つてぢやらう……」。

ここまで言ひかけた仁右衞門の口を、三五郎はそつと塞いだ。そして皆いふなといふ事を目色で暗示した。

淺平と目をすゑた三五郎の顏は、ひりついて眞蒼だつた。口をうごかすやうにも見えたが、それでゐて急に物を言ひ得なかつた。やつと掠れた聲でいつた。

「まさか、そんな人でなしなことはすまいよ。いくら惡人ぢやとて。」

仁右衛門は冷笑つて、

「關ふもんか、どうせ仕たいままなことをした奴らだもの。」

その上、いくらか個人的にも憎惡してゐるらしかつた。三五郎は、この言葉を不機嫌に聞いた。

「人間は人間扱ひにせぬと碌なことがなからうぜ。あの女だつて溫和し過ぎるくらゐな女だ。」

三五郎は、ちよいと赧くなつた。

「腹の底まで判るもんか。女ぢや、對手がの。」

仁右衛門は、妙に皮肉に微笑つて、村に何にも用事がないかと言つて歸つて行つた。三五郎は牢前へかへると、「對手が女ぢや。」と仁右衛門が言つたことを思ひ出した。かれは、昨日のやうにあまり物もいはずに默つて座つてゐた。

「まさか……」とさう思へた。まさかと、それが本當だとすると、三五郎の顏いろは眞靑に變化つて行つた。

「村の衆が見えられて何か面白いお話でもありましたか。」

石格子の中から、淺尾がしづかに訊ねた。昨日よりもずつと落着いて、目も一とところに据はつてゐた。

「いんや。別に、村などといふものは話がかいもく無いもので……。」

三五郎はふりかへつて痛々しさうに淺尾をながめた。多分、明日あたりお臨遣があらうと、その瞬間にさう感じた。きつと仁右衛門が城下に泊つて、足止めを食つてゐるにちがひない。

淺尾は、そのとき敏感な目つきで、三五郎の顔色を偸み見た。そこには絶望的な悲しげな目いろを焦らしてゐる正直な相貌が、牢舍とは反對の方へ目をむけてゐた。淺尾は、ぎくりとした。そして自分のお處置がもう近づいたことを知つた。ひよつとしたら昨日、三五郎が食べたいものがないかと煩さく訊ねたことなど取併すと、明日あたり斷附が下りるかも知れないと思つた。それでも、そのことは口へ出さないでゐた。

日の暮れに、三五郎は、永い初夏のくれ方の明りに、しづかに沈んでゐるやうな淺尾の生白い顔をまじまじ眺めてゐた。あまりその時間が長かつたので、淺尾は格子先きへ寄つてたづねた。

「なぜさうまぢまぢとわたしの顔を見つめなさる。」

三五郎は、そのときはつとしたやうだつたが、しづかに微笑んだ。

「あすは非番ゆゑに。」

「ほんとにね。」

淺尾は、それだけしか言はなかつた。晩の交替は、もう食事をすまして來るころだつた。もし明日お處刑があるとすると、さういふ風にふたりは偶然に考へ併した。多分あるだらうと既う決つてゐるやうな氣もした、がぐすぐすしてゐられなかつた。夜番は、もう詰所の戸のそとへ出て、こちら向きに歩いてくるのだつた。

「では明日またお目にかかれたら都合してな。」

淺尾は、低い聲でこれまでにない親密に囁いた。

「きつと。」

三五郎は、さういふと三尺窓をはなれた。淺尾は、三五郎と目を合せると、悲しげに微笑んで見せた。顫へるやうな目

い相貌は、三五郎の眼底にしつかりと殘つた。かうしてゐるのが、明日になると、その一切が終るのかと、交替の夜番とも別れた。淺尾は、三五郎が行つてしまふと土牢の奥深くはいり込んでしまつた。

三

鶴間が原は、お城下の高臺の上にあつた。大槻傳藏の情婦淺尾が、まだ加賀に曾つてなかつた蛇攻めの極刑に處せられるといふ制札が、その前の晩に町奉行や辻々の張場の前に建てられた。その噂はすぐ城下の町々を煮えくり返させた。生杉の制札には、奉行の梅八紋の弓張提灯がさげられ、盜乎とした町々の人人がそのまはりに群れ騷いでゐた。

淺尾は、その日久しぶりで牢内から出され、小立野臺へ向つて引き廻された。すつかり洗面をすました彼女は、途中俯向きがちに歩いて行つた。誰が見ても肌がすくむほど、クッキリした婉艶な淺尾は、繊い襟足を光にうたせながら、ほつそりと悴れてあるいてゐた。なによりその素足の蒼白さと弱々しさとは、こころない見物人さへもいたいたしさうに見送つたのである。

仁右衛門は、足止めを食つて城下に泊つてゐたが、その日は、大尾範のそばに檢分役人と一しよに構えてゐた。仁右衛門の付人であり淺尾の付人である三五郎も、同じく大尾範の傍に控えてゐた。

間もなく淺尾が刑場に着いたらしい見物のどよめきが起つた。矢來内へ、その行列がはいつてきたとき、三五郎は、ほつそりとした淺尾の白裝束をすぐ見つけた。二俵取り四人の取繩で、よはよはしく歩いてゐる淺尾は、もうそれ自身が死のやうに見えた。わけても背後へ流して束ねた髮が、黑々と、三五郎の目に映つた。

三五郎は、そのときから絶え間ない惡寒を脇の下から感じてゐた。ひ弱な淺尾のからだに、あらうことか、これらの

蛇が絡きついてゆくことを考へると、かれは、かれ自身のからだがぞくぞくすることを感じた。立つても居てもゐられない恐ろしさが彼れを上と下とから壓してゐた。

大尾籠の内部は、たへず這ひ上つてはずり落ちる長い生きものの鱗の音が、にぶく、三五郎のからだと心にひびいた。はたりといふ重い音につれて、かれは完膚なきまでに青くさい異臭と肉體とを目にえがくと、それと一しよに淺居の顔がぼんやり映つてきた。かれは、ひと目見てさへわかるほど蒼褪め打震えてゐた。仁右衛門が何か言ひかけたときも彼はぼんやりしてゐた。すぐ近くで刑場太皷がゆるく四つづつ鳴はじめた。

三五郎は、大尾籠を背後に座つてゐたが、いつの間にか、その蓋の竹の蝶交に指さきをかけてゐた。仁右衛門は、検分役人と今年は鮬か捕れるかとか尋ねられて、村のことを話してゐるのを夢中できいてゐた。それから矢來のそとから見える夢香山の松林とを、まるでかれは死人のやうに蒼ざめて眺め込んでゐた。そのとき、かれの右の手は完全に大尾籠の蝶交を外した。蓋がとれた。容易にとれたのである。

日光が一どきに大尾籠のなかに流れこんだ。蛇はそのとき一さいに鎌首を上げて、はじめ覗うやうにしてゐたが、充分な日光のあたたかみと微風とを感じると、一分と經たないうちにぞろぞろ這ひ出した。三五郎は、それを後方にかんじながら、汗と脊と焦燥と恐怖に戰慄しながら、凝乎と座つてゐた。もう、蛇の這ふ音さへしだした。

四方に亂れて這ひ出た蛇は、その、どれからも手のつけやうがなかつた。二寸ばかり持ちあげた鎌首は、錐のやうな鋭どさで、あたりに火のやうに抜き出てゐた。さすがの仁右衛門も手のつけやうもなく茫然して眺めてゐるばかりだつた。

「仁右衛門、何をぼんやりしてゐる。早く始末をせんか。」

検分役人がさう怒鳴つても、仁右衛門は、薄笑ひをうかべながら動かうとしなかつた。仁右衛門の目の下に、蛙のやうに蒼ざめた三五郎が拝むやうな目付で、かれを見上げてゐた。

「かうなつては一疋だつて捕まへることができません……。」

さう言つて彼は八方へ散るのを眺めた。若武士や役人や、矢來のそとの見物人は、一どきに聲をあげて騒いだ。が、三五郎は、即座に縄を打れた。仁右衛門は取逃した咎があつて、これも捕へられた。

淺尾の方にも、もの騒ぎが手に取るやうに見えた。三五郎が縄を打れたことや、自分が蛇攻めの刑をのがれたことも知つた。

三五郎が淺尾の前へ引かれたとき、かれは白裝束の淺尾を見詰めた。淺尾もすぐかれの目に微笑んでみせた。微笑んだといふより啜り泣いてゐるやうな三五郎は、そのときから入牢させられた。

表向き蛇攻めといふことにして、じつは、淺尾は打首だけに濟まされた。さういふ騒ぎがあつたので見物人は興もなささうに散つて行つた。七日の後三五郎は、仁右衛門と同じい席でやはり首を打たれた。

三、龍樹菩薩

一

印度憍陳羅の王宮には、そのころ四季とりどりの珍らしい花になぞらへた姫が、桃色やオレンヂや大理石のいろや、つやつやした豹のやうな皮膚をさらしながら、眞如の月をかたちどつた石廊の窓々の下を歩いてゐた。さまざまな皮膚が息づく空氣は、それ自身うつとりした花氣のやうに廣がつて、大蘇鐵や龍舌蘭の壯綠の間をさまようてゐた。各國から召されたそれらの處女だちは、芭蕉の果が内部からみつちりと實のるやうに、まだ王の手がつかないで熟れるがままになつてゐた。あるものは涼爽な熱帶樹の蔭に、思ひのままな豐麗な長い肢體をそよかぜに弄らせながら眠り、あるものは大浴室の石段の上に腰かけながら、美しい投影がともすれば碎けがちな水面に見とれてゐた。月のある晩は圓天井が嵌み込まれて、自由に月光の照影を大浴室に招き込れることができた。水面の中心にある噴水は霧のやうに煙つて、その微塵な飛沫の一つ一つにさへ、眞珠のやうな熱帶の月光がかがやいてゐた。

その大浴室の噴水を眞中にした多くの處女だちは、さまざまな形體と香氣と滑度とを殆毎夜のごとく擅にしてゐた。あるものは人魚のやうなうねりを肢體に、蒼茫とした月光の陰影の間に泳ぎ澄み、あるものは、したしたと四散する噴水に打れたまま、その輕羅をもう一枚皮膚の上からうつすりとへばりつかしてゐた。柔らかい光と艶と、夜がふくむ蒸し暑さとが、奴僕が彈く遠い庭前の音樂とによく調和して、そこだけは秘そりした一枚の錦布のやうに取り擴げられてゐた。

王は、そこの一段と高い石階の上から、あたかも花園に群れ咲く草木の、そのわけても美しいのを毎夜のごとく一本づつを拔き去るのであつた。それ故、いつも選まれた處女が去るごとに寂れはしたが、つぎからつぎへと任される處女のために、その拔跡がいつも埋められてゐた。が、一度召された處女だちは最早やその大浴室にあらはれることがなかつた。王宮の奥深い帳のうちに、かれらは多くの女官に圍繞されたまま、もはや昨日の處女でなくなつてゐた。

禁門裡には、いかなる小鳥さへも雄の啼く音も絶たれてゐた。優柔な囁きと、きぬづれと、湖のやうな静かさとが何時も王宮のいたるところに漲つてゐた。が、ここに不思儀なことは、そのころから、毎月のやうに、どの姫も色つやが悪くなつて、樹のかげなどに蹲つてゐるものや、ひそかに吐瀉するものなどがゐた。彼女らのさういふ病状をもつものは何事をも語らないのみならず、ほとんど大浴室に姿をさへ見せなかつた。あるものは深夜にひつそりと水浴するものはあつたが、たがひに面を合せるといふことがなくなつてゐた。異體の知れない恐怖と、恐怖を覗きあてる過敏な神經とが、處女だちの間に窮屈な空氣をつくりはじめてゐた。さうした最初の一人の懐胎があつてから百日の後には、もう明らかに數十にちかい處女だちが、ふしぎな懐姙に肩息をついてゐた。

石階の上にあらはれた王は、處女だちが浴室にあらはれないので、進んでそれらを査べたとき、もう處女の過半は姙んでゐた。

王の怒りは、それらの姙んだ姫を、しかも新しく召しつれてきた新鮮な處女だちの前で、これを裸體にして打首にした。美しい艷はな女體は、おのおの腹部に蠢乎として動くものをその最后まで動かしながら、恒河の沼深いほとりに、下人の手によつて取棄てられた。群獸と鳥族とは、この珍らしい食物の上に奇異な聲を放ちながら群れ啄いた。が、それにも關はらず不思儀なる懐胎と姙娠とは、次から次へとつづいて行つた。王は、王宮中のあらゆる男性を嚴しく取調べたが、誰あつて禁門裡に近づくものさへなかつたので、その犯人を指摘するすべもなかつた。

王は、よく廊閣に出て憂鬱な目を王宮のすべてに投げてみてゐた。女官をはじめ姫などは、夜にさへなれば恐がつて、一室に閉ぢこもつてゐた。が、ふしぎに密房の戸はひそかに打叩かれてゐた。

王は、王城の上を飛來する鳥族をさへ、猜疑深く打眺め、それを朝になく夕になく射落させた。王は、愴然として幾

たびとなく廊閣をあちこち歩きながら、毎日のやうに運ばれてくる處女たちが、間もなく胎んで恒河に棄てられる駱駝車を見送つては嗟嘆の息をついてゐた。

二

隱師や占術や、さういふ總ゆる智謀あるものの評議によつて、二箇の決論が出たのである。それは隱術によつて王宮に忍び込むものがあるといふことである。それ故、あらゆる王宮の門扉には、靜かな砂時計がひと廻りするごとに屈強な番士が、密中を六十回斬り廻すことにした。その鋭利な刄物の光は、夜になると、いたるところの石廊と門扉と庭前に閃めき立つてゐた

それから、もう一つは總ゆる王宮の地上に白砂を舖くことであつた。もし隱術で忍び込むものがゐるとしても、その足跡だけは遁れることはできまいと言ふことであつた。こまかい白砂はいたるところに物寂しくうち舖かれ、蟲さへ劍影におびやかされて這はなかつた。王宮全體は、ただ稻妻のやうな刄物の光によつて充たされ、刄物は、さびしく遊い空氣にしづかな太刀風を呼んでゐた。

土民は、丘陵や屋階に群れて、不安な口碑と邪淫の王とを結び合せて、夜になると至るところに群れてゐた。王宮の眩ゆい燈影はへいぜいの半分も灯れてゐなかつた。たゞ、怪獸のやうに聳立した王宮全館が寂寥のうちに靜かな劍影をひらめかしてゐるばかりだつた。星や樹や風やその光や影やが、王宮を展望してゐる土民の心にふしぎな怪しい點景をまで考へさせた。わけても夜が更けるごとに澄みかがやく星座の奥にまで光とどくと云はれた劍影は、なぜか地上の不皆を巫哲するもののやうに、嬌奢と邪淫の古い都の上にひらめいてゐた。

王は、暗い石廊の上から、いまは、たゞ徒らに寂しげに砕け散る噴水と、一面にうち敷かれた白々しい門扉のあたりに動く劍影とを毎夜のごとく眺めに出てゐた。もし怪しい人物の影を見つけたらと待ち構へてゐたが、たゞ、ぱちぱち撥く天上の焚火のやうな群星が、あまりに鋭く輝くばかりで、なにごとも目にうつらなかつた。邪淫と肉池との王は、なほ暗い屏をつくる天上を仰ぎみるさへ、さきの日のやうな亂擾極りなき形體を心に描きながら、一日も早く隠術の賊士をほふりたい心と、その後の平和な快樂とを夢みてゐた。

が、やはり處女だちは、なにものとも知れない懐妊に惱んで、れいの打首にされた上、恒河のほとりに棄てられたのである。

三

が、ふしぎにも庭さきに敷かれた白砂の上に、或る夜、四人の足跡があきらかに印せられてゐた。

番士は、劍と血とに猛つて、さかんに空中斬りをはじめた。いたるところの砂時計は、それにも拘はらず騒々として玉砂を吐きながら、熱帯の深夜に時をきざんでゐた。

果して三人の青年が空中から斬り落された。みな禁忌の學深い若者であつた。かれらは均しく一味の微笑を泛べたまま、王の前に、死骸となつて引据えられた。王は、これを恒河に棄てさせた。

「いま一人は……。」

王は、四人の足跡からかう言つて、番士の迂濶と、まだ至らざる劍影の怠りを嚴しく責めさいなんだ。

番士は、王宮の隈々をほとんど撫斬りに斬り廻した。太刀風は、女官や姉の閨房の隙間からも漏れ聞え、彼女らはみ

た竦んで顫えた。が、最後の一人は、おそらくその頭領であるべき隱術者は、斬り落すことができなかつた。

「あとの一人はどうしても斬り落せません。見あたりさへも覺束ないやうに思ひます。それとも逃げたかも知れません。」

王は怒つて、あくまで、そのものを斬り落すやうに嚴命した。

番士は、もはや疲勞してゐた。が、どのやうに斬り廻つても、その一人は落すことができなかつた。が、王の玉座のまはり七尺四方を斬ることは、この國の掟として禁められてゐた。

王の背後には、一人の青年が打慄へながら、その劍影に脅やかされてゐた。かれは、ほとんど逃れがたい劍影の隙間をねらひながらも、なほ且つ逃れがたい焦心に苦しめながら、心の痺れるやうな思ひで、さうした一襲衣を劍鋒のすみずみを痛めながら送つた。王は、もとよりこの青年に氣がつかなかつた。

間もなく王宮を逃れ出た龍樹大士は、はじめて發心したと云はれてゐる――。



流行兒

菊池寛

小說家の木下健は、四月の初、妻子を連れて、鄕里へ歸省した。

彼は、鄕里で最初帝劇の事務からの電報を受取つた。それは、彼の戲曲「女優の家」と云ふ一幕物を、五月興行の女優劇に、上演を許して與れと云ふ依賴だつた。

二三日經つと、彼は又一通の電報を受取つた。それは、松竹合名社からの電報だつた。

キサクアルカテイジヨウエンシテヨキカヘン

それは、如何なる劇場で、どんな俳優達にやらせるともかいてなかつたが、彼の戲曲「ある家庭」をやらせて與れと云ふ依賴だつた。

そたから、一週間ばかり經つと、彼は又思ひがけなく、第三番目の電報に接した。それは市村座の顧問をして居る知人の前田芳雄君からの電報で、彼の戲曲「閻魔堂」を、五月に上演させて與れと云ふ、可なり長文の電報だつた。

彼は、三つとも承諾の返事を出した。別に上演を謝絕すると云ふ理由もなかつたから、その上、どんな舊作でも愚作でも上演されると云ふことは、作者にとつて、嬉し

いことに遑なかつた。が、承諾の返事を出したから、彼は一種くすぐつたいやうな、不安を感ぜずには居られなかつた。それは、彼の戯曲を上演すると云ふことが、はやく〳〵劇壇で、一種の流行になりかけて居ると云ふ、イヤな感じから起る不安だつた。

木村健の戯曲は、大抵は大正五年以前の舊作だつた。みんな、其頃やつて居た同人雜誌に發表した習作だつた。その當時は、ちつとも認められなかつた。いくら、書いても、少しの反響もなかつた。小說を書いて居る友人が、いちばやく文壇に、出て行きさうになつたのにも拘はらず、戯曲をかいて居る彼丈は、をいてけぼりになりさうだつた。彼は、あせつた。そして戯曲を捨てゝ小說に移つた。

幸運は、彼の小說を待つて居た。三年か四年かの裡に、彼は小說家として、押しも押されもせぬ位置を文壇に占めて居た。幸運と機會とは、お互に手を引き合つて來るものだつた。小說家としての聲名が、揚ると共に、彼の戯曲までが次ぎ〳〵に脚光の光を浴び始めた。

どれもこれも、舞臺の上で相當の成功を贏えた。彼はさうした成功に、自分の戯曲が相當するものだとは思つて居たが、彼の戯曲の上演が續くと共に、何だか不安だつた。殊に、旅行中に、東京の三つの――それ限りと云ふてもよい――興行者から、別々に上演の交渉を受ける。それが、得意でないことはない。が、妙に自分の心が、浮ついて來るのを感じる。自分自身は、しつかり地の上に、足を踏みしめて居るのにも拘はらず、傍からワイ〳〵と擔ぎ上げられると云ふ感じだつた。

東京へ歸つたのは、四月の三十日だつた。

留守中に來て居る郵便物の中に、松竹からの手紙があつた。それは、彼の戯曲の上演を取消して來て居る手紙だつた。
彼は、それを讀んで淡い失望を感ずると共に、安心に似た心持を得た。二つ丈けでいゝ、二つ丈の方がいゝと思つた。
彼は、是非とも帝劇の稽古を見たいと思つた。「女優の家」と云ふのは、大正三年の舊作だつた。彼が、戯曲を書き出してから、二三番目にかいたものだつた。高等學校時代の生な思想や考へ方で、一杯になつて居る芝居だつた。露骨な、讀んで居て、ヘラ／＼するやうな臺辭が、所々にあつた。彼は、舞臺稽古に、立合つて、耳觸りな臺辭を、訂すつもりだつたが、彼が三十日の午後、電話で訊き合すと、舞臺稽古は、午前中に終つてしまつて居た。

初日の晩、彼は九時近くに帝劇に行つた。彼は、芝居に對して、興味を殆ど失ひかけて居た。どんな芝居でも、一時間も見續けて居ると、退屈してしまつた。その晩も、彼は銀座の方を廻つて居て、意識して遲れた。つまらない芝居は決して見ないと云ふことが、彼の一種の見得でもあつた。

帝劇へ着いたとき、彼はまだ夕食を喰つて居なかつた。二階の正面の食堂へは入つて訊くと、辨當はすつかり出拂つてしまつて居た。

彼が立ち去らうとすると、室の一隅に坐つて居た洋服を着た人が彼を呼びかけた。

「木下君ですか。丁度いゝ處で會ひました」

見ると、それは山田と云ふ畫家だつた。彼の戯曲「天と地の間」の、舞臺裝置をして、好評を博した人だつた。

「實は、市村座の貴君の「閻魔堂」の舞臺裝置を頼まれて居るものですから、是非貴君に伺ひたかつたのです。今丁度デザインを持つて居ますから」

さうされながら、山田君は描いてあつたデザインを卓子の上に擴げた。自分の一つの芝居の初日の晩に、他の芝居の結婚問題　相談を受ける。木下健は、得意にならずには居られなかつた。彼に、險揚な態度を裝ひながら、そのデザインを見た。が、元來彼は舞臺裝置などには、あんまり興味がなかつた。自分の脚本の邪魔にさへならなければ、何んなものでもよかつた。

「結構です。大變結構です。」

彼は、自分でも頼りにならないいゝ加減な、肯定をした。

「僕は夕食が食べたいのですがね。何か喰ふものはないでせうか」

婦人雜誌の話が濟むと、山田君にさう云つて訊いた。

「魚十なら、まだあるでせう、三階の左の廊下を突き當つたところです」

彼は敎へられた通、魚十へ行つた。辨當があつたので安心した。可なり空腹を感じて居た。辨當を手にするとガツ〳〵喰つた。

幕が開いて居るので、廊下には人影がなかつた。たゞ、彼の腰かけて居る前のテーブルに、若い娘が一人やつぱり辨當を喰つて居た。彼は、女優だなと直ぐ思つた。六期か七期かの女優に違いないと思つた。赤い色の交じつた華美な棒縞の御召を着て居た。

彼が、辨當に喰ひ入つて居る間に、誰か男性が、この娘と話を始めて居た。彼は、その男性が誰であるか、顔を上げて見る興味はなかつた。

「何うです、三番目は」

男は狂言の話を始めたらしい。

「面白くないわ」

女は切口上で答へた。

「四番目の「女優の家」と云ふのは、ありや誰のものです」

彼は、一寸堅唾を呑んだ。

「木下健！」

女は、響きの物に應ずるやうに、言下に答へた。

「流行兒だ！」

男は、打つて返すやうに答へると立ち上つた。

木下健は、暫らくの間、顔を上げることが出來なかつた。我にもあらず、顔が熱くなつた。二三分經つてから、彼は漸く、オヅ／＼と顔を上げて見た。彼を「流行兒だ！」と、一言で片付けてしまつたのは、お客ではなくして、魚十の主人だつた。

「流行兒だ！」、それが彼の心の内の一種の不安を、どんなに適切に、突き刺して居たゞらう。「流行兒だ！」さうした、一言によつて、片付けられてしまつて、本質的にいゝところは、少しも認められなくなつてしまふ。「流行兒だ！」と云つたやうな言葉に依つて、手輕く片付けられてしまふ。彼が、心の裡におぼろげに感じてゐた不安が、此の主人の言葉に依つて、忽ちにして、判然たる形を取つてしまつたやうに感ぜられた。

彼は、むしやくしやしながら、魚十を出た。むろん、魚十の主人に對して、腹を立てたのではなかつた。何者に對し

てどもなく腹が立つた。何だか、不當に輕蔑されて居るやうな氣持だつた。彼は、坐席に就いて、中途から芝居を見た。女の衣裝を着て、敵を打つて居るらしい武士までが、シャクに觸つた。

幕が閉つて廊下へ出ると、共處で帝劇の專務に會つた。

「いや、宗之助が大變自信を持つてやつて居ます。私は、これを三番目に置いて、やつぱり時代物と、打ち出すつもりで居たのですが、宗之助がなに客を歸さない自信があると云ふものですから、おしまひに廻したのです。昨日も、舞臺稽古を見てつく〳〵さう思つたのです。あれが本當の喜劇です、むろん番附にはさうはかいてありませんがね、本當の喜劇です。何も云つてないで、見物がハヽンと肯くやうに出來て居ます。」

專務は、何でもそんなことを云つた。喜劇……喜劇かな、彼は心の裡でそんなことをボンヤリ考へた。たゞ、八年も前にかいた舊作が、帝劇で上演されると云ふことが、夢のやうに思はれた。

幕が開いた。自分の芝居を初て見るときに感ずる不安を、いつもの二倍も三倍もの程度で感じた。が、彼の豫期したよりも遙によく、芝居は進んで行つた。殊に、主人公の會計員が、彼の生な臺辭を、可なり耳だゝないやうに、自然に云つて呉れた。見物は、彼の警句を喝采した。不安や憂鬱が、一時は彼の胸の裡から、消えるやうに思はれた。が、芝居が、進行して、女主人公が、女優として自覺し、今までの家庭生活を捨てようとする所になつて來ると、女主人公の生な臺辭が、彼の頭に、硝子を磨つて居るやうな感じを與へた。「人間としての私もあるのです」「藝術家として生きて行くのです」と云つたやうな、臺辭が叫ばれることに、彼はだん〳〵憂鬱になつて來た。女主人公は、さうした臺辭がある毎に之れを一段聲高く叫んだ。むろん、それが眼目の臺辭である以上、さう叫ぶのが當然だつた。

ふと、彼は自分の坐席へ近づいて來る衣ずれの音を聞いた。

「木下さん、今晩は！」

彼の坐席の傍の薄暗の中で、ほの白い顔が美しい微笑を浮べて居た。それは、彼が、知己のKと云ふ若い女だつた。小說家志願の人だつた。

「しばらく！　何時歸つていらつしたの！」

「昨日」

彼は、不機嫌な自分をどうすることも出來なかつた。

「わたし今日、兄からぜヒ「女優の家」を見て來いと云はれて來たのですわ。本當に見徹へがあるのは、貴君のもの丈ですわね」

彼は、此の人の好意に感謝したかつた。が、彼の顔に現はれたものは煮え切らない微笑丈だつた。

「ぢや、わたし失禮しますわ。あちらへ行つて見ますから」

女は、彼の不機嫌なのを知ると、さう〳〵向ふへ行つてしまつた。

幕切が、近づくに從つて、彼は自分の芝居の缺陷が、益々露骨になつて來るのを感じた。怒つた夫が、剃刀を出して妻を斬らうと云ふのが、不自然だつた。また、妻を斬り損つて、髮丈を斬ると云ふのが、もつと不自然だつた。女が、殺されはしまいかと思つて、抵抗して居る以上、髮丈が容易に斬れる譯はないと思つた。が、髮を切つてしまつた後で夫がへたばつてしまつて、妻が家出をするのを、ちつと傍觀して居るところが、もつと不自然だつた。夫の弱い性格として、徹底的に哀願しない譯はないと思つた。さう思ふと、妻の髮を切つた剃刀を手にしながら、緣側へ兩手を突いて喘いで居る役者が、氣の毒になつた。それは、劇中人物の苦悶を現はして居るのだつたが、作者たる木下健には、それ

が如何にも自然な仕ぐさがないために、役者自身が止むを得ず手を突いて困つて居るのだとしか見えなかつた。女主人公の態度が、また餘りに冷酷だつた。概念丈で動いて居る作中の人物を、そのまゝに仕活して居る。七年連れ添つた夫を捨てるのにしては、女らしい感情が、少しも動いて居なかつた。幕切になつてから、拍手が淋びしく鳴つた。

彼が立ち上つたとき、彼の三つ向ふの坐席から立ち上つた男が、何か呟いた。

「何だつまらない！」

彼には、その男がさう云つたとかしか思はれなかつた。彼に、不快な氣持になつて、階子段を下りかけた。

「木下健の芝居と云ふのは、いつもあんなものです。心理が分りさへすれば、いゝと思つて居るのですからね、ちつとも動きがありませんよ。つまりませんや！」

黄色つぽい羽織を着た二十位の男が、五十位の男の連れに、振り返つて喋べりながら、彼に添ふて階段を下りるのだつた。

その若い男は、劇通を以て、任じて居る男らしかつた。その五十位の男が「つまらない！」と言つたのに、迎合して、そのつまらない所以を、說明して居るらしかつた。

自分の作品に對して、可なり謙遜になつてゐた木下健も、こんなことをきくと、少し癪に觸つた。「たに、動きがない！動きがないことがあるものか」、彼はさう考へながら、學生時代に讀んだある戲曲學者の、言葉を想ひ出して居た。「眞に戲曲的動作(アクシヨン)とは外面的の動作を意味せずして、心理的動作を意味す。」彼は、そんなことを考へていらだつて來る自分の胸を和めた。

下足を取るときに、傍に居る青年が、ちつと彼の顔を見詰めて居た。平素だつたら、そんなことからでも、少し得意に

なる彼だつたが、その晩は、一刻も早く劇場を去りたかつた。

劇場を出てからも、彼は何となく腹立しかつた。出來る丈早く劇場から離れたかつた。夢中になつて急いだ。が、彼が劇場を出て、警視廳の前へ、さしかゝつたときだつた。彼は、急に烈しい衝動を感じた。アツと思ふ間もなく、彼の身體が、一間ばかり地中へ、墜落した。氣が付いて見ると、彼は警視廳の前で、石で疊んだ狹い溝の中に落ちて居たのだつた。

ハツと思つた刹那、彼は自分の不體裁な位置に氣が付いた。「女優の家」の作者が、溝に落ちて居るとは知らず、劇場がへりの人達は、潮のやうに、彼より一段高い所を通り過ぎて居る。彼は、此の上狼狽てゝ醜體を見せてはならないと思つた。彼は、なるべく悠然として、兩手を溝の兩側へ支へて、身體を外へ出した。氣が付いて見ると、新調して間もない下駄の鼻緒が切れて居た。その上、底の淺い水が跳ねたと見え、裾の方が少し濡れて、ペト〱したイヤな感じがした。

其處に、街燈のないために、墜落したのだつたが、溝から這ひ上つて見ると、街燈のないのが、救ひだつた。彼は、誰にも氣が付かれないのを幸ひに、切れた下駄を右の手に持ちながら、なるべく足早に去らうとした。が、その時彼の顏を覗き込むやうにして近づいて來る人があつた。

「やあ！　木下君ですか、お怪我はありませんか」

それは、先刻話した專務の本山氏だつた。とんだところを見られたと思つた。穴があれば這入りたいと思つた。こんなところを、興行者に見られては、劇作家の權威に關はると思つた。

「だから私はいつも危險い！〱と警視廳へ抗議を申し込んで居るのです。警視廳が、彼處へ街燈を點けるか、若しくはあの溝へ掩ひをしないとは怪しからないです。早速明日、交渉して見ませう」

が、そんな同情をされゝば、されるほど、彼の心は傷ついた。彼は、その話を打ち切るため、「女優の家」の出來榮の話をしようとした。が、今の場合、兩方とも彼にとつて、愉快な話題ではなかつた。

彼は、下駄が切れたから、タクシイで歸ると云つて、專務と分れた。

タクシイに乘つてからも、彼は少しも靜まらなかつた。なんだか、みんなから馬鹿にされて居るやうな氣がした。が魚十の主人や、黃色い羽織を着た若者を、相手にする譯にも行かなかつた。が、彼を溝に落したこと丈は、たしかに警視廳の責任だと思つた。交通の危險だとか、交通の妨害などゝ云ふことを、取締りながら、人間が落ちるやうな（たとへその人間が、いかに心理的に優れて居たとは云へ）溝を、そのまゝにして置くのは、怪しからないと思つた。

彼は、自分の家へ歸ると、直ぐ警視廳へ當てゝ出すべき抗議の手紙を書いた。

「……若し、彼の溝をそのまゝに、放置せらるゝ場合は、警視廳の前に限り、溝あり危險につき左側を通行すなとの掲示を出されて然るべく……」

彼は、そんな名文句を考へ付いて居た。が、そんな手紙をかいて見ても、彼の心は少しも慰まなかつた。警視廳もやつぱり、魚十の主人や、あの黃色い羽織を着た若者と同じやうに、彼の腹立たしさの相手にする譯には行かないやうな氣がして居た。

●此の一篇は里見弴氏最初の長篇にして最も會心の作である。

長篇小説 桐畑

石井鶴三氏装幀
頗優美上製箱入
四六判三四〇頁
定價貳圓貳拾錢
送料拾四錢

里見弴氏作

刎頸の友にして、少年時より不思議にも常に必ず同時に同一人を戀して、炎の如き戀愛戰を繰返すこと四度、後二年を隔て、一つは新妻を携へ、一つは藝妓等に擁せられて新京極の雜沓中に邂逅す、これ「桐畑」の發端なり。回を重ぬるに從ひ、新婚の夫婦と其の友と、僅々三人の人物を使驅して波瀾の重疊を極むること、全然所謂通俗小説の境に非ず。世相の深刻を極め、人心の眞奥に徹する靈筆、里見弴氏にして初めて能く拓き得る所、敢て最近文壇の權威として江湖に薦む。

永遠の生命

■メーテルリンクの原著、高田文學氏譯

本書は現代第一の思想家たる原著者が神秘的瞑想と異常なる理智の明とを以つて靈魂の不滅を立證したるものにして彼の有名なる『死後は如何』『靈智と運命』と共に併讀すべきものなり。

■菊半截洋装箱入一圓五十錢　送料六錢

東京市神田區
南神保町九

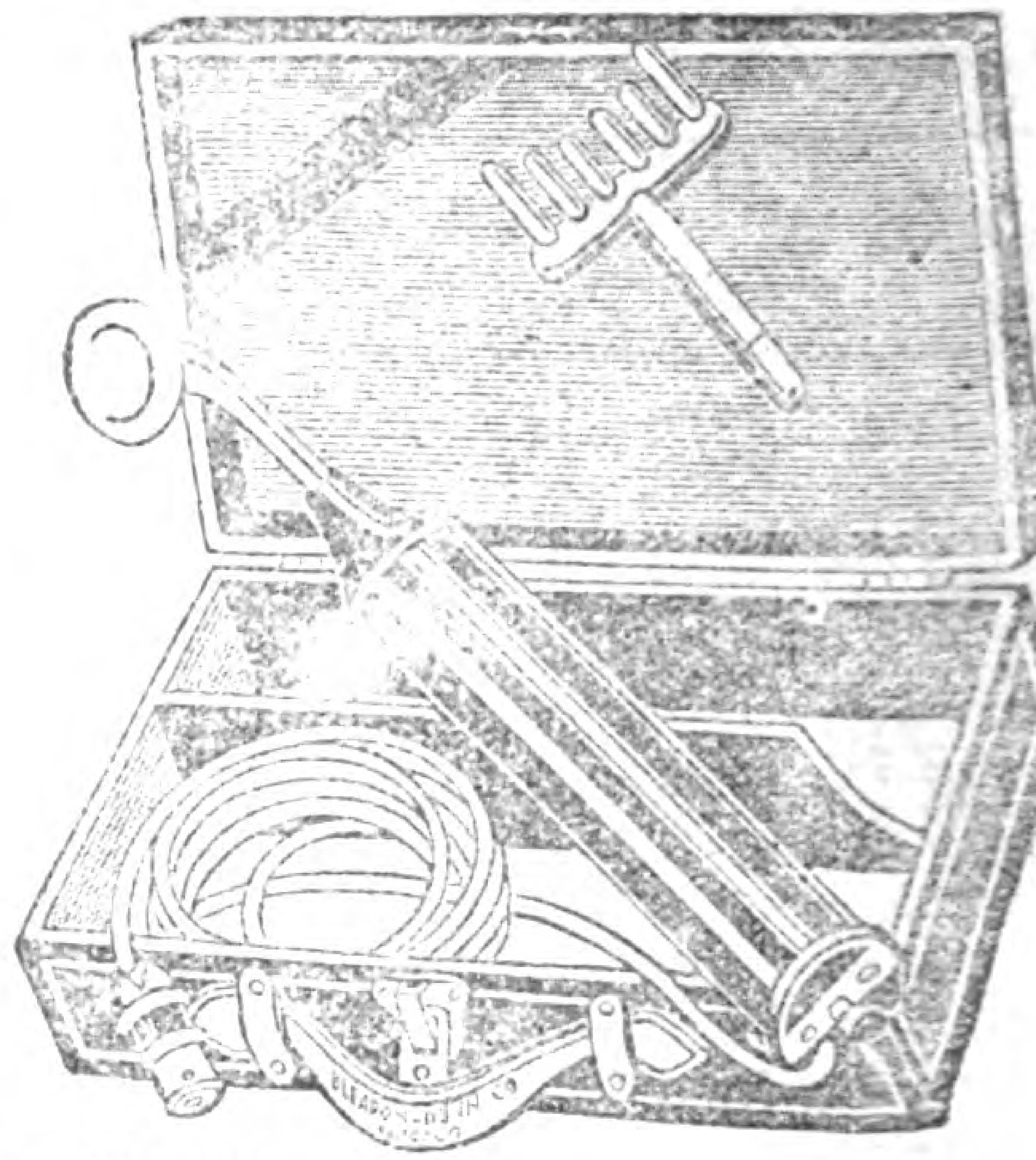
太陽堂

振替東京三一七二五番
電話九段一九四四番

驚くべき治療力を有する

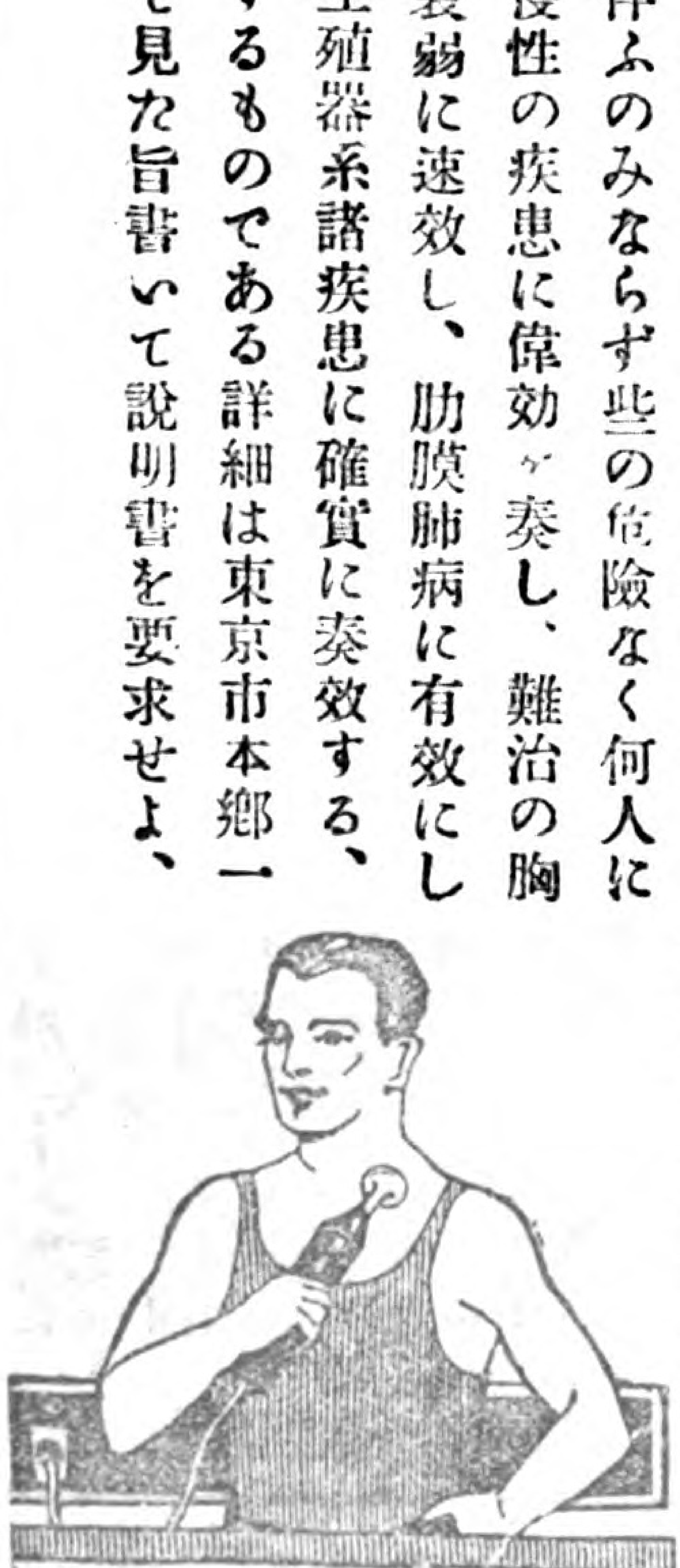
電波治療器現る

・・・電氣王エヂソン氏發明のヴアイオレーヤー機・・・・歐米にて目下流行を極むる健康增進器・・・・永久使用・・・・使用簡易・・・・一具金參拾五圓



世界的の科學者ニコラ、テスラ氏の發見せる音周波電流は今日無線電信及び無線電話の電波發生機として驚くべき作用を顯はして居る、此の電波或は高周波電流はラヂユーム、X光線と共に近世醫學上の三大治療法として大なる病院には必ず之れを備ふるに到つた、然るに米國發明王トーマス、エヂソン氏は之れを各家庭に於て使用せしめんが爲め小型の電波發生機を發明しヴアイオレーヤーと命名して發賣した、此の電波は人體に應用して無痛無刺撃にして快感を伴ふのみならず些の危險なく何人にても直ちに使用し得べく此れを醫藥の効なき慢性の疾患に偉効を奏し、難治の胸廓及び內臟の諸疾患に卓效あり、不眠、神經衰弱に速效し、肋膜肺病に有效にして不妊症、子宮病一切に奇效あり、淋疾及び生殖器系諸疾患に確實に奏效する、有力なる電氣、紫光線、酸化の三大作用を有するものである詳細は東京市本郷一の九ヴアイオレーヤー商會へ「中央公論」にて見た旨書いて說明書を要求せよ、無代進呈する。





經濟思潮講演會

一、開期　自大正十年八月一日至同月八日　毎夜六時半ヨリ九時半迄

一、會場　慶應義塾大學講堂

一、申込期限　大正十年七月二十五日（聽講者資格及男女制限ナシ）

一、會費　金三圓（申込ト同時ニ拂込ノコト）

一、題目並講師氏名左ノ如シ（講演順序）

經濟思潮一班及自由主義…………慶應義塾大學教授　法學博士　氣賀勘重

科學的社會主義…………同　小泉信三

講壇社會主義…………同　阿部秀助

國家資本主義…………同　法學博士　堀江歸一

ソリダリズム（社會連帶主義）…………同　増井幸雄

ギルド社會主義（附サンヂカリズム）…………同　三邊金藏

社會主義的理想實現の計畫…………同　高橋誠一郎

以上

芝區三田　慶應義塾大學

國史專攻 文學士 大森金五郎先生著 全部三卷

大日本全史

菊判天金約二千九百頁

上卷（上古より平家の滅亡まで九百七十頁）挿畫地圖大小百三十餘

中卷（頼朝の覇業より秀吉の薨去迄九百十頁）挿畫地圖大小百四十餘

下卷（江戸時代—明治維新迄約九百九十頁）續刊

◆**各卷特價六圓**（正價七圓）郵稅 內地廿四錢臺樺五十錢鮮支六十五錢

十有一年苦心の大著！

國史は國民成長の記錄である。 國史を通して祖先の血が高く現代に脈うち、我等の生活は祖先の經驗から常に新たな活力を養ひ來る。人として強い個性が各自の痛切な體驗から生れるやうに、國民として最も強い特質は徹底した國史の涵養から生れる。これを

英佛の例に見よ！ 國史に關する讀物は幾千百種を數へ、國民は競つて之を愛讀し、以て彼等が祖先の偉業に對する憧憬、燃ゆるが如き愛國心、目すべからざる民族結束の精神を高調し、以て大戰終局の勝利者となつたではないか？ 況や世界に最も舊く最も美しき國史を誇る日本國民にとりて、國史は直ちに實生活の活きたる經典であつて、遍く民衆の間に耽讀せらるべき國民的大國史の出現は、今の時代の一大要求である。此際に於て

我が國史學の權威たる 大森先生が苦心前後十有一年、半生の蘊蓄を傾けて「大日本全史」の事業を大成し、率先國史の智識普及の模範を示された事は實に讀書界の大なる歡喜である。

本書の特色は 第一に浩瀚なる史料と新舊一切の研究が終始一人の頭腦によつて消化整理され、今日國史學の研究の達し得た最高調を示してゐる事である。內容に於て單なる政治と戰爭の歷史たるに止まらず、宗教、藝術、民俗、產業其他文化上の諸問題から各般の社會生活を敍して、特殊部落民の生活に及び、題材の廣汎、觀察の精到、國民生活の全局を蔽ひ盡してゐる事である。**殆ど 數ともいふべき挿畫と地圖と**が其親切な說明と相俟つて文字以外の興趣と理解とを夥しく昂めてゐる事である。

本書特色中の特色として國史の根本義たる通俗にして飽くまで面白き讀物として書かれた事は實に著者の熱血の凝つた所。全篇を通じて平明にして生氣溢れるばかりの現代口語を以て、二千六百年の歷史の事件と人物とを紙上に躍動せしめ、光彩煥發、傳奇小說を讀むよりも面白く、一大歷史映畫を見るの思あらしめるに至つては、正に本書が群籍中に比類ないものと信ずる所である

◎內容見本進呈 往復葉書申込

東京 神田 **冨山房** 振替五〇一

中央公論大賣捌所

[illegible]	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金六拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

册數＼國別	内國	外國
六册	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二册	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
	以上郵税共	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は内國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
帝國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　大興社

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌御當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十年五月三十一日印刷納本
大正十年六月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　中央公論社
電話（小石川一四四一・小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.70; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.